兵庫県文化財調査報告書　第286冊

姫路市

市之郷遺跡

―JR山陽本線等連続立体交差事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ―

〔本　文　編〕

2005年3月

兵庫県教育委員会

兵庫県文化財調査報告書　第286冊

姫　路　市

市之郷遺跡（いちのごういせき）

―JR山陽本線等連続立体交差事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ―

２００５年３月

兵庫県教育委員会

市之郷遺跡遠景（南西から）

市之郷遺跡遠景（東から）

ＳＨ18全景（南西から）

ＳＨ18　カマド内土器出土状況

ＳＨ18出土土器

出土瓦

軒丸瓦

軒平瓦

例　言

1．本書は、姫路市市之郷他に所在する市之郷遺跡の発掘調査報告書である。

2．発掘調査は、JR山陽本線等連続立体交差事業に先立つもので、兵庫県姫路土木事務所からの委託を受け、兵庫県教育委員会が平成５年度に確認調査を、平成７年度・平成８年度に本発掘調査を実施した。本発掘調査は、両年度とも、株式会社神崎組と請負契約を結び、実施した。

確認調査は、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所　吉田　昇が担当した。本発掘調査は、平成７年度が同山田清朝・矢野治巳が、平成８年度が山田清朝・國本綾子が担当した。なお、本発掘調査の遺跡調査番号は950194・950226（平成７年度）と960041（平成８年度）である。確認調査の遺跡調査番号については、第２章第２節を参照されたい。

3．調査後の空中写真の撮影は、アジア航測株式会社（平成７年度）・株式会社ジェクト（平成８年度）に委託して実施した。他の遺構の写真撮影は調査員が、実測は調査員と調査補助員が実施した。

4．整理作業は、平成12年度から兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所にて実施した。

5．遺物の接合・実測・復元トレースについては上記事務所整理普及班（平成14年度より整理保存班）で行った。

6．遺物写真の撮影は、㈱イーストマンに委託し、平成14年度と15年度に行った。

7．調査は、姫路土木事務所が設置した基準点をもとに三級基準点を設置し、これを基準とした。なお、調査地は第Ⅴ系に位置する。

8．本書に用いた方位は座標北を示す。また、標高は東京湾平均海水準を基準とした。

9．本書に用いた遺物番号は、本文・挿図・図版ともに統一している。

10．本書の編集は岡崎輝子の補助を得て山田が行い、全て山田が執筆した。

11．本報告にかかわる遺物は、兵庫県教育委員会魚住分館（明石市魚住町清水）に、写真は兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所に保管している。

12．最後に、発掘調査および報告書の作製にあたっては、以下の方々の御援助・御指導・御教示をいただいた。記して深く感謝の意を表するものである。

秋枝　芳（姫路市教育委員会）・今里幾次・岩戸晶子（奈良国立博物館）・大谷輝彦（姫路市教育委員会）・亀田修一（岡山理科大学）・黒田慶一（財団法人　大阪市文化財協会）・小柴治子（姫路市教育委員会）・高橋　学（立命館大学）・竹村忠洋（芦屋市教育委員会）・多田暢久（姫路市教育委員会）・田畑　基（朝来郡教育委員会）・中川　猛（姫路市教育委員会）・菱田哲郎（京都府立大学）・福井　優（姫路市教育委員会）・藤原　学（吹田市立博物館）・森岡秀人（芦屋市教育委員会）・山根壬生子（養父市教育委員会）・吉井秀夫（京都大学）

凡　例

1．座標値については、調査時においては、日本測地系を基準とした。その後、平成14年4月から世界測地系へ変換されたため、本報告では世界測地系に基く座標値で報告することにする。このため、国土地理院の座標変換ソフト（座標変換パラメータ）を用いて、座標値の変換を行った。調査地は、Ａ・Ｂ区・Ｃ・Ｄ区・Ｅ区の大きく３地区からなる。そこで、地区ごとに座標値の明らかな1点を世界測地系に変換し、これをもとに座標を組み直していった。地区ごとの座標値の変換状況は以下のとおりである。

地　区	日　本　測　地　系		世　界　測　地　系
Ａ・Ｂ区	Ｘ座標	－１３０６４０	－１３０２９６．６４４１
	Ｙ座標	３４２４０	３３９９２．２０３７
Ｃ・Ｄ区	Ｘ座標	－１３０６６５	－１３０３２１．６４５５
	Ｙ座標	３４３３０	３４０８２．２０１７
Ｅ区	Ｘ座標	－１３０７２０	－１３０３７６．６５３１
	Ｙ座標	３４８００	３４５５２．１８９６

2．遺物番号については、石器の頭にはＳを、金属器の頭にはＦを、木製品の頭にはＷをつけ、土器・瓦とは区別している。なお、土器と瓦については、頭に記号をつけていない。ただし、土器は1から、瓦は1001から番号を付けている。

3．瓦の基本的な呼称は、奈良国立文化財研究所編『奈良国立文化財研究所基準資料　瓦編　１解説』による。

4．土器および瓦の実測図断面については、①古墳時代以降について土師器は白抜き、須恵器・陶磁器は黒塗り、瓦器・瓦質土器・瓦は網掛けとし、区別している。ちなみに、弥生土器については、全て黒塗りしている。

5．遺構番号は、調査時に付けたものではなく、Ａ区から順に付け直している。特に、柱穴番号については、竪穴住居跡及び掘立柱建物跡に伴うものについては、それぞれの遺構ごとに付けている。他の柱穴については、報告にあたって必要なもののみ番号をつけている。

6．第３章で記載する時期は、第４章での検討結果を踏まえてのものである。

目　次

第1章　市之郷遺跡 …… 3
第１節　地理的環境 …… 3
第２節　歴史的環境 …… 7
第３節　市之郷遺跡 …… 13
第２章　調査の経緯 …… 18
第１節　調査の契機 …… 18
第２節　確認調査 …… 20
第３節　本発掘調査 …… 22
第４節　整理作業 …… 23
第３章　調査の成果 …… 24
第１節　調査の概要 …… 24
第２節　Ａ・Ｂ区の調査 …… 26
１．基本層序と遺構の検出 …… 26
２．第１面 …… 29
３．第２面 …… 54
第３節　Ｃ・Ｄ区の調査 …… 85
１．基本層序と遺構の検出 …… 85
２．第１面 …… 88
３．第２面 …… 138
第４節　Ｅ区の調査 …… 183
１．基本層序と遺構の検出 …… 183
２．第１面 …… 187
３．第２面 …… 203
第４章　遺物のまとめ …… 250
第１節　弥生土器 …… 250
第２節　古墳時代の土器 …… 272
第３節　飛鳥～平安時代前半の土器 …… 289
第４節　中世の土器 …… 295
第５節　瓦 …… 314
第５章　遺構のまとめ …… 351
第１節　遺構の変遷 …… 351
第２節　地形環境の変化 …… 391
第３節　市之郷廃寺について …… 399
第４節　総括 …… 404

挿　図　目　次

第１図　遺跡の位置……2
第２図　明治時代の市之郷遺跡周辺……3
第３図　遺跡の立地……4
第４図　姫路平野東半部基本土層図……5
第５図　遺跡周辺微地形……6
第６図　主要周辺遺跡……8
第７図　律令体制下の市之郷遺跡……10
第８図　薬師堂……13
第９図　塔心礎……13
第10図　地籍図……14
第11図　市之郷遺跡の調査……16
第12図　竣工後の調査地（Ｄ区　北西から）…18
第13図　竣工後の調査地（Ｄ区　北東から）…18
第14図　事業予定地……19
第15図　確認調査位置図（１）……20
第16図　確認調査位置図（２）……21
第17図　現地説明会……22
第18図　土器洗い……23
第19図　地区割図……25
第20図　Ａ・Ｂ区基本土層……27
第21図　Ａ・Ｂ区　第１面……29
第22図　Ａ－１区　第１面……30
第23図　Ａ－２区　第１面……31
第24図　Ａ－３区・Ｂ区　第１面……32
第25図　ＳＢ01……33
第26図　ＳＢ02……34
第27図　ＳＢ03……36
第28図　ＳＥ02出土木製品……39
第29図　ＳＥ02……40
第30図　ＳＥ03……42
第31図　ＳＥ03根太（１）……43
第32図　ＳＥ03根太（２）……44
第33図　ＳＥ03根太（３）……45
第34図　ＳＥ04……47
第35図　ＳＸ01……48
第36図　ＳＫ04……50
第37図　ＳＤ02……52
第38図　ＳＥ02の検出……53
第39図　Ａ－Ｂ区　第２面……54
第40図　Ａ－１区　第２面……55
第41図　Ａ－２区　第２面……56
第42図　Ａ－３・Ｂ区　第２面……57
第43図　ＳＫ06土器の検出……58
第44図　第２面　弥生時代……58
第45図　Ａ－２区　第２面　弥生時代……59
第46図　Ａ－３区・Ｂ区　第２面　弥生時代…60
第47図　ＳＫ06……61
第48図　ＳＤ06……64
第49図　ＳＤ07……65
第50図　ＳＨ04の検出……66
第51図　Ａ・Ｂ区　第２面　古墳時代……66
第52図　Ａ－２区　第２面　古墳時代……67
第53図　Ａ－３区・Ｂ区　第２面　古墳時代…68
第54図　ＳＨ01……69
第55図　ＳＨ02……70
第56図　ＳＨ03……71
第57図　ＳＨ04……73
第58図　ＳＨ05……74
第59図　ＳＨ06……75
第60図　ＳＤ08……77
第61図　耳環出土状況……77
第62図　第２面　飛鳥時代～奈良時代……78
第63図　ＳＢ04……79
第64図　ＳＢ05……80
第65図　第２面　中世……83
第66図　ＳＤ12……84
第67図　Ｃ・Ｄ区　基本土層……86
第68図　Ｃ・Ｄ区　第１面……88
第69図　Ｄ－４区……89
第70図　Ｃ・Ｄ区第１面　弥生時代……89

第71図　C・D区第1面　弥生時代（東半部）90
第72図　C・D区第1面　弥生時代（西部）…90
第73図　SH07……91
第74図　C・D区第1面　古墳時代 ……96
第75図　SH08……97
第76図　SH09……98
第77図　SD20……99
第78図　瓦溜り検出状況 ……100
第79図　C・D区第1面　飛鳥～奈良時代 …100
第80図　第1面　飛鳥～奈良時代（東部）……101
第81図　第1面　飛鳥～奈良時代（中央部）…102
第82図　SB06 ……103
第83図　SB07 ……104
第84図　SB08 ……105
第85図　SK19 ……107
第86図　SD21 ……108
第87図　SD22 ……108
第88図　SD23 ……109
第89図　SD50 ……112
第90図　SE05検出作業 ……113
第91図　C・D区　第1面　中世 ……113
第92図　C・D区　第1面　中世
（中央部遺構群）…114
第93図　C・D区　第1面　中世
（東半部遺構群）…115
第94図　SB09 ……116
第95図　SB10 ……117
第96図　SB11 ……118
第97図　SB12 ……119
第98図　P13土器出土状況 ……120
第99図　SE05 ……121
第100図　SK25……125
第101図　SK26……126
第102図　SK29……128
第103図　SD30……131
第104図　SD33……133
第105図　SD38……136
第106図　SD39……137
第107図　SD40……137
第108図　C・D区　第2面……138
第109図　周溝墓1の検出……139
第110図　C・D区第2面　弥生時代……139
第111図　C・D区第2面　弥生時代（西部）…140
第112図　C・D区第2面　弥生時代（中央部）…141
第113図　C・D区第2面　弥生時代（東部）…142
第114図　SH10……143
第115図　SH10　中央土坑……144
第116図　SH10　土器出土状況……145
第117図　周溝墓1 ……147
第118図　周溝墓1　周溝……147
第119図　周溝墓1　土器供献位置……148
第120図　周溝墓1　主体部……149
第121図　周溝墓2 ……151
第122図　周溝墓2　周溝……151
第123図　周溝墓2　主体部……152
第124図　SX02……153
第125図　SX03……154
第126図　SX04……155
第127図　SX05……156
第128図　SX05の検出……157
第129図　SK37……158
第130図　SK38……159
第131図　SK39……159
第132図　SK42……160
第133図　SK43……161
第134図　SD42……165
第135図　SD42検出状況……167
第136図　SD43……168
第137図　SD44……175
第138図　C・D区第2面　古墳時代……181
第139図　SD51……182
第140図　縄文土器出土状況……183
第141図　E区基本土層……184
第142図　E区第1面……187
第143図　E区第1面　中世……188
第144図　SB13……189

第145図　ＳＢ14……190
第146図　ＳＢ15……191
第147図　ＳＢ16……193
第148図　ＳＢ17……194
第149図　ＳＫ58……198
第150図　ＳＤ52……200
第151図　ＳＤ55……201
第152図　Ｅ区第２面……203
第153図　ＳＤ64の掘削……204
第154図　Ｅ区第２面　弥生時代……204
第155図　Ｅ区第２面　弥生時代（東半部）…205
第156図　ＳＫ62……206
第157図　ＳＫ65……207
第158図　ＳＤ58……208
第159図　ＳＤ60……211
第160図　ＳＤ64……213
第161図　ＳＨ12の検出……214
第162図　Ｅ区第２面　古墳時代……214
第163図　Ｅ区第２面　古墳時代（東半部）…215
第164図　ＳＨ11……216
第165図　ＳＨ11　土器出土位置……217
第166図　ＳＨ12……218
第167図　ＳＨ12　カマド……219
第168図　ＳＨ12　土器出土位置……220
第169図　ＳＨ13……222
第170図　ＳＨ13　土器出土位置……223
第171図　ＳＨ14……223
第172図　ＳＨ14　カマド……224
第173図　ＳＨ14　土器出土位置……225
第174図　ＳＨ15……226
第175図　ＳＨ15　カマド……227
第176図　ＳＨ16……228
第177図　ＳＨ16　カマド……229
第178図　ＳＨ16　土器出土位置……230
第179図　767拓影 ……231
第180図　ＳＨ17……232
第181図　ＳＨ18……233
第182図　ＳＨ18　カマド……234
第183図　ＳＨ18　土器出土位置……235
第184図　790拓影 ……235
第185図　792拓影 ……236
第186図　ＳＢ18……237
第187図　ＳＢ19……238
第188図　ＳＢ20……239
第189図　ＳＢ21……240
第190図　柱穴の断割り作業……241
第191図　ＳＫ69……244
第192図　ＳＤ66……245
第193図　第２面　飛鳥～奈良時代……247
第194図　弥生時代前期の土器……250
第195図　弥生時代中期の土器　壷１……252
第196図　弥生時代中期の土器　壷２……253
第197図　弥生時代中期の土器　壷３……254
第198図　弥生時代中期の土器　壷４……255
第199図　弥生時代中期の土器　壷５……256
第200図　甕の法量……259
第201図　甕の口径……259
第202図　弥生時代中期の土器　甕（１）……260
第203図　弥生時代中期の土器　甕（２）……261
第204図　弥生時代中期の土器　鉢……262
第205図　弥生時代中期の土器　高坏……263
第206図　弥生時代中期の土器　脚部・台……264
第207図　弥生時代中期の土器　蓋……265
第208図　弥生時代後期の土器　壷……267
第209図　弥生時代後期の土器　甕……268
第210図　弥生時代後期の土器
鉢・高坏・器台……269
第211図　市之郷遺跡出土の初期須恵器……273
第212図　古墳時代の土器　壷……274
第213図　古墳時代の土器　土師器（甕）……275
第214図　古墳時代の土器　土師器（高坏）…276
第215図　高坏の法量……277
第216図　古墳時代の土器　土師器（鉢・椀）278
第217図　古墳時代の土器　土師器（鍋・甑）278
第218図　古墳時代の土器　韓式系土器……280
第219図　古墳時代の土器（１）……282

第220図　古墳時代の土器（２）……284
第221図　古墳時代の土器（３）……286
第222図　飛鳥時代の土器　須恵器……290
第223図　飛鳥時代の土器
土師器・韓式土器……291
第224図　飛鳥～奈良時代の土器……292
第225図　奈良～平安時代の土器……293
第226図　中世の土器　土師器（皿）……295
第227図　皿Ａｂの法量……296
第228図　皿Ｂの法量……296
第229図　中世の土器　土師器（杯・椀）……297
第230図　中世の土器　土師器（煮沸具）……298
第231図　中世の土器　須恵器（椀）……299
第232図　中世の土器　須恵器（小皿）……300
第233図　中世の土器　須恵器（捏鉢）……300
第234図　中世の土器　須恵器（甕・壷）……301
第235図　緑釉陶器……301
第236図　黒色土器・瓦器・瓦質土器……301
第237図　中世の土器　備前焼・丹波焼……302
第238図　中世の土器　青磁・白磁……303
第239図　中世一括資料　Ⅰ期（１）
須恵器 ……304
第240図　中世一括資料　Ⅰ期（１）
土師器他 ……305
第241図　中世一括資料　Ⅰ期（２）
須恵器他 ……306
第242図　中世一括資料　Ⅰ期（２）
土師器他 ……307
第243図　中世一括資料　Ⅱ期（１）
備前焼他 ……308
第244図　中世一括資料　Ⅱ期（１）
土師器他 ……309
第245図　中世一括資料　Ⅱ期（２）
備前焼 ……310
第246図　中世一括資料　Ⅱ期（２）
土師器・瓦質土器 …311
第247図　器種構成の変化……312
第248図　種類別重量比……314
第249図　軒丸瓦部分名称……314
第250図　軒平瓦部分名称……323
第251図　丸瓦部分名称……328
第252図　丸瓦側面の分類……329
第253図　丸瓦端面の分類（玉縁式）……330
第254図　丸瓦端面の分類（行基式）……330
第255図　丸瓦　布の綴じ合わせ模式図……331
第256図　平瓦部分名称……333
第257図　平瓦凸面拓影（１）……334
第258図　平瓦凸面拓影（２）……335
第259図　平瓦　側面の整形手法……336
第260図　平瓦　端面の整形手法……338
第261図　平瓦の綴じ合わせ模式図……339
第262図　瓦の変遷（軒丸瓦）……348
第263図　瓦の変遷（軒平瓦・鴟尾・平瓦）…349
第264図　第１期の遺構（Ａ～Ｄ区）……352
第265図　第１期の遺構（Ｅ区）……353
第266図　第２期の遺構（Ａ～Ｄ区）……354
第267図　第２期の遺構（Ｅ区）……355
第268図　第３期の遺構（Ａ～Ｄ区）……356
第269図　第３期の遺構（Ｅ区）……357
第270図　第４期の遺構（Ａ～Ｄ区）……360
第271図　第５期の遺構（Ａ～Ｄ区）……360
第272図　第４期の遺構（Ｅ区）……361
第273図　第５期の遺構（Ｅ区）……361
第274図　第６期の遺構（Ａ～Ｄ区）……362
第275図　第６期の遺構（Ｅ区）……363
第276図　第７期の遺構（Ａ～Ｄ区）……364
第277図　第７期の遺構（Ｅ区）……365
第278図　第８期の遺構（Ａ～Ｄ区）……366
第279図　第８期の遺構（Ｅ区）……367
第280図　第９期の遺構（Ａ～Ｄ区）……368
第281図　第９期の遺構（Ｅ区）……369
第282図　第10期の遺構（Ａ～Ｄ区）……370
第283図　第10期の遺構（Ｅ区）……371
第284図　第11期の遺構（Ａ～Ｄ区）……372
第285図　第11期の遺構（Ｅ区）……373
第286図　第12期の遺構（Ａ～Ｄ区）……374

第287図　第12期の遺構（E区）……375
第288図　第13期の遺構（A～D区）……376
第289図　第13期の遺構（E区）……377
第290図　第14期の遺構（A～D区）……378
第291図　第14期の遺構（E区）……379
第292図　第15期の遺構（A～D区）……380
第293図　第16期の遺構（A～D区）……380
第294図　第15期の遺構（E区）……381
第295図　第16期の遺構（E区）……381
第296図　第17期の遺構（A～D区）……382
第297図　第17期の遺構（E区）……383
第298図　第18期の遺構（A～D区）……384
第299図　第19期の遺構（A～D区）……384
第300図　第18期の遺構（E区）……385
第301図　第19期の遺構（E区）……385
第302図　第20期の遺構（A～D区）……386
第303図　第20期の遺構（E区）……387
第304図　地形変遷模式図（1）……392
第305図　地形変遷模式図（2）……393
第306図　井戸と地形環境……397
第307図　瓦出土位置……399
第308図　調査地と土壇……400
第309図　D区と土壇……400
第310図　地籍図（辻ケ内）の現地比定……401
第311図　市之郷廃寺推定図……402

表 目 次

第１表　主要周辺遺跡……9
第２表　ＳＢ01建物規模一覧表……34
第３表　ＳＢ01柱穴規模一覧表……34
第４表　ＳＢ02建物規模一覧表……35
第５表　ＳＢ02柱穴規模一覧表……35
第６表　ＳＢ03建物規模一覧表……36
第７表　ＳＢ03柱穴規模一覧表……36
第８表　ＳＢ04建物規模一覧表……79
第９表　ＳＢ04柱穴規模一覧表……79
第10表　ＳＢ05建物規模一覧表……81
第11表　ＳＢ05柱穴規模一覧表……81
第12表　ＳＢ06建物規模一覧表……103
第13表　ＳＢ06柱穴規模一覧表……103
第14表　ＳＢ07建物規模一覧表……105
第15表　ＳＢ07柱穴規模一覧表……105
第16表　ＳＢ08建物規模一覧表……105
第17表　ＳＢ08柱穴規模一覧表……105
第18表　ＳＢ09建物規模一覧表……116
第19表　ＳＢ09柱穴規模一覧表……116
第20表　ＳＢ10建物規模一覧表……118
第21表　ＳＢ10柱穴規模一覧表……118
第22表　ＳＢ11建物規模一覧表……119
第23表　ＳＢ11柱穴規模一覧表……119
第24表　ＳＢ12建物規模一覧表……120
第25表　ＳＢ12柱穴規模一覧表……120
第26表　ＳＨ10柱穴規模一覧表……144
第27表　ＳＢ13建物規模一覧表……190
第28表　ＳＢ13柱穴規模一覧表……190
第29表　ＳＢ14建物規模一覧表……191
第30表　ＳＢ14柱穴規模一覧表……191
第31表　ＳＢ15建物規模一覧表……192
第32表　ＳＢ15柱穴規模一覧表……192
第33表　ＳＢ16建物規模一覧表……194
第34表　ＳＢ16柱穴規模一覧表……194
第35表　ＳＢ17建物規模一覧表……195
第36表　ＳＢ17柱穴規模一覧表……195
第37表　ＳＢ18建物規模一覧表……238
第38表　ＳＢ18柱穴規模一覧表……238
第39表　ＳＢ19建物規模一覧表……239
第40表　ＳＢ19柱穴規模一覧表……239
第41表　ＳＢ20建物規模一覧表……240
第42表　ＳＢ20柱穴規模一覧表……240
第43表　ＳＢ21建物規模一覧表……241
第44表　ＳＢ21柱穴規模一覧表……241
第45表　古墳時代高坏の法量……276
第46表　検出時期一覧表……351
第47表　時期別遺構一覧（Ａ・Ｂ区）……388
第48表　時期別遺構一覧（Ｃ～Ｅ区）……389
第49表　地形環境の変化……396

図版目次（以下、「図版編」）

図版１　Ａ・Ｂ区出土土器

包含層出土土器（１～８）Ｐ５出土土器（９）

Ｐ７出土土器（10）ＳＢ02出土土器（11）

Ｐ２出土土器（12）Ｐ６出土土器（13）

Ｐ４出土土器（14）Ｐ３出土土器（16）

Ｐ１出土土器（15）

ＳＥ04出土土器（19～26）ＳＫ05出土土器（27～34）

図版２　Ａ・Ｂ区出土土器

ＳＫ05出土土器（35～53）ＳＤ02出土土器（54～57）

図版３　Ａ・Ｂ区出土土器

Ｐ８出土土器（58）Ｐ９出土土器（59）

ＳＫ07出土土器（60）ＳＫ06出土土器（61～65）

ＳＫ10出土土器（66）ＳＤ05出土土器（67～69）

図版４　Ａ・Ｂ区出土土器

ＳＤ06出土土器（70・71）ＳＤ07出土土器（72）

ＳＨ03出土土器（73～80）ＳＨ01出土土器（81）

ＳＨ04出土土器（82・83）ＳＨ05出土土（84・85）

ＳＨ06出土土器（86・87）Ｐ10出土土器（88）

図版５　Ａ・Ｂ区出土土器

ＳＤ08出土土器（89～96）ＳＤ09出土土器（97）

ＳＤ10出土土器（98）ＳＤ12出土土器（99～103）

図版６　Ｃ・Ｄ区出土土器

包含層出土土器（105～124）

図版７　Ｃ・Ｄ区出土土器

ＳＫ13出土土器（126～130）ＳＨ09出土土器（131・132）ＳＤ20出土土器（133・134）ＳＨ08出土土器（135・136）ＳＫ19出土土器（137）Ｐ11出土土器（125）

図版８　Ｃ・Ｄ区出土土器

ＳＢ06出土土器（138）ＳＢ08出土土器（139）

Ｐ12出土土器（140）ＳＤ23出土土器（141～145）

ＳＤ22出土土器（147～149）ＳＤ22・23上層出土土器（150・151）ＳＤ27出土土器（154・155）ＳＤ28出土土器（152・153）ＳＥ05井戸枠内出土土器（156～165）

図版９　Ｃ・Ｄ区出土土器

ＳＥ05井戸枠内出土土器（166～170）　ＳＥ05掘り形内出土土器（171～174）Ｐ14出土土器（175）

Ｐ13出土土器（176）ＳＫ25出土土器（177～179）

ＳＫ29出土土器（180）ＳＫ30出土土器（181～186）

ＳＫ35出土土器（187）

図版10　Ｃ・Ｄ区出土土器

ＳＤ32出土土器（188）ＳＤ34出土土器（189）

ＳＤ33出土土器（190～203）

図版11　Ｃ・Ｄ区出土土器

ＳＤ38出土土器（204～215）

図版12　Ｃ・Ｄ区出土土器

ＳＨ10出土土器（216～218）Ｐ16出土土器（219）

Ｐ15出土土器（220）周溝墓１出土土器（221～223）

周溝墓２出土土器（224）ＳＫ38出土土器（225・226）

ＳＫ51出土土器（227・228）

図版13　Ｃ・Ｄ区出土土器

ＳＤ42出土土器（229～242）

図版14　Ｃ・Ｄ区出土土器

ＳＤ42出土土器（243～249）

図版15　Ｃ・Ｄ区出土土器

ＳＤ42出土土器（250～257）

ＳＤ43出土土器（259～269）

図版16　Ｃ・Ｄ区出土土器

ＳＤ43出土土器（270～285）

図版17　Ｃ・Ｄ区出土土器

ＳＤ43出土土器（286・287）

図版18　Ｃ・Ｄ区出土土器

ＳＤ43出土土器（288～303）

図版19　Ｃ・Ｄ区出土土器

ＳＤ43出土土器（304～310）

図版20　Ｃ・Ｄ区出土土器

ＳＤ43出土土器（311・312）

図版21　Ｃ・Ｄ区出土土器

ＳＤ43出土土器（313～321）

図版22　Ｃ・Ｄ区出土土器

ＳＤ43出土土器（322～328）

図版23　C・D区出土土器
ＳＤ43出土土器（329～337）
図版24　C・D区出土土器
ＳＤ43出土土器（338～357）
図版25　C・D区出土土器
ＳＤ43出土土器（358～376）
図版26　C・D区出土土器
ＳＤ43出土土器（377～388）
図版27　C・D区出土土器
ＳＤ43出土土器（389～396）
ＳＤ46出土土器（397～409）
図版28　C・D区出土土器
ＳＤ46出土土器（410～425）
図版29　C・D区出土土器
ＳＤ46出土土器（426～440）
図版30　C・D区出土土器
ＳＤ46出土土器（441～460）
図版31　C・D区出土土器
ＳＤ46出土土器（461～463）ＳＤ45出土土器（480・481）ＳＤ47出土土器（482）ＳＤ50出土土器（483～485）ＳＤ51出土土器（486～488）
ＳＫ37出土土器（491・492）
図版32　E区出土土器
基盤層出土土器（493）包含層出土土器（494～507）
図版33　E区出土土器
包含層出土土器（508～535）
図版34　E区出土土器
ＳＢ15出土土器（536～543）ＳＢ17出土土器（544・545）Ｐ20出土土器（547）Ｐ21出土土器（546）
Ｐ17出土土器（548）Ｐ19出土土器（549）Ｐ22出土土器（550～552）Ｐ18出土土器（553～558）ＳＫ57出土土器（559～567）ＳＫ58出土土器（568～575）
図版35　E区出土土器
ＳＫ58出土土器（576～623）
図版36　E区出土土器
ＳＫ58出土土器（624～637）ＳＤ53出土土器（646）
ＳＤ55出土土器（638～645）
図版37　E区出土土器
ＳＫ60出土土器（647）ＳＫ61出土土器（648～650）
ＳＫ62出土土器（651～654）ＳＫ65出土土器（655）
ＳＤ58出土土器（656～662）
図版38　E区出土土器
ＳＤ58出土土器（663～680）
図版39　E区出土土器
ＳＤ58出土土器（681～691）ＳＤ59出土土器（692～694）ＳＤ60出土土器（695・996）ＳＤ61出土土器（697～699）ＳＤ63出土土器（700～704）
図版40　E区出土土器
ＳＤ64出土土器（705～708）
ＳＨ11出土土器（709～717）
図版41　E区出土土器
ＳＨ12出土土器（723～735）
図版42　E区出土土器
ＳＨ13出土土器（737～741）ＳＨ14出土土器（743～745）ＳＨ15出土土器（747～752）ＳＨ16出土土器（753～759）
図版43　E区出土土器
ＳＨ16出土土器（760～771）
ＳＨ17出土土器（775～783）
図版44　E区出土土器
ＳＨ18出土土器（785～792）
図版45　E区出土土器
ＳＨ18出土土器（793・794）ＳＢ19出土土器（801）
ＳＫ67出土土器（802）ＳＢ20出土土器（803）
Ｐ23出土土器（804）ＳＫ69出土土器（805～808）
図版46　E区出土土器
ＳＫ68出土土器（809～811）ＳＤ65出土土器（812）
ＳＤ66出土土器（813～817）
図版47　E区出土土器
ＳＤ66出土土器（818・819）ＳＤ67出土土器（820～826）Ｐ26出土土器（827）Ｐ24出土土器（828）
Ｐ25出土土器（829）
図版48　C・D区出土瓦
軒丸瓦（1001～1011）

図版49　C・D区出土瓦
軒丸瓦（1012～1024）
図版50　C・D区出土瓦
軒丸瓦（1025～1032）道具瓦（1033）
図版51　C・D区出土瓦
軒丸瓦（1034～1045）
図版52　C・D区出土瓦
軒丸瓦（1046～1049）軒平瓦（1050～1058）
図版53　C・D区出土瓦
軒平瓦（1059～1068）
図版54　C・D区出土瓦
軒平瓦（1069～1072）丸瓦（1073）
図版55　C・D区出土瓦
丸瓦（1074・1075）
図版56　C・D区出土瓦
丸瓦（1076～1079）
図版57　C・D区出土瓦
丸瓦（1080・1081）
図版58　C・D区出土瓦
丸瓦（1082～1084）
図版59　C・D区出土瓦
丸瓦（1085～1087）
図版60　C・D区出土瓦
丸瓦（1088・1089）
図版61　C・D区出土瓦
丸瓦（1090～1095）
図版62　C・D区出土瓦
丸瓦（1096・1097）
図版63　C・D区出土瓦
平瓦（1098～1100）
図版64　C・D区出土瓦
平瓦（1101～1103）
図版65　C・D区出土瓦
平瓦（1104～1106）
図版66　C・D区出土瓦
平瓦（1107～1109）
図版67　C・D区出土瓦
平瓦（1110～1113）
図版68　C・D区出土瓦
平瓦（1114～1117）
図版69　C・D区出土瓦
平瓦（1118～1120）
図版70　C・D区出土瓦
平瓦（1121・1122）
図版71　C・D区出土瓦
平瓦（1123・1124）
図版72　C・D区出土瓦
平瓦（1125～1127）
図版73　C・D区出土瓦
平瓦（1128～1132）
図版74　C・D区出土瓦
平瓦（1133～1136）
図版75　C・D区出土瓦
平瓦（1137）
図版76　C・D区出土瓦
平瓦（1138～1140）
図版77　C・D区出土瓦
平瓦（1141～1143）道具瓦（1144）鴟尾（1145・1146）
図版78　出土石器
A・B区包含層出土石器（S１・S２・S17）
SD43出土石器（S３～S６・S９・S10・S14・S15）SD46出土石器（S７・S16）SH10出土石器（S８）E区包含層出土石器（S11～S13）
図版79　出土石器
A・B区包含層出土石器（S18～S21・S24）SD43出土石器（S22）C・D区包含層出土石器（S23）
図版80　出土金属製品
SE04出土金属製品（F１）SD08出土金属製品（F２・F３）D区包含層出土金属製品（F４・F８・F10・F11・F13・F14）SD29出土金属製品（F６）
SD38出土金属製品（F12）SD42出土金属製品（F７）SK24出土金属製品（F15）
SK25出土金属製品（F５・F９）SK58出土金属製品（F17）SD58出土金属製品（F19）
E区包含層出土金属製品（F18）

写真図版目次（以下、「写真図版編」）

写真図版１　市之郷遺跡　遺跡全景
全景（米軍撮影空中写真）
写真図版２　市之郷遺跡　遺跡全景
姫路平野（南から）　姫路平野（東から）
写真図版３　市之郷遺跡　遺跡全景
全景（南上空から）　全景（西上空から）
写真図版４　市之郷遺跡　遺跡近景
近景（上空から）
写真図版５　Ａ・Ｂ区　全景
Ａ区（北東上空から）
Ａ区（北西上空から）
写真図版６　Ａ・Ｂ区　全景
第１面全景（上空から）
写真図版７　Ａ・Ｂ区　第１面
全景（西から）　全景（東から）
写真図版８　Ａ・Ｂ区　第１面
ＳＢ01（西から）　ＳＢ03（東から）
写真図版９　Ａ・Ｂ区　第１面
ＳＥ01　全景（北から）　ＳＥ01　水溜（北から）
写真図版10　Ａ・Ｂ区　第１面
ＳＥ01　断面（北から）
写真図版11　Ａ・Ｂ区　第１面
ＳＥ02　全景（南から）　ＳＥ02　断面（南から）
写真図版12　Ａ・Ｂ区　第１面
ＳＥ02曲物出土状況　SE02水溜内　ＳＥ02基底石　SE02基底石と水溜
写真図版13　Ａ・Ｂ区　第１面
ＳＥ03全景（南から）ＳＥ03　断面（南から）
写真図版14　Ａ・Ｂ区　第１面
SE03石組撤去後　SE03根太　SE03根太撤去後　SE03水溜と根太　SE03水溜
写真図版15　Ａ・Ｂ区　第１面
ＳＥ04　全景（南から）ＳＥ04　断面（南から）
写真図版16　Ａ・Ｂ区　第１面
ＳＸ01　全景（西から）　ＳＸ01　棺半截（西から）　ＳＸ01　墓坑（西から）
写真図版17　Ａ・Ｂ区　第１面
ＳＫ04（西から）　ＳＫ05（北から）
ＳＤ02（南東から）
写真図版18　Ａ・Ｂ区　第２面
Ａ区全景（東から）　Ｂ区全景（東から）
Ａ区全景（上空から）
写真図版19　Ａ・Ｂ区　第２面
Ａ－２区　Ａ－３区　Ａ－２区（東から）
Ａ－３区（東から）
写真図版20　Ａ・Ｂ区　第２面
ＳＫ06（北から）　ＳＫ09（南から）
写真図版21　Ａ・Ｂ区　第２面
ＳＤ04（東から）　ＳＤ05（北から）
ＳＤ06（西から）
写真図版22　Ａ・Ｂ区　第２面
ＳＨ02（北東から）　ＳＨ03（南から）
写真図版23　Ａ・Ｂ区　第２面
ＳＨ04（北から）　ＳＨ05（北から）
ＳＨ06（南から）
写真図版24　Ａ・Ｂ区　第２面
ＳＫ11（南から）　ＳＤ09（東から）
ＳＢ05（東から）
写真図版25　Ｃ・Ｄ区　全景
全景（東上空から）　全景（北上空から）
写真図版26　Ｃ・Ｄ区　全景
全景（北東上空から）　全景（北西上空から）
写真図版27　Ｃ・Ｄ区　第１面
Ｄ－２区（西から）　Ｄ－２区（東から）
Ｄ－２区（上空から）
写真図版28　Ｃ・Ｄ区　第１面
Ｄ－３区（西から）　Ｄ－４区（東から）
Ｄ－３・４区（上空から）　Ｃ区（北から）

写真図版29　C・D区　第1面
ＳＨ07（西から）　ＳＫ13上層（南から）
ＳＫ13下層（南から）
写真図版30　C・D区　第1面
ＳＫ14（北から）　ＳＤ14（南から）
ＳＤ15（北から）　ＳＤ18（南から）
写真図版31　C・D区　第1面
ＳＨ08（北から）　ＳＨ09（南から）
写真図版32　C・D区　第1面
ＳＢ06（北から）　ＳＢ06　Ｐ８（南から）
ＳＢ06　Ｐ６（東から）　ＳＢ07（東から）
写真図版33　C・D区　第1面
ＳＤ21（南から）　ＳＤ22・23（北から）
ＳＤ23（南から）　ＳＤ27（西から）
写真図版34　C・D区　第1面
瓦溜り（北西から）　瓦溜り（南東から）
瓦溜り　近景　瓦溜り　近景
写真図版35　C・D区　第1面
ＳＢ09（南から）ＳＢ11（南から）
ＳＢ11　Ｐ２（南から）
ＳＢ11　Ｐ４（南から）ＳＢ12（南から）
写真図版36　C・D区　第1面
ＳＥ05（南から）　ＳＥ05　石組み断ち割り
写真図版37　C・D区　第1面
ＳＥ05　基底石断ち割り　ＳＥ05基底石と石組み（西側）　ＳＥ05基底石と石組み（東側）
ＳＥ05　石組み　南から
写真図版38　C・D区　第1面
ＳＫ22（南から）　ＳＫ33（南から）
ＳＫ23（南から）　ＳＫ25（南から）
写真図版39　C・D区　第1面
ＳＤ30（南から）　ＳＤ33（東から）
ＳＤ34（南から）
写真図版40　C・D区　第1面
ＳＤ27・38・39（南から）　ＳＤ38（北から）
ＳＤ38（南から）　ＳＤ38　石組（東から）
写真図版41　C・D区　第2面
Ｄ－１区（上空から）　Ｄ－１区（東から）
Ｄ－２区（東から）
写真図版42　C・D区　第2面
Ｄ－２区（西から）Ｄ－２区中央部（西から）
Ｄ－２区　全景（上空から）
写真図版43　C・D区　第2面
ＳＨ10（南西から）　ＳＨ10中央土坑（南東から）　ＳＨ10中央土坑断面（南東から）
写真図版44　C・D区　第2面
周溝墓群（上空から）　周溝墓群（東から）
周溝墓１・２（南西から）　周溝墓１・２（北東から）
写真図版45　C・D区　第2面
周溝墓１（北東から）　周溝墓１（南東から）
周溝墓１供献土器（221･222）出土状況（西から）周溝墓１供献土器(223)出土状況（南から）
写真図版46　C・D区　第2面
周溝墓１　主体部の検出
周溝墓１　主体部（西から）
周溝墓１　墓坑半截（西から）
写真図版47　C・D区　第2面
周溝墓２（北西から）　周溝墓２（北東から）
写真図版48　C・D区　第2面
周溝墓２　主体部（北西から）周溝墓２　墓坑内（南西から）　周溝墓２　主体部内（南西から）　周溝墓２　周溝（南から）
写真図版49　C・D区　第2面
ＳＸ02（北から）　ＳＸ02墓坑（北から）
ＳＸ03（南から）　ＳＸ03墓坑（南から）
ＳＸ03墓坑（西から）
写真図版50　C・D区　第2面
ＳＸ05（南から）　ＳＸ05　棺と小口穴（西から）　ＳＸ05長側板と小口穴の確認（南から）
ＳＸ05長側板と小口穴の検出（南から）
写真図版51　C・D区　第2面
ＳＫ37（南から）　ＳＫ47（南東から）
ＳＫ42（東から）　ＳＫ44（南から）
写真図版52　C・D区　第2面
ＳＫ45（南西から）　ＳＫ46（西から）

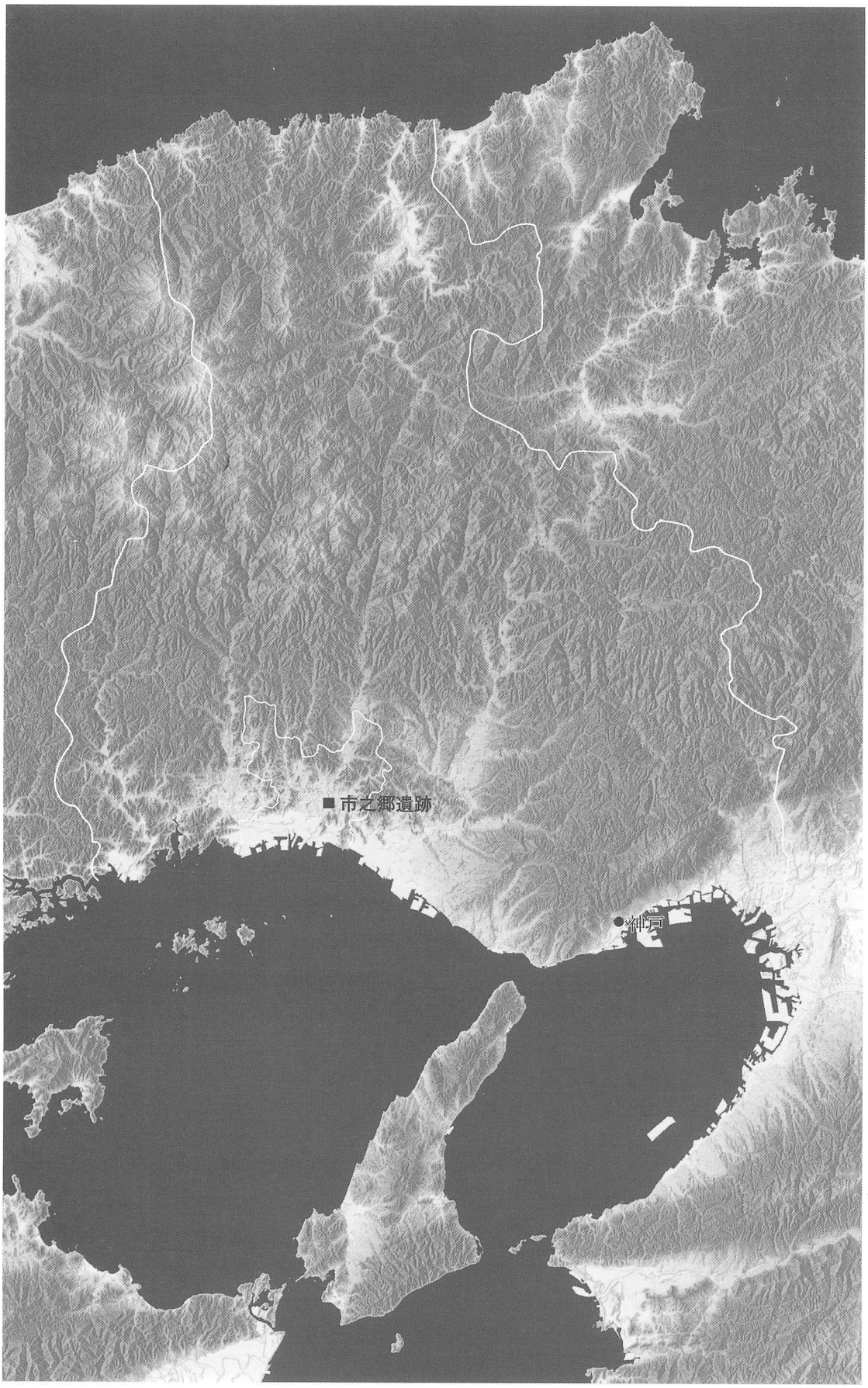
ＳＫ55（南から）
写真図版53　Ｃ・Ｄ区　第２面
ＳＤ42（南東から）　ＳＤ42（南西から）
写真図版54　Ｃ・Ｄ区　第２面
ＳＤ43（北西から）　ＳＤ43（南東から）
ＳＤ43土器検出作業　ＳＤ43土器出土状況
ＳＤ44（南東から）
写真図版55　Ｅ区　全景
Ｅ区（東上空から）　Ｅ区（北上空から）
写真図版56　Ｅ区　第１面
Ｅ－２区（西から）　Ｅ－５区（東から）
写真図版57　Ｅ区　第１面
Ｅ－３区（西から）　Ｅ－３区（東から）
写真図版58　Ｅ区　第１面
Ｅ－４区（西から）　Ｅ－４区（東から）
写真図版59　Ｅ区　第１面
ＳＢ15（南から）　ＳＢ16（南から）
ＳＢ17（南から）
写真図版60　Ｅ区　第１面
ＳＢ17　Ｐ７　ＳＢ17　Ｐ６
Ｐ18（東から）ＳＫ58（南から）
写真図版61　Ｅ区　第１面
ＳＤ52（南から）　ＳＤ55（南から）
写真図版62　Ｅ区　第２面
Ｅ－５区（西から）　Ｅ－５区（東から）
写真図版63　Ｅ区　第２面
Ｅ－２区（北西上空から）
Ｅ－２区（北東上空から）
写真図版64　Ｅ区　第２面
Ｅ－２区全景（上空から）
写真図版65　Ｅ区　第２面
Ｅ－３区（北西上空から）
Ｅ－３区（北東上空から）
写真図版66　Ｅ区　第２面
Ｅ－３区（上空から）Ｅ－３区（東から）
写真図版67　Ｅ区　第２面
Ｅ－４区（北西上空から）
Ｅ－４区（北東上空から）
写真図版68　Ｅ区　第２面
Ｅ－４区（上空から）
写真図版69　Ｅ区　第２面
Ｅ－４区（西から）　Ｅ－４区（東から）
写真図版70　Ｅ区　第２面
Ｅ－４区（西から）　Ｅ－４区（東から）
写真図版71　Ｅ区　第２面
ＳＫ64（西から）　ＳＫ65（北から）
ＳＫ65　土器出土状況
写真図版72　Ｅ区　第２面
ＳＤ58（南から）　ＳＤ58　656出土状況
ＳＤ58　657出土状況　ＳＤ58　687出土状況
ＳＤ58　686出土状況　ＳＤ60（南東から）
写真図版73　Ｅ区　第２面
ＳＤ59（東から）　ＳＤ61（東から）
ＳＤ63（南から）
写真図版74　Ｅ区　第２面
ＳＤ64（南東から）　ＳＤ64（南東から）
写真図版75　Ｅ区　第２面
ＳＨ11（東から）　ＳＨ11（南から）　ＳＨ11土器出土状況（南東から）
写真図版76　Ｅ区　第２面
ＳＨ12（南から）　ＳＨ12カマド付近土器出土状況　ＳＨ12カマド　ＳＨ12土器出土状況（西から）
写真図版77　Ｅ区　第２面
ＳＨ13検出状況（南から）ＳＨ13（南から）
ＳＨ13　737出土状況　ＳＨ13　739出土状況
写真図版78　Ｅ区　第２面
ＳＨ14（南から）　ＳＨ14カマド（南から）
ＳＨ14カマド横断面（南から）
写真図版79　Ｅ区　第２面
ＳＨ15（南西から）　ＳＨ15カマド（南西から）
ＳＨ15　748出土状況（南西から）
ＳＨ16（南東から）
写真図版80　Ｅ区　第２面
ＳＨ16　土器出土状況
ＳＨ16　土器出土状況　ＳＨ17（南東から）

写真図版81　E区　第２面
ＳＨ16・17カマド（南東から）
ＳＨ16･17カマド断面（南東から）
写真図版82　E区　第２面
ＳＨ18（西から）
ＳＨ18　カマド周辺土器出土状況（西から）
写真図版83　E区　第２面
ＳＨ18カマド内土器出土状況（西から）
ＳＨ18カマド内土器出土状況（上層）（西から）
ＳＨ18カマド内土器出土状況（下層）（西から）
ＳＨ18カマド完掘状況（西から）
ＳＨ18カマド外土器出土状況（西から）
写真図版84　E区　第２面
ＳＢ18・ＳＤ65（東から）　ＳＢ18（南から）
ＳＢ18　Ｐ４　ＳＢ18　Ｐ９　ＳＢ18　Ｐ８
ＳＢ18　Ｐ11
写真図版85　E区　第２面
ＳＢ19（南から）ＳＢ19　Ｐ２　ＳＢ19　Ｐ５
ＳＢ21（西から）ＳＢ21　Ｐ２　ＳＢ21　Ｐ４
ＳＢ21　Ｐ５
写真図版86　E区　第２面
ＳＢ20（南から）　ＳＢ20（西から）
ＳＢ20　Ｐ５　ＳＢ20　Ｐ６
写真図版87　E区　第２面
ＳＫ69（南から）ＳＤ66（西から）
ＳＤ66土器出土状況　ＳＤ67（北東から）
ＳＤ70（北から）
写真図版88　A・B区　出土土器
包含層出土土器（１・４）　Ｐ５出土土器（９）
Ｐ３出土土器（17）　ＳＥ04出土土器（22）
ＳＫ05出土土器（35･37･39・40・41）
写真図版89　A・B区　出土土器
ＳＫ05出土土器（50･51･53）　ＳＫ06出土土器（61～63）　ＳＤ05出土土器（68）
写真図版90　A・B区　出土土器
ＳＤ06出土土器（71）ＳＨ03出土土器（75・76）
ＳＨ04出土土器（82）　ＳＤ08出土土器（93・94）　ＳＤ10出土土器（98）
包含層出土土器（104）
写真図版91　C・D区　出土土器
包含層出土土器（111）　ＳＨ08出土土器（136）
Ｐ12出土土器（140）　ＳＤ23出土土器（145・146）　ＳＤ28出土土器（152）
ＳＥ05出土土器（156・159・163・168）
写真図版92　C・D区　出土土器
ＳＥ05出土土器（166）Ｐ13出土土器（176）
ＳＫ25出土土器（179）ＳＫ29出土土器（180）
写真図版93　C・D区　出土土器
ＳＫ30出土土器（183）　ＳＤ32出土土器（188）
ＳＤ33出土土器（191・197・201・202）
ＳＤ38出土土器（205）
写真図版94　C・D区　出土土器
ＳＤ38出土土器（206～209・211・214）
写真図版95　C・D区　出土土器
ＳＤ38出土土器（215）　ＳＨ10出土土器（216・217）　周溝墓１出土土器（221・222）
写真図版96　C・D区　出土土器
周溝墓１出土土器（223）
ＳＤ42出土土器（229・230・233～236）
写真図版97　C・D区　出土土器
ＳＤ42出土土器（238・248・253・256～258）
ＳＤ43出土土器（259）
写真図版98　C・D区　出土土器
ＳＤ43出土土器（261・263～266・271・274・278）
写真図版99　C・D区　出土土器
ＳＤ43出土土器（279・280・282～286）
写真図版100　C・D区　出土土器
ＳＤ43出土土器（287～289・291・293・294）
写真図版101　C・D区　出土土器
ＳＤ43出土土器（295～297・299・301・303）
写真図版102　C・D区　出土土器
ＳＤ43出土土器（304・308・310～312）
写真図版103　C・D区　出土土器
ＳＤ43出土土器（313・314・317・320・322・324）

写真図版104　C・D区　出土土器
ＳＤ43出土土器（329・330・335・337・342）
写真図版105　C・D区　出土土器
ＳＤ43出土土器（343・345・350・351・354・355）
写真図版106　C・D区　出土土器
ＳＤ43出土土器（356・358～360・362・364）
写真図版107　C・D区　出土土器
ＳＤ43出土土器（366～371・373）
写真図版108　C・D区　出土土器
ＳＤ43出土土器（374～378・380・383・385）
写真図版109　C・D区　出土土器
ＳＤ43出土土器（388・389・392～394）
ＳＤ46出土土器（397・403）
写真図版110　C・D区　出土土器
ＳＤ46出土土器（406・415・436・441・448・452・464）
写真図版111　C・D区　出土土器
ＳＤ46出土土器（461・465～469）
写真図版112　C・D区　出土土器
ＳＤ46出土土器（470～479）
ＳＫ37出土土器（491）
写真図版113　C・D区　出土土器
ＳＤ51出土土器（486・487・489・490）
写真図版114　E区　出土土器
基盤層出土土器（493）
包含層出土土器（499・500・508・517）
写真図版115　E区　出土土器
包含層出土土器（526・527・529）ＳＢ15出土土器（538・541）ＳＢ17出土土器（545）
Ｐ21出土土器（546）Ｐ18出土土器（553・554）
写真図版116　E区　出土土器
Ｐ18出土土器（555・557）　ＳＫ57出土土器（561・567）　ＳＫ58出土土器（569・576～578・581・584）
写真図版117　E区　出土土器
ＳＫ58出土土器（585～591・594・596・602）
写真図版118　E区　出土土器
ＳＫ58出土土器（597・599・603・604・606・609～611）
写真図版119　E区　出土土器
ＳＫ58出土土器（613・629～631・634・635・637）
写真図版120　E区　出土土器
ＳＤ55出土土器（639・640・645）　ＳＫ61出土土器（649）　ＳＫ62出土土器（654）
ＳＫ65出土土器（655）ＳＤ58出土土器（656）
写真図版121　E区　出土土器
ＳＤ58出土土器（657・681・685～687）
ＳＤ59出土土器（694）
写真図版122　E区　出土土器
ＳＤ60出土土器（696）
ＳＤ63出土土器（704）
ＳＨ11出土土器（709・711・712・718～722）
写真図版123　E区　出土土器
ＳＨ12出土土器（723・725～728・730～732）
写真図版124　E区　出土土器
ＳＨ12出土遺物（734）
ＳＨ13出土土器（737・739・742）
ＳＨ14出土土器（743・744）
写真図版125　E区　出土土器
ＳＨ14出土土器（745・746）　ＳＨ15出土土器（748・750）　ＳＨ16出土土器（755・756）
写真図版126　E区　出土土器
ＳＨ16出土土器（757・761・764・766・767・769）
写真図版127　E区　出土土器
ＳＨ16出土土器（770・772・773）
ＳＨ17出土土器（775・776・783・784）
ＳＨ18出土土器（785）
写真図版128　E区　出土土器
ＳＨ18出土土器（786～791）
写真図版129　E区　出土土器
ＳＨ18出土土器（792）

写真図版130　E区　出土土器
ＳＨ18出土土器（793・794）
写真図版131　E区　出土土器
ＳＨ18出土土器（794～800）
ＳＫ68出土土器（809）
写真図版132　E区　出土土器
ＳＫ68出土土器（810・811）　ＳＫ69出土土器（806）　ＳＤ65出土土器（812）
ＳＤ66出土土器（815・818）
写真図版133　E区　出土土器
ＳＤ66出土土器（817・819）　ＳＤ67出土土器（821・822）　Ｐ24出土土器（828）
写真図版134　C・D区　出土瓦
軒丸瓦（1001）
写真図版135　C・D区　出土瓦
軒丸瓦(1001)
写真図版136　C・D区　出土瓦
軒丸瓦（1002）
写真図版137　C・D区　出土瓦
軒丸瓦（1003・1005）
写真図版138　C・D区　出土瓦
軒丸瓦（1003・1006・1013）
写真図版139　C・D区　出土瓦
軒丸瓦(1007・1008・1010・1012)
写真図版140　C・D区　出土瓦
軒丸瓦（1009・1011・1014・1017）
写真図版141　C・D区　出土瓦
軒丸瓦（1015）
写真図版142　C・D区　出土瓦
軒丸瓦（1016・1020・1021）
写真図版143　C・D区　出土瓦
軒丸瓦（1018・1019）
写真図版144　C・D区　出土瓦
軒丸瓦（1022・1023・1024・1026・1027）
写真図版145　C・D区　出土瓦
軒丸瓦（1025・1028・1029）
写真図版146　C・D区　出土瓦
軒丸瓦（1030・1031・1033）
写真図版147　C・D区　出土瓦
軒丸瓦（1032・1034）
写真図版148　C・D区　出土瓦
軒丸瓦（1035～1038・1040・1042・1043）
写真図版149　C・D区　出土瓦
軒丸瓦（1039・1041・1044・1046～1049）
写真図版150　C・D区　出土瓦
軒平瓦（1050～1052）
写真図版151　C・D区　出土瓦
軒平瓦（1053～1059）
写真図版152　C・D区　出土瓦
軒平瓦（1060～1065）
写真図版153　C・D区　出土瓦
軒平瓦（1066～1068・1070～1072）
写真図版154　C・D区　出土瓦
軒平瓦（1069）
写真図版155　C・D区　出土瓦
丸瓦（1073・1074・1082）
写真図版156　C・D区　出土瓦
丸瓦（1075・1076）
写真図版157　C・D区　出土瓦
丸瓦（1077・1080・1091）
写真図版158　C・D区　出土瓦
丸瓦（1081・1083）
写真図版159　C・D区　出土瓦
丸瓦（1093・1095）
写真図版160　C・D区　出土瓦
丸瓦（1097・1147・1149）
写真図版161　C・D区　出土瓦
丸瓦（1148・1150・1164～1166）
写真図版162　C・D区　出土瓦
平瓦（1099・1100・1103）
写真図版163　C・D区　出土瓦
平瓦（1104～1106）
写真図版164　C・D区　出土瓦
平瓦（1107・1114・1152）
写真図版165　C・D区　出土瓦
平瓦（1151・1153・1167・1168）

写真図版166　C・D区　出土瓦
平瓦（1119・1120・1158）
写真図版167　C・D区　出土瓦
平瓦（1121・1125・1155）
写真図版168　C・D区　出土瓦
平瓦（1122・1123・1156・1172）
写真図版169　C・D区　出土瓦
平瓦（1124・1126・1134・1169・1170）
写真図版170　C・D区　出土瓦
平瓦（1128・1129・1171・1174）
写真図版171　C・D区　出土瓦
平瓦（1116・1133・1135・1173・1176）
写真図版172　C・D区　出土瓦
平瓦（1136・1138・1160）
写真図版173　C・D区　出土瓦
平瓦（1137・1139・1161）
写真図版174　C・D区　出土瓦
平瓦（1140・1141・1143・1175）
写真図版175　C・D区　出土瓦
平瓦（1142・1162・1163）
写真図版176　C・D区　出土瓦
平瓦（1098・1108・1113・1154・1157・1177）
写真図版177　C・D区　出土瓦
道具瓦（1144）鴟尾（1145・1146）
写真図版178　C・D区　出土瓦
鴟尾（1178）その他（1179）
写真図版179　A・B区　出土石器
包含層出土石器（S１・S２・S17～S21・S24）
写真図版180　C・D区　出土石器
包含層出土石器（S23）SH10出土石器（S８）SD46出土石器（S７・S16）SD43出土石器（S３～S６・S９・S10・S14・S15・S22）
写真図版181　E区　出土石器
包含層出土石器（S11～S13）
写真図版182　A・B区　出土木製品
SE02出土木製品（W１～W３）
SE03出土木製品（W４・W５）
写真図版183　A・B区　出土木製品
SE03出土木製品（W６～W９）
写真図版184　C・D区　出土金属製品
SE04出土金属製品（F１）SD08出土金属製品（F２・F３）C・D区包含層出土金属製品（F４・F８・F10・F11・F13）SK25出土金属製品（F５・F９）SD29出土金属製品（F６）SD38出土金属製品（F12）SK24出土金属製品（F15）
写真図版185　C・D区　出土金属製品
C・D区包含層出土金属製品（F16）
SD42出土金属製品（F７・F14）
SK58出土金属製品（F17）
SD58出土金属製品（F19）
E区包含層出土金属製品（F18）



第１図　遺跡の位置

第１章　市之郷遺跡

第１節　地理的環境

姫路市

市之郷遺跡は、兵庫県姫路市市之郷に所在する。姫路市は、兵庫県第２の都市で、播磨の中心をなす都市である。地理的にも、播磨のほぼ中央部、瀬戸内に面した地点に位置する。高砂市の西側、龍野市・揖保郡太子町の東側にあたる。

姫路市は、姫路城を中心とした城下町から発展したもので、明治22年（1889）に姫路市制が敷かれ、昭和10年に城南村・高岡村を、昭和32年に四郷・花田・御国野・別所村を、昭和42年に林田町を合併し、今日の市域に至っている。そして、平成８年には中核都市に移行している。市の面積は274.57㎢、人口は約48万人（平成16年１月現在）である。

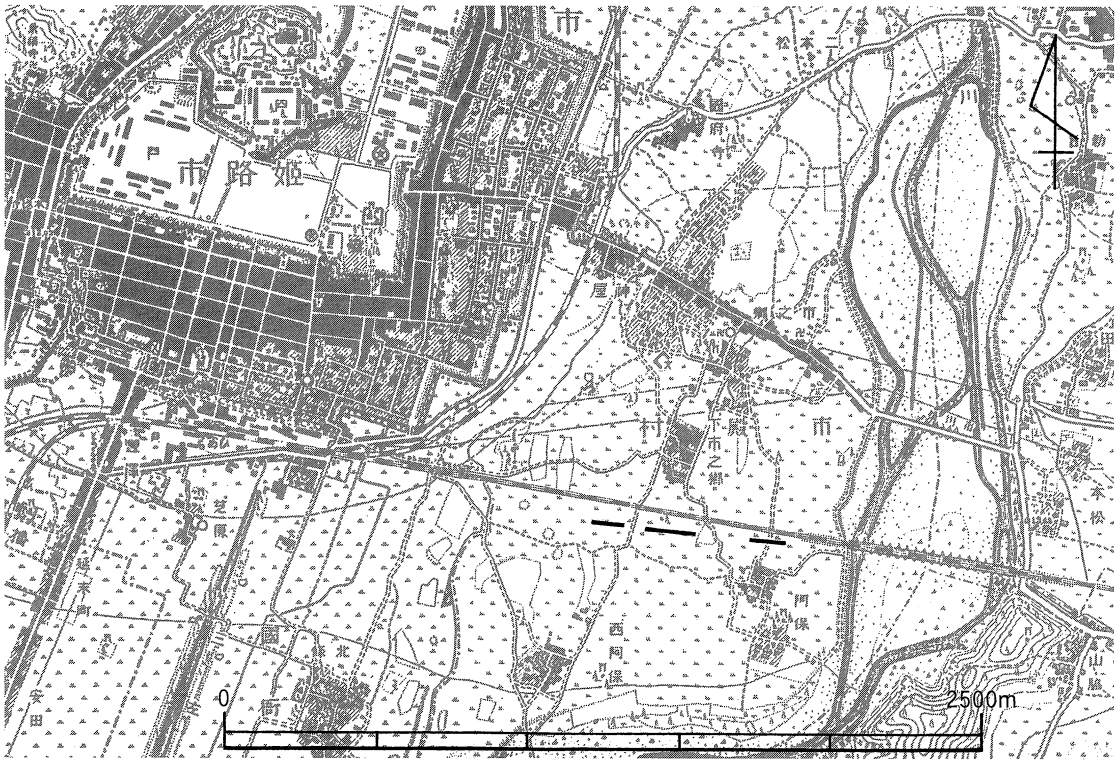
市之郷

市之郷遺跡の所在する市之郷は、旧城南村大字市之郷字辻ヶ内にあたり、姫路城の城下町の南東側周辺部にあたる。ＪＲ山陽本線姫路駅の東約２～３㎞から市川までの一帯がその範囲である（第２図）。遺跡の大半は、ＪＲ山陽本線およびＪＲのヤードおよび住宅地となっている。

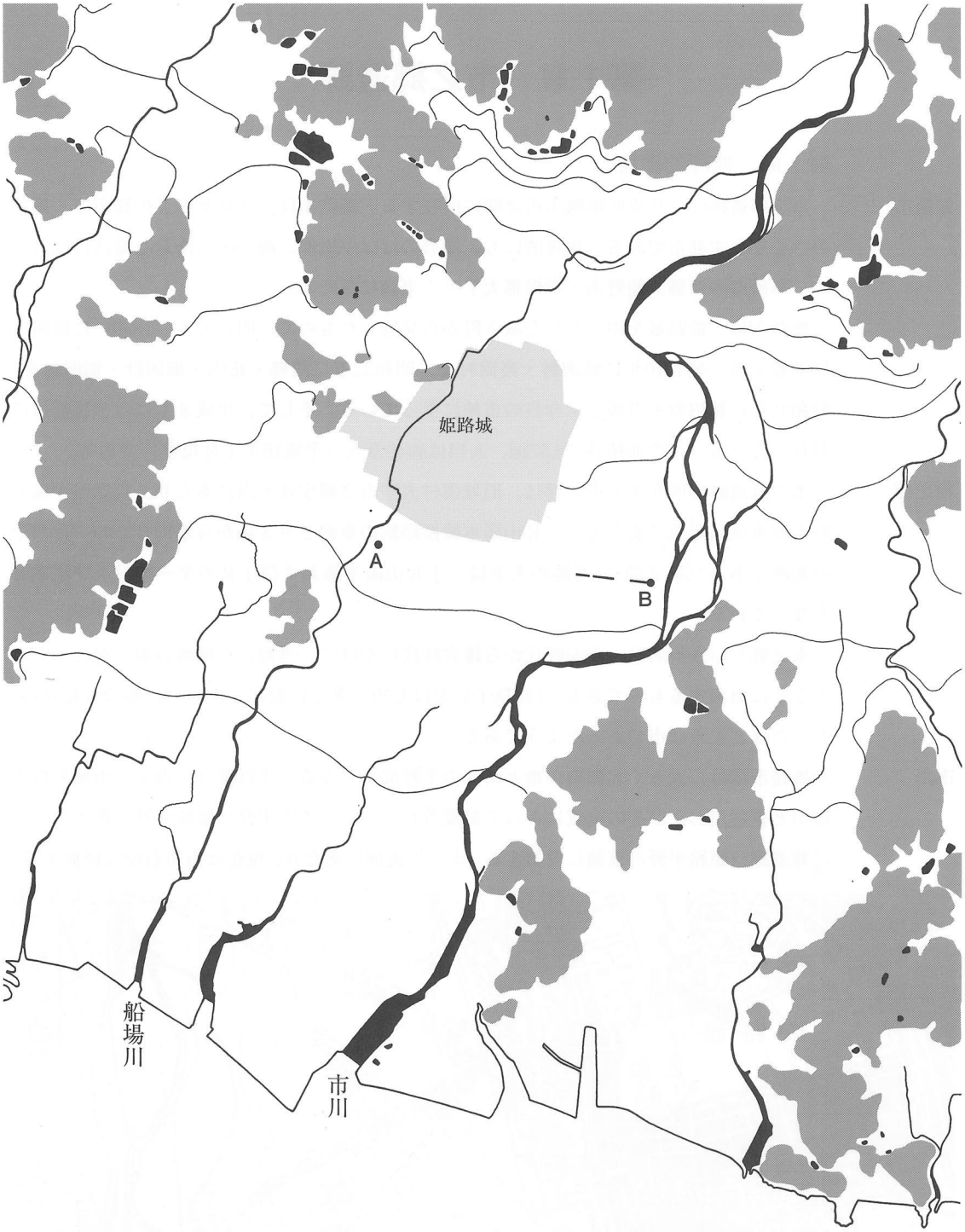
市之郷という地名は、平安時代から鎌倉時代にかけて、当地に「飾磨の市」がたっていたことに由来するものである[1]。『枕草子』をはじめ、多くの歌にうたわれ、都にも知れわたったほど大きな市であったようである。

市川

姫路市域は、大きく北側の山地と南側の平野部からなる。平野部は、南北に市域を貫く市川と夢前川およびその支流によって形成されている。この平野は姫路平野と称され、市之郷遺跡は姫路平野の東側に位置する。市川下流域にあたり、現在は市川右岸に位置する。



第２図　明治時代の市之郷遺跡周辺



第３図　遺跡の立地

海岸線から市之郷遺跡までの直線距離は約５kmを測り、調査地の現地表面の標高は12.10m（E区）～10.50m（A区）である。

市川は、朝来郡生野町を源とし、神崎郡・姫路市をほぼ南北に南下し瀬戸内海に注ぐ、二級河川である。全長約77.5kmを測り、兵庫県下で２番目に長い川である。流域面積は491km²に及ぶ。『播磨風土記』においては、「小川」と称されている[(2)]（第７図）。

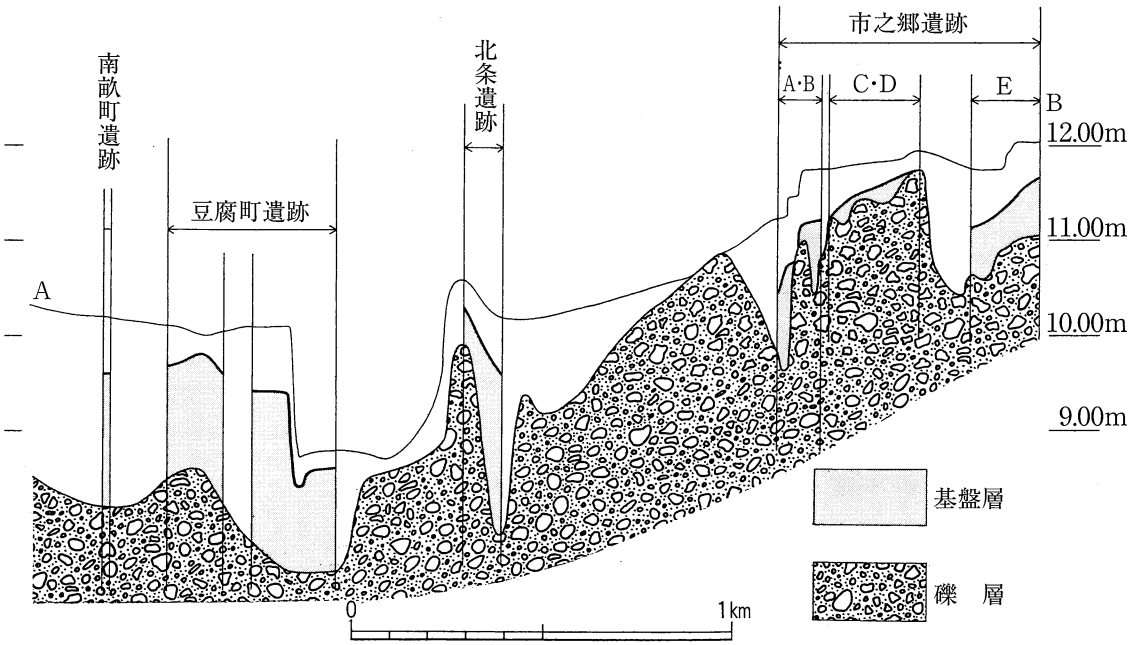
先に、「現在は右岸」としたのは、現在の流路となったのは比較的新しい時期と考えられるからである。

地形環境　市之郷遺跡は、広義の沖積平野に立地する。明治40年陸地測量部発行の１／10000地形図をみると、姫路城を中心に張り出す広義の微高地の縁辺部にあたるようである（第３図）。しかし、市川から船場川にかけてのＪＲ山陽本線の延びる東西のライン（第３図　Ａ－Ｂ）のエレベーション（第４図）をみると、市之郷遺跡が最も高所に立地していることが理解できる。第４図は、ＪＲ山陽本線等連続立体交差事業に伴い発掘調査を実施した市之郷遺跡をはじめ、北条遺跡・豆腐町遺跡・南畝町遺跡における調査成果から地表面・遺構面・礫層のエレベーションを復元したものに、昭和63年西日本旅客鉄道株式会社が作成したボーリングデーター図（中播都市計画高速鉄道山陽本線等　地質横断面図）で補足したものである。これによると、市川から船場川の間では、市之郷遺跡の立地する一帯に、最も早く微高地が形成されたことが理解できる。

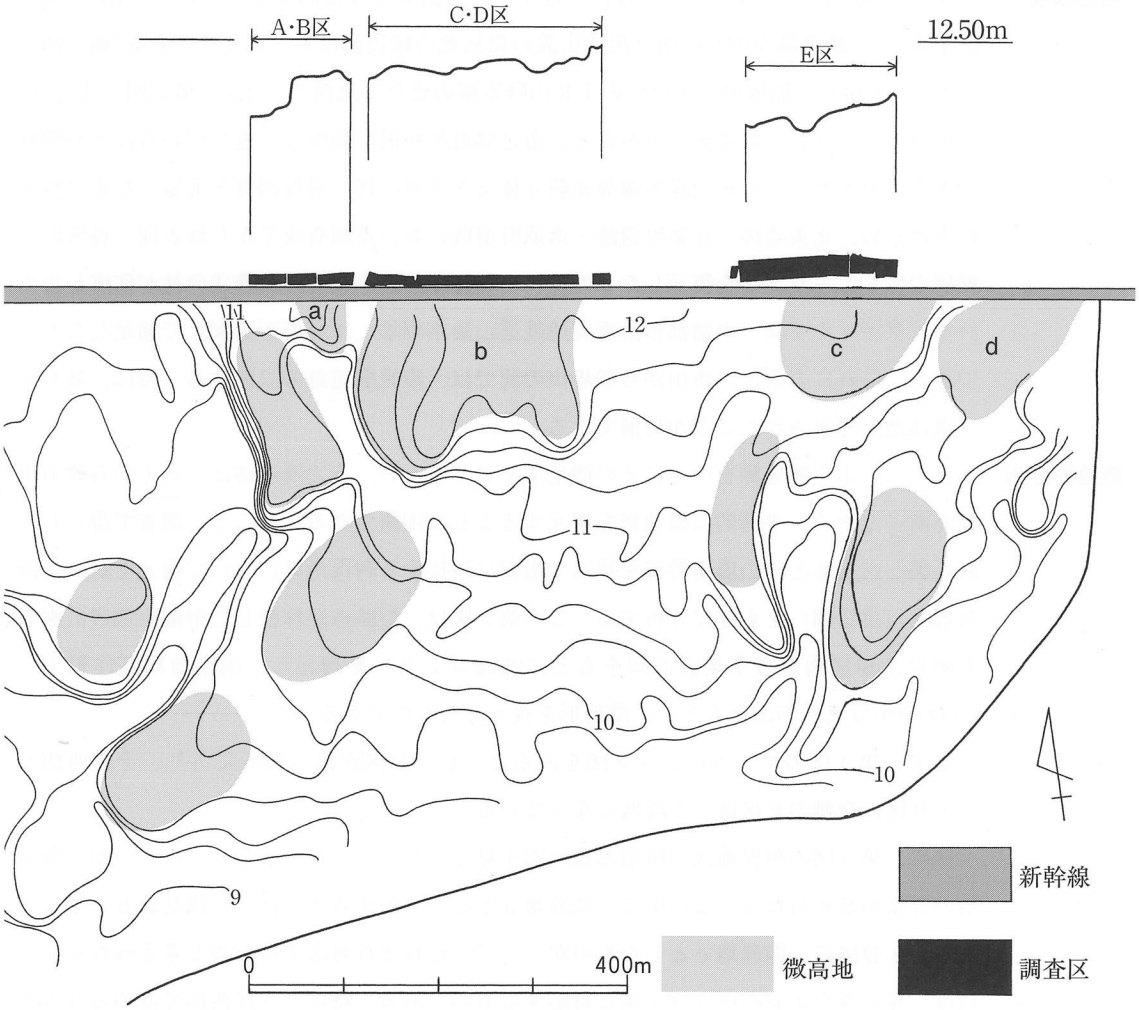
微地形分析　さらに、市之郷遺跡を中心にその微地形を見てみたい。市之郷遺跡は、古くから鉄道用地であったため、平面的に微地形を復元することは困難である。そこで、調査で得られた断面図と当遺跡とは山陽新幹線を挟んで南側に隣接する阿保地区において復元を試みた微地形図（第５図）をもとに分析する。この第５図は、姫路市が作製した中播磨都市計画事業阿保土地区画整理事業設計図をもとに25cmコンターを復元し、国土地理院作製１／10000空中写真の判読をもとに、微地形を復元したものである。

まず、第４図のエレベーション図をみると、Ｃ・Ｄ区が最も高所にあり、その西側のＡ・Ｂ区、東側のＥ区は、１段低くなっている。

次に、第５図の阿保地区の微地形復元図を見てみたい。これによると、いくつかの微高地の存在が認められる。この中で、微高地ａとしたものがＡ・Ｂ区に、微高地ｂとしたものがＣ・Ｄ区に、微高地ｃとしたものがＥ区に、それぞれ対応するものと考えられる。これは、先にみたエレベーション図と対応するものである。特に、Ａ区西部で認められる明確な段差については、微高地ａとその西側の後背湿地に対応するものと考えられる。



第４図　姫路平野東半部基本土層図



第５図　遺跡周辺微地形

以上から、市之郷遺跡は、少なくとも３つ微高地から構成されていることが明らかである。さらに、各微高地上で検出された遺構の時期には差が認められることから、その形成時期が異なるものと考えられる。また、Ａ・Ｂ区とＣ・Ｄ区の間に明確な段差が認められることから、埋没段丘の存在が予想される。この点に関しては、第５章第３節にて検討したい。

また、各微高地は、中州状に堆積した礫層を基盤とし、その凹部を中心に堆積した洪水砂により自然堤防が形成され、この上面が旧地表面となっている。詳細については、各地区の基本土層の項にて報告する。

〔註〕

(1)　橘川真一『播磨の街道　「中国行程記」を歩く』2004

(2)　『日本古典文学大系２　風土記』岩波書店　1958

第２節　歴史的環境

はじめに　市之郷遺跡の周辺においては、多くの遺跡が周知されている。本節では、今回の調査で明らかとなった弥生時代・古墳時代・飛鳥～奈良時代・平安～室町時代を中心に、周辺の遺跡をみていくことにする。当遺跡周辺には多くの遺跡が周知されているが、本項では、調査が行われた遺跡を中心にみていくことにする。また、地域的には姫路平野東半部、市川下流域に限定する（第６図）。

なお、従来市之郷遺跡として周知されていた地域内において、姫路市教育委員会が「仮称姫路駅周辺第３地点遺跡」と称して調査を行っている。この調査成果については、次節で触れることにする。

（１）弥生時代

当該期の遺跡としては、姫路駅周辺第１地点遺跡（９）・姫路駅周辺第２地点遺跡（８）・豆腐町遺跡(12)・船場川東区整遺跡(30)・兼田遺跡(41)・橋詰遺跡(24)・八代深田遺跡(15)で調査が行われている。

第１地点遺跡　市之郷遺跡の西側に位置する。同じくＪＲ山陽本線等連続立体交差事業に伴い、平成８年度に、兵庫県教育委員会が北条遺跡と称して調査を行っている。弥生時代前期末の旧河道が検出されている。また、姫路駅周辺土地区画整理事業に伴い、姫路市教育委員会が調査を行っており、前期の溝・土坑、中期後半の土器溜りが検出されている。[1]

第２地点遺跡　姫路駅周辺土地区画整理事業に伴い、姫路市教育委員会が調査を行い、前期の溝・土坑、弥生時代中期後半の土坑・竪穴住居跡・溝・土器溜りが検出されている。[2]

豆腐町遺跡　姫路駅構内に位置する。同じくＪＲ山陽本線等連続立体交差事業に伴い、平成10年度から平成12年度にかけて、兵庫県教育委員会が調査を行っている。弥生時代前期の溝、および終末期の土坑群が検出されている。[3]

船場川東区整遺跡　船場川下流域に位置する。区画事業に伴い調査が行われ、第10次調査[4]では弥生時代～古墳時代初頭の竪穴住居跡が検出されている。第13次調査[5]では弥生時代中期の竪穴住居跡・土坑墓、後期～古墳時代初頭の竪穴住居跡・柵列・溝・井戸などが検出されている。なかでも、後期～古墳時代初頭の竪穴住居跡内からの無茎銅鏃の出土が注目される。第14次調査[6]でも、中期と後期の竪穴住居跡が検出されている。第15次調査[7]では、弥生時代の土坑墓が検出されている。第16次調査[8]では、中期・後期・古墳時代初頭の竪穴住居跡が検出されている。また、後期の円形周溝墓・溝も検出されている。

兼田遺跡　兼田遺跡発掘調査団によって調査が行われている。[9]市川左岸山頂に立地する遺跡である。弥生時代後期の竪穴住居跡が検出されている。

橋詰遺跡　浅田芳郎・今里幾次によって調査が行われている。[10]遺物包含層を確認し、弥生時代前期から後期にかけての土器が出土している。[11]特に後期の土器が多く、庄内併行期の土器は、長越遺跡同様、本報告Ｅ区出土資料の類例として注目される。

八代深田遺跡　姫路市教育委員会によって調査が行われている。遺物包含層を確認し、中期と後期の土器がまとまって出土している。本遺跡の当該期の土器の良好な類例となりうる資料である。

姫路城跡
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
0
2500m

第6図
主要周辺遺跡

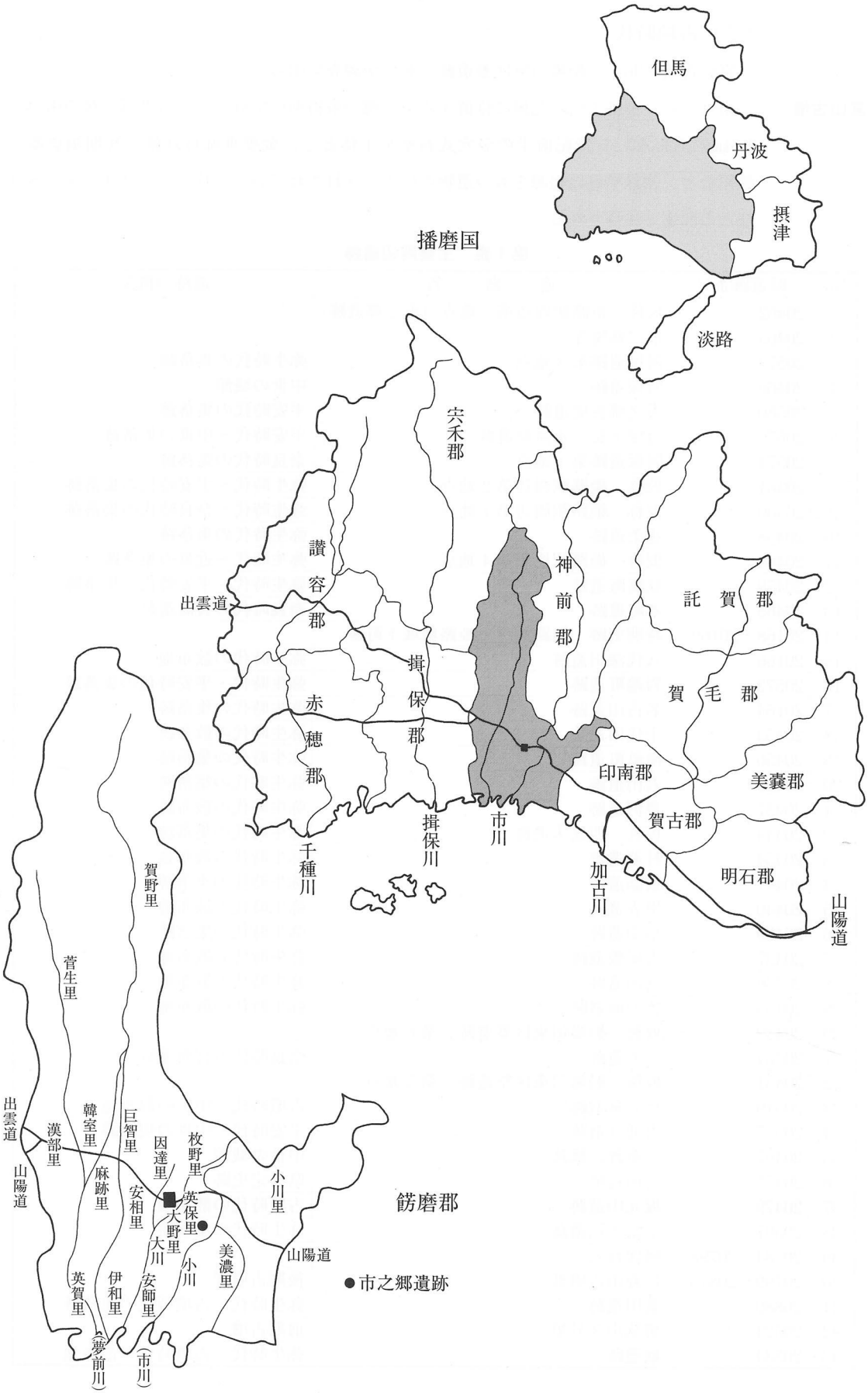
（２）古墳時代

宮山古墳[12]（36）・船場川東区整遺跡（30）が調査で明らかとなっている。

宮山古墳　市川左岸、小富士山の北側に位置する小山塊の東斜面に位置する。市之郷遺跡の南東約1.5kmにあたる。５世紀前半の竪穴式石室を主体とし、金製垂飾付耳飾・初期須恵器・鉄鋌など、朝鮮半島に起源をもつ遺物の出土で注目されている。特に、今回報告するＳＨ18との関連で注目される。

第１表　主要周辺遺跡

No.	県遺跡番号	遺　跡　名	遺跡の概要
1	20462	仮称　姫路駅周辺第３地点（市之郷遺跡）	
2	20463	市之郷廃寺	
3	20573	阿保遺跡第２地点	弥生時代の集落跡
4	20466	阿保遺跡	中世の城館
5	20580	市之郷長堤遺跡	平安時代の集落跡
6	20579	阿保下長・永河原遺跡	平安時代～中世の集落跡
7	20571	阿保遺跡第１地点	奈良時代の集落跡
8	20461	仮称　姫路駅周辺第２地点	弥生時代～平安時代の集落跡
9	20460	仮称　姫路駅周辺第１地点	弥生時代～奈良時代の集落跡
10	20458	北条遺跡	弥生時代の集落跡
11	20464	仮称　姫路駅周辺第４地点	弥生時代～近世の集落跡
12	20459	豆腐町遺跡	弥生時代～平安時代の集落跡
13	20465	本町遺跡	奈良時代の官衙遺跡
14	20168・20169	特別史跡　姫路城跡・姫路城城下町跡	
15	20166	八代深田遺跡	弥生時代の散布地
16	20572	岩端町遺跡	弥生時代・平安時代の集落跡
17	20164	名古山遺跡	弥生時代の集落跡
18	20453	千代田遺跡	弥生時代の散布跡
19	20456	南畝町遺跡	弥生時代の集落跡
20	20455	君田遺跡	弥生時代の集落跡
21	20457	豊沢遺跡	弥生時代の散布跡
22	20444	仮称　西延末遺跡	弥生時代の集落跡
23	20454	村淵遺跡	弥生時代の散布地
24	20441	橋詰遺跡	弥生時代の集落跡
25	20440	黒表遺跡	弥生時代の散布地
26	20439	小山遺跡	弥生時代の集落跡
27	20437	古屋敷遺跡	弥生時代の散布地
28	20436	浜田遺跡	弥生時代の散布地
29	20435	竹の前遺跡	弥生時代の散布地
30	20432	仮称　船場川東区整遺跡　第６地点	
31	20434	三宅遺跡	奈良時代の官衙遺跡
32	20431	仮称　船場川東区整遺跡　第５地点	
33	20519	ヒジ倉遺跡	古墳時代～中世の散布地
34	20577	南通り遺跡	平安時代～中世の集落跡
35	20467	八重鉾山構跡	中世の城館
36	20477	宮山古墳	県指定史跡
37	20479	坂元山遺跡	古墳時代の散布地
38	20507	小富士山遺跡	弥生時代の集落跡
39	20784～20798	阿保百穴	
40	20799～20813	仁寿山古墳群	後期古墳群
41	20889	兼田遺跡	弥生時代・古墳時代の集落跡
42	20524	御旅山３号墳	前期古墳
43	20534	継遺跡	弥生時代・古墳時代の散布地



第７図　律令体制下の市之郷遺跡

船場川東区整遺跡　中期の竪穴住居跡・掘立柱建物跡、後期の掘立柱建物跡が検出されている。第13次調査[13]では、中期～後期の竪穴住居跡・掘立柱建物跡が検出されている。竪穴住居跡は、カマドを伴うもので、本報告Ｅ区で検出した竪穴住居跡と時期的に近いものである。第14次調査[14]でも、後期（６世紀前半）の竪穴住居跡が検出されている。

（３）飛鳥～奈良時代

播磨風土記によると、当該期において当地は播磨国の飾磨郡英保里に編入されていた[15]（第７図）。そして、当該期において、調査地を中心とした一帯に市之郷廃寺が建立されていたと推定されている。関連する遺跡として、豆腐町遺跡（12）・本町遺跡[16]（13）・北条遺跡（10）が周知され、調査が行われている。

本町遺跡　市之郷遺跡の北東に位置する。郵便局の建替えに伴い調査が行われ、検出された建物跡及び出土瓦から、播磨国庁跡の一部の可能性が高まっている。

豆腐町遺跡　井戸・土坑・柱穴群・埋め甕が検出されている[17]。

北条遺跡　姫路市教育委員会によって調査が行われ、７世紀末～８世紀初頭の掘立柱の柱穴列・溝・大型土坑・素掘り井戸が検出されている。また、旧河道内からは、当該期の土器をはじめ、布目瓦・円面硯が出土している[18]。

（４）平安～室町時代

豆腐町遺跡（12）・阿保遺跡（４）・船場川東区整遺跡（30）・姫路駅周辺第２地点遺跡（８）・（仮称）姫路駅周辺第４地点遺跡（11）で調査が行われている。

阿保遺跡　市之郷遺跡の南側に位置する。鎌倉～室町時代の溝・井戸などが確認されている[19・20]。

船場川東区整遺跡　中世の柱穴・溝･土坑・井戸が検出されている。第13次調査[21]では、平安時代後期～鎌倉時代の柱穴・土坑墓が検出されている。第14次調査でも、平安時代後半の掘立柱建物跡が検出されている。

姫路駅周辺第２地点　姫路駅周辺土地区画整理事業にともない姫路市教育委員会により調査が行われている[22]。平安時代後期の掘立柱建物跡・溝が検出されている。

姫路駅周辺第４地点　姫路駅周辺土地区画整理事業にともない姫路市教育委員会により調査が行われている[23]。平安時代後期の井戸が検出されている。

第１地点遺跡　ＪＲ山陽本線等連続立体交差事業に伴い、平成８年度に、兵庫県教育委員会が「北条遺跡」と称して調査を行っている。平安時代後半の溝・柱穴・土坑が検出されている。

豆腐町遺跡　平安時代の池跡・建物跡、鎌倉時代の井戸・柱穴群などが検出されている[24]。

〔註〕

(1)　秋枝　芳「北条遺跡（第１次調査）」『ＴＵＢＯＨＯＲＩ　平成８年度（1996）　姫路市埋蔵文化財調査略報』姫路市教育委員会　1998

(2)　秋枝　芳「（仮称）姫路駅周辺第２地点遺跡（第１次調査）」『ＴＵＢＯＨＯＲＩ　平成７年度（1995）　姫路市埋蔵文化財調査略報』姫路市教育委員会　1997

(3) 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所『豆腐町遺跡　現地説明会資料』2001
(4) 大谷輝彦「(仮称) 船場川東区画整理事業地内遺跡　第６地点８区（第10次調査)」『ＴＵＢＯＨＯＲＩ　平成６年度（1994）　姫路市埋蔵文化財調査略報』姫路市教育委員会　1999
(5) 大谷輝彦・小柴治子「(仮称) 船場川東土地区画整理事業地内遺跡　第６地点11区12区（第13次調査)」『ＴＵＢＯＨＯＲＩ　平成８年度（1996）　姫路市埋蔵文化財調査略報』姫路市教育委員会　1998
(6) 大谷輝彦・小柴治子「(仮称) 船場川東土地区画整理事業地内遺跡　第６地点13区（第14次調査)」『ＴＵＢＯＨＯＲＩ　平成８年度（1996）　姫路市埋蔵文化財調査略報』姫路市教育委員会　1998
(7) 小柴治子「船場川東区整遺跡　第６地点14区（第15次)」『ＴＵＢＯＨＯＲＩ　平成12年度（2000）姫路市埋蔵文化財調査略報』姫路市教育委員会　2002
(8) 小柴治子「船場川東区整遺跡　第６地点15区（第16次)」『ＴＵＢＯＨＯＲＩ　平成13年度（2001）姫路市埋蔵文化財調査略報』姫路市教育委員会　2003
(9) 松本正信・加藤史郎『兼田－弥生遺跡と古墳群の調査－』兵庫県姫路市教育委員会・兼田遺跡発掘調査団　1982
(10) 浅田芳郎・今里幾次『播磨橋詰遺跡発掘調査略報』1960
(11) 山本博利・秋枝　芳『八代深田遺跡』(姫路市文化財調査報告Ⅵ) 姫路市教育委員会　1977
(12) 松本正信・加藤史郎『宮山古墳発掘調査概報』姫路市教育委員会　1970
松本正信・加藤史郎『宮山古墳第２次発掘調査概報』姫路市教育委員会　1973
(13) 前掲（５）
(14) 前掲（６）
(15) 『日本古典文学大系２　風土記』岩波書店　1958
(16) 秋枝　芳『本町遺跡』姫路市教育委員会　1984
(17) 前掲（３）
(18) 前掲（１）
(19) 大谷輝彦「(仮称) 阿保土地区画整理事業地内遺跡（第１次)」『ＴＵＢＯＨＯＲＩ　平成11年度（1999）　姫路市埋蔵文化財調査略報』姫路市教育委員会　2001
(20) 中川　猛「阿保地区試掘調査（第２次)」『ＴＵＢＯＨＯＲＩ　平成12年度（2000）　姫路市埋蔵文化財調査略報』姫路市教育委員会　2002
(21) 前掲（５）
(22) 前掲（２）
(23) 中川　猛「(仮称) 姫路駅周辺第４地点遺跡（第２次)」『ＴＵＢＯＨＯＲＩ　平成11年度（1999）姫路市埋蔵文化財調査略報』姫路市教育委員会　2001
(24) 前掲（３）

第３節　市之郷遺跡

（１）研究史

はじめに　市之郷遺跡は、弥生時代の集落遺跡および古代の市之郷廃寺に関連する遺跡として、多くの学史を有する遺跡である。以下、両時代に関する研究史を簡単にまとめておきたい。

弥生時代　今里幾次[1]・増田重信[2]の研究がある。

今里幾次　「播磨市之郷弥生式遺跡の研究」において、姫路貨物駅操車場拡張のため、後に触れる塔心礎が残存する土壇の北西に連なる地点から見つかった、多量の弥生土器の紹介・分類が行われている。

今里は、これらの土器を第一類から第四類に分類し、第一類を遠賀川式後半（前期後半）、第二類を櫛目式前半（中期前半）、第三類を櫛目式後半（中期後半）、第四類を穂積式（後期）に編年的に位置付けている。なかでも、第二類・第三類の土器を指標として、播磨における櫛目式土器の細別基準とされている。そして、第三類土器に「市之郷式」の型式名を与えている。

また、上記資料中、第三類土器の中でＢ類と分類した「雲母土器」を、「播磨の雲母土器」において発展させ、播磨における河内・讃岐・吉備地域からの搬入土器研究の先駆となっている。

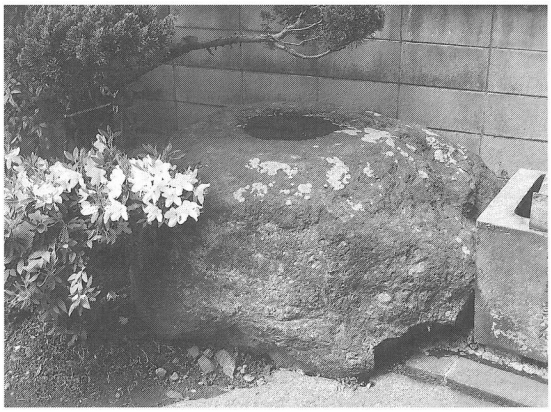
増田重信　「姫路市の先史遺跡」において、姫路市内の弥生遺跡をまとめている。そのなかで、今里が紹介した、姫路貨物駅操車場拡張により見つかった弥生土器についてまとめられている。

市之郷廃寺　市之郷廃寺に関しては、塔心礎（第９図）と瓦の散布が大きなポイントとなっている。ところが、塔心礎に関しては幾度か移転されており、この移転元が当該寺の位置を解明する上での鍵となっている。浅田芳郎[3]・鎌谷木三次[4]・赤松啓介[5]・今里幾次[6]の研究がある。

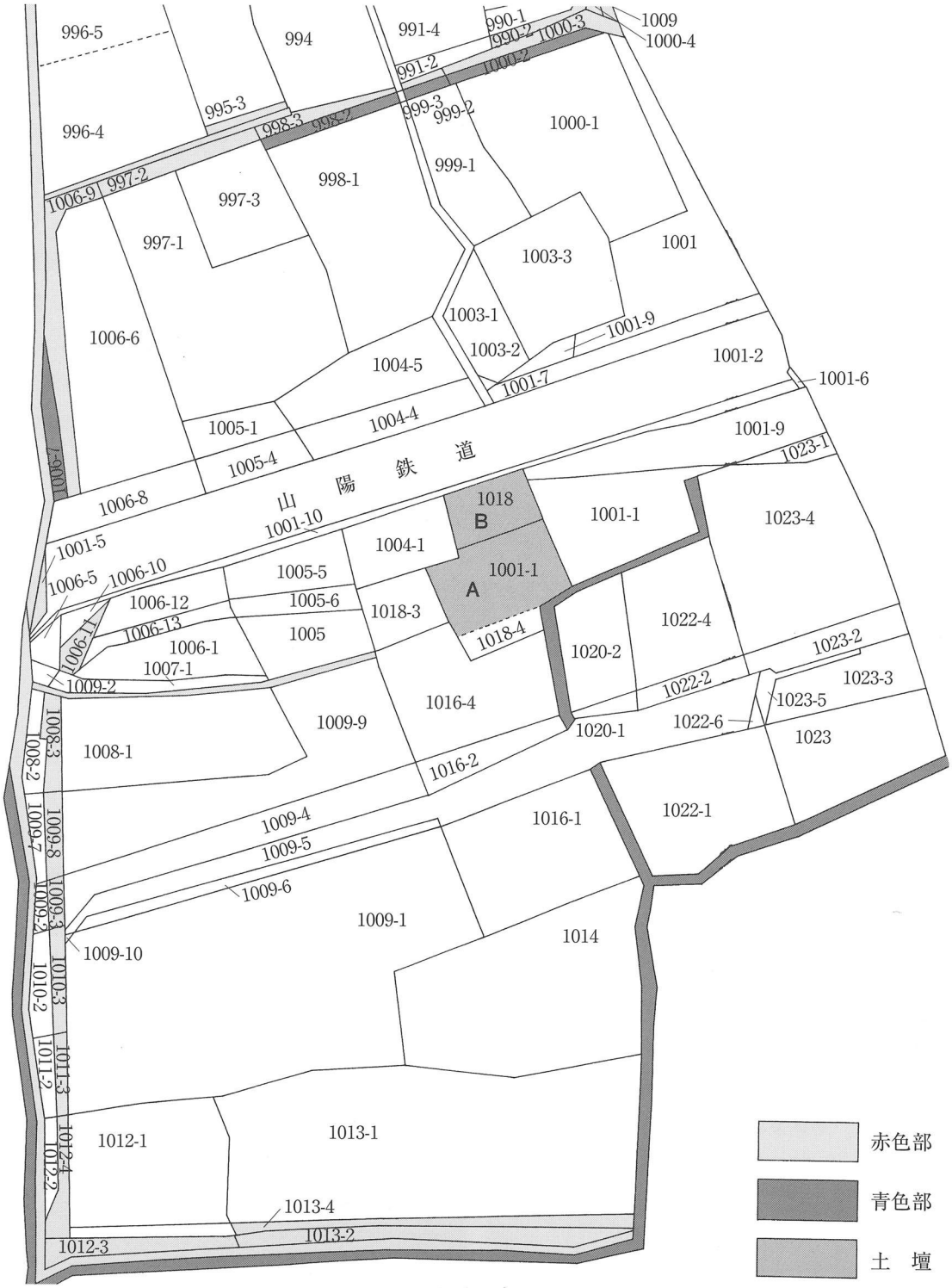
なお、現在、塔心礎は、昭和32年に山陽本線の北側に、薬師堂（第８図）とともに移されている。

浅田芳郎　「播磨國古堂・下市之郷・下太田の寺趾に就て」において、「姫路駅操車場東端近く、山陽線下り線路に南接する」土壇があり、この土壇を中心に古瓦が散布する。さらに、その北東に心礎が存在する。以上から、寺跡と考えて誤りないとの判断を示されている。

第８図　薬師堂



第９図　塔心礎



第10図　地籍図

鎌谷木三次　「播磨上代寺院阯の研究」において、現存する薬師堂が昭和32年に当地に移転する以前の薬師堂およびそこに所在した塔心礎について、地籍図（第10図）及び薬師堂に南接する土地の所有者の話をもとに分析を行っている。

これによると、塔心礎は、以前は薬師堂（B）の南側の地（A）にあったが、山陽鉄道の敷設に伴う土取りのため、その北側の薬師堂の前に移されたことが突きとめられている。そ

して、この塔心礎が移設される前の地（A）が「塔跡」であったものとされ、国分寺西門説を否定されている。また、薬師堂については、市之郷廃寺の堂宇跡とみることはできないとされている。

赤松啓介　「播磨古代寺院の研究」において、寛永三年三木東水の『播州続古所拾考』における下市の郷村薬師堂に関する記載をもとに、姫路駅東方十余町を隔てた線路南側の土壇を塔の峰と推察されている。ここに遺存する塔心礎の年代観から、市之郷廃寺は平安時代末頃まで伽藍が残っていたものと考える。これは国府の盛衰と期を一にするものであることから、市之郷廃寺は播磨の国府寺と考えることも可能ではないか、と考えられている。

今里幾次　市之郷廃寺に伴う瓦を三期に分類し、特に第二期の播磨国分寺式瓦の出土状況から、「播磨国府寺」に当てはめられるのではないかと、結論付けられている。

（２）市之郷遺跡の調査

市之郷遺跡の発掘調査は、今回報告する調査以外に、姫路貨物駅操車場拡張に伴う調査・山陽新幹線建設に伴う調査・JR山陽本線等連続立体交差事業及びこれに連動する姫路駅周辺土地区画整理事業に伴う調査と、大きく３次の調査が行われている。各調査の概要は以下の通りである。

なお、後述するが、微地形から判断して、阿保遺跡の一部も市之郷遺跡の範疇で理解できるものと考えているが、この点に関しては、将来の課題としたい。

貨物駅調査　市之郷遺跡の最初の調査である。1941年に行われている。[7]

新幹線調査　山陽新幹線建設に伴い、橋脚部分の調査が岡山理科大学を中心に行われている。調査成果がだされていないため、調査位置も含め、詳細は不明である。

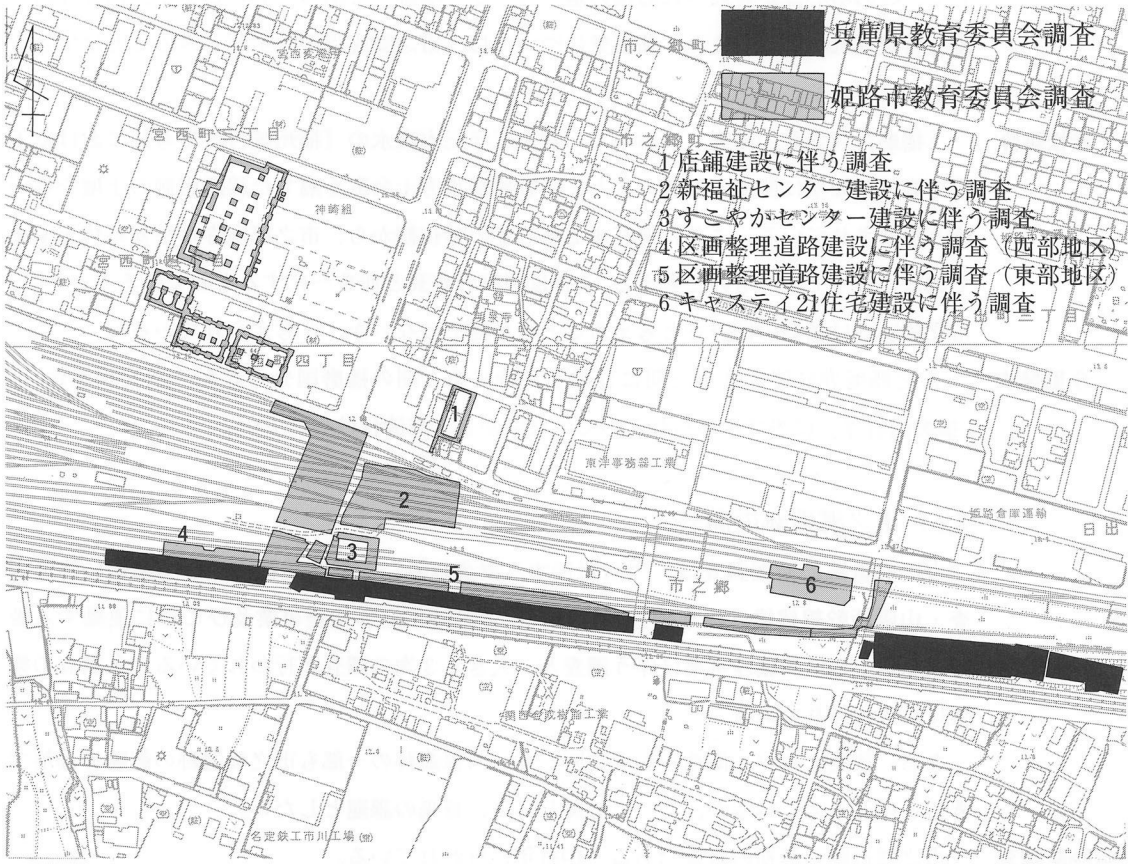
区画整理調査　今回報告する調査の契機となった、ＪＲ山陽本線等連続立体交差事業と一体で行われる姫路駅周辺土地区画整理事業に伴い、姫路市教育委員会が「姫路駅周辺第３地点遺跡」と称して、数次に渡る調査が行われている（第11図）。なお、第11図は平成15年度までに行われた調査箇所である。

西部調査区　今回報告するＡ区の北側にあたる。[8] 弥生時代中期から古墳時代初頭の溝・竪穴住居跡・土坑・土坑墓・素掘り井戸・掘立柱建物跡が検出されている。注目されるものとして、弥生時代中期後半の棟持柱を有する大型掘立柱建物跡、奈良時代前期の須恵器・水晶・土玉・土馬が出土した祭祀に関する遺構、などが検出されている。

この他、当該調査区の東端で南北方向に走る旧河道が検出されている。これは、今回報告するＣ区で検出されたＳＤ21が、この旧河道の一部の可能性が高く、注目される。

東部調査区　今回報告するＤ区の北側にあたる。[9] 古墳時代後期の竪穴住居跡・溝・土坑、奈良時代の市之郷廃寺に関係する遺構・遺物（瓦・鴟尾）が検出されている。古墳時代の竪穴住居跡内からは韓式土器がまとまって出土しており、Ｅ区の調査成果との関連が注目される。また、市之郷廃寺に関連する遺構・遺物に関しても、今回報告するＤ区で検出されており、その関連が注目される。

新福祉センター　新福祉センター建設に伴う調査である。[10] 今回報告するＤ区の北側に位置する。弥生時代前期の河道、同中期後半の土器棺、同後期の竪穴住居跡、奈良時代の掘立柱建物跡・集



第11図　市之郷遺跡の調査

石土坑・区画溝、中世の井戸・埋甕・溝・土坑墓が調査で明らかとなっている。とりわけ、これらの調査成果の中で注目されるのが、奈良時代の区画溝が市之郷廃寺に関連する遺構の可能性が高いことである。また、鴟尾片も出土している。

キャスティ21　キャスティ21住宅建設に伴う調査である。[11] 今回報告のＤ区の北東側に位置する。弥生時代中期の溝、平安時代後期（11世紀後半）の掘立柱建物跡が検出されている。

店舗建設　店舗建設に伴う調査である。[12] 薬師堂の北側の地区を対象としている。市之郷廃寺に関連すると考えられる、南北方向の溝が検出されている。

すこやかセンター　すこやかセンター建設に伴う調査である。[13] Ｄ－1区の北東側にあたる。古墳時代の竪穴住居跡、７世紀末の柱穴・溝、平安時代の溝等が検出されている。７世紀末および平安時代の遺構に関しては、市之郷廃寺との関連が考えられている。

他　確認調査では、韓式土器が出土しており、Ｅ区で検出された韓式土器および当該期の集落との関連で注目される。[14]

〔註〕

(1)　今里幾次「播磨市之郷弥生式遺跡の研究－播磨国弥生式土器の様式分類」『古代文化』14－９　1943
今里幾次「播磨の雲母土器」『考古学研究』第23巻第4号　1977

(2)　増田重信『姫路市の先史遺跡』1957

(3) 浅田芳郎「播磨國古堂・下市之郷・下太田の寺趾に就て」『史迹と美術』第41号　1934
(4) 鎌谷木三次「市之郷廃寺」『播磨上代寺院趾の研究』1942
(5) 赤松啓介「播磨古代寺院の研究」『古代聚落の形成と発展過程』1990
(6) 今里幾次「古瓦からみた播磨国府寺」『兵庫史学』33　兵庫史学会　1963
(7) 前掲（６）
(8) 秋枝　芳「(仮称）姫路駅周辺第３地点遺跡（第２次調査)」『ＴＵＢＯＨＯＲＩ　平成９年度（1997）　姫路市埋蔵文化財調査略報』姫路市教育委員会　1999
(9) 前掲（８）
(10) 中川　猛「(仮称）姫路駅周辺第３地点遺跡　新福祉センター建設予定地」『ＴＵＢＯＨＯＲＩ　平成12年度（2000）　姫路市埋蔵文化財調査略報』姫路市教育委員会　2002
(11) 中川　猛「(仮称）姫路駅周辺第３地点遺跡　キャスティ21住宅建設予定地」『ＴＵＢＯＨＯＲＩ　平成12年度（2000）　姫路市埋蔵文化財調査略報』姫路市教育委員会　2002
(12) 小柴治子「姫路駅周辺第３地点遺跡（店舗建設に伴う)」『ＴＵＢＯＨＯＲＩ　平成13年度（2001）　姫路市埋蔵文化財調査略報』姫路市教育委員会　2003
(13) 小柴治子「姫路駅周辺第３地点遺跡（すこやかセンター建設に伴う)」『ＴＵＢＯＨＯＲＩ　平成13年度（2001）　姫路市埋蔵文化財調査略報』姫路市教育委員会　2003
(14) 秋枝　芳「姫路駅周辺遺跡（第２次調査)」『ＴＵＢＯＨＯＲＩ　平成６年度（1994）　姫路市埋蔵文化財調査略報』姫路市教育委員会　1999

第２章　調査の経緯

第１節　調査の契機

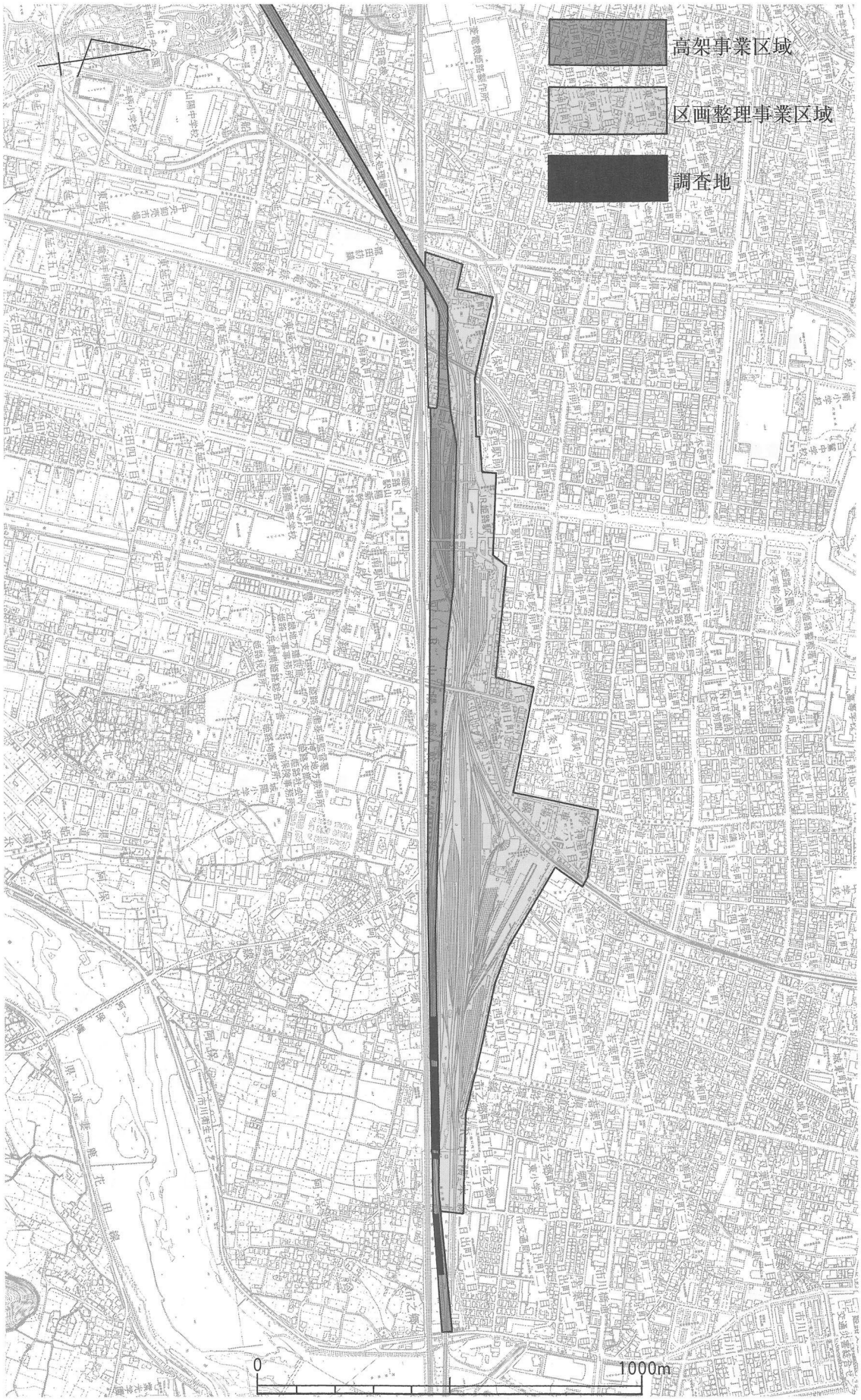
都市基盤整備　姫路駅周辺では、都市基盤整備が計画されている。この計画は、昭和48年の国鉄高架化基本構想の発表に起因するものである。この基盤整備は、ＪＲ山陽本線等連続立体交差事業、関連道路事業、姫路駅周辺土地区画整理事業、街並み・まちづくり総合支援事業からなる。これらの事業は、兵庫県・姫路市・ＪＲ西日本の３者が主体となって行われるもので、今回、兵庫県とＪＲ西日本が主体となるＪＲ山陽本線等連続立体交差事業に伴う埋蔵文化財発掘調査を、兵庫県教育委員会が行うこととなったものである。

立体交差事業　ＪＲ山陽本線等連続立体交差事業は、現在の鉄道関連施設（山陽新幹線を除く線路・駅舎等）を高架にする事業である（第14図）。ＪＲ山陽本線の市川右岸から中央南北幹線までの約4.3km及び播但線1.0km・姫新線1.3kmがその対象区間である。ただし、協議の結果、駅舎部分の対応に関しては、姫路市教育委員会で対応することになった。

発掘調査　当事業計画にともない、確認調査を経て、今回報告する市之郷遺跡をはじめとして、北条遺跡・豆腐町遺跡・南畝町遺跡・西延末遺跡の調査が行われることとなった。これらの遺跡の調査は、平成７年度の市之郷遺跡の調査を初めとして、平成15年度まで、工事工程に合わせて順次行われた。また、姫路駅周辺土地区画整理事業に伴う調査についても、姫路市教育委員会により、ほぼ平行して行われてきている。

第12図　竣工後の調査地（Ｄ区　北西から）

第13図　竣工後の調査地（Ｄ区　北東から）



第14図　事業予定地

第２節　確認調査

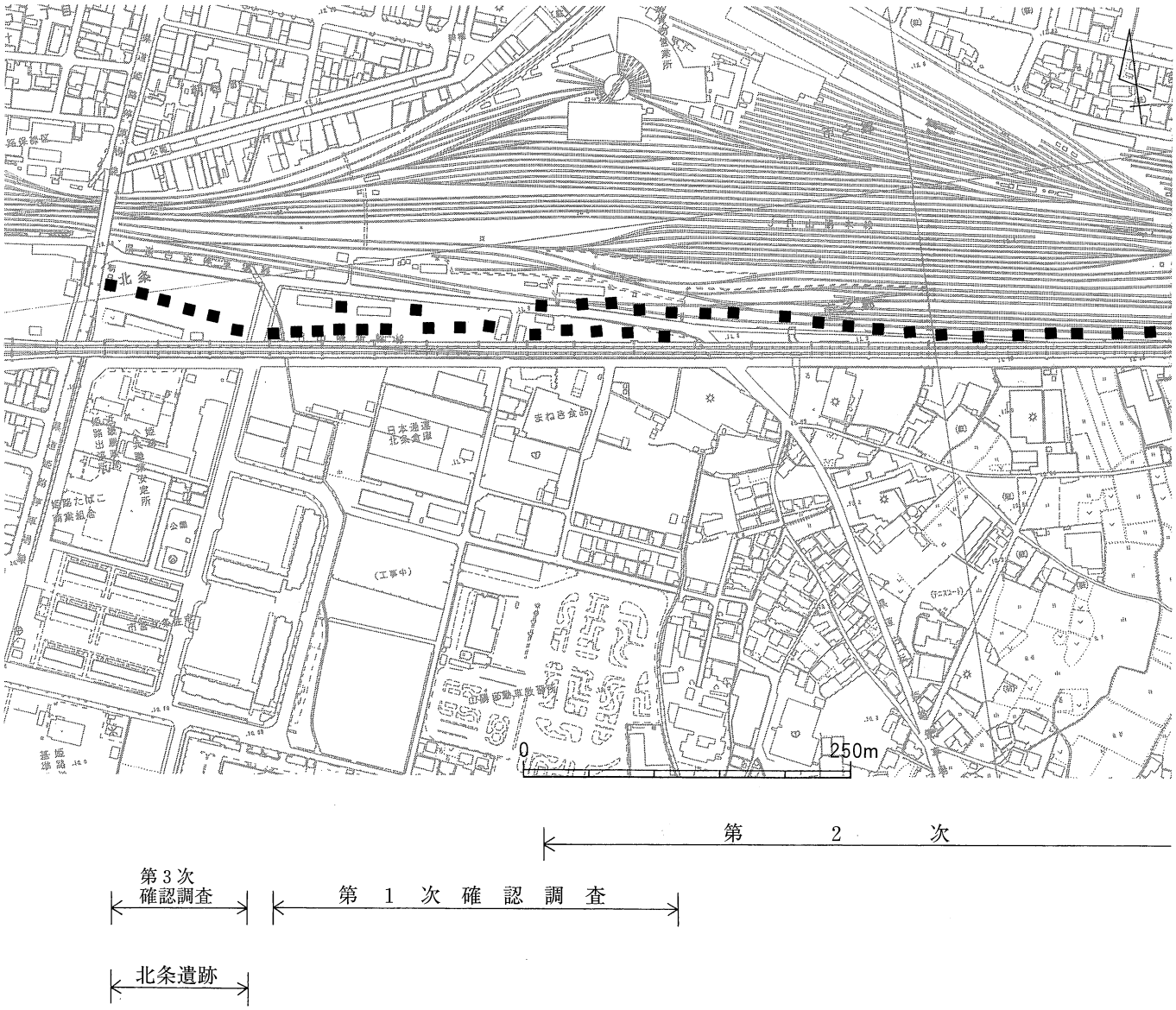
今回報告する、調査対象とした地区は、ＪＲ山陽本線の軌道として利用されていたところである。このため、分布調査による埋蔵文化財包蔵の有無の確認は困難である。一方、当地一帯は市之郷遺跡として周知されていた。このため、事業予定地内において、軌道の撤去された地区から順次確認調査をすすめ、埋蔵文化財の有無の確認に努めた。

確認調査は、平成５年以降、３次にわたって行われた（第15図・第16図）。各確認調査の概要は、以下のとおりである。

第１次調査　平成５年７月５日から７日にかけて実施した。16箇所にグリッドを設定し、遺構・遺物の確認を行った。いずれのグリッドにおいても、遺構・遺物を確認することはできなかった。本発掘調査を実施した北条遺跡の東側にあたり、本発掘調査の対象外となった。

遺跡調査番号　930104

調査担当　兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所　吉田　昇



第15図　確認調査位置図（1）

第２次調査　平成５年11月21日から24日にかけて実施した。44箇所にグリッド（２ｍ×２ｍ）を設定し、遺構・遺物の確認を行った。一部を除いて、弥生時代・奈良時代・中世の遺構・遺物を確認した。今回報告する調査対象地に相当する。

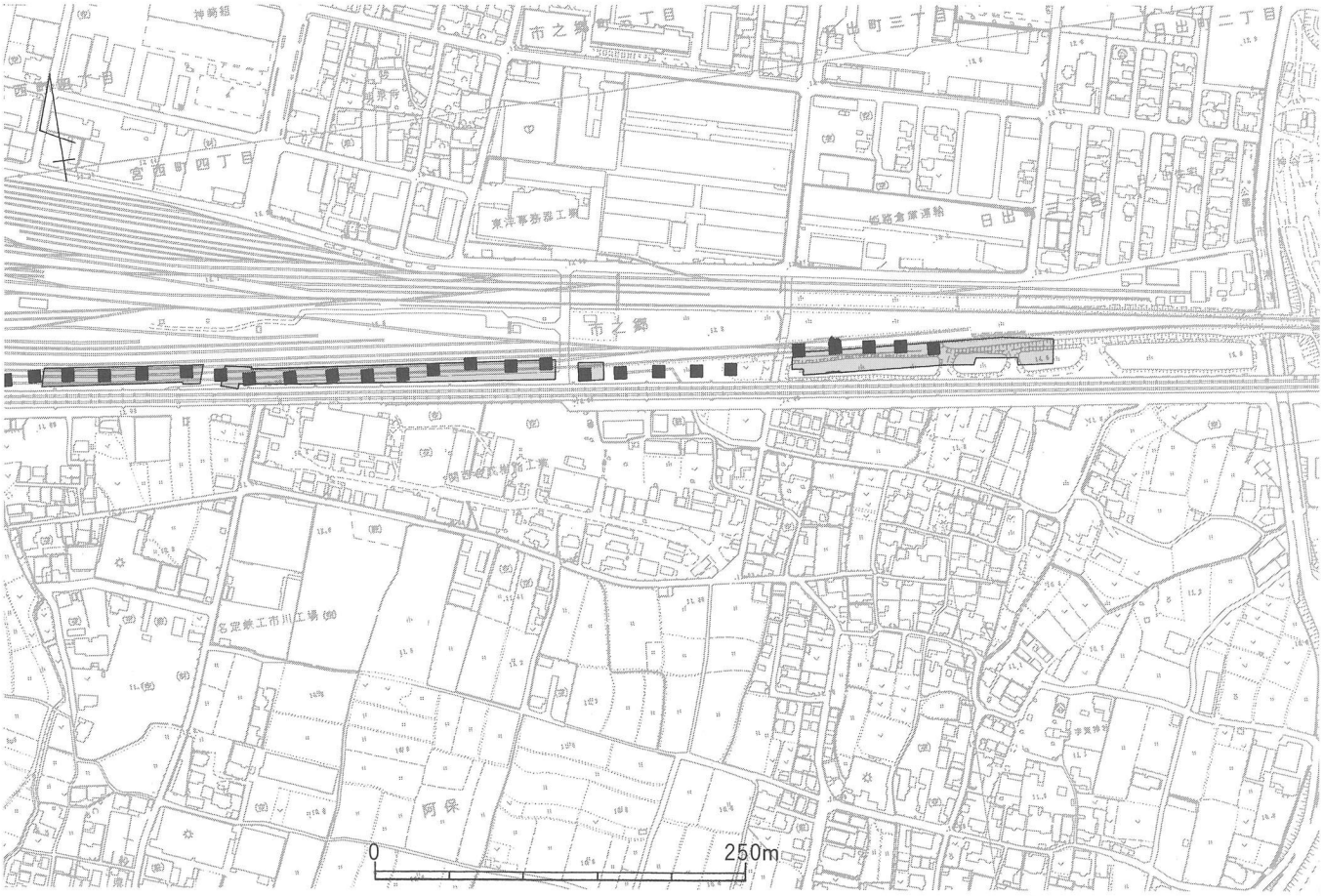
遺跡調査番号　930324

調査担当　兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所　吉田　昇

第３次調査　平成５年11月27日に実施した。６箇所にグリッドをいれ、遺構・遺物の確認を行った。一部をのぞいて、弥生時代と中世の遺構・遺物を確認した。北条遺跡の本発掘調査を実施した地区（平成８年度　兵庫県教育委員会実施）に相当する。

遺跡調査番号　930167

調査担当　兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所　吉田　昇



確　認　調　査

市　之　郷　遺　跡

第16図　確認調査位置図（2）

第３節　本発掘調査

各年度の調査内容および調査体制は、以下のとおりである。

平成７年度　第１次と第２次の２次にわたって調査を実施した。第１次調査は、Ｂ区とＣ区を対象とし、平成７年７月17日から８月１日まで実施した。調査対象面積は、280㎡（Ｂ区：168㎡・Ｃ区：112㎡）である。調査体制は以下のとおりである。

遺跡調査番号　950194

調査員　山田清朝・矢野治巳

第２次調査は、Ａ区・Ｄ区・Ｅ－１区・Ｅ－３区・Ｅ－５区を調査対象として、平成７年７月27日から平成８年３月14日にかけて実施した。調査面積は、計4009㎡（Ａ区：880㎡・Ｄ区：2255㎡・Ｅ－１区：57㎡・Ｅ－３区：417㎡・Ｅ－５区：400㎡）である。

調査体制は以下のとおりである。

遺跡調査番号　950226

調査員　山田清朝・矢野治巳

調査補助員　山本陽子・中塚克浩・林田善也

現場事務員　森崎由紀子・曽賀瑞恵・覚野郁子・山本嘉子

平成８年度　Ｅ－２区とＥ－４区の２地区を調査対象とし、平成８年５月14日から平成８年８月１日にかけて実施した。調査面積は、計2676㎡（Ｅ－２区：2222㎡・Ｅ－４区：454㎡）である。調査終了前の７月20日には、一般市民を対象とした現地説明会を実施した（第17図）。

調査体制は以下のとおりである。

遺跡調査番号　960041

調査員　山田清朝・國本綾子

調査補助員　山本陽子・中塚克浩・中谷悟史・白髭　武・香西亜由美

現場事務員　森崎由紀子・曽賀瑞恵・覚野郁子・鞍野　愛

第17図　現地説明会

第４節　整理作業

まず、現地の調査事務所内で、土器洗い・ネーミング作業を発掘調査と平行して行った。調査終了後は、平成12年度から、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所にて整理作業を行った。各年度の作業内容および整理体制は以下のとおりである。

１．平成12年度の整理作業

土器の接合、瓦の接合を行った。

整理担当職員　深江英憲

整理技術嘱託員　西口由紀・眞子ふさ恵・中田明美・西野淳子・横山キクエ・中西睦子・竹内泰子・宮野正子・前田恭子・神田妙子

２．平成13年度の整理作業

土器の実測を行った。菱田哲郎氏・岩戸晶子氏には、瓦の整理方法についてのご指導をいただいた。

整理担当職員　深江英憲

整理技術嘱託員　岡崎輝子・奥野政子

３．平成14年度の整理作業

土器・瓦の実測、遺物写真の撮影、遺構図のトレースを行った。菱田哲郎氏・岩戸晶子氏には、瓦を見ていただき、瓦についての御教示をいただいた。

整理担当職員　深江英憲

整理技術嘱託員　岡崎輝子・奥野政子

４．平成15年度の整理作業

石器・木製品の実測、遺物写真の撮影、遺構図・遺物実測図のトレース作業を行った。亀田修一氏・吉井秀夫氏には、初期須恵器・韓式土器を見ていただき、御教示いただいた。

整理担当職員　長濱誠司

整理技術嘱託員　岡崎輝子・古谷章子・奥野政子・高瀬敬子・高田めぐみ・垣本明美

５．平成16年度の整理作業

遺構図のトレース作業および原稿執筆・編集作業を行い、刊行に至った。また、弥生土器を森岡秀人氏・竹村忠洋氏に、古墳時代の須恵器を藤原　学氏に見ていただき、御教示いただいた。さらに、市之郷廃寺に伴う瓦について、今里幾次氏から同笵関係・年代観等について、高橋　学氏からは当地の地形環境について、それぞれ御意見を伺った。

整理担当職員　長濱誠司

整理体制　岡崎輝子・岸野奈津子・垣本明美

第18図　土器洗い

第３章　調査の成果

第１節　調査の概要

はじめに　調査対象地は、大きく３地区からなる。しかし、①調査が平成７年度と８年度の２ヶ年にわたって行われたこと、②工事工程との兼ね合い等から一括して調査することは困難であったことから、上記３地区をさらに数地区に細分して調査をしなければならなかった。この結果、調査地を、西側から大きくＡ区からＥ区の５地区に分割し、さらに各地区を細分して調査を進めていった。各地区の詳細は以下のとおりである（第19図）。

Ａ区　調査地内を水路が南北方向に２本存在した。この水路については、事前に立合調査を済ませ、周囲の調査に影響が及ばないようにＵ字溝を設置した。以上から、Ａ区を、Ａ-１・Ａ-２・Ａ-３区に３分割することとなった。およそ、10ｍ×90ｍの範囲を調査対象とし、その調査面積は880㎡（Ａ－１区：360㎡・Ａ－２区：306㎡・Ａ－３区：214㎡）である。調査は平成７年度に実施した。

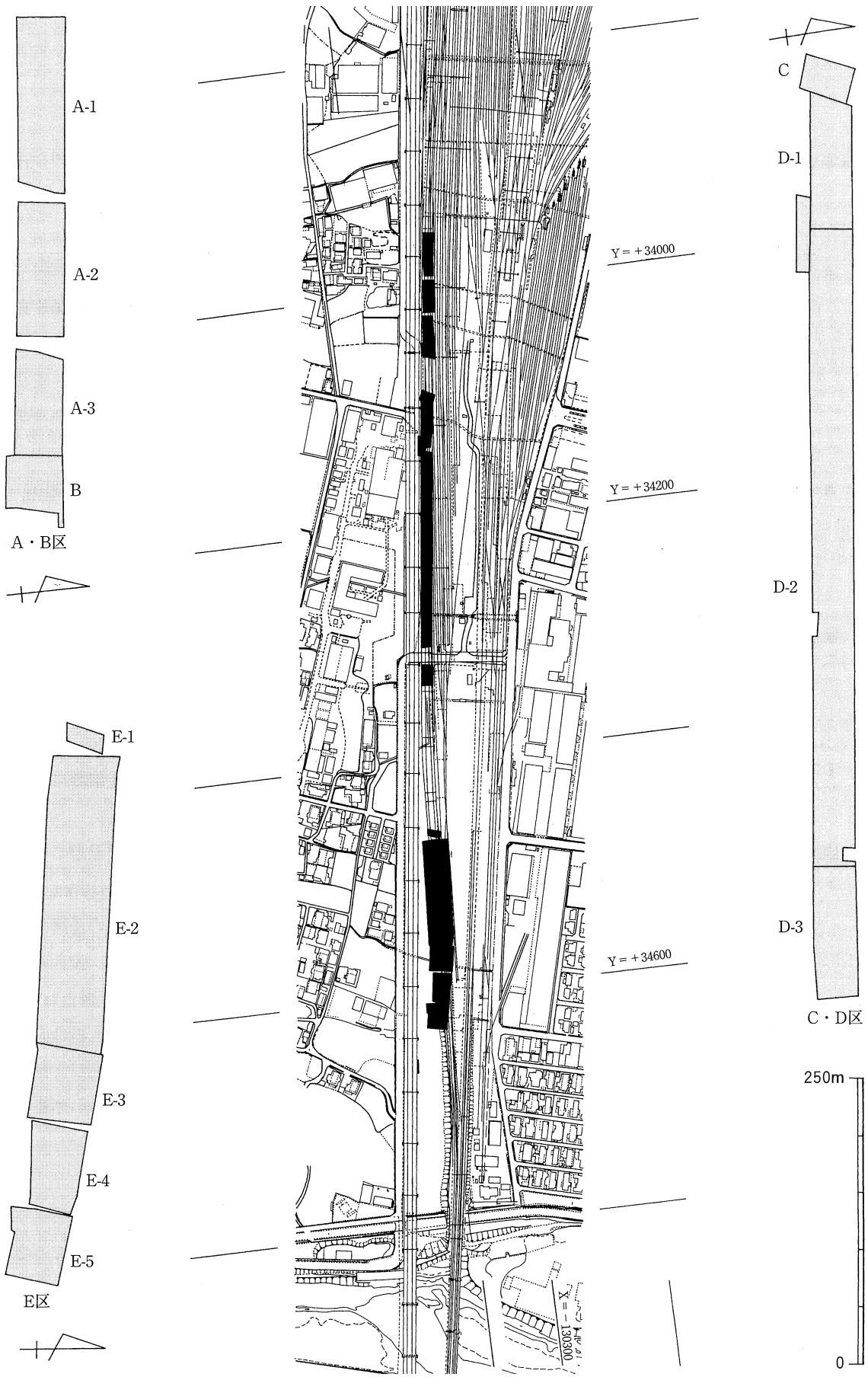
Ｂ区　Ａ区とは平面的に連続する地区である。ただし、当地区は、工事工程上先行して調査する必要があり、一つの地区として調査を行った。調査年度は平成７年度で、調査面積は168㎡である。

Ｃ区　Ｂ区とは都市計画道大日線を挟んだ位置にある。当地区についても、本来なら東側のＤ区と平面的に連続する地区であるが、Ｂ区と同様の理由から、一つの地区として調査を行った。調査面積は112㎡である。調査は平成７年度に実施した。遺跡調査番号は950194である。

Ｄ区　今回の調査対象地の中では最も広い地区である。工事工程の都合上、調査区を３分割し（Ｄ-１区・Ｄ-２区・Ｄ-３区）、工程上急ぐ箇所から調査を進めていった。さらに、一般県道姫路環状線を挟んだ箇所があり、Ｄ-４区とした。おおよそ10ｍ×220ｍの範囲を調査対象とし、その調査面積は2255㎡である。調査は平成７年度に実施した

Ｅ区　当地区についても、Ｄ区同様、工事工程に合わせて５地区に分割（Ｅ-１区・Ｅ-２区・Ｅ-３区・Ｅ-４区・Ｅ-５区）して調査を行った。当地区の調査は２ヶ年に及び、平成７年度にＥ-１区・Ｅ-３区・Ｅ-５区の３地区を、平成８年度にＥ-２区とＥ-４区の２地区の調査を行った。およそ、20ｍ×180ｍの範囲を調査対象とし、その調査面積は3550㎡である。

５地区の調査は以上のように進めていったが、Ａ区とＢ区、Ｃ区とＤ区は平面的に連続するものである。そこで、本報告では、Ａ・Ｂ区、Ｃ・Ｄ区、Ｅ区の大きく３地区に分けて、報告する。


A-1
A-2
A-3
B
A・B区
E-1
E-2
E-3
E-4
E-5
E区
Y＝＋34000
Y＝＋34200
Y＝＋34600
X＝－130300
C
D-1
D-2
D-3
C・D区
250m
0

第19図　地区割図

第2節　A・B区の調査

1．基本層序と遺構の検出

基本層序　当地区は、後述するように（第5章第2節）、A－1区とA－2区の間に段丘崖の存在が推定され、遺構検出面のレベルに顕著な差が認められるとともに、層序においても大きな差が認められる。以下、A－1区とA－2区～B区にわけて報告する。

A－1区　上層から、盛土層・耕作土層・床土層・整地層・基盤層の層序が認められた（第20図）。基盤層は、遺構検出面を上面とするもので、上から、基盤層となる黒色シルト質極細砂混じり灰色シルト質極細砂（第20図：8層）、顕著に土壌化した黒褐色シルト質極細砂～黒色シルト質極細砂（第20図：13層）、下層は礫層からなる。基盤層上面のレベルは一定ではなく、西側に向かって低くなる傾向が認められる。当地区東側における現地表面から基盤層上面までの深さは87cmで、旧地表面からの深さは26cmである。

A～B区　A－1区と大きく異なる点は、床土層下の整地層が認められないことである。基盤層においても、8層は認められない。礫層上面は顕著な起伏が認められ、その凹部を埋めるように部分的に洪水砂（第20図：6層）の堆積が認められた。なお、基盤層上面のレベルは、B区において、東側へわずかに低くなる傾向が認められる。

段丘崖　A－1区東端部とA－2区西端部の境にあたる。この箇所は、基盤層の中心をなす礫層が大きく落ち込み、この凹部を埋めるように多量の洪水砂（第20図：7層・11層）の堆積が認められた。また、旧耕土層のレベルもその箇所を境に顕著な段差が認められた。このため、同じ基盤層を構成する礫層ではあるが、その堆積時期は異なるものと考えられる。特に、A－1区の礫層は、段丘崖形成後の堆積と考えられる。基盤層上層の土壌層に関しても同様である。

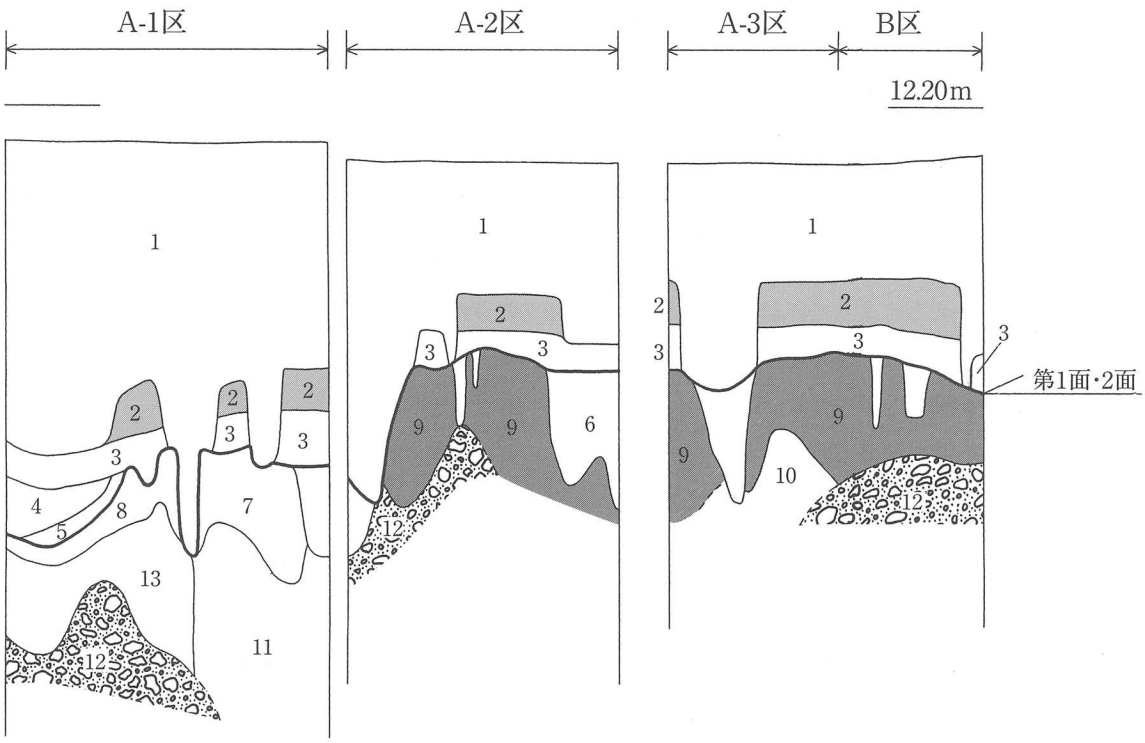
遺構検出　遺構を検出した面は、層位的には1面である。この面は、先述したような段丘崖の存在から、A－1区とA－2区～A－3区の間に大きな段差が認められる。その差は20cm～30cmに及ぶ。ただし、遺構間に切り合い関係が少なからず認められ、新しい時期の遺構の埋土は灰色系を呈し、それ以外の遺構との識別が可能であった。調査においては、大きく2回に分けて行うこととした。新しい時期の遺構を第1面、古い時期の遺構を第2面とした。

出土遺物　遺構を検出するにあたり、多くの土器が出土している（図版1）。これらの土器は直接遺構に伴うものではないが、当地区における遺構の時期の推測ないしは、土地利用時期の復元にあたっての検討材料になるものと考えられる。そこで、主だった遺物について報告する。

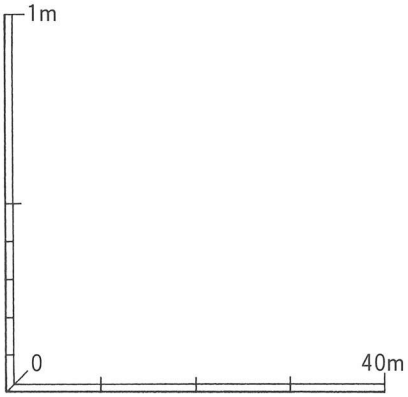
大きくみて、弥生時代・飛鳥時代・平安時代の土器が出土している。

弥生時代　土器と石器が出土している。

土器　弥生時代中期の壷が2点（1・2）出土している。2点とも広口壷に分類されるものである。1は、口縁端部を下方に拡張し、端面に凹線を施す。この上に4本1セットの棒状浮文と円形浮文を交互に6箇所に貼り付けている。また、頸部にも凹線が8条施されている。2は、口縁端部を上下方に拡張し、端面に5条の凹線が施され、その上に円形浮文が



1．盛土
2．耕作土
3．床土層
4．灰色シルト質極細砂
5．灰色シルト質極細砂・褐色シルト質極細砂（整地層）
6．暗灰色粗砂
7．暗灰黄色極細砂（洪水砂）
8．黒色シルト質極細砂混じり灰色シルト質極細砂
9．黒褐色シルト質極細砂～黒色シルト質極細砂（土壌質Ⅰ）
10．暗黄褐色シルト質極細砂（洪水砂）
11．暗灰黄色極細砂（洪水砂）
12．礫層
13．黒褐色シルト質極細砂～黒色シルト質極細砂



第20図　A・B区基本土層

10箇所に貼り付けられている。また頸部には、指頭圧痕紋突帯が貼り付けられている。

石器　石鏃２点（Ｓ１・２）、石錐1点（Ｓ17）、石庖丁３点（Ｓ18～20）、石鎌1点（Ｓ21）、刃器１点（Ｓ24）が出土している（図版78・79）。Ｓ24がＢ区から出土している以外は、全てＡ－２区から出土している。この中で、Ｓ20の刃部の磨耗状況は、磨製石庖丁と同様の使われ方が認められる。

飛鳥時代　須恵器の杯蓋（3）と杯A（4）が出土している（図版1）。3は、内外面とも横ナデ調整により仕上げられている。4は、底部が平高台状を呈するやや変則的な形態をとるもので、底部はヘラにより切り離されている。体部から口縁部内外面は、横ナデ調整により仕上げられている。

平安時代　須恵器・土師器・緑釉陶器が出土している（図版1）。須恵器は、椀の口縁部（5）と底部片（6）が出土している。いずれも同タイプの椀で、底部の特徴から、11世紀後半と考えられる。底部は回転糸切りにより切り離されている。

緑釉は、椀の底部片（7）が出土している。胎土は土師質で、幅広の高台である。全面に釉がかけられている。

土師器は小皿が1点（8）出土している。口縁部は横ナデ調整により仕上げられ、底部はヘラにより切り離されている。

小結　当地区においては、弥生時代中期から平安時代にかけての遺構の存在が、明らかとなった。さらに、A－1区で出土している遺物は、図化できなかったものも含めて、鎌倉時代以降に限られる。また、A－2区・A－3区から出土した遺物は、弥生時代前期までは遡らない。

2．第１面（写真図版６・７）

上述したように、当面で検出した遺構は中世以降に限られる。遺構としては、掘立柱建物跡・柱穴・井戸・墓・土坑・溝を検出した（第21図）。

（１）概要

当地区は、大きく３地区に細分できる。このなかで、遺構が最も多く検出されたのはＡ－３区からＢ区にかけてで、逆にＡ－１区で検出された遺構はわずかである。各地区で検出された遺構およびその平面的位置をまとめると、以下の通りである。

Ａ－１区　検出した遺構は、柱穴・溝・井戸に限られる（第22図）。

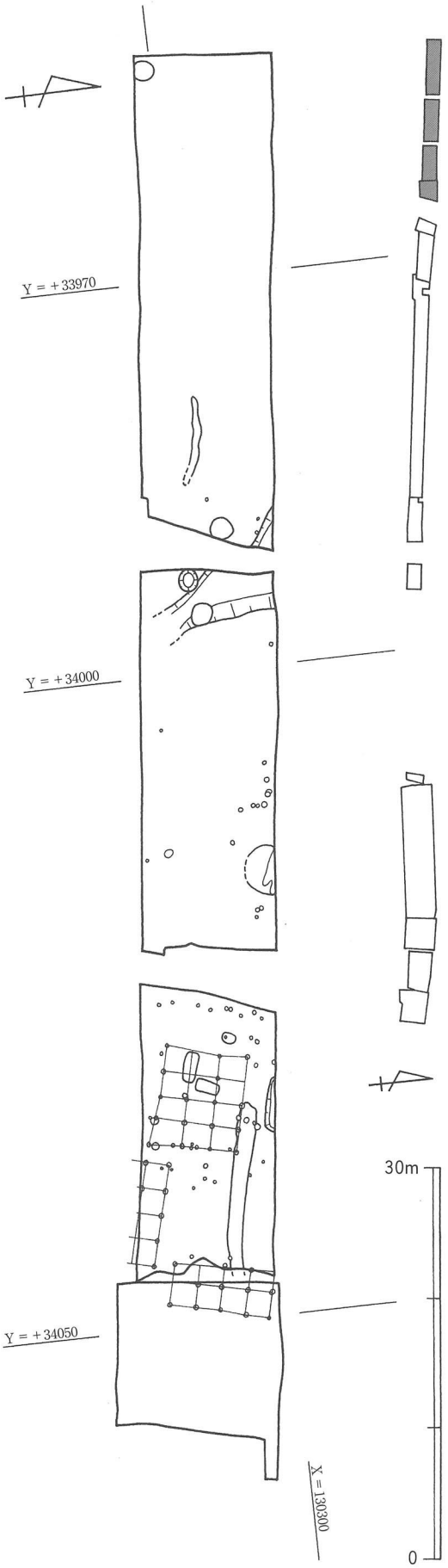
柱穴は当地区東側で数穴検出したに過ぎない。溝に関しては、２条検出したが、そのなかのＳＤ02はＡ－２区を中心に検出された遺構の一部である。

井戸は２基検出されたが、南西隅と東端部で検出されている。

Ａ－２区　検出した遺構は、柱穴・土坑・溝・井戸である（第23図）。西端部で溝と土坑を、東部で柱穴と井戸１基が検出されている。柱穴は数穴検出されたに過ぎない。

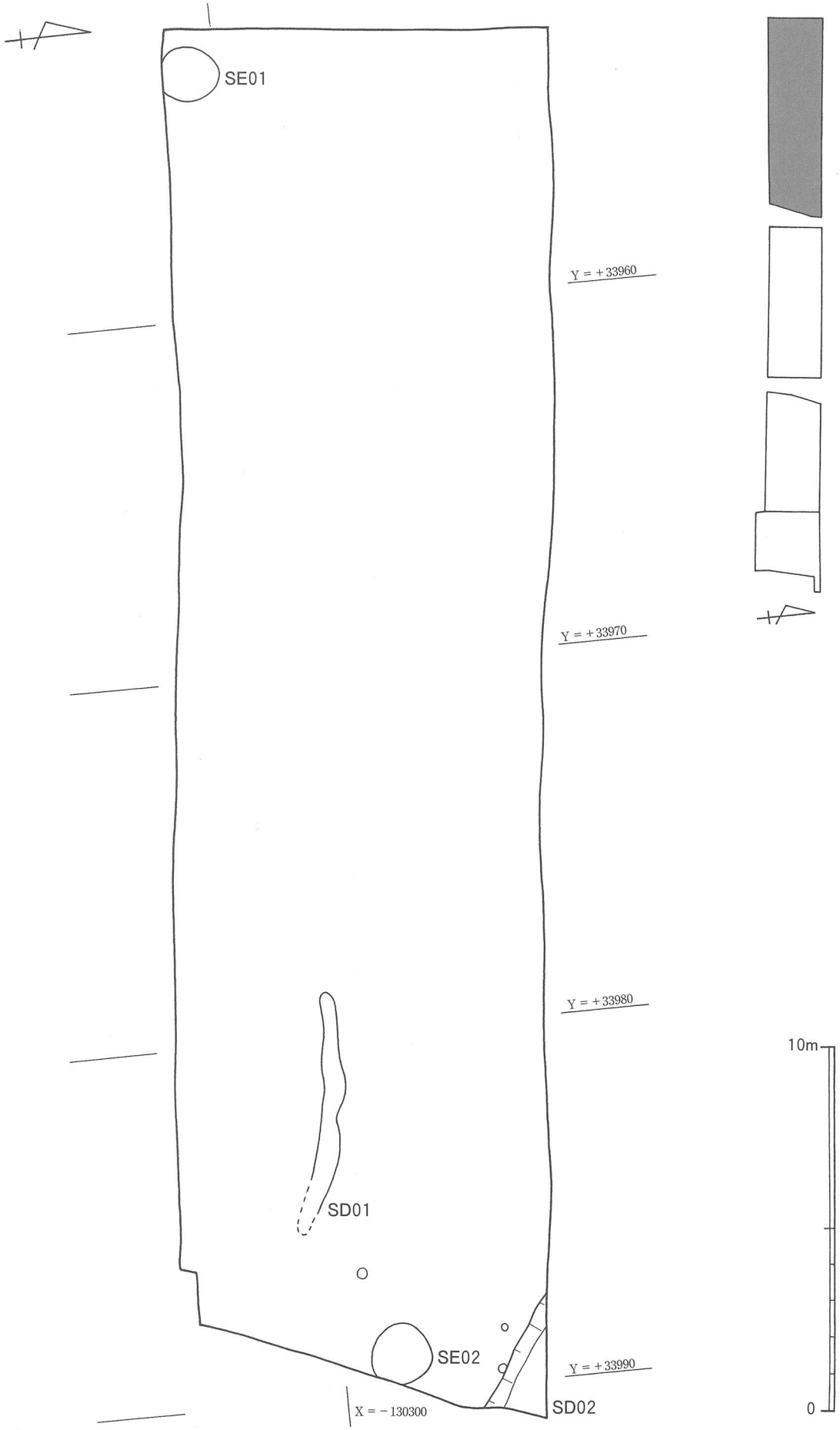
Ａ－３・Ｂ区　検出した遺構は、掘立柱建物跡・柱穴・土坑・溝である（第24図）。当地区で目立つのが掘立柱建物跡で、３棟検出されている。Ａ－３区全面にこれらの遺構が検出されている。Ｂ区ではこのうちの掘立柱建物跡１棟の一部のみが検出されたに過ぎない。

土坑は、西半に集中するが、そのうちの１基（ＳＫ04）は、掘立柱建物ＳＢ01にともなうものである。

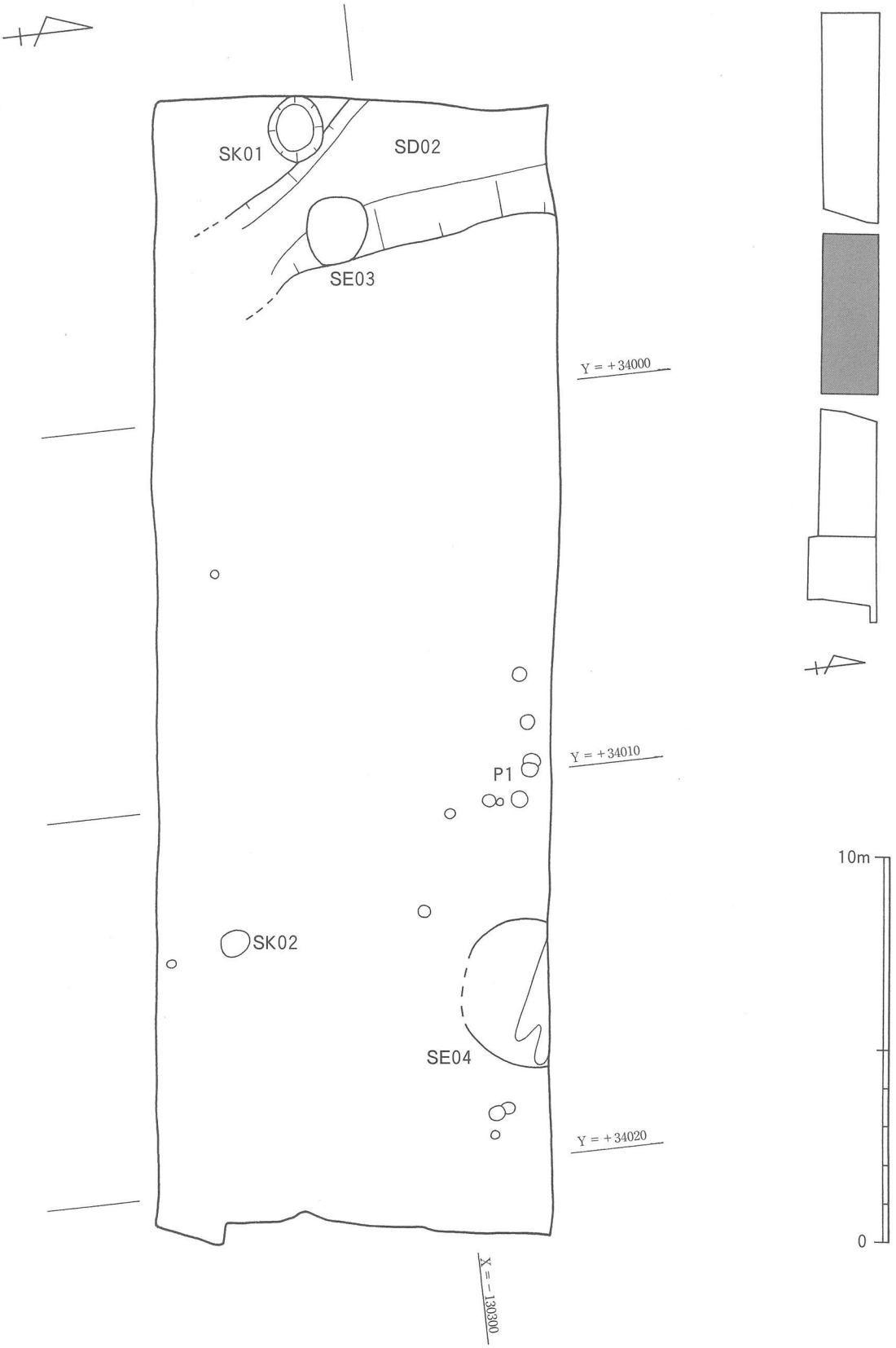


第21図　Ａ・Ｂ区　第１面

第１面

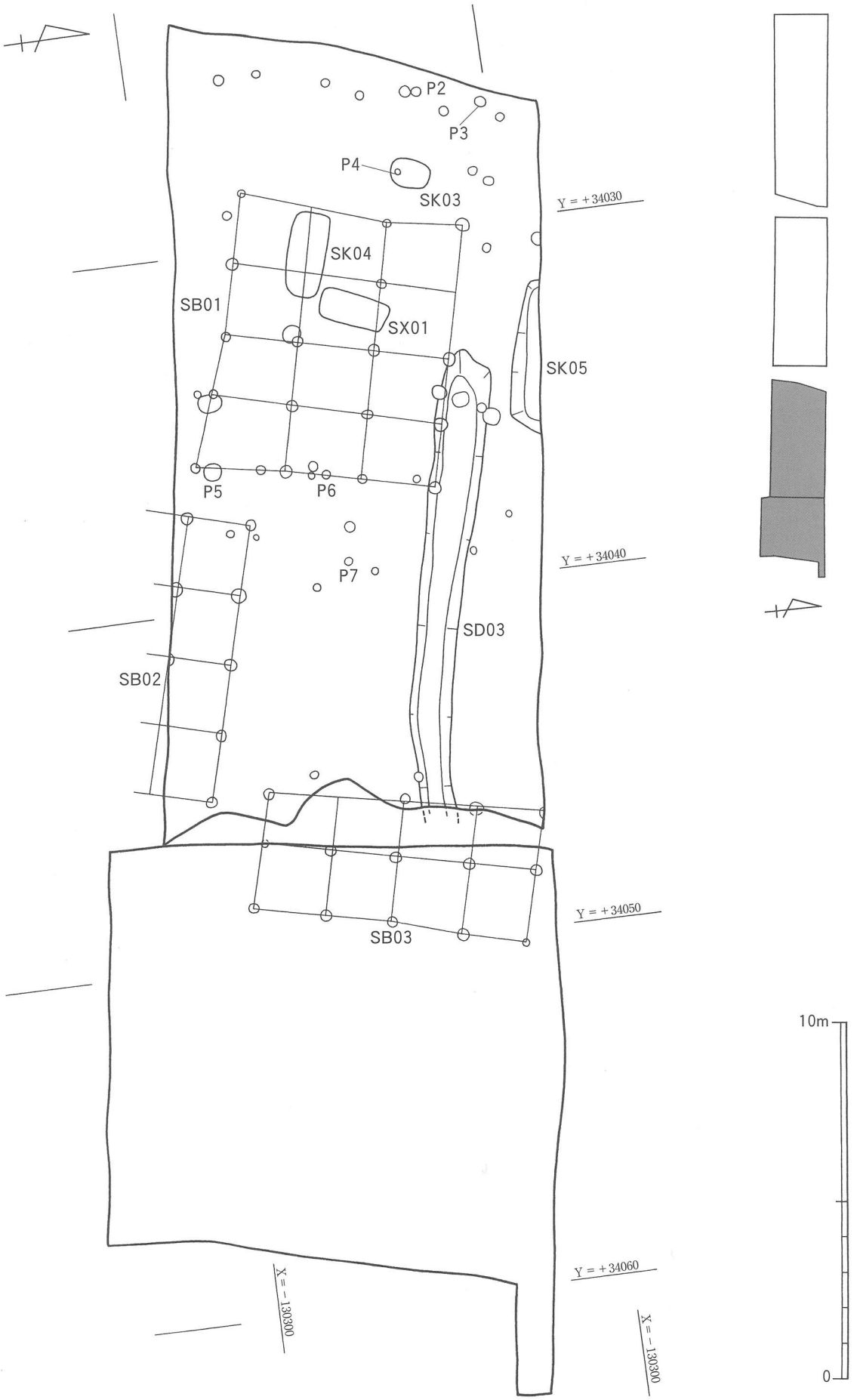


第22図　Ａ－１区　第１面


SK01
SD02
SE03
Y = +34000
P1
Y = +34010
SK02
SE04
Y = +34020
X = −130300
10m
0

第23図　A－2区　第1面

第１面



第24図　A－３区・B区　第１面

（２）掘立柱建物跡

ＳＢ０１（写真図版８）

検出状況　Ａ－３区で検出した（第24図）。建物の規模から判断して、南側へは拡がらず、建物１棟分を検出したものと考えられる。ＳＢ02の北西側に位置する。

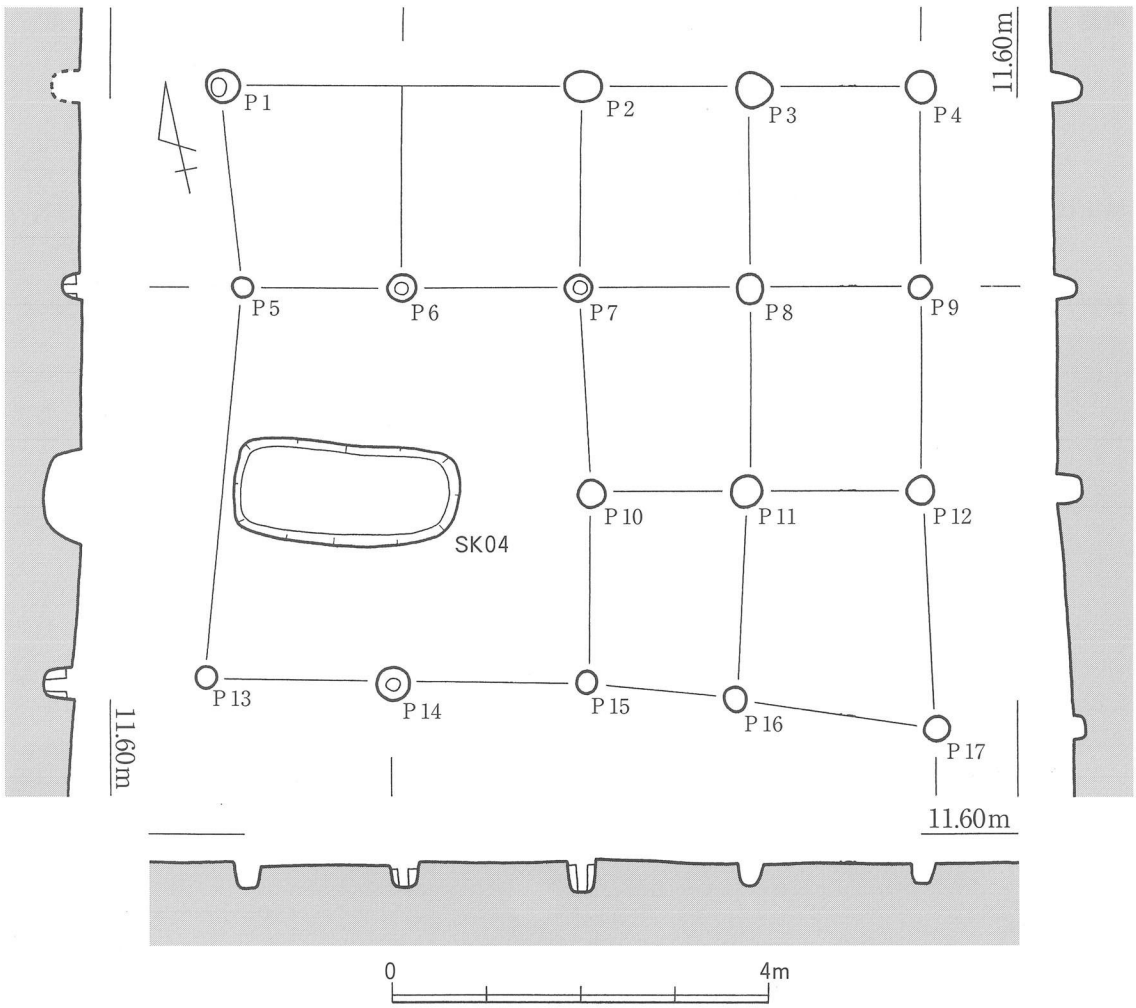
形状・規模　桁行４間、梁行３間の総柱建物である（第25図）。Ｐ５－Ｐ９間を基準とした棟軸方向はN78°Ｗを示す。ただし、西梁行のＰ５とＰ13の間の１穴を検出することができなかった。また、当建物とＳＫ04（49頁）がセットとなるものと考えられ、ＳＫ04と平面的に重複する箇所についても、柱穴１穴を検出することはできなかった。

北桁行方向で7.47m、東梁行方向で6.80mを測り、その面積は50.86㎡を測る。柱穴間の距離および柱間の平均値は第２表のとおりである。

柱穴　掘り形の平面形は全て円形からなり、その規模は直径20cm～40cmを測る。深さは、６cm～27cmを測る。各柱穴の規模については、第３表のとおりである。埋土は、灰色シルト質極細砂を中心とした灰色系が主体である。

出土遺物　いくつかの柱穴から須恵器・土師器・瓦器が出土している。

須恵器　椀の口縁部片と底部・甕の体部片が出土しているが、いずれも小片のため図化できなかった。



第25図　ＳＢ01

第２表　ＳＢ01建物規模一覧表

	柱穴間	柱穴間距離	側面距離	柱穴間平均距離
北桁行	Ｐ１－Ｐ２	3.88		
	Ｐ２－Ｐ３	1.80		
	Ｐ３－Ｐ４	1.80	7.48	1.84
東梁行	Ｐ４－Ｐ９	2.10		
	Ｐ９－Ｐ12	2.16		
	Ｐ12－Ｐ17	2.54	6.80	2.26
南桁行	Ｐ13－Ｐ14	1.98		
	Ｐ14－Ｐ15	2.04		
	Ｐ15－Ｐ16	1.60		
	Ｐ16－Ｐ17	2.16	7.78	1.94
西梁行	Ｐ１－Ｐ５	2.12		
	Ｐ５－Ｐ13	4.18	6.30	2.10

第３表　ＳＢ01柱穴規模一覧表

柱穴No.	平面規模	柱痕径	深さ
Ｐ１	32	16	14
Ｐ２	40		27
Ｐ３	40		16
Ｐ４	36		16
Ｐ５	22		14
Ｐ６	28	14	9
Ｐ７	28	14	16
Ｐ８	26		12
Ｐ９	24		11
Ｐ１０	28		8
Ｐ１１	32		7
Ｐ１２	28		3
Ｐ１３	20		13
Ｐ１４	34	14	16
Ｐ１５	22		7
Ｐ１６	22		7
Ｐ１７	26		6

※　第２表の単位はｍ
※　第３表の単位はcm

土師器　大皿・小皿・甕が出土しているが、いずれも小片のため図化できなかった。

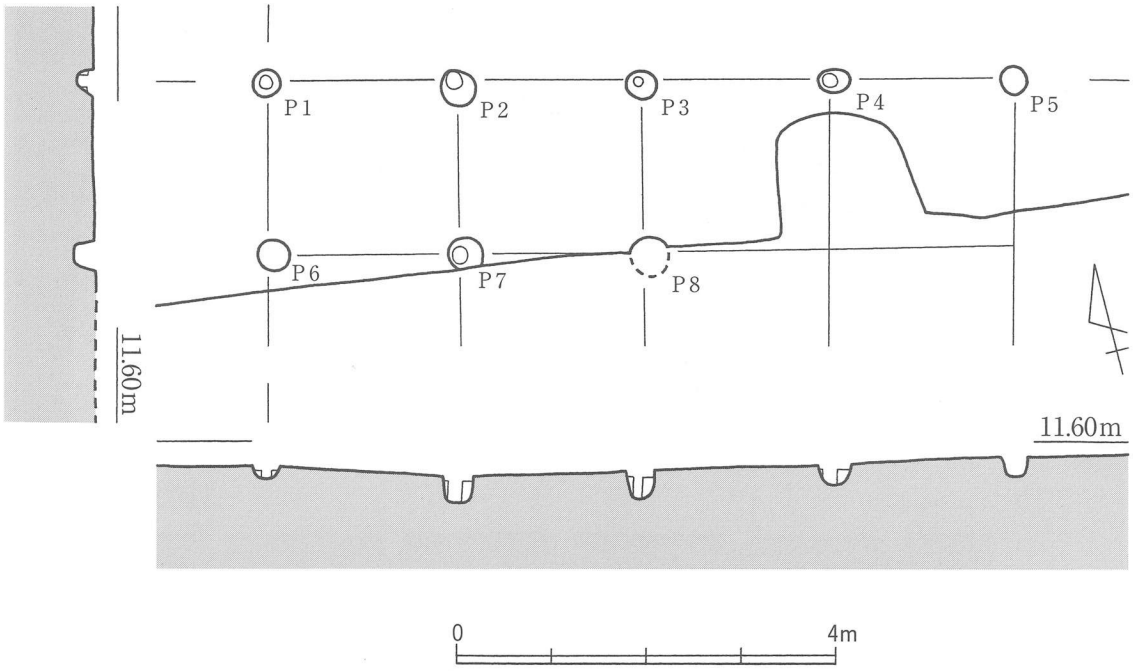
瓦器　椀の口縁部が1点出土しているが、小片のため図化できなかった。

時期　ＳＢ03との方向性の一致および柱穴内出土土器の特徴、およびＳＫ04の時期から、第17期（中世Ｉ期前半）と考えられる。

ＳＢ０２

検出状況　Ａ－３区で検出した（第24図）。当建物の大半は南側調査区外へ拡がるものと考えられ、検出できたのは建物北側の一部に限られる。ＳＢ01の南東・ＳＢ03の南西に位置する。

形状・規模　N76°Wに棟軸方向をとる総柱建物である（第26図）。ただし、全体を検出できたのは



第26図　ＳＢ02

第４表　ＳＢ02建物規模一覧表

	柱穴間	柱穴間距離	側面距離	柱穴間平均距離
北梁行	Ｐ１－Ｐ２	1.98		
	Ｐ２－Ｐ３	1.94		
	Ｐ３－Ｐ４	2.00		
	Ｐ４－Ｐ５	1.96	7.88	1.97
西桁行	Ｐ１－Ｐ６	2.12	2.12	

第５表　ＳＢ02柱穴規模一覧表

柱穴№	平面規模	柱痕径	深さ
Ｐ１	30	12	7
Ｐ２	38	18	14
Ｐ３	32	10	14
Ｐ４	32	16	10
Ｐ５	30		10
Ｐ６	32		10
Ｐ７	36	16	12
Ｐ８			14

※　第４表の単位はｍ
※　第５表の単位はcm

A・B区

北側桁行のみで、柱間は４間である。梁行方向については、西側で１間分検出できたにすぎない。

建物の規模は、北側桁行方向で7.88ｍ、西側梁行方向で2.12ｍを測る。主な柱穴間の距離および柱間の平均値は、第４表のとおりである。

柱穴　掘り形の平面形は全て円形からなり、その規模は、直径30cm～38cm、深さ７cm～14cmを測る。各柱穴の規模については、第５表のとおりである。埋土は、ＳＢ01同様、灰色シルト質極細砂を中心とした灰色系が主体である。

出土遺物　各柱穴内から須恵器と土師器が出土している。

須恵器　甕の体部片・杯の口縁部片が出土しているが、いずれも小片のため図化できなかった。

土師器　大皿・小皿・杯の各器種が出土している。大皿と小皿については、小片のため図化できなかった。

杯については、Ｐ３から出土した11を図化することができた（図版１）。口縁部が２段の横ナデ調整により、底部がユビオサエにより仕上げられている。以上の調整方法から、形態的には杯であるが、大皿に近いものと考えられる。

時期　ＳＢ03との方向性の一致および柱穴内出土土器の特徴から、第17期（中世Ｉ期前半）と考えられる。

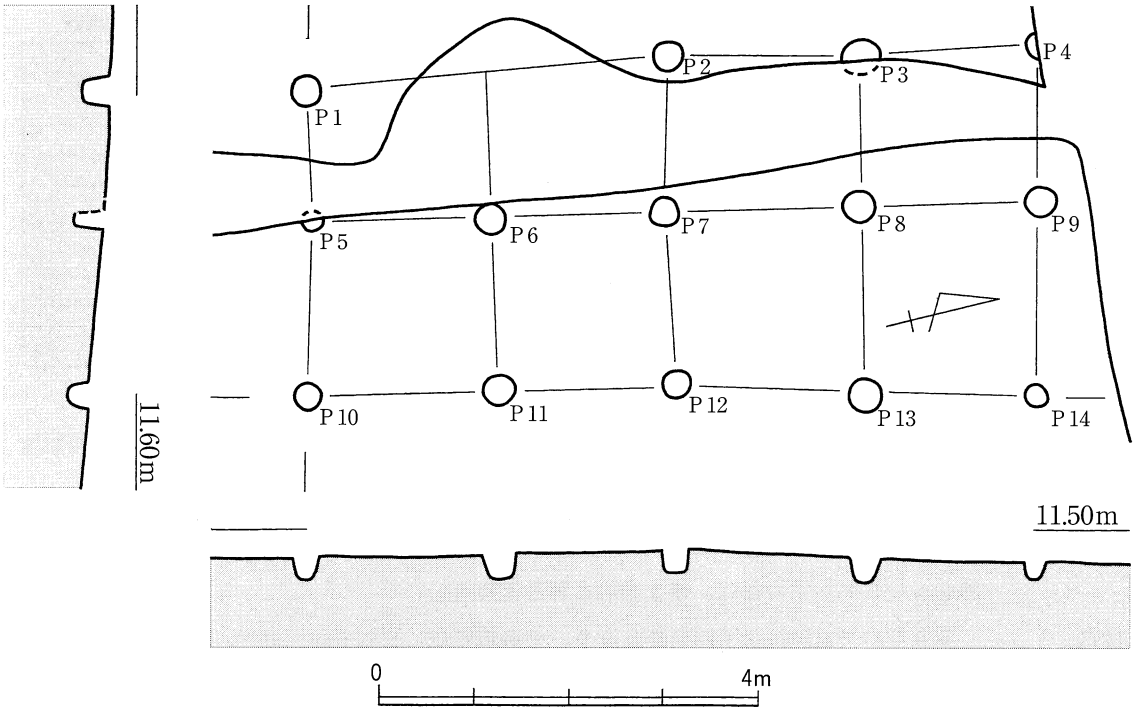
ＳＢ０３（写真図版８）

検出状況　Ａ－３区からＢ区にかけて検出した（第24図）。両地区の調査は別の時期に行ったため、両地区の平面図を合成した段階で、当建物を復元することができた。建物は、北西隅の1穴の一部を欠く以外は、全体を検出することができた。ＳＢ02の北東に位置する。

形状・規模　Ｎ14°Ｅに棟軸方向をとる、桁行4間、梁行２間の総柱建物である（第27図）。ただし、西桁行のＰ１とＰ２の間の1穴を欠く。

建物の規模は、西桁行方向で7.80ｍ、東桁行方向で7.70ｍ、北梁行方向で3.70ｍ、南梁行方向で3.25ｍを測り、梁行方向の規模に差が認められる。西桁行と北梁行を基準とした建物の面積は、28.86㎡である。主な柱穴間の距離および柱間の平均値は、第６表のとおりである。

柱穴　掘り形の平面形は全て円形からなり、その規模は直径21cm～40cmを測る。深さは、９cm～17cmを測る。各柱穴の規模については、第７表のとおりである。埋土は、ＳＢ01同様、



第27図　ＳＢ03

灰色シルト質極細砂を中心とした灰色系が主体である。

出土遺物　いくつかの柱穴内から須恵器と土師器が出土している。しかし、いずれも小片のため図化することはできなかった。

須恵器　椀と甕の小片が出土している。

土師器　小皿・杯・鍋の小片が出土している。

時期　柱穴内出土須恵器椀の特徴、およびＳＢ02との方向性の一致から、第17期（中世Ｉ期前半）と考えられる。

第６表　ＳＢ03建物規模一覧表

	柱穴間	柱穴間距離	側面距離	柱穴間平均距離
西梁行	Ｐ１－Ｐ２	3.85		
	Ｐ２－Ｐ３	2.00		
	Ｐ３－Ｐ４	1.95	7.80	1.95
北梁行	Ｐ４－Ｐ９	1.65		
	Ｐ９－Ｐ14	2.05	3.70	1.85
東梁行	Ｐ10－Ｐ11	2.00		
	Ｐ11－Ｐ12	1.90		
	Ｐ12－Ｐ13	2.00		
	Ｐ13－Ｐ14	1.80	7.70	1.92
南桁行	Ｐ１－Ｐ５	1.40		
	Ｐ５－Ｐ10	1.85	3.25	1.62

第７表　ＳＢ03柱穴規模一覧表

柱穴No.	平面規模	柱痕径	深さ
Ｐ１	30		15
Ｐ２	30		
Ｐ３	40		
Ｐ４			
Ｐ５	21		15
Ｐ６	30		
Ｐ７	32		
Ｐ８	34		
Ｐ９	33		
Ｐ１０	27		12
Ｐ１１	34		14
Ｐ１２	27		12
Ｐ１３	34		17
Ｐ１４	22		9

※　第６表の単位はm
※　第７表の単位はcm

（3）柱穴

（2）で報告した建物を構成する柱穴以外に、多くの柱穴を検出している。これらの柱穴の一部からは、良好な資料が得られている。以下、これらの柱穴について、出土遺物を中心に報告する。

Ｐ１

位置　Ａ－２区のほぼ中央北側で検出した（第23図）。

出土遺物　土師器の小皿１点（15）が出土している（図版１）。口縁部は２段の横ナデ調整、体部から底部にかけては指オサエとナデ調整により、仕上げられている。

時期　出土土器から判断して、中世Ｉ期と考えられる。

Ｐ２

位置　Ａ－３区の西端部で検出した（第24図）。Ｐ３の南側に位置する。

出土遺物　土師器の小皿１点（12）が出土している（図版１）。口縁部は２段の横ナデ調整、体部から底部にかけては指オサエとナデ調整により、仕上げられている。

時期　出土土器から判断して、中世Ｉ期と考えられる。

Ｐ３

位置　Ａ－３区の西端部で検出した（第24図）。Ｐ２の北側に位置する。

出土遺物　土師器の小皿１点（16：図版１）と瀬戸焼（17：写真図版88）が出土している。

16は、口縁部が２段の横ナデ調整、体部から底部にかけて指オサエとナデ調整により仕上げられている。17は小片のため図化できなかった。全面に緑色の釉がかかるが、器種は特定できない。

時期　第17期から第18期にかけての時期（中世Ｉ期）と考えられる。

Ｐ４

位置　Ａ－３区の西部で検出した（第24図）。Ｐ２の東側に位置し、ＳＫ03と平面的に重複する。ＳＫ03との切り合い関係は、明確にすることはできなかった。

出土遺物　土師器の小皿１点（14）が出土している（図版１）。口縁部は２段の横ナデ調整、体部から底部にかけては指オサエとナデ調整により、仕上げられている。

時期　出土土器から判断して、中世Ｉ期と考えられる。

Ｐ５

位置　Ａ－３区中央南端部で検出した（第24図）。Ｐ６の南側に位置する。ＳＢ01と平面的に重複するが、両者の前後関係は明確にできない。

出土遺物　土師器の大皿１点（９）が出土している（図版１・写真図版88）。口縁部を２段の横ナデ調整、体部から底部にかけては指オサエにより仕上げられている。

時期　出土土器から判断して、中世Ｉ期と考えられる。

Ｐ６

位置　Ａ－３区中央部で検出した（第24図）。Ｐ５の北側に位置する。Ｐ５同様、ＳＢ01と平面的に重複するが、両者の前後関係は明確にできない。

出土遺物　土師器の小皿１点（13）が出土している（図版１）。口縁部は２段の横ナデ調整、体部から底部にかけては、外面を指オサエ、内面をナデ調整により仕上げられている。

時期　出土土器から判断して、中世Ｉ期と考えられる。

Ｐ７

位置　Ａ－３区中央部東側で検出した（第24図）。Ｐ６の東側に位置する。

出土遺物　土師器の大皿１点（10）が出土している（図版１）。口縁部は横ナデ調整、体部から底部にかけては指オサエとナデ調整により、仕上げられている。

時期　出土土器から判断して、中世Ｉ期と考えられる。

（４）井戸

４基の井戸（ＳＥ01～ＳＥ04）を検出した。いずれも石組の井戸である。

ＳＥ０１（写真図版９・10）

検出状況　Ａ－1区南西隅で検出した（第22図）。掘り形の一部が調査区外へ拡がる以外は、ほぼ完存する。他の遺構との切り合い関係も認められない。

なお、この井戸は、後述するように砂礫層を掘削しており、崩壊の危険性が高かったため、写真撮影のみで図化作業を行うことができなかった。掘り形等の規模については、直接計測したものである。

形状・規模　石組の井戸である。

掘り形　検出面における平面形は、一部を欠くがほぼ円形を呈する。その規模は、直径1.45mを測る。砂礫層を基盤とし、この層を掘り抜いている。そして、この砂礫が石組みの裏込めとして掘り形内に埋められている。掘り形の断面形は逆台形を呈し、検出面からの深さは2.4mを測る。また、底部における規模は、径84cmを測る。

水溜　曲物側板を転用している。直径40cm、深さ30cmを測る。

石組　根太を六角形に組み、その上に砲弾形の円礫が積み上げられている。円礫は、面を有する小口側を内側に向け、これらの面が筒形になるように積み上げられている。円礫の規模は、20cm～40cmを測る。石組み内面の径は、上面で62cm、中間部で84cm、基底部付近で65cmと、胴張り形の石組みである。石組みの高さは、2.1mを測る。

埋没状況　井戸上面にトタン製の蓋が架けられ、井戸内は空洞となっていた。人為的に埋められた痕跡は認められなかった。

出土遺物　井戸内・掘り形内いずれからも、遺物は全く出土していない。

時期　遺物が全く出土していないため、時期の特定は困難である。ただし、蓋をした状態での検出状況から、当地に鉄道が敷かれる時期まで機能していた可能性が考えられる。

ＳＥ０２（写真図版11・12）

検出状況　Ａ－１区東端部中央で検出した（第22図）。他の遺構との切り合い関係は認められない。

形状・規模　石組みの井戸である（第29図）。

掘り形　検出面における平面形は、ほぼ円形を呈する。その規模は、1.66m×1.70mを測る。砂礫層を基盤とし、この層を掘り抜いている。そして、この砂礫が石組みの裏込めとして、掘り形内の下半部を中心に埋められている。

掘り形の断面形は逆台形を呈し、検出面からの深さは1.57mを測る。また、底部における規模は、径１mを測る。

水溜　曲物側板を転用し、掘り形底部中央に置かれていた。直径35cm、深さ13cmを測る。曲物は、掘り形底部直上に置かれていた。なお、曲物そのものについては、腐植が激しく、図化などの作業はできなかった。

石組　水溜め上面のレベルまで、水溜周囲の掘り形内を砂礫で埋られている。その後、長方体もしくは砲弾形を呈する円礫を、水溜め上面のラインに小口を合わせるよう一段敷き並べ、基底石としている。長軸で30cm大のほぼ同規模の石材である。

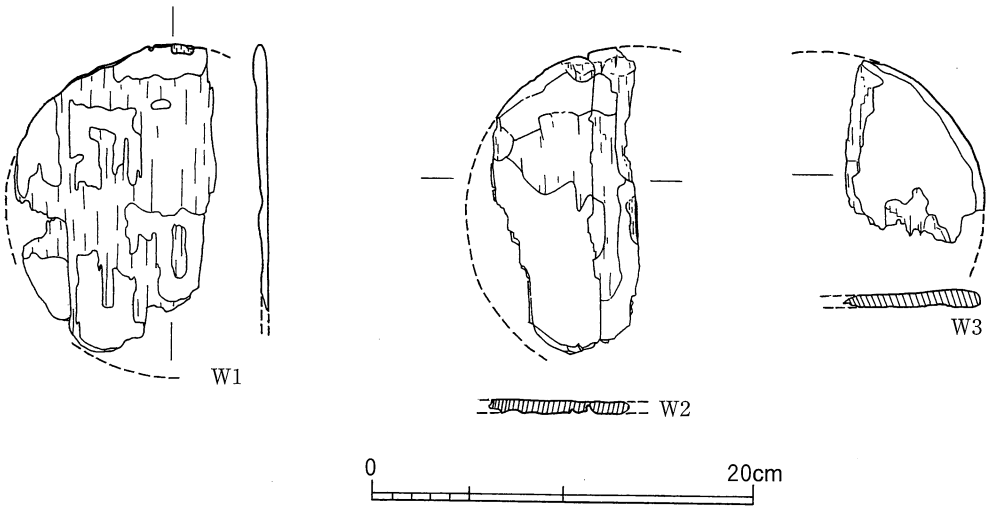
この後、これらの基底石上に、外側に重心がくるように、基底石よりやや小ぶりな石材が積み上げられている。このため、石組みの内径は基底石の内径より大きく、上面からみると、基底石上面の内側約1/2が明確に観察することができる。この円礫は、基底石同様、長方体もしくは砲弾形をなし、その規模は長軸で20cm前後を測る。

石組み内面の径は上面で82cm、基底部付近で64cmを測る。その断面形は逆台形をなし、底部から上面に向かってほぼ直線的に開いている。石組は、基底石上面から1.20m積み上げられている。

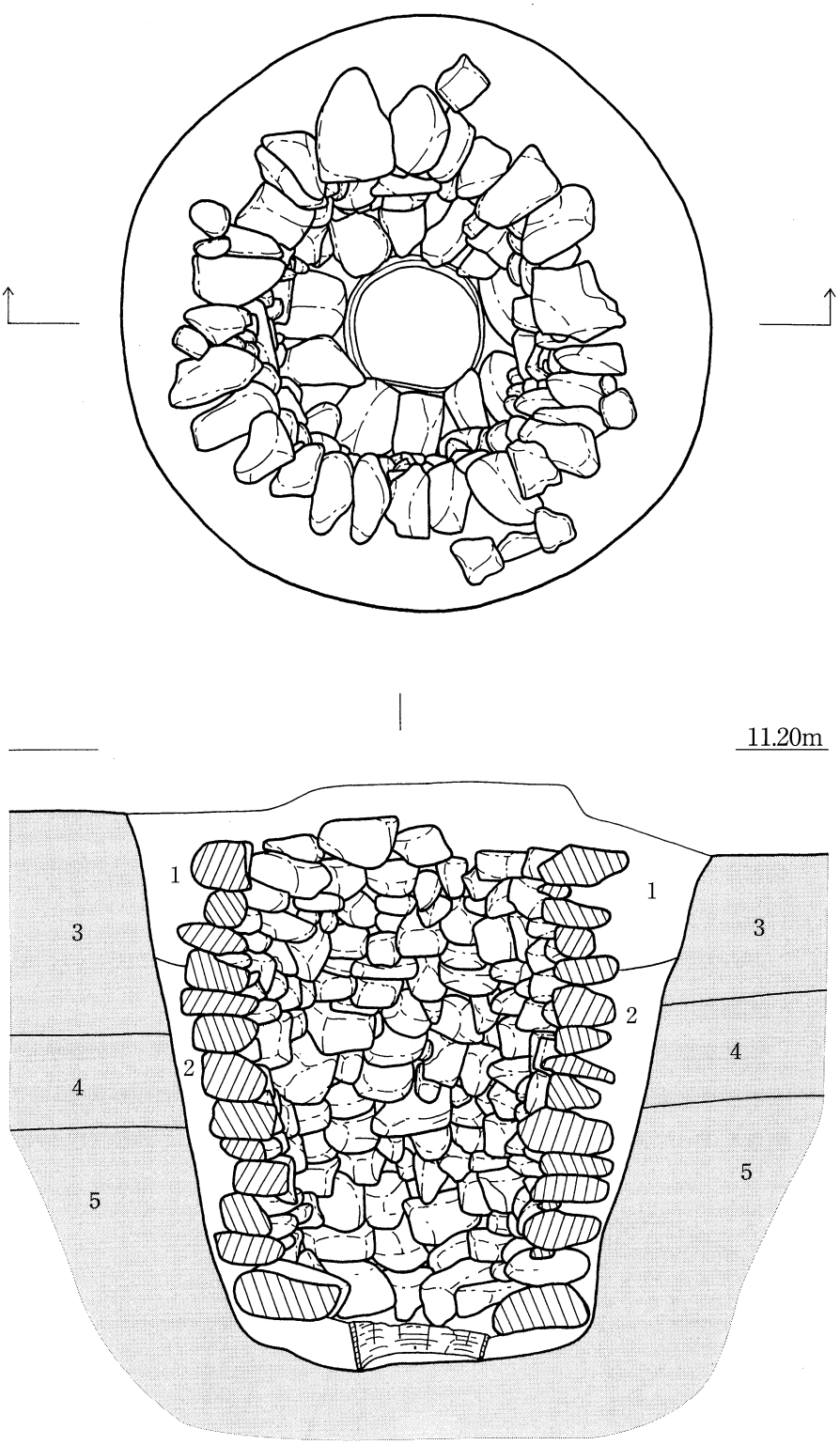
埋没状況　井戸内は砂礫混じりシルトが堆積していた。人為的に埋められたものと考えられる。

出土遺物　水溜内・石組内から出土している。

水溜内　曲物底板の小片が３点（Ｗ１～Ｗ３）出土している（第28図・写真図版182）。Ｗ１～Ｗ３の３点とも遺存状況は良好とはいいがたく、表裏両面とも退化が著しい。特に、Ｗ１は側板を伴って水溜め上層で出土している。ただし、取り上げた段階で著しく破損し、側板



第28図　ＳＥ02出土木製品



1．黒褐色砂混じりシルト
2．暗灰色砂礫
3．黒灰色礫（基盤層）
4．黄灰色細砂～粗砂
5．灰色砂礫

0　1m

第29図　ＳＥ02

まで図化することはできなかった。底板側面には、木釘穴を２穴確認することができた。なお、３点の厚さ・復原径は、Ｗ１が７㎜・17.6㎝、Ｗ２が7.5㎜・18.0㎝、Ｗ３が9.5㎜・17.0㎝である。

石組内　須恵器と土師器が出土している。

須恵器　椀・小皿・甕が出土しているが、いずれも小片のため図化できなかった。

土師器　小皿・羽釜が出土しているが、いずれも小片のため図化できなかった。

時期　出土土器から、中世Ⅰ期と判断される。

ＳＥ０３（写真図版13・14）

検出状況　Ａ－２区西部中央で検出した（第23図）。ＳＤ02と切り合い関係にあり、切っている。

形状・規模　石組の井戸である（第30図）。

掘り形　検出面における平面形は、やや歪んだ円形を呈する。その規模は、直径1.68ｍ×1.60ｍを測る。ＳＥ01・ＳＥ02同様、砂礫層を基盤とし、この層を掘り抜いている。そして、この砂礫が、石組みの裏込めとして掘り形内に埋められていた。

掘り形は、水溜め上面のレベルでわずかに段が認められ、２段に掘り込まれている。２段とも、その断面形は逆台形を呈する。ただし、水溜めより上側は円筒形に近い。検出面からの深さは、水溜め上面までが2.00ｍ、底部までが2.64ｍを測る。また、底部における規模は、径74㎝を測る。

水溜　曲物側板を転用し、掘り形底部中央に置かれていた。曲物は、掘り形底部直上に置かれていた。直径72㎝、深さ63㎝を測る。なお、曲物そのものについては、腐植が激しく、図化などの作業はできなかった。

石組　水溜め上面のレベルまでの水溜周囲の掘り形内は、砂礫で埋められていた。その後、この水溜めを囲むように、６本の根太（Ｗ４～Ｗ９　第31図～第33図　写真図版182･183）が井桁状に六角形に組まれていた（写真図版14）。各根太の長さ・太さは、Ｗ４が78.1㎝・8.0㎝、Ｗ５が77.9㎝・6.6㎝、Ｗ６が74.2㎝・7.2㎝、Ｗ７が78.0㎝・6.2㎝、Ｗ８が79.2㎝・8.7㎝、Ｗ９が77.1㎝・10.3㎝と、ほぼ同規模の丸太材が用いられている。

根太を組むにあたっては、根太の底部が一定に、つまり水溜め掘り形上面に密着し安定するように、組合う箇所が削り落とされていた。

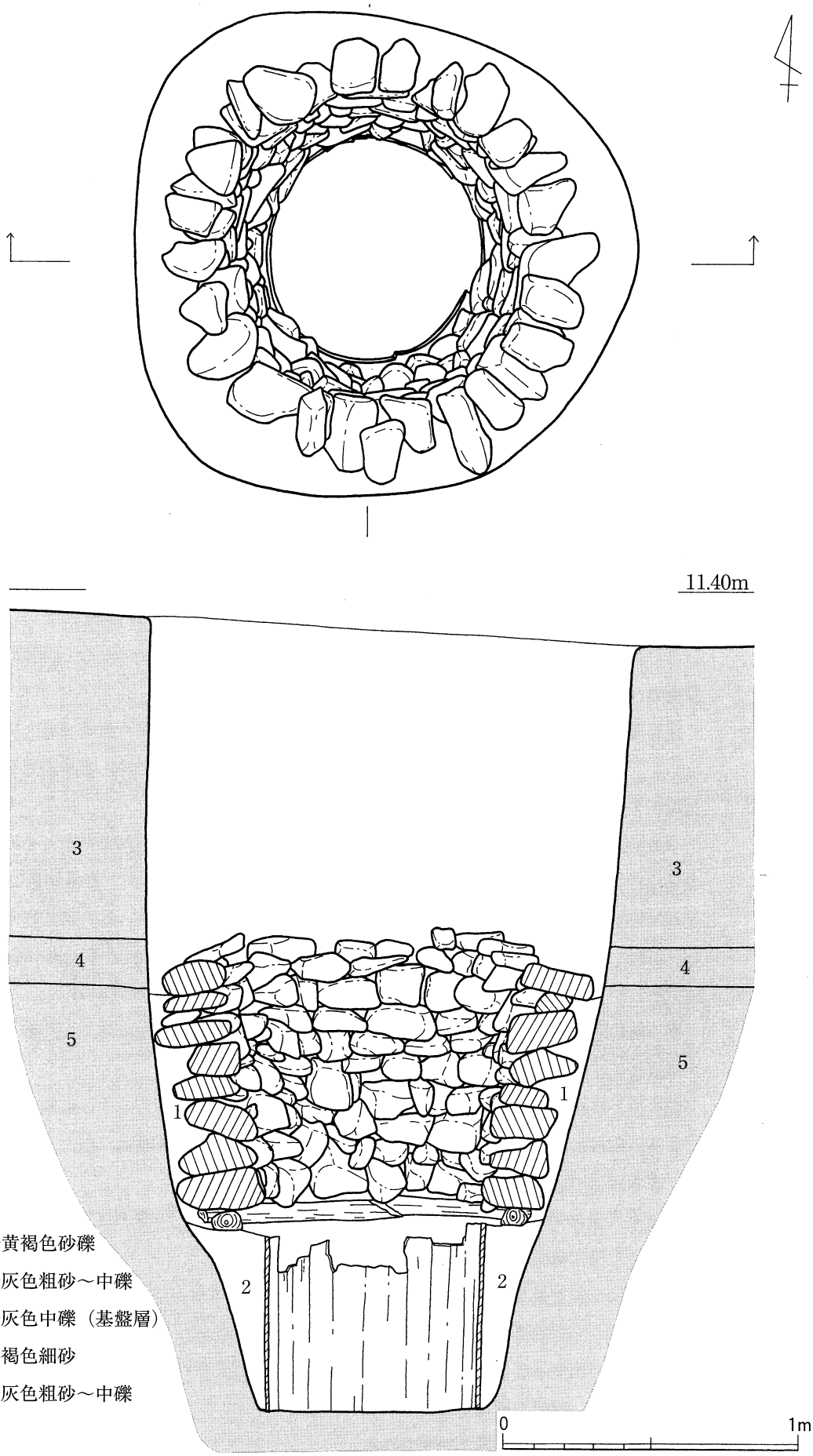
根太の上には、砲弾形もしくは長方体の円礫が小口を内側に揃えるように積み上げられている。ただし、この石組は掘り形上面までは残存せず、その範囲は、根太から90㎝の高さ、掘り形検出面から1.05ｍの深さまでに限られる。

石組み内面の径は、上面で1.02ｍ、基底部で74㎝を測り、その断面形は逆台形をなし、底部から上面に向かってほぼ直線的に積み上げられている。

埋没状況　井戸内はシルト混じり砂礫が堆積していた。人為的に埋められたものと考えられる。

出土遺物　石組み内から須恵器と土師器が出土している。須恵器は甕の体部片が出土しているが、小片のため図化することができなかった。また、土師器についても、小片のため図化はもちろんのこと、器種の特定も困難である。

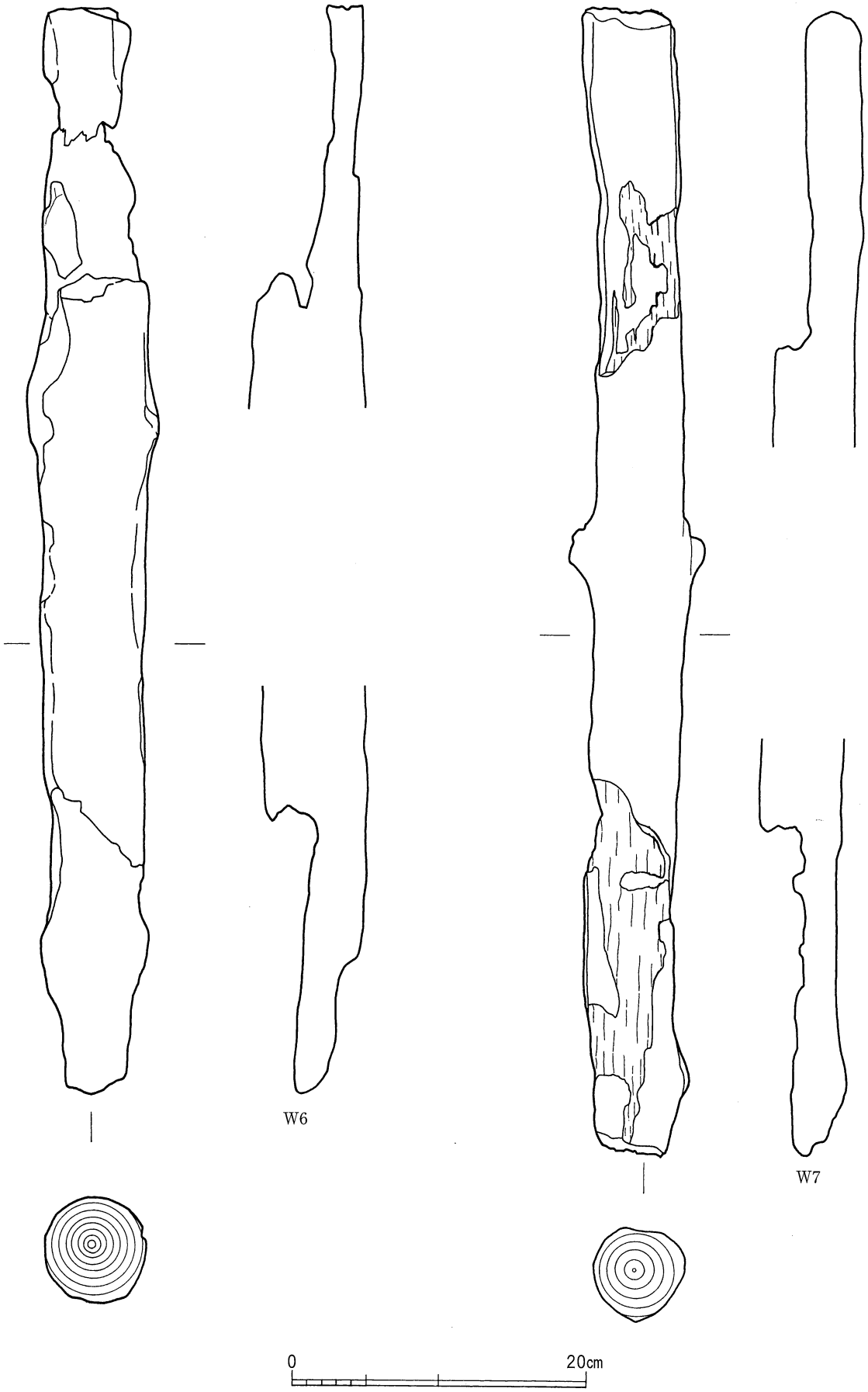
時期　出土土器から、中世Ⅰ期と判断される。



1．暗黄褐色砂礫
2．暗灰色粗砂～中礫
3．暗灰色中礫（基盤層）
4．茶褐色細砂
5．暗灰色粗砂～中礫

第30図　ＳＥ03

第31図　ＳＥ03根太（1）



第32図　ＳＥ03根太（２）

第33図　ＳＥ03根太（3）

ＳＥ０４（写真図版15）

検出状況　Ａ－２区北東部で検出した（第23図）。掘り形の一部は北側調査区外に拡がるため、全体を検出することはできなかった。石組みについては、全体を検出することができた。なお、上面は鋤溝に切られているが、遺構自体はその影響を受けていない。

形状・規模　石組みの井戸である（第34図）。ただし、水溜は認められなかった。

掘り形　検出面における平面形は、円形を呈する。その規模は、東西方向で直径3.73mを測る。当遺構の基盤であるシルト層を掘り抜き、底部は砂礫層まで達していた。

掘り形は、断面形逆台形を呈する。検出面から底部までの深さは1.76m、底部における規模は径2.60mを測る。掘り形内には、石組みの裏込めとして、シルトと砂礫が交互に埋められていた。土層観察の結果、石の積み上げと、シルトもしくは砂礫の埋め戻しが対応していたことが理解できる。

石組み　ＳＥ01・ＳＥ03のような根太は認められず、掘り形底部に直接砲弾形もしくは長方体の円礫が、小口を内側に揃えるように積み上げられていた。石組み内面のラインは斜上方に直線的に積み上げられ、その内径は、上面で1.76m、基底部で1.22mを測る。

埋没状況　井戸内はシルト混じり砂礫が堆積していた。人為的に埋められたものと考えられる。

出土遺物　掘り形内と石組み内から出土している。

掘り形内　土器と金属製品が出土している。

土器　土師器と須恵器・白磁・青磁が出土している（図版１）。

土師器　大皿と小皿が出土している。大皿は２個体（19･20）図化したが、いずれも口縁部は２段の横ナデ調整、体部から底部内外面はユビオサエとナデ調整により、仕上げられている。

小皿は、21・23～25の4個体図化した。口縁部は、21と24が１段の、23と25が２段の横ナデ調整により仕上げられている。体部から底部にかけては、いずれも指オサエとナデ調整より仕上げられている。

須恵器　椀と甕の体部片が出土しているが、いずれも小片のため図化できなかった。

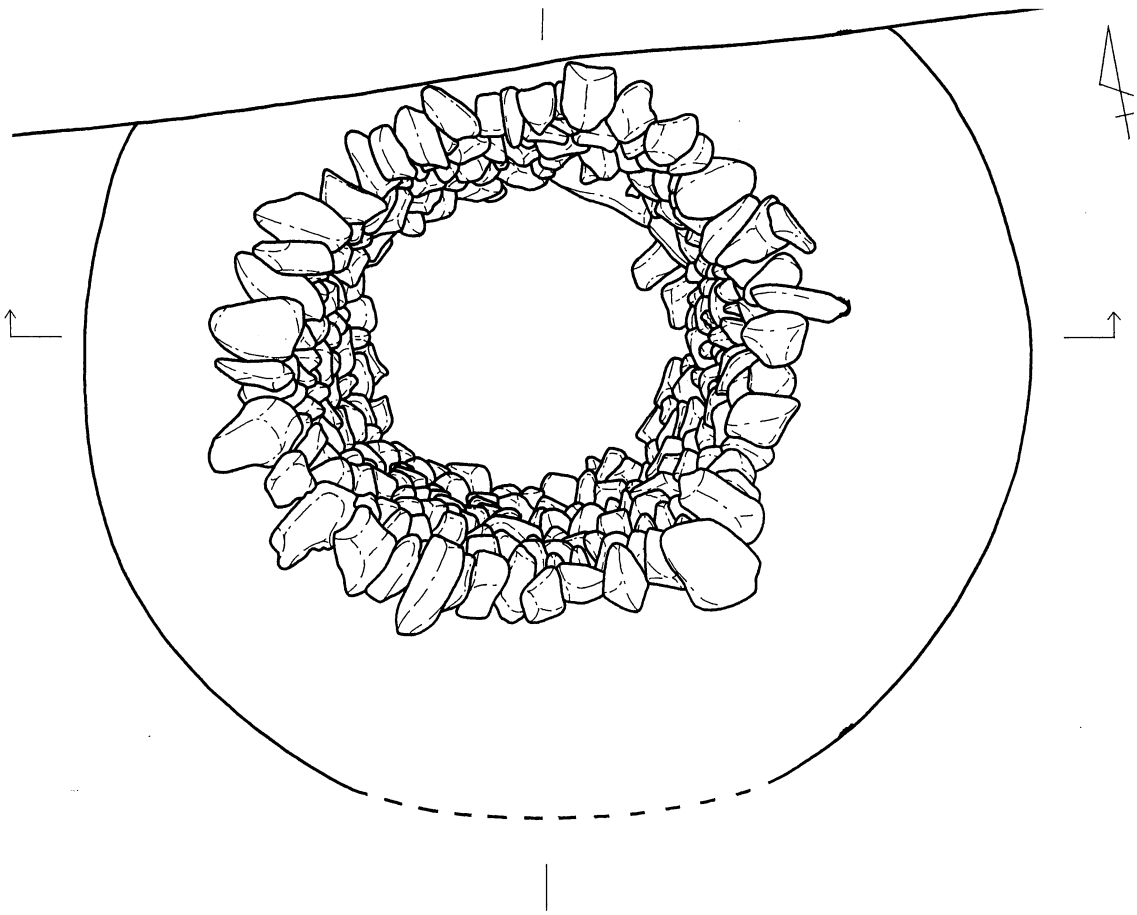
白磁　Ⅳ類に分類される碗が出土しているが、小片のため図化できなかった。

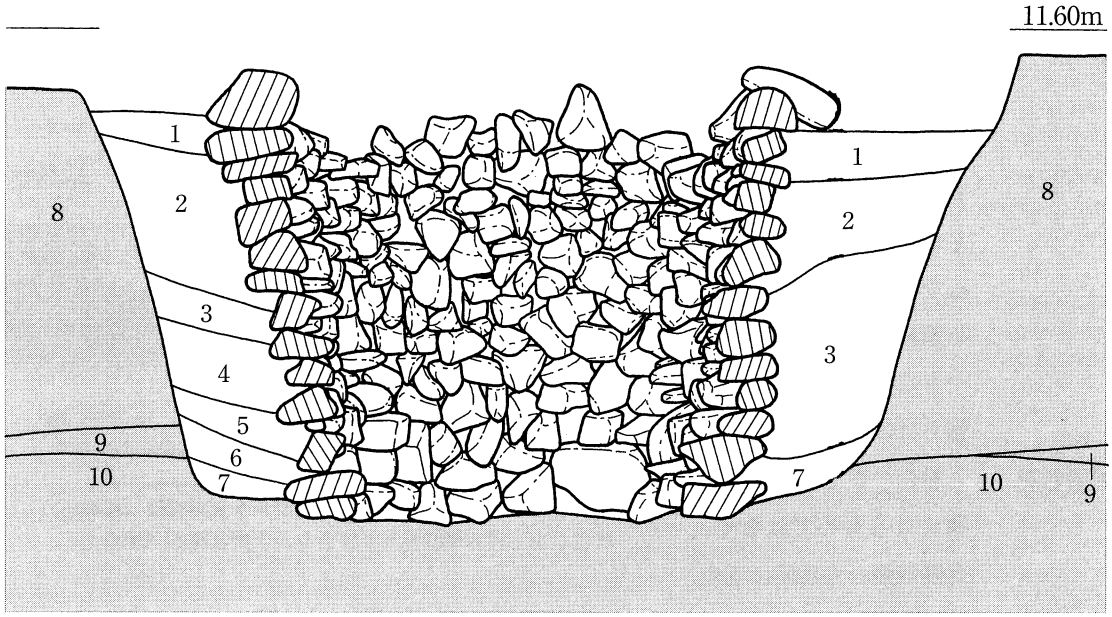
青磁　碗の底部片が出土しているが、小片のため図化できなかった。

金属製品　鉄鏃１点（Ｆ１）が出土している（図版80）。刃部・関部・茎からなり、先端部および茎部をわずかに欠くがほぼ完存し、残存長は9.0cmを測る。刃部は柳葉形をなし、その長さは4.7cm、最大幅は1.95cmを測る。刃部中央に鎬がわずかに認められ、横断面は菱形を呈し、鎬部での厚さは４mmを測る。関部は、長さ2.7cmを測り、中央部が大きく窪んでいる。中央部における横断面は５mm×6.5mmの長方形、基部における横断面は９mm×1.1cmの長方形を呈する。茎部は1.6cm残存し、横断面は５mm×５mmの方形を呈する。

石組み内　土師器と瓦質土器が出土している。土師器については、小皿1個体(22：写真図版88)を図化した。口縁部は１段の横ナデ調整、体部から底部は指オサエとナデ調整により仕上げられている。瓦質土器については、浅鉢１個体(26)が出土している。口縁部から底部は、回転台を用いての横ナデ調整により仕上げられている。底部には、３箇所に脚が貼り付けられている。

時期　掘り形内出土土器および第４章第４節での検討結果から、中世Ⅰ期後半には掘削され、石組み内出土土器から14世紀頃に埋められたものと考えられる。





1．暗褐色礫混じりシルト　5．暗灰色礫混じりシルト　8．暗灰色中礫混じりシルト（基盤層）

2．暗灰色砂礫　6．暗灰色砂礫　9．茶褐色細砂

3．黒褐色礫混じりシルト　7．暗黒褐色礫混じりシルト　10．灰色粗砂～小礫

4．暗灰色砂礫

0　2m

第34図　ＳＥ04

（５）墓

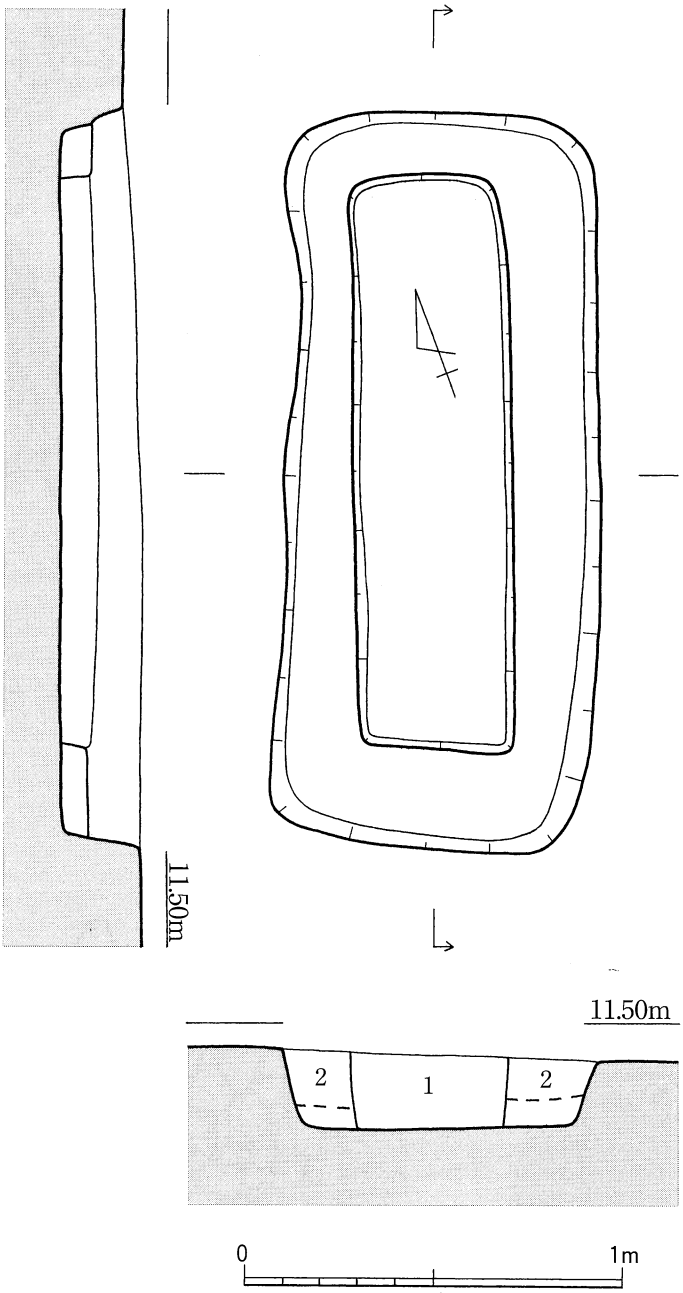
ＳＸ０１（写真図版16）

検出状況　Ａ－３区中央やや西側で検出した木棺墓である（第24図）。ＳＢ01と平面的に重複するが、柱穴との切り合い関係は認められない。また、ＳＫ04の北東に近接している。

墓坑　平面形は隅丸長方形を呈し、主軸方向はＮ20°Ｅを示す。長軸方向で1.95m、その直交方向で83cmを測る。墓坑中央部における横断面は逆台形をなし、検出面からの深さは20cmを測る。また、墓坑底部の規模は、主軸方向で1.48m、その直交方向で76cmである。

棺　箱形組合せ木棺と考えられる（第35図）。主軸方向で1.51mを測る。棺底部における北側・南側小口の規模は、ともに36cmを測り、小口の規模から頭位を判断することはできない。棺底は墓坑底部とほぼ一致する。

埋没状況　棺内の埋土は、自然堆積によるものではなく、蓋陥没後、人為的に埋められたものと考えられる。



1．暗褐色シルト質極細砂混じり灰色シルト質極細砂（埋め土）
2．黒色シルト質極細砂混じり灰色シルト質極細砂（埋め土）

第35図　ＳＸ01

出土遺物　墓坑内から須恵器と瓦器がわずかに出土している。全て小片のため図化できなかった。

須恵器　11世紀後半の特徴を示す椀の底部片が出土している。

瓦器　椀の底部片と体部片が出土している。

時期　墓坑内から出土した土器から、11世紀後半と判断される。

（6）土坑

ＳＫ０１

検出状況　Ａ－２区西端部で検出した（第23図）。ＳＤ02と切り合い関係にあるが、これを切っている。よって完存する。

形状・規模　平面形は円形に近い楕円形を呈し、その規模は1.70ｍ×1.48ｍを測る。横断面は逆台形を呈し、最深部における検出面からの深さは66cmを測る。

出土遺物　須恵器の椀が出土している。12世紀の特徴を示す口縁部片が出土しているが、小片のため図化できなかった。

時期　出土土器から判断して、中世Ｉ期（第17期）と考えられる。

ＳＫ０２

検出状況　Ａ－２区南東部で検出した（第23図）。他の遺構との切り合い関係はなく、完存する。

形状・規模　平面形は楕円形を呈し、その規模は75cm×65cmを測る。横断面は皿形をなし、最深部における検出面からの深さは15cmを測る。

埋没状況　褐色シルト質極細砂混じり灰色シルト質極細砂１層の堆積が認められた。層相から判断して、人為的に埋められたものと考えられる。

出土遺物　須恵器の椀が出土している。12世紀の特徴を示す口縁部片が出土しているが、小片のため図化できなかった。

時期　出土土器から判断して、中世Ｉ期（第17期）と考えられる。

ＳＫ０３

検出状況　Ａ－３区西部で検出した（第24図）。ＳＢ01の西側に位置し、当遺構の主軸方向がＳＢ01の棟軸方向と一致する点は、注目される。Ｐ４と平面的に重複するが、調査時には前後関係を明らかにすることはできなかった。ただし、遺構そのものは完存する。

形状・規模　平面形は方形に近い隅丸長方形を呈する。長軸方向で1.08ｍ、その直交方向で80cmを測る。横断面は逆台形を呈し、最深部における検出面からの深さは18cmを測る。

埋没状況　黒色シルト質極細砂混じり暗灰色シルト質極細砂１層の堆積が認められた。層相から判断して、人為的に埋められたものと考えられる。

出土遺物　須恵器の椀と土師器の甕が出土している。須恵器は13世紀前半の特徴を示す口縁部片が出土しているが、小片のため図化できなかった。土師器も、甕の小片が出土している。

時期　出土土器および、ＳＢ01との関係から判断して、中世Ｉ期（第18期）と考えられる。

ＳＫ０４（写真図版17）

検出状況　Ａ－３区西部で検出した（第24図）。ＳＸ01の南西側に近接する。平面的にＳＢ01と重複するが、当遺構の主軸方向とＳＢ01の棟軸方向が一致することから、先述したように（33頁）、ＳＢ01に伴う施設と考えている。他の遺構との切り合い関係は認められず、完存する。

形状・規模　平面形は隅丸長方形を呈するが、長辺は歪んでいる（第36図）。主軸方向はＮ70°Ｗを

示し、その規模は2.36mを測る。また、その直交方向は1.05mを測る。横断面は逆台形呈し、最深部における検出面からの深さは19cmを測る。底部における規模は、主軸方向で2.20m、その直交方向で85cmを測る。

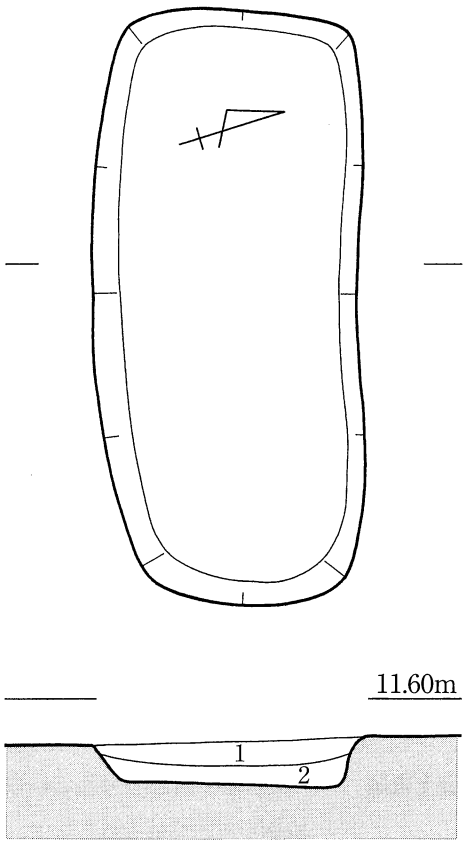
埋没状況　２層からなる（第36図）が、その層相から判断して、上層については人為的に埋められた層と判断される。

出土遺物　須恵器と土師器が出土している（図版１）。

須恵器　甕の体部片が出土しているが、小片のため図化できなかった。

土師器　大皿と小皿が出土している。大皿については、口縁部と体部片が出土しているが、小片のため図化できなかった。小皿については、１個体（18）図化することができた。口縁部は２段の横ナデ、体部から底部は指オサエとナデ調整により仕上げられている。

時期　出土土器から判断して、中世Ⅰ期と考えられる。



１．灰黄褐色シルト質極細砂混じり灰色シルト質極細砂（埋め土）

２．灰色シルト質極細砂

0　1m

第36図　ＳＫ04

ＳＫ０５（写真図版17）

検出状況　Ａ－３区西部北端で検出した（第24図）。ＳＢ01の北側に位置する。他の遺構との切り合い関係は認められないが、大半が調査区外に拡がっている。このため、検出できた範囲はわずかである。

形状・規模　平面形は、方形もしくは長方形を呈するものと考えられる。一部しか残存しないため、その規模は明確にできないが、南辺で４ｍを測る。断面形は、西側は逆台形状に落ち込むが、東側は皿状に落ち込んでいる。検出した範囲内における最深部の検出面からの深さは、54cmを測る。

なお、南東隅底部において、径約1.30mの円形の落ち込みが認められた。当土坑底部からの深さは14cmを測る。

埋没状況　黒褐色シルト質極細砂混じり灰色シルト質極細砂を主体とした層が、４層にわたって認められた。いずれの層についても、人為的に埋められた層と判断される。

出土遺物　検出した規模はわずかであるが、土器はかなりまとまって出土している。多くが土坑底部付近からの出土で、その状況から、一括して廃棄されたものと判断される。器種としては、須恵器・土師器・瓦器・青磁が出土している（図版１・２）。また、土器以外に、土錘が１点（53）出土している。

須恵器　椀・甕・捏鉢が出土している。椀は、６個体（27～32）を図化したが、いずれも同タイ

プのものである。体部から口縁部にかけては内湾気味に立ち上がり、底部内面には明確な落ち込みは認められない。底部は、30がヘラにより切り離され、32がヘラナデにより仕上げられている以外は、いずれも回転糸切りにより切り離されている。なお、32の底部には数条のヘラ描きが認められる。

捏鉢は、2個体（33・34）図化した。2個体とも、直線的に開く体部に対して、端部が上方につまみあげられている。特に33については、内面の使用痕が顕著である。

甕は、体部片が出土しているが、小片のため図化できなかった。

土師器　大皿・小皿・羽釜・鍋が出土している。

大皿については、35と36の2個体を図化した。35については、その形態から杯の可能性も考えられるが、口縁部を2段の横ナデ調整により仕上げる特徴から、大皿に分類した。36は口縁部が1段の横ナデ調整により仕上げられている。両個体とも、体部から底部にかけては指オサエとナデ調整により仕上げられている。

小皿は、37～47の11個体を図化した。いずれもその調整方法は同じで、口縁部は2段の横ナデ調整、体部から底部は指オサエとナデ調整により、仕上げられている。

羽釜は、50の1個体が出土している。口縁部下に幅2.4cmの鍔を貼り付け、その周囲および口縁部内外面が横ナデ調整により仕上げられている。体部から口縁部内面は横方向を主体としたハケ調整、体部外面はハケ調整後ナデ調整により、仕上げられている。また、鍔自体も横ナデ調整により仕上げられている。鍔下面から体部外面にかけては、煤の付着が認められる。

鍋は51の1個体である。体部から口縁部にかけての内外面をハケ調整後、口縁部内外面が横ナデ調整により仕上げられている。体部外面には、煤の付着が認められる。

瓦器　椀（48）が1個体出土している。図上では完形に復原できるが、内外面の摩滅が著しい。このため、暗文の有無については観察できない。口縁部は内外面を横ナデ調整により、体部外面は指オサエにより、仕上げられている。底部は、断面蒲鉾形を呈する輪高台が貼り付けられているが、高台高はわずか2.5mmである。

瓦質土器　羽釜（52）が1個体出土している。内湾気味の体部と口縁部境に、幅1.2cmの鍔が貼り付けられ、その後、鍔および口縁部内外面が横ナデ調整により仕上げられている。また、体部内外面は指オサエにより仕上げられている。胎土中に砂粒が多く含まれ、瓦質ではあるが土師器に近い胎土である。

青磁　同安窯系の碗が出土している（49）。内外面に劃花文が印刻され、釉がかけられている。

土錘　土師質の管状土錘が1点（53）出土している。ほぼ完存する個体で、径4.5mmの穴があけられている。長さ3.1cm、最大径1.0cmを測る。

時期　出土土器、およびＳＢ04等との方向性の一致（第5章第1節）から判断して、中世Ⅰ期前半（第17期）と考えられる。

（７）溝

ＳＤ０１

検出状況　Ａ－１区東部で検出した（第22図）。他の遺構との切り合い関係は認められないが、東端部は後世の攪乱を受けている。ＳＥ02の西側に位置する。

形状・規模　弧状を呈する溝で、検出した長さは5.6ｍである。横断面は逆台形をなし、最深部における検出面からの深さは５㎝と、大変浅い溝である。検出面における幅は34㎝～62㎝を測る。底部のレベルはほぼ一定している。

埋没状況　黄褐色シルト質極細砂混じり灰色シルト質極細砂１層が堆積していた。層相からみて、人為的に埋められたものと判断される。

出土遺物　土器をはじめとした遺物は全く出土していない。

時期　土器が出土していないため、時期の特定は困難である。ただし、第５章第２節における地形環境の復元結果から、第18期以降（中世Ｉ期後半以降）と考えられる。

ＳＤ０２（写真図版17）

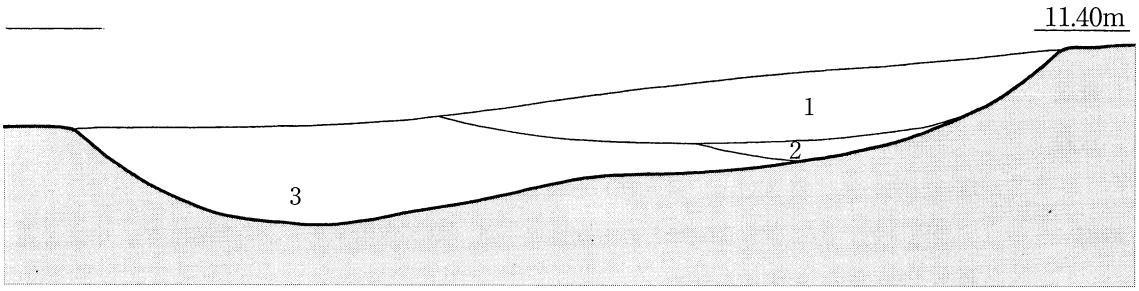
検出状況　Ａ－１区北東端からＡ－２区西部にかけて検出した（第22図・第23図）。ＳＥ03及びＳＫ01と切り合い関係にあり、両遺構に切られている。さらに、南東端は、後世の攪乱を受けている。

形状・規模　北西から南東方向にほぼ直線的にのびる溝で、検出した長さは8.1ｍである。検出面は逆台形に近い皿形を呈し、検出面における幅は、北東部で5.5ｍ、南東部で2.2ｍと、南東側ほど狭くなる傾向が認められる。最深部における検出面からの深さは42㎝を測り、底部のレベルは北西端から南東端にかけてほぼ一定している。

埋没状況　大きく３層からなる（第37図）。最上層の褐色シルト質極細砂混じり灰色シルト質極細砂は、その層相からみて、人為的に埋められた層と判断される。以下の層については、自然堆積によるものと考えられる。

出土遺物　須恵器・土師器・瓦器・白磁が出土している（図版２）。

須恵器　椀・壷・甕・捏鉢が出土している。椀は、口縁部片と底部片が出土しているが、図化できたのは57の底部片のみである。底部外面は平高台の痕跡が残るが、内面には落ち込みは



１．褐色シルト質極細砂混じり灰色シルト質極細砂（埋め土）
２．黒褐色シルト質極細砂～中礫混じり灰色シルト質極細砂
３．灰黄色中礫混じり細砂～粗砂

0　1m

第37図　ＳＤ02

認められない。底部は回転糸切りにより切り離されている。

捏鉢は、口縁部と底部片が出土しているが、図化できたのは口縁部を中心とした54と55の２個体である。いずれも、わずかに肥厚する口縁端部が上方につまみあげられている。

壷は56の底部片のみである。双耳壷の底部と考えられる。底部は回転糸切りにより切り離されている。

甕は、体部片が比較的多く出土しているが、接合復元することはできなかった。

土師器　小皿・甕・鍋が出土しているが、いずれも小片のため図化することはできなかった。小皿と甕は口縁部片が、鍋は三足鍋の脚が出土している。

瓦器　羽釜の口縁部と体部片が出土しているが、いずれも小片のため図化できなかった。

白磁　Ⅳ類に分類できる碗の口縁部片が出土しているが、小片のため図化できなかった。

時期　出土土器、特に捏鉢の特徴から判断して、中世Ⅰ期前半（第17期）と判断される。

ＳＤ０３

検出状況　Ａ－３区北部で検出した（第24図）。ほぼ東西方向にのびる溝で、西端はＳＫ05とＳＢ01の間から、東端はＳＢ03とほぼ平面的に重複するあたりの、当地区東端部までのびている。Ｂ区では当遺構の続きは検出されていないことから、Ａ－３区とＢ区の境で収束するものと考えられる。西端部付近でＳＢ01に伴う柱穴に切られている以外は、他の遺構との明確な切り合い関係は認められない。

形状・規模　ほぼ直線的にのびる溝で、検出した長さは12.8mを測る。横断面は浅い皿形を呈し、最深部における検出面からの深さは７cmに過ぎない。検出面における幅は、西側で1.43m、東側で75cmを測る。底部のレベルは西端から東端にかけてほぼ一定している。

埋没状況　褐色シルト質極細砂混じり灰白色シルト質極細砂１層からなる。その層相から判断して、人為的に埋められた層と判断される。

出土遺物　古墳時代の特徴を示す須恵器の杯身が出土している。しかし、これはこの溝の時期を示すものではなく、人為的に埋め戻される際に混入したものと考えられる。このため、出土土器から当遺構の時期を判断することは困難である。よって、埋土の特徴から、中世以降と考えられ、ＳＢ01とその方向性が一致することから、ＳＢ01に近い時期、つまり第17期（中世Ⅰ期）と考えられる。

第38図　ＳＥ02の検出

３．第２面（写真図版18・19）

Ａ－２区とＡ－３区で、弥生時代・古墳時代・飛鳥時代・平安時代以降の各時期の遺構が検出されている（第39図）。各地区の遺構分布と遺構の時期との関係は以下の通りである。

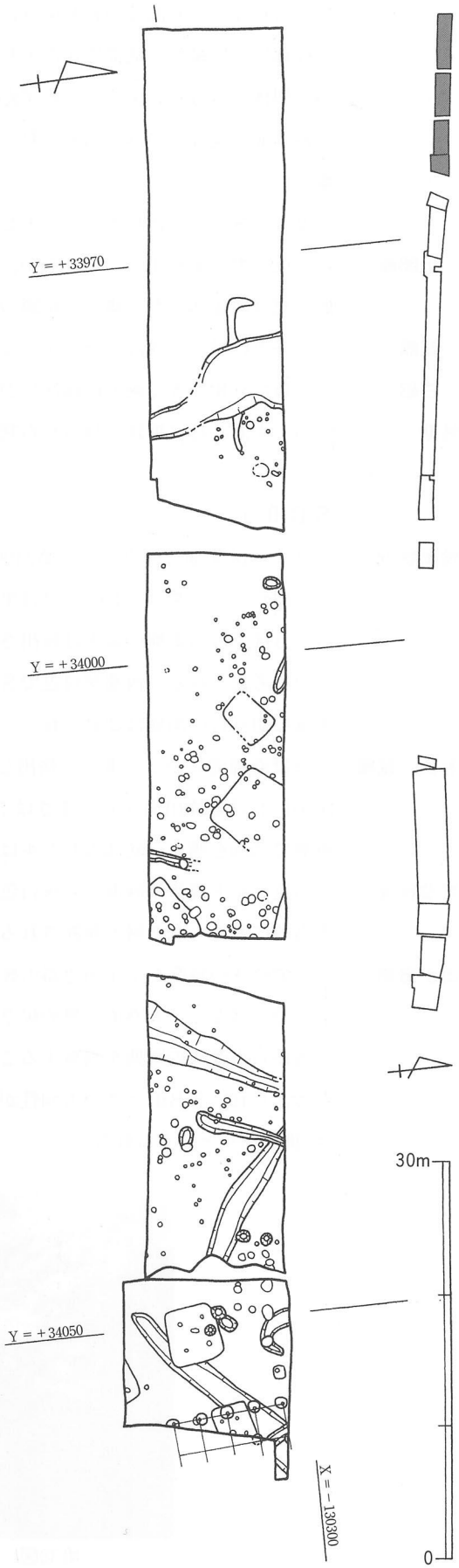
Ａ－１区　遺構の分布は東半部に限られる（第40図）。その時期は、鎌倉時代以降に限られる。

Ａ－２区　弥生時代・古墳時代・飛鳥～奈良時代に３時期に限られる（第41図）。中世の遺構については、全て第１面に伴うものとしているため、第２面として報告するものはない。

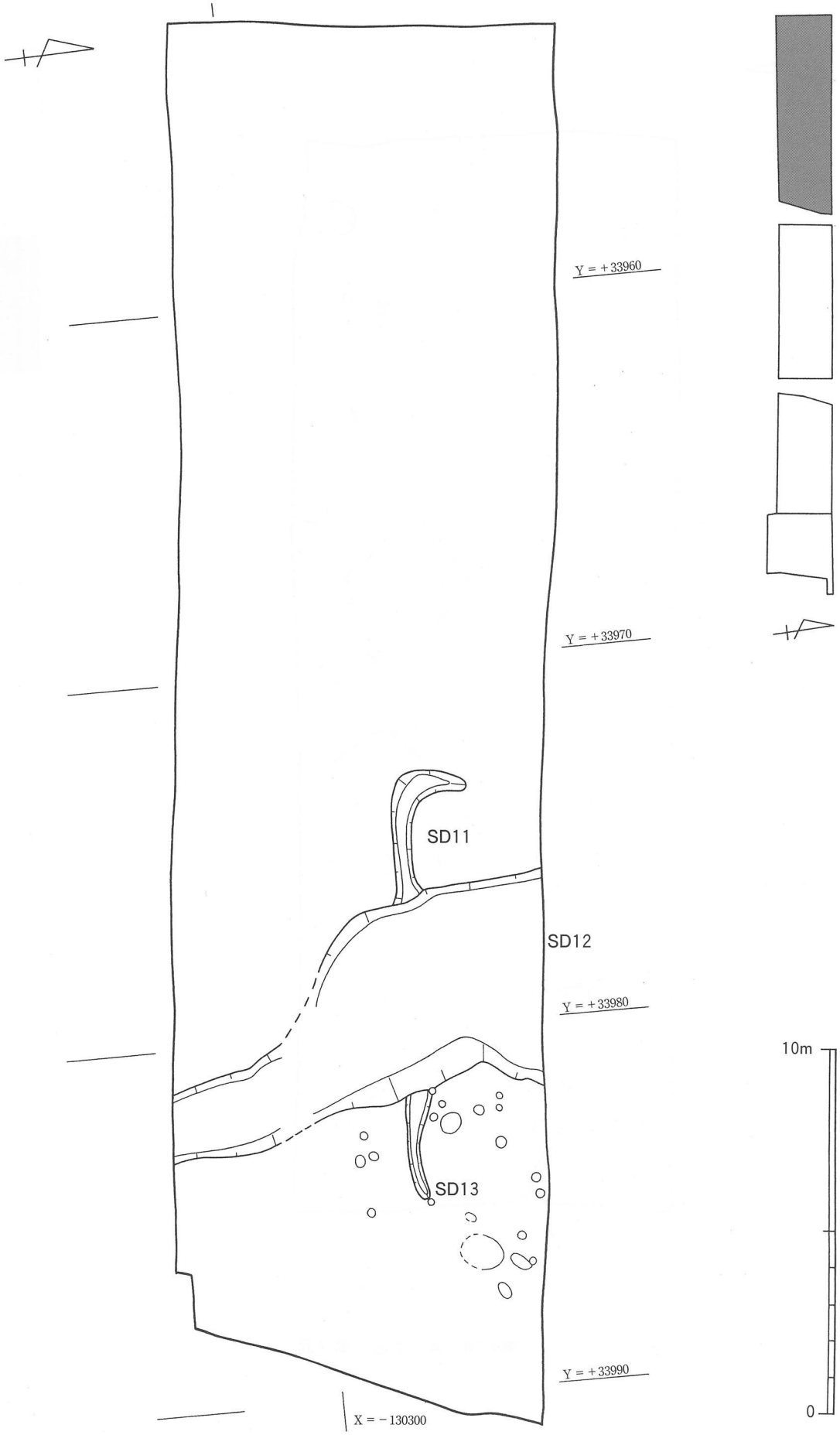
飛鳥～奈良時代の遺構は、柱穴がわずかに検出されたに過ぎず、ほとんどが弥生時代と古墳時代の遺構である。特に、竪穴住居跡・柱穴を中心とした、古墳時代の遺構が当地区全域で検出されている。

Ａ－３・Ｂ区　弥生時代・古墳時代・飛鳥～奈良時代に３時期に限られる（第42図）。中世に関しては、Ａ－２区同様、全て第１面に伴うものとしている。

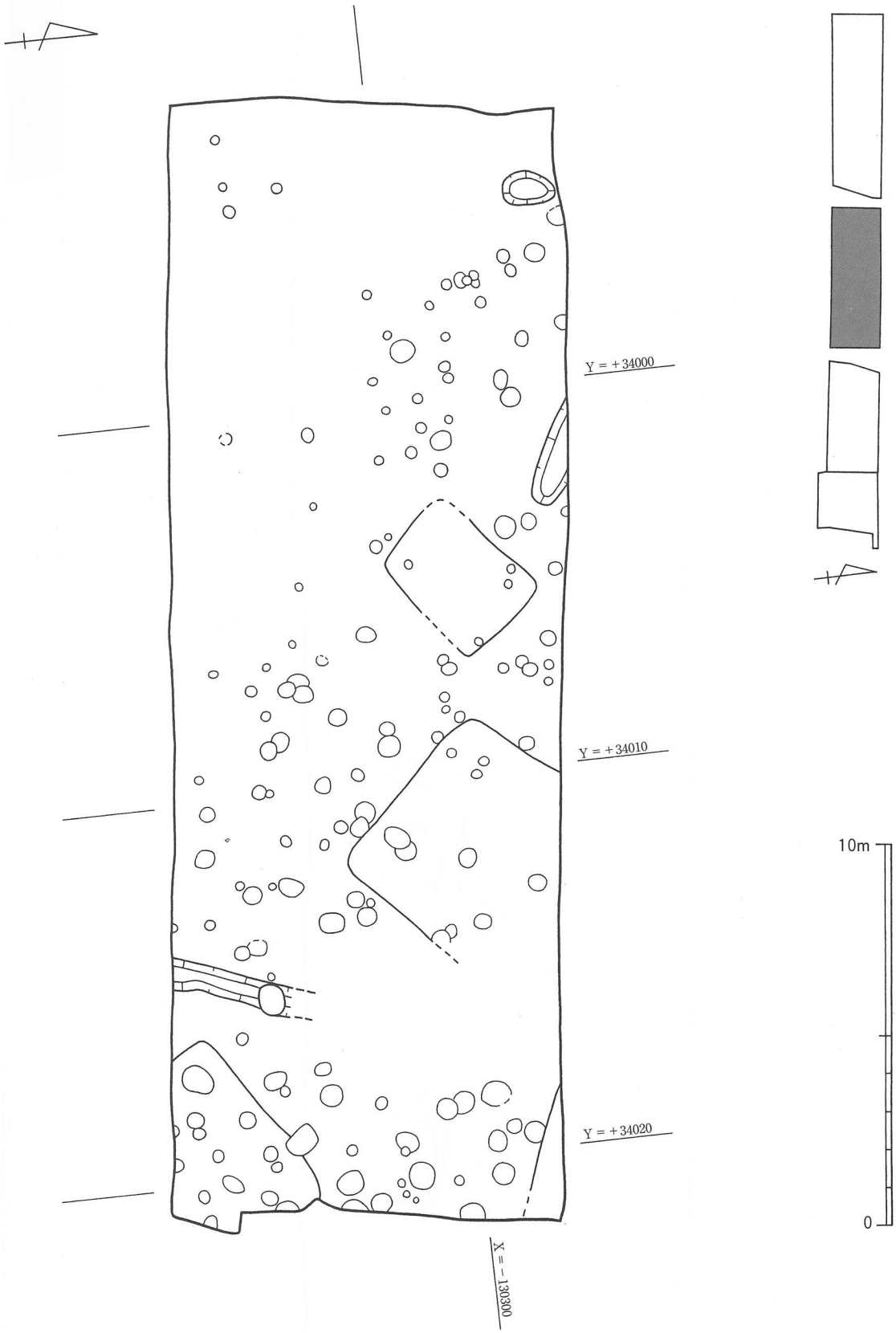
弥生時代の遺構としては溝状遺構が、古墳時代の遺構としては竪穴住居跡・掘立柱建物跡・溝状遺構等が検出されている。飛鳥～奈良時代の遺構に関しても、掘立柱建物跡・柱穴が検出されているが、多くはない。



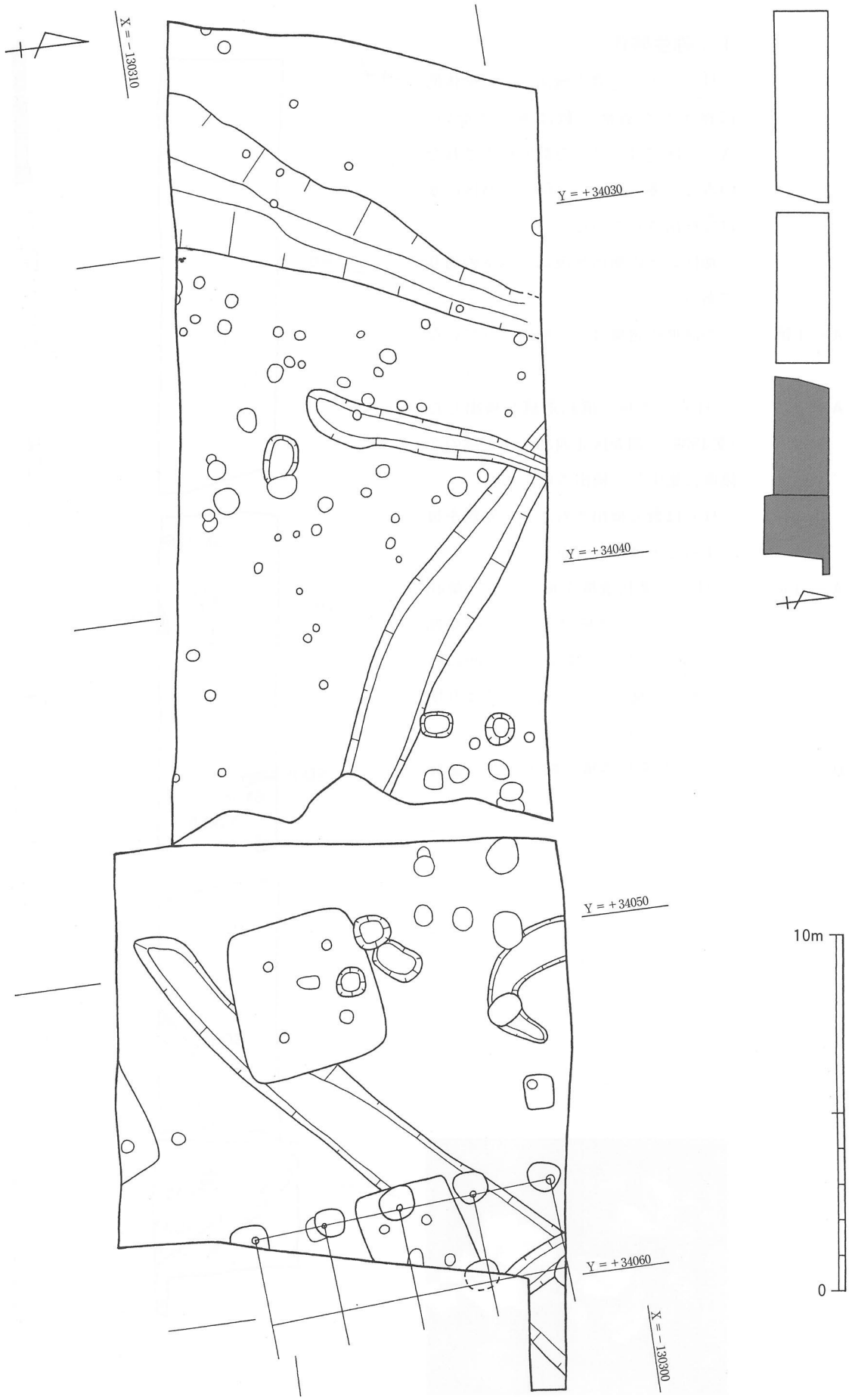
第39図　Ａ・Ｂ区第２面



第40図　A－1区　第2面



第41図　Ａ－２区　第２面



第42図　A－3・B区　第2面

Ⅰ：弥生時代

柱穴・土坑・溝を検出した。全体的に検出した遺構の数は多くはない。Ａ－１区では、柱穴を数穴検出されたのみで、多くはＡ－２区からＢ区にかけて検出されている。

地区ごとの検出状況は、以下の通りである。

Ａ－１区　当該期の遺構は全く検出されていない。

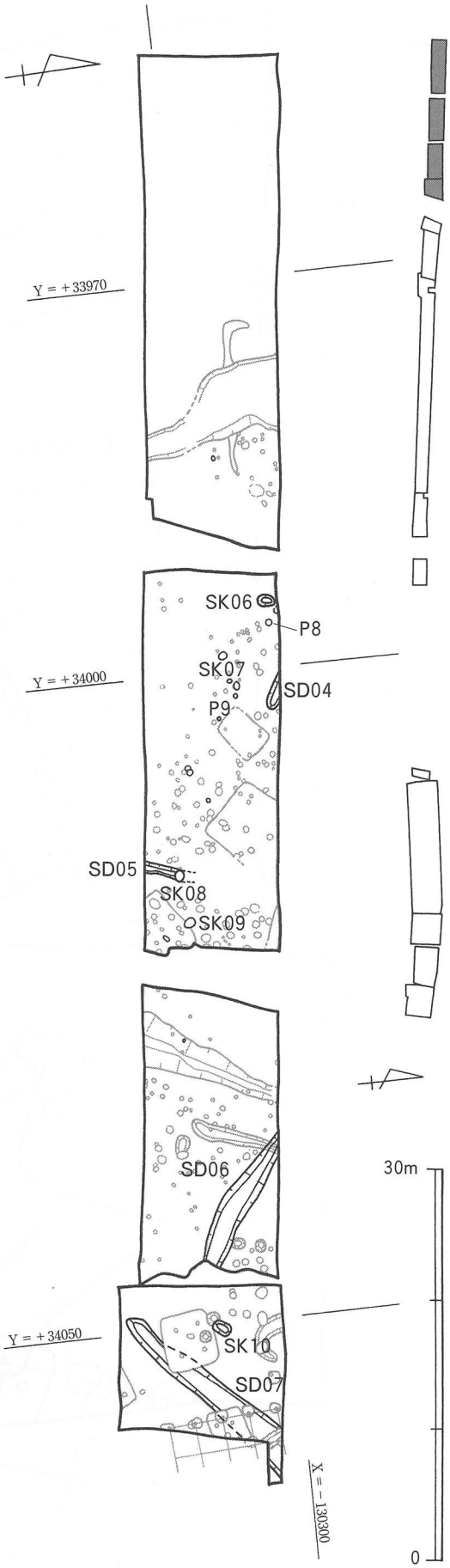
Ａ－２区　柱穴・土坑・溝状遺構を検出した（第45図）。調査区北西部と南東部の２箇所に集中して検出されている。

柱穴は数穴検出されたが、建物を復元することはできなかった。

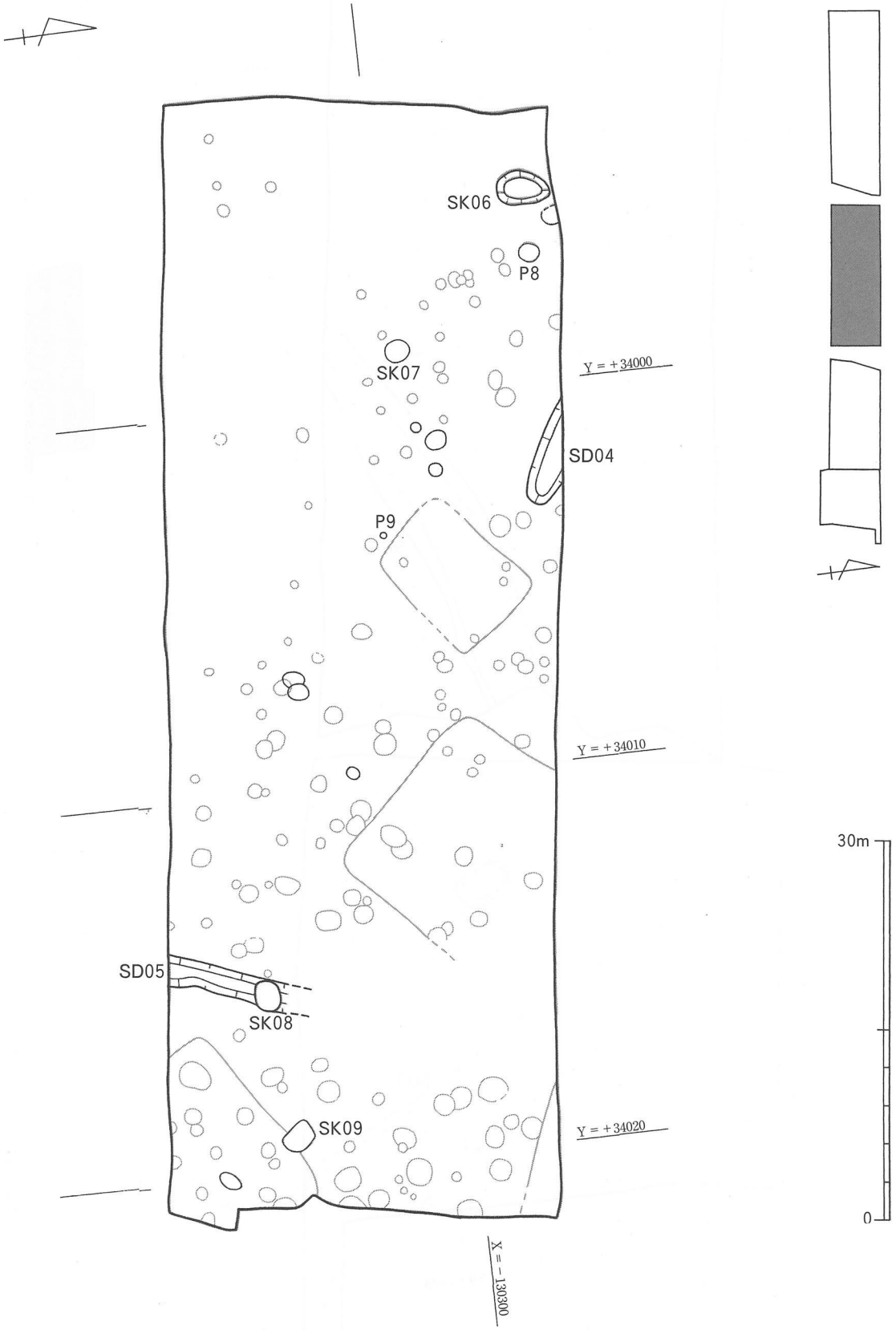
Ａ－３区　柱穴と溝状遺構を検出した（第46図）。これらの遺構は、Ａ－３区東部からＢ区にかけて集中する傾向にある。柱穴に関しては、Ａ－２区より明らかに少ない。

Ｂ区　土坑と溝状遺構を検出した（第46図）。

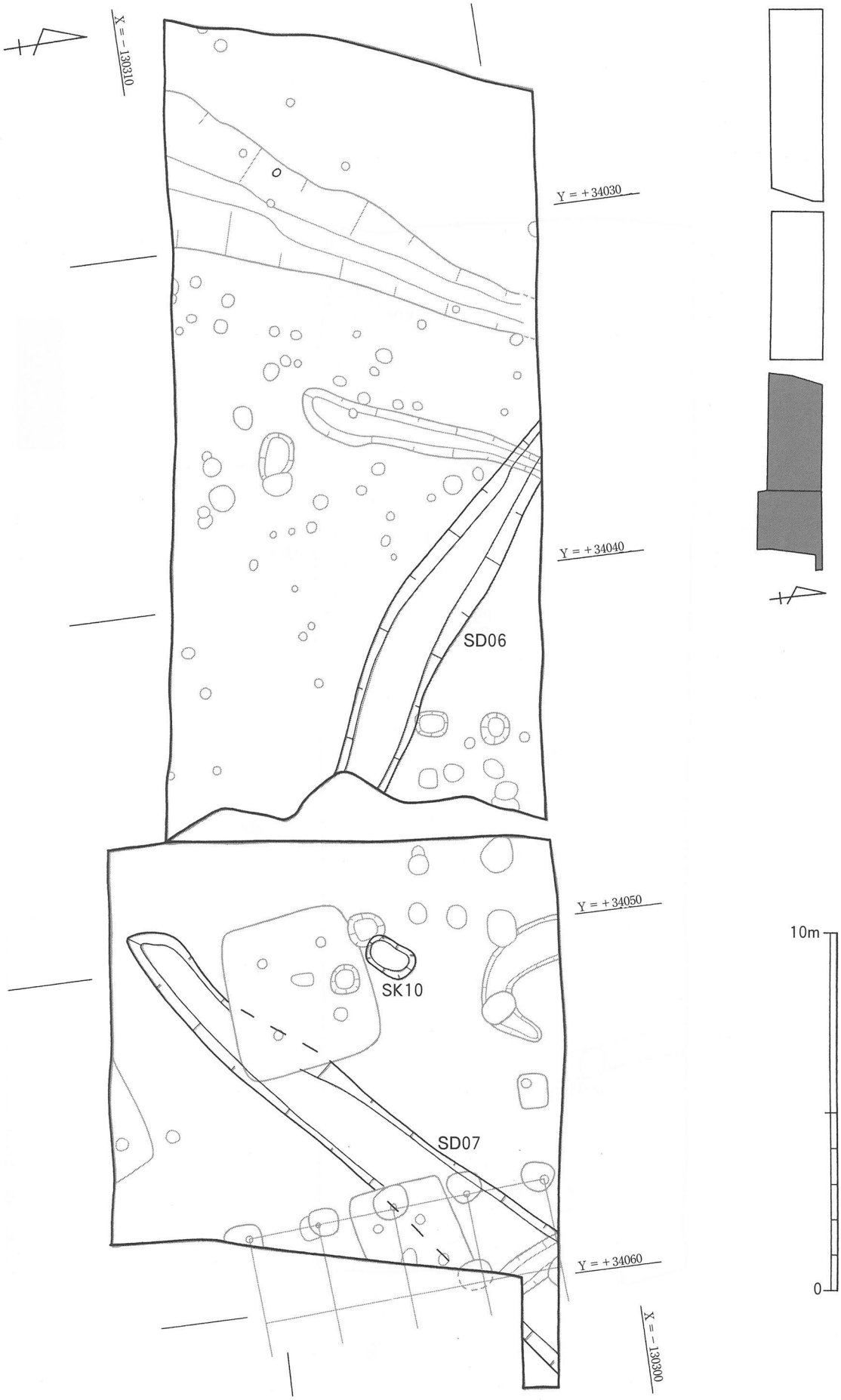
第43図　ＳＫ06土器の検出



第44図　第２面　弥生時代



第45図　A－2区　第2面　弥生時代



第46図　A－３区・B区　第２面　弥生時代

（1）柱穴

Ａ－２区を中心に数穴の柱穴を検出したが、これらの柱穴から建物を復元することはできなかった。しかし、これらの柱穴のなかには、良好な資料が得られたものもある。以下、これらの柱穴について、出土遺物を中心に報告する。

Ｐ８

位置　Ａ－２区北西部で検出した（第45図）。

出土遺物　甕１点（58）が出土している（図版３）。体部から頸部内外面をハケ調整後、口頸部が横ナデ調整により仕上げられている。

時期　古墳時代の可能性も考えられる。

Ｐ９

位置　Ａ－２区のほぼ中央部で検出した（第45図）。

出土遺物　甕１点（59）が出土している（図版３）。底部～体部と口縁部～体部からなる。両者間の接合は認められないが、胎土・色調等の特徴から、同一個体と判断した。体部内外面を縦方向を主体としたハケ調整後、体部外面中位以下を縦方向のヘラ磨きが施されている。体部内面下半については、摩滅のため調整は観察できない。また、体部肩部には、ノ字状の刻み目が認められる。口縁部は、内外面とも横ナデ調整により仕上げられている。

時期　弥生時代中期後半（第３期）と考えられる。

（2）土坑

５基検出した。

ＳＫ０６（写真図版20）

検出状況　Ａ－２区北西部で検出した（第45図）。Ｐ８の西側に位置する。他の遺構との切り合い関係は認められず、完存する。

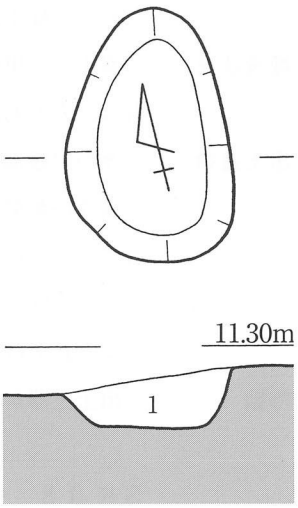
形状・規模　平面形はやや歪んだ楕円形呈し（第47図）、その規模は長軸方向で1.35m、その直交方向で76cmを測る。横断面は逆台形をなし、最深部における検出面からの深さは20cmを測る。

埋没状況　埋土は、暗褐色シルト質極細砂１層からなる。炭・焼土片を少なからず含み、人為的に埋められたものと考えられる。

出土遺物　土器が一括で廃棄された状況で出土している。器種としては、壷と甕が出土している（図版３）。

壷　広口壷（61）、水差形壷（62）、無頸壷（63）が出土している。

61は、口縁部を外下方に大きく折り曲げ、その屈曲部に断面三角形の凸帯が２条貼り付けられている。２条の凸帯頂部には、刻み目が施されている。凸帯間には、２個１対の紐穴が４箇所（残存３箇所）に穿たれている。また、口縁端部上端に粘土紐を貼りつけることにより口縁端部を拡張し、端面



第47図　ＳＫ06

には刻み目が施され、その上に円形浮文が３個１セットで５セット貼り付けられている。頸部から口縁部にかけての外面は、縦方向のハケ調整後、断面三角形の凸帯が２条貼り付けられている。口頸部内面は、ナデ調整により仕上げられている。

62は、体部に剥離痕が認められ、水差形土器と考えられる。体部外面は、縦方向を主体としたハケ調整後、下半部がヘラ磨き（下位を縦方向、上位を横方向）により仕上げられている。体部中位の最大径部にはノ字形の刻み目が、肩部には簾状文が施されている。体部内面は、下半が指オサエ後ナデ調整、上半が縦方向のハケ調整により仕上げられている。口縁部は、体部のハケ調整後、横方向のナデ調整により仕上げられている。また。口縁外端部には刻み目が施されている。

63の無頸壷は、体部内面をハケ調整、外面下半を横方向のヘラ磨きにより仕上げられている。体部外面最大径部には、貝殻施文が施されている（写真図版89）。体部外面上半の調整については、摩滅のため観察できない。口縁部は、横ナデ調整により仕上げられている。また、口縁部には１対の紐穴が８㎜の間隔をあけて穿たれている。

甕　64と65の２個体図化した。２個体とも同タイプに分類されるものである。64は、体部外面がハケ調整後、下半が縦方向のヘラ磨きにより仕上げられている。内面は、下半が縦方向のヘラ削りにより仕上げられている。中位～上位にかけては指オサエとナデ調整により仕上げられている。65についても、摩滅が著しく調整等は詳細に観察できないが、64と同様と考えられる。口縁部は横ナデ調整により仕上げられている。

時期　出土土器から判断して、弥生時代中期後半と考えられる。

ＳＫ０７

検出状況　Ａ－２区西部で検出した（第45図）。ＳＫ06の南東に位置する。他の遺構との切り合い関係は認められず、完存する。

形状・規模　平面形はほぼ円形を呈し、その規模は65cm×62cmを測る。横断面は皿形をなし、最深部における検出面からの深さは20cmを測る。

埋没状況　埋土は、黒色シルト質極細砂混じり暗褐色シルト質極細砂１層からなる。土器片を多く含み、人為的に埋められたものと考えられる。

出土遺物　甕の口縁部～体部片と、底部片が出土している。両者の接合は認められないが、胎土・色調等の類似から同一個体の可能性が高く、本報告では同一個体として報告する（60：図版３）。体部外面は縦方向のハケ調整後中位～下位を中心に縦方向のヘラ磨き、内面は下半が縦方向のヘラ削りにより仕上げられている。その後、口縁部は内外面とも横ナデ調整により仕上げられている。

時期　出土土器から判断して、弥生時代中期後半（第３期）と考えられる。

ＳＫ０８

検出状況　Ａ－２区南東部で検出した（第45図）。ＳＫ09の西側に位置する。ＳＤ05と切り合い関係にあり、ＳＤ05を切っている。このため、当遺構は完存する。

形状・規模　平面形は楕円形呈し、その規模は長軸方向で83cm、その直交方向で64cmを測る。横断面

は逆台形を呈し、最深部における検出面からの深さは20cmを測る。

埋没状況　埋土は、灰色シルト質極細砂混じり暗褐色シルト質極細砂１層からなる。層相から判断して、人為的に埋められたものと考えられる。

出土遺物　広口壷の口縁部片・体部片と甕の体部片が出土している。いずれも、小片のため図化できなかった。

時期　出土土器から判断して、弥生時代中期後半（第３期）と考えられる。

ＳＫ０９（写真図版20）

検出状況　Ａ－２区東部で検出した（第45図）。ＳＫ08の東側に位置する。他の遺構との切り合い関係は認められず、当土坑は完存する。

形状・規模　平面形は隅円長方形呈し、その規模は長軸方向で85cm、その直交方向で66cmを測る。横断面はＵ字形を呈し、最深部における検出面からの深さは27cmを測る。

埋没状況　埋土は、灰色シルト質極細砂を塊状に含む暗灰褐色シルト質極細砂１層からなる。層相から判断して、人為的に埋められたものと考えられる。

出土遺物　広口壷の口縁部片と体部片が出土している。いずれも小片のため、図化できなかった。

時期　出土土器から判断して、弥生時代中期後半（第３期）と考えられる。

ＳＫ１０

検出状況　Ｂ区ほぼ中央で検出した（第46図）。他の遺構との切り合い関係は認められず、当土坑は完存する。

形状・規模　平面形は隅円長方形呈し、その規模は長軸方向で1.37m、その直交方向で87cmを測る。横断面は浅い皿形を呈し、最深部における検出面からの深さは、わずか11cmである。

埋没状況　埋土は、黒褐色シルト質極細砂１層からなる。

出土遺物　広口壷の底部～体部片（66）が出土している（図版３）。外面は斜方向のハケ調整後、中位が横方向のヘラ磨きにより仕上げられ、その後下半が縦方向のヘラ磨きにより仕上げられている。内面は摩滅のため調整は観察できなかった。

時期　出土土器から判断して、弥生時代中期後半（第３期）と考えられる。

（３）溝

ＳＤ０４（写真図版21）

検出状況　Ａ－２区北西部で検出した（第45図）。ＳＫ07の北東に位置する。他の遺構との切り合い関係は認められないが、調査区外へのびているため、全体を検出することはできなかった。東西方向にほぼ直線的にのびる溝で、東側は調査区内で収束し、西側は調査区外までのびている。

形状・規模　検出した長さは2.60mを測る。横断面は浅いＵ字形を呈し、最深部における検出面からの深さは20cmを測る。検出面における幅は82cmを測り、底部のレベルは、検出した範囲ではほぼ一定である。

埋没状況　埋土は、灰色シルト質極細砂混じり暗灰褐色シルト質極細砂１層からなる。層相から判

断して、自然に埋没したものと考えられる。

出土遺物　甕の口縁部片が出土しているが、小片のため図化できなかった。

時期　出土土器から判断して、弥生時代中期後半（第３期）と考えられる。

ＳＤ０５（写真図版21）

検出状況　Ａ－２区南東部で検出した（第45図）。ＳＫ08と切り合い関係にあり、ＳＫ08に切られている。また、当遺構は調査区外までのびているため、全体を検出することはできなかった。南北方向にほぼ直線的にのびる溝で、北側は後世の攪乱を受け、南側は調査区外までのびている。

形状・規模　検出した長さは9.10mを測る。横断面は浅いＵ字形を呈し、最深部における検出面からの深さは22cmを測る。検出面における幅は61cm～81cmを測る。底部のレベルは、北端部と南端部で６cmの差が認められ、わずかに南側への傾斜が認められる。

埋没状況　埋土は、黒色シルト質極細砂をブロック状に含む暗褐色シルト質極細砂１層からなる。層相から判断して、人為的に埋められたものと考えられる。

出土遺物　壷と甕が出土している（図版３）。

壷　広口壷の口縁部が出土している（67・68）。

67は、頸部から斜方向へのびる口縁部を下方まで折り返し、５条１単位の櫛描波状文が２単位施され、単位間に円形浮文が、櫛描波状文の内側に棒状浮文がそれぞれ列状に貼り付けられている。また、頸部には指頭圧痕文凸帯が貼り付けられている。内外面ともナデ調整により仕上げられている。

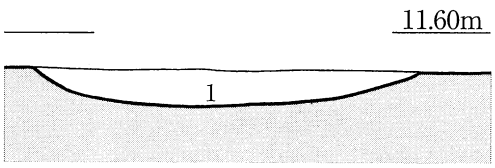
68（写真図版89）は、頸部から斜方向へのびる口縁部を水平方向に屈曲させ、端部を上下に拡張させ、外端面を有する。この端面に貝殻施文が一定の間隔で施され、その上に円形浮文が貼り付けられている。円形浮文は全周せず、数個が１単位となっているようであるが、４個のみしか残存せず、その単位は明らかにできない。内外面とも横ナデ調整により仕上げられている。

甕　底部片が出土している（69）。外面は縦方向のヘラ磨き、内面は縦方向のヘラ削りにより仕上げられている。

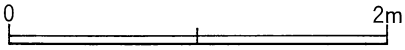
時期　ＳＫ08との切り合い関係および出土土器から判断して、弥生時代中期後半（第３期）と考えられる。

ＳＤ０６（写真図版21）

検出状況　Ａ－３区北東部で検出した（第46図）。飛鳥～白鳳時代のＳＤ09と切り合い関係にあり、ＳＤ09に切られている。西北西－東南東方向にほぼ直線的にのびる溝で、北西側は調査区外までのび、反対側については、Ａ－３区東端部までのびている。ただし、Ｂ区では検出されていな



１．暗褐色シルト質極細砂



第48図　ＳＤ06

いため、A－3区とB区との間で収束するものと考えられる。

形状・規模　10.75m検出した。横断面は皿形を呈し、最深部における検出面からの深さは22cmを測る（第48図）。検出面における幅は1.18m～2.08mと一定せず、底部のレベルは東端部が約9cm高くなっている。

埋没状況　埋土は、暗褐色シルト質極細砂1層からなる。炭片を含み、層相から判断して、人為的に埋められたものと考えられる。

出土遺物　甕2個体（70・71）が出土している（図版4）。

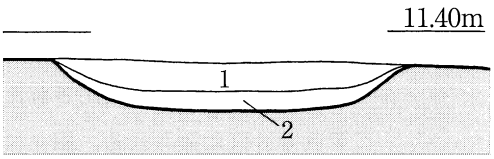
70は、体部中位を欠き、口縁部から底部まで完全に残存するものではないが、胎土・色調等の特徴から同一個体として報告する。この土器は、摩滅が著しいため、体部外面下半のヘラ磨き以外は観察できないが、71と形態・調整法とも同じものと考えられる。

71は、体部下半を中心に縦方向のヘラ磨き、内面を縦方向のハケ調整後底部付近が縦方向のヘラ削りにより仕上げられている。口縁部は内外面とも横ナデ調整により仕上げられている。

時期　出土土器から判断して、弥生時代中期後半（第3期）と考えられる。

ＳＤ０７

検出状況　B区のほぼ中央部で検出した（第46図）。古墳時代のＳＨ04・ＳＨ06および奈良時代のＳＢ05に伴う柱穴と切り合い関係にあり、これらの遺構に切られている。北東－南西方向にほぼ直線的にのびる溝で、南西端は調査区内で収束し、北東側は調査区外までのびている。



1．黒褐色シルト質極細砂
2．黒褐色極細砂～細砂（中～大礫多く含む）

第49図　ＳＤ07

形状・規模　全長15.47m検出した。横断面は浅い逆台形を呈し（第49図）、最深部における検出面からの深さは24cmを測る。検出面における幅は、南西側で1.24m、北東側で2.76mと、北東側ほど広くなる傾向が認められる。底部のレベルはほぼ一定している。

埋没状況　上から、黒褐色シルト質極細砂、黒褐色極細砂～細砂の2層からなる。2層とも土器を包含し、その層相から判断して、人為的に埋められたものと考えられる。

出土遺物　壷・甕・蓋・回転台の各器種が出土している。

壷　広口壷の口縁部（72）とその体部片が出土している（図版4）。72は、口縁部を大きく折り返すタイプと考えられるが、端部を欠く。口縁部内面には2条の断面三角形を呈する凸帯が貼り付けられている。両凸帯の頂部には、刻み目が施されている。また、頸部にも断面三角形を呈する凸帯が貼り付けられている。頸部から口縁部にかけての外面はハケ調整、他の外面は横ナデ調整、内面はナデ調整により仕上げられている。

甕・蓋　その体部片が出土しているが、小片のため図化できなかった。甕については底部片が出土している。

時期　出土土器から判断して、弥生時代中期後半（第3期）と考えられる。

Ⅱ．古墳時代

当該期の遺構としては、竪穴住居跡・掘立柱建物跡・柱穴・土坑・溝を検出している（第51図）。

地区ごとの検出状況は以下のとおりである。

A－1区　当該期の遺構は検出されていない。

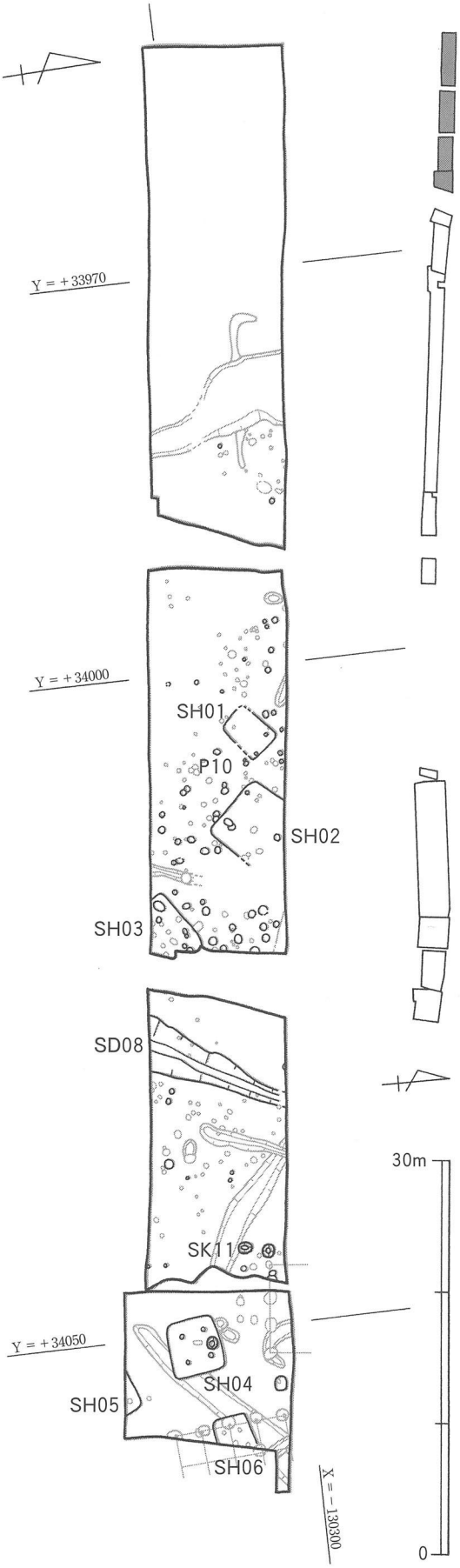
A－2区　竪穴住居跡・柱穴を検出した（第52図）。

竪穴住居跡は３棟検出されている。柱穴は比較的多く検出されたが、これらの柱穴からは、建物を復元することはできなかった。竪穴住居跡・柱穴ともに、当地区の北東側を中心に分布し、南西部では遺構はほとんど検出されていない。

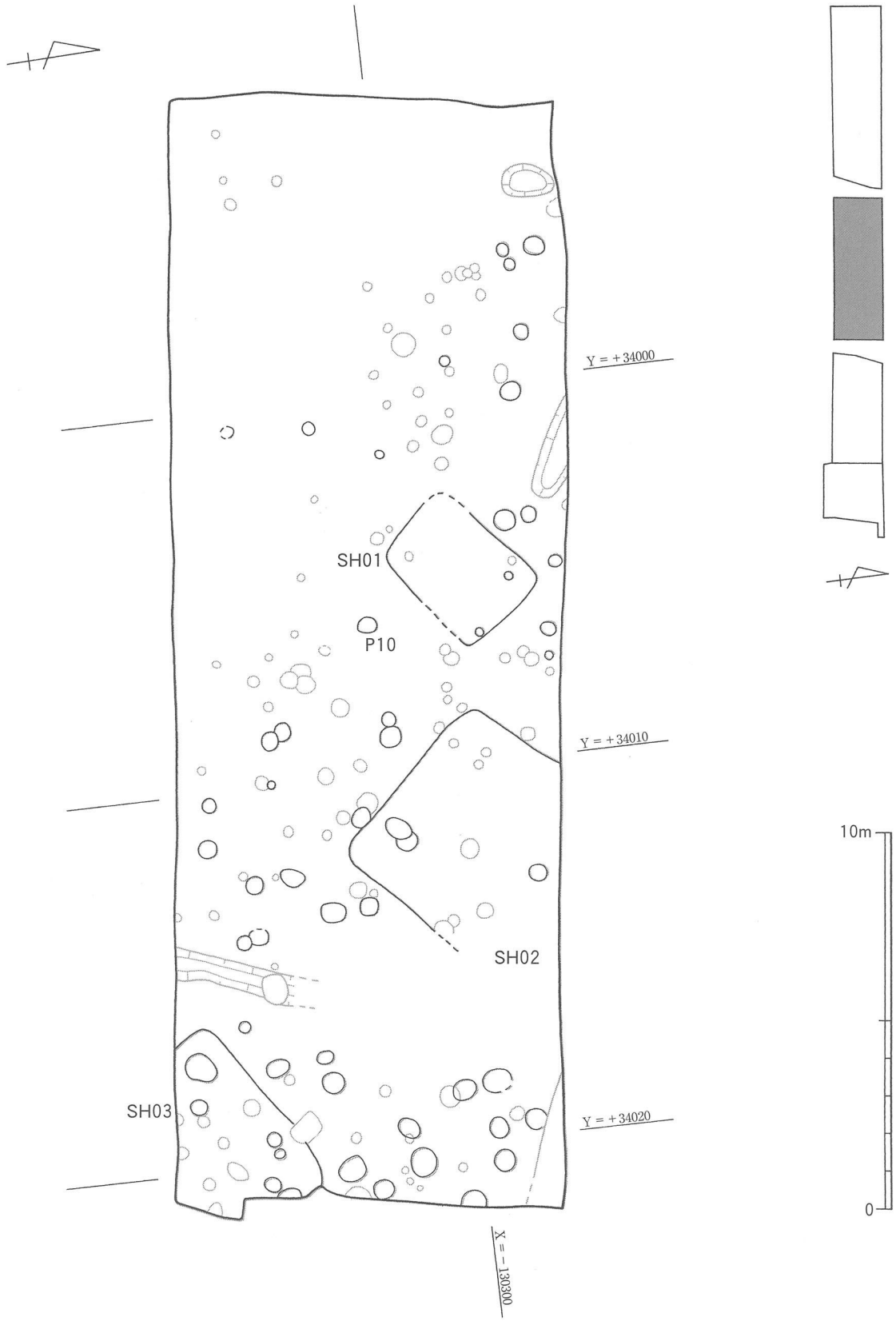
A～B区　竪穴住居跡・掘立柱建物跡・柱穴・溝・土坑を検出した（第53図）。

竪穴住居跡は３棟検出されたが、いずれもＢ区に限られる。掘立柱建物跡は１棟検出された。Ｂ区を中心に検出されている。逆に、溝はＡ－３区に限られる。

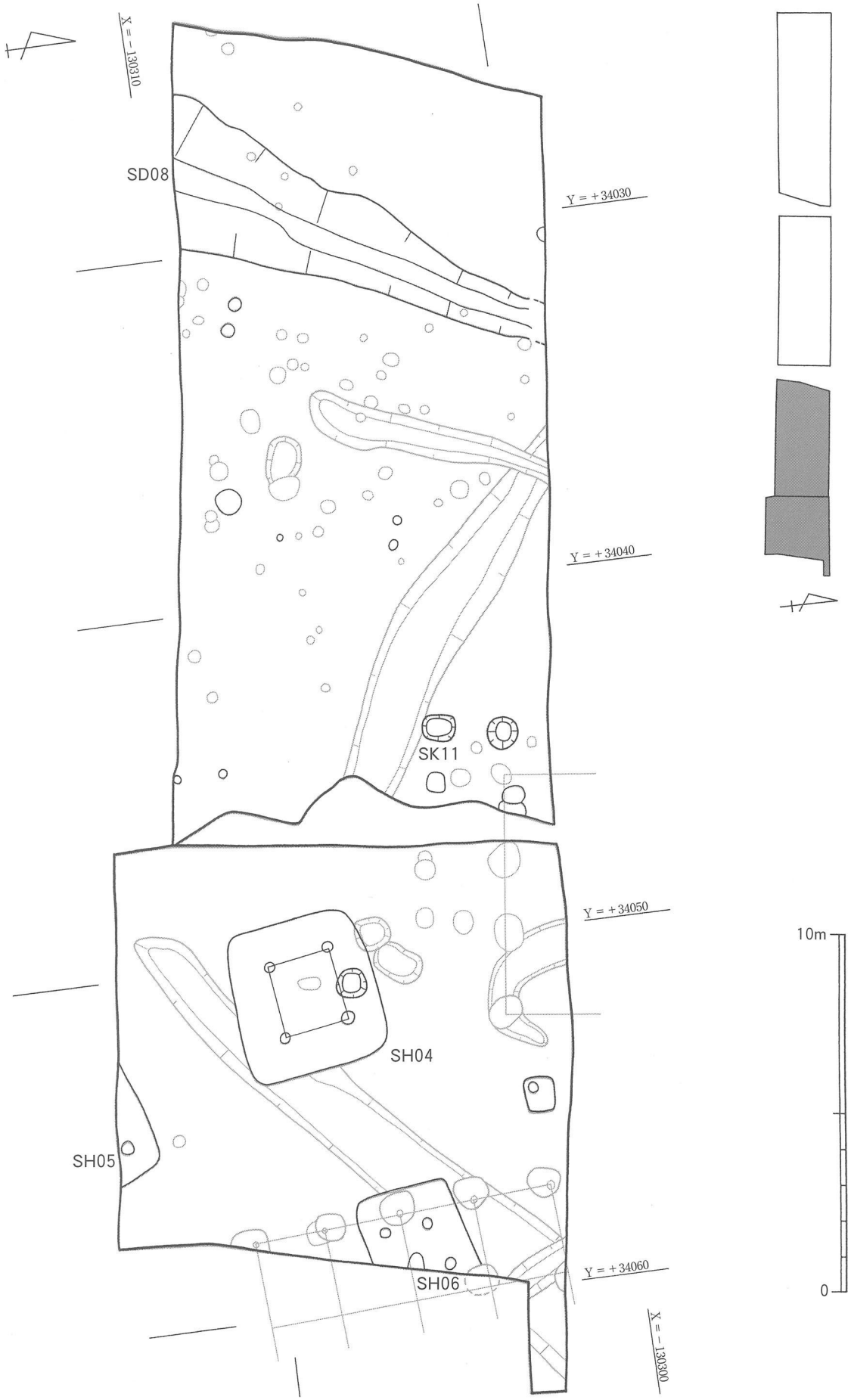
第50図　ＳＨ04の検出



第51図　Ａ・Ｂ区　第２面　古墳時代



第52図　A－2区　第2面　古墳時代



第53図　Ａ－３区・Ｂ区　第２面　古墳時代

（1）竪穴住居跡

ＳＨ０１

検出状況　Ａ－２区ほぼ中央部で検出した（第52図）。ＳＨ02の西側に位置する。他の遺構との切り合い関係は認められず、一部後世の攪乱を受けているが、ほぼ完存する。

形状・規模　平面形は長方形を呈する。北東－南西方向に主軸をとり、北東辺で2.50m、南東辺で3.20m、南西辺で2.20m、北西辺で3.40mを測る。床面はほぼ平坦で、その床面積は8.9㎡を測る。中央部における検出面からの深さは14cmと浅く、その標高は11.26mである。

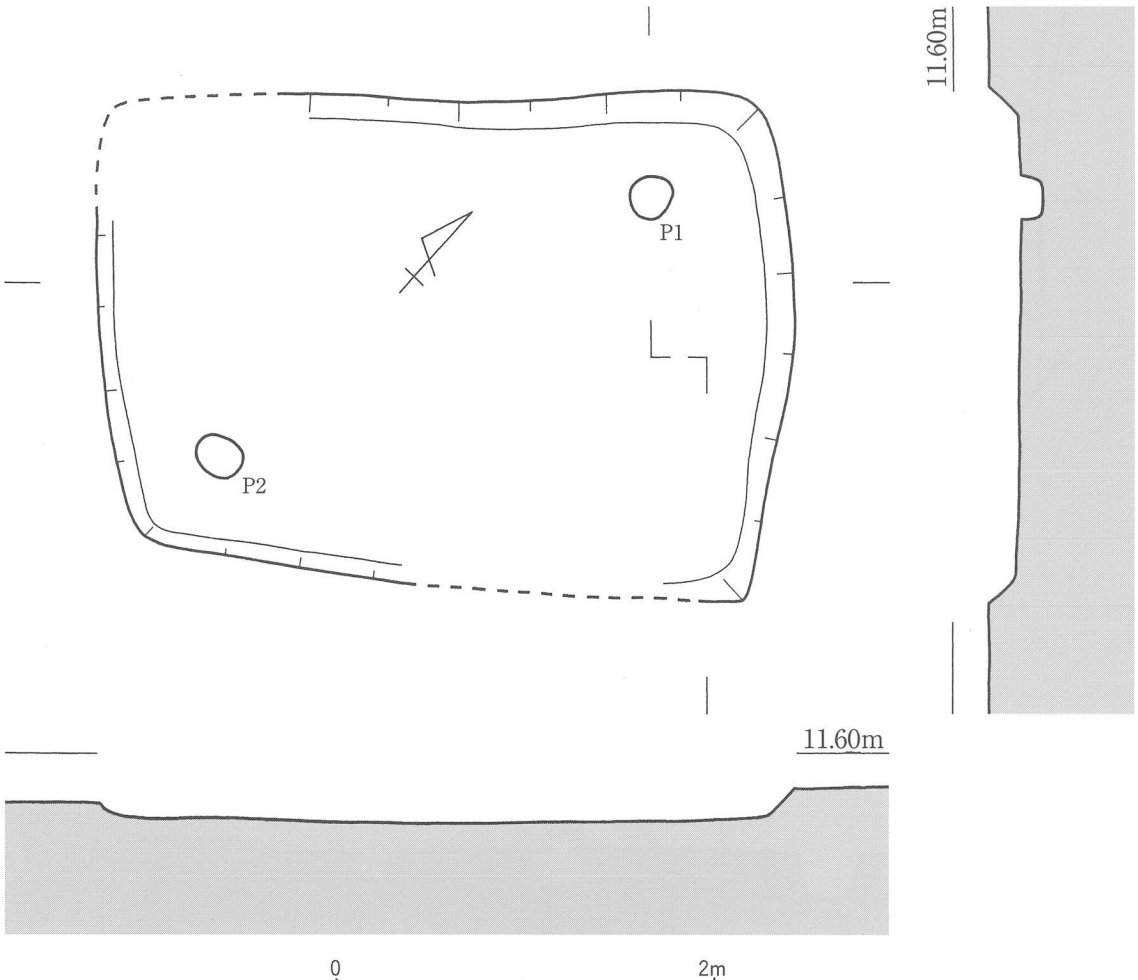
付属施設　北隅と南隅の２箇所で主柱穴を検出した（Ｐ１・Ｐ２）。Ｐ１・Ｐ２の床面における直径は22cm・20cm、及び床面からの深さは11cm・10cmを測る。当住居跡の主柱穴は4穴からなると考えられるが、Ｐ１・Ｐ２以外の柱穴については、攪乱を受け検出できなかった。また、カマドについても、焼土面も含めて検出されなかった。

出土遺物　須恵器と土師器が出土している。

須恵器　杯身・杯蓋・甕の体部片が出土している。いずれ小片のため、図化できなかった。

土師器　甕（81）が出土している（図版４）。いわゆる布留式の特徴がわずかに認められる口縁部が出土している。口縁端部は外方へ肥厚し、上端面を有する。内外面とも横ナデ調整により仕上げられている。なお、体部外面にはハケ調整の痕跡がわずかに観察できる。

時期　出土土器から判断して、第６期（古墳時代Ｉ期）と考えられる。



第54図　ＳＨ01

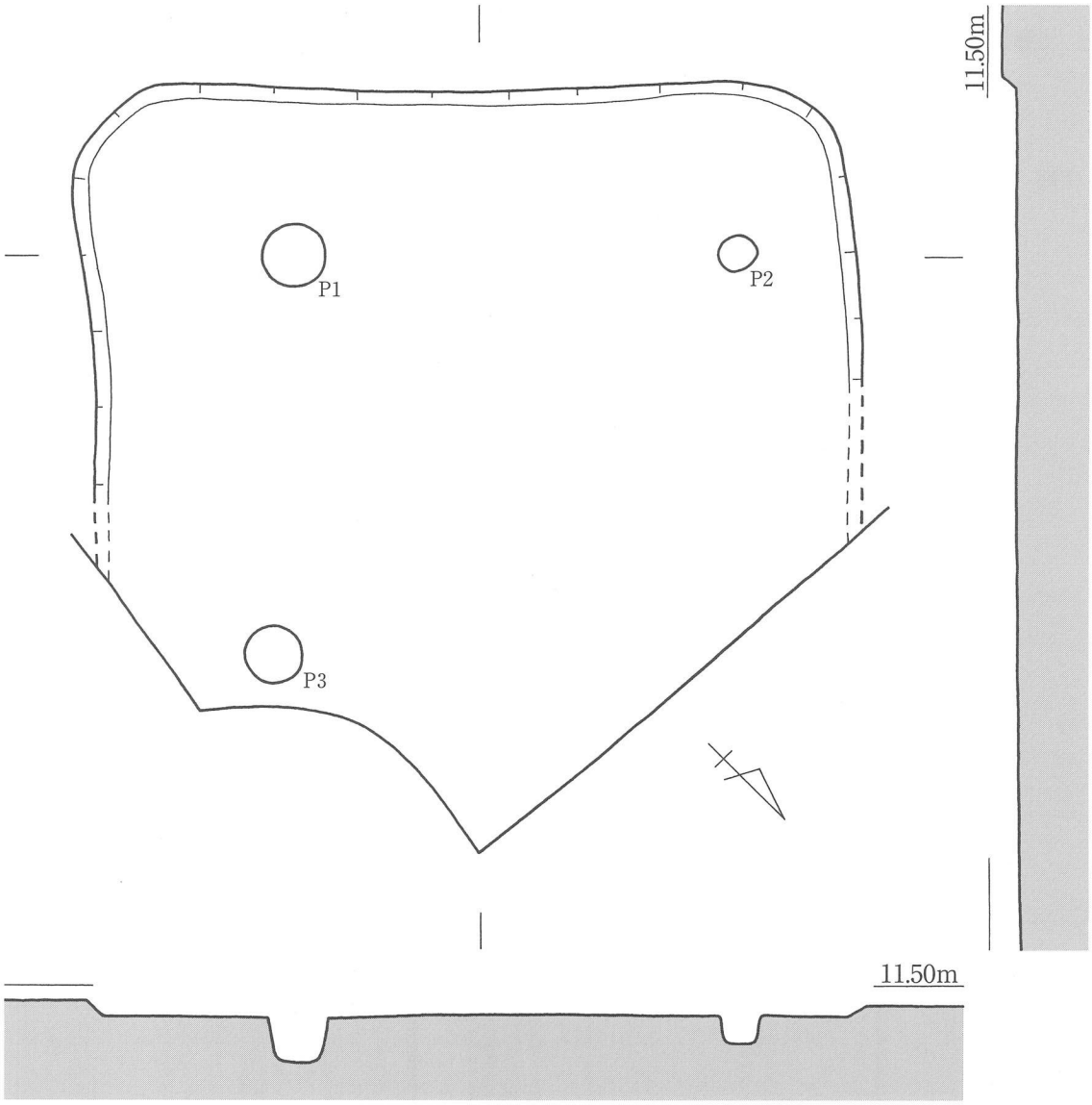
ＳＨ０２（写真図版22）

検出状況　Ａ－２区中央やや東よりで検出した（第52図）。ＳＨ01の東側に位置する。他の遺構との切り合い関係は認められないが、住居跡の一部は調査区外に拡がり、東部は攪乱を受けている。

形状・規模　平面形は方形を呈するものと考えられる（第55図）。主柱穴（Ｐ１・Ｐ２）を基準とした主軸方向はＮ44°Ｗを示し、ＳＨ01とは一致しない。住居跡の規模を明らかにできるのは南西辺のみで、一辺の長さは4.8ｍを測る。床面はほぼ平坦で、その床面積は22.20㎡を測る。中央部における検出面からの深さは13㎝と浅く、その標高は11.31ｍである。

付属施設　主柱穴を３穴検出した（Ｐ１～Ｐ３）。主柱穴の床面における直径は25㎝～44㎝、および床面からの深さは19㎝～30㎝を測る。当住居跡の主柱穴は4穴からなると考えられるが、北側の１穴については、その位置関係から、調査区外にあるものと考えられる。

出土遺物　須恵器と土師器が出土している。須恵器の体部片と土師器の器種を特定できない小片が



第55図　ＳＨ02

出土しているが、いずれも小片のため図化できなかった。

時期　ＳＨ01・ＳＨ03とほぼ同じ方向性を示すことから、古墳時代中期と考えられる。土器から時期を特定することは困難である。

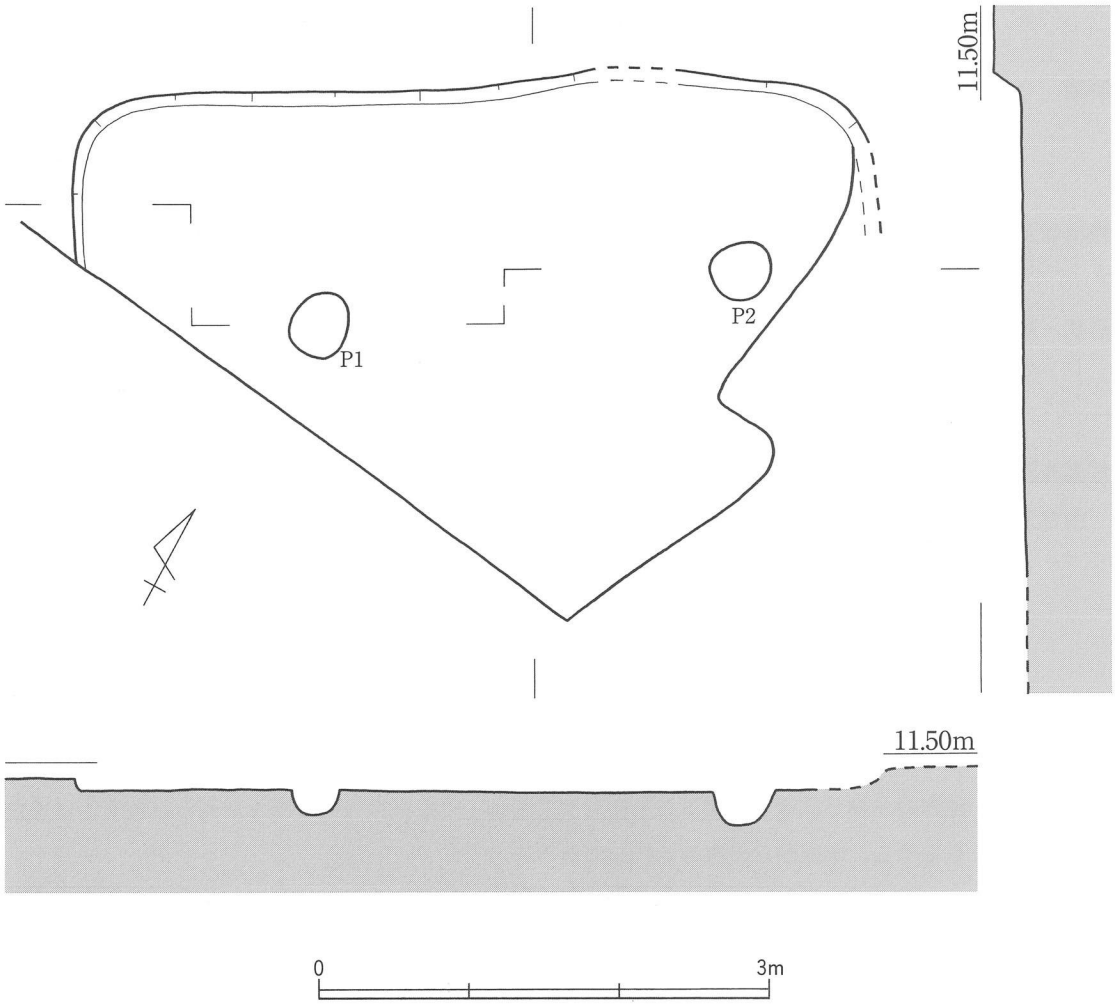
ＳＨ０３（写真図版22）

検出状況　Ａ－２区南東隅で検出した（第52図）。ＳＨ02の南東側に位置する。住居跡の多くは調査区外に拡がり、検出できたのは全体の約1／2弱に限られる。

形状・規模　平面形は方形を呈するものと考えられる（第56図）。主柱穴を基準とした主軸方向はＮ62°Ｅを示す。住居跡の規模を明らかにできるのは北西辺のみで、一辺の長さは4.59ｍを測る。床面はほぼ平坦で、検出した床面積は13.20㎡を測る。中央部における検出面からの深さは９㎝と浅く、その標高は11.27ｍである。

付属施設　主柱穴を２穴検出した（Ｐ１・Ｐ２）。主柱穴の床面における直径および床面からの深さは、それぞれ30㎝・33㎝、15㎝・20㎝を測る。当住居跡の主柱穴は４穴からなると考えられるが、他の２穴については、その位置関係から、調査区外にあるものと考えられる。

なお、Ｐ２の南側一帯で焼土を多く含む層を確認した。この層と床面の間には炭層が認められた。よって、土屋根が焼け落ちたものと考えられる。



第56図　ＳＨ03

出土遺物　須恵器と土師器・土製紡錘車が出土している（図版４）。住居跡を検出した深さが大変浅いため、出土した土器はほぼ床面に近いレベルで出土している。

須恵器　杯身・杯蓋・高杯・壷・甕の各器種が出土している。

杯身は73と74の２個体図化した。両個体とも同タイプと考えられ、ほぼ完形に復元できた74は、内外面を回転ナデにより仕上げられている。

甕は、76の１個体が出土している。口縁部外面に断面三角形の凸帯が貼り付けられ、比較的シャープに仕上げられている。凸帯以下の頸部外面はカキメが施され、その後凸帯下方に10条からなる波状文が施されている。

壷は75の直口壷と、77の壷が出土している。75は、肩部に１条の沈線が施され、内外面を回転ナデ調整により仕上げられている。77は、口縁部が回転ナデ調整、体部が叩き整形により仕上げられている。

この他、高杯は筒部の一部が出土しているが、小片のため図化できなかった。

土師器　甕が出土しているが、図化できたのは78・79の２個体に限られる。78は、体部外面がハケ調整、内面がヘラ削りにより仕上げられている。口頸部は、体部のハケ調整後、横ナデ調整により仕上げられている。79は、78と同様の調整によるものと考えられるが、摩滅が著しく、体部の調整痕は観察できない。口縁部は横ナデ調整により仕上げられている。

紡錘車　80の１個体が出土している。土師器の甕の体部を転用したものである。残存するのは全体の約1／2に限られる。直径3.9㎝、孔の径3.5㎜、厚さ5㎜を測る。

時期　出土土器から判断して、飛鳥時代（第12期）と考えられる。

ＳＨ０４（写真図版23）

検出状況　Ｂ区ほぼ中央部で検出した（第53図）。ＳＨ05の北側に位置する。弥生時代の溝ＳＤ07と切り合い関係にあり、ＳＤ07を切る。このため、当遺構は完存する。

形状・規模　平面形は方形を呈し（第57図）、主柱穴を基準とした主軸方向はＮ35°Ｗを示す。主軸方向で4.0ｍ、その直交方向で4.20ｍを測る。床面はほぼ平坦で、検出した床面積は14.50㎡を測る。中央部における検出面からの深さは10㎝と浅く、その標高は11.25ｍである。

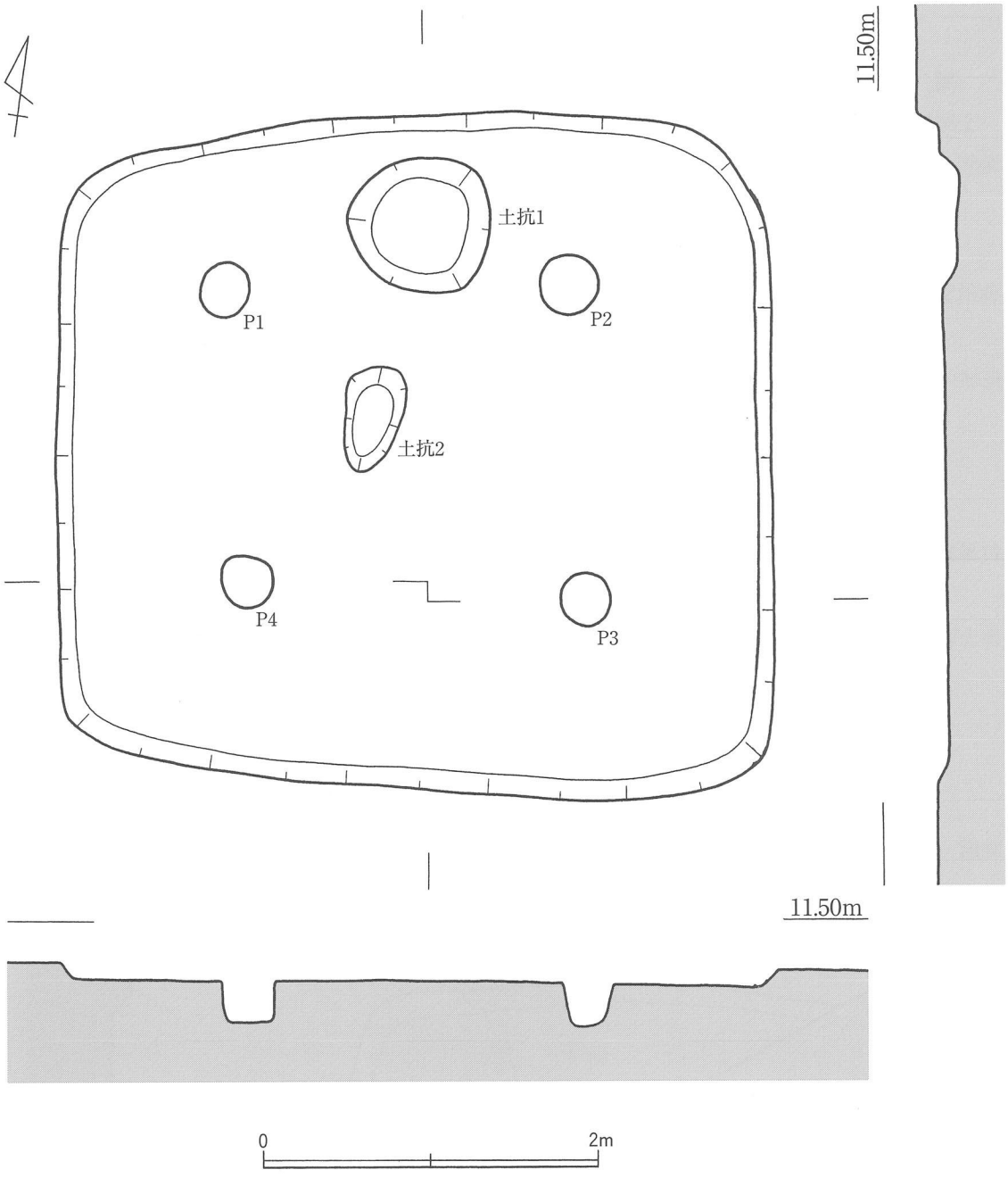
付属施設　主柱穴と土坑を検出した。

主柱穴　４穴検出した（Ｐ１～Ｐ４）。各柱穴間の距離が、Ｐ１－Ｐ２間で2.05ｍ、Ｐ２－Ｐ３間で1.82ｍ、Ｐ３－Ｐ４間で2.05ｍ、Ｐ４－Ｐ１間で1.75ｍと、当住居跡の平面形と相似形をなすように配置されている。主柱穴の床面における直径および床面からの深さは、Ｐ１で29㎝・24㎝、Ｐ２で34㎝・25㎝、Ｐ３で27㎝・26㎝、Ｐ４で32㎝・25㎝を測る。

土坑　２基検出した（土坑１・土坑２）。

土坑１は、北辺中央部付近に位置する。平面形は隅丸方形を呈し、その主軸方向は、当建物の主軸とほぼ一致する。主軸方向で80㎝、その直交方向で85㎝を測る。横断面は逆台形を呈し、床面からの深さは12㎝である。

土坑２は、住居址のほぼ中央部で検出した。平面形は楕円形を呈するが、その主軸方向は、住居跡の主軸方向とはわずかにずれている。主軸方向で61㎝、その直交方向で35㎝を測る。横断面は逆台形を呈し、最深部における床面からの深さは6.5㎝を測る。



第57図　ＳＨ04

出土遺物　須恵器と土師器が出土している。

須恵器　杯（82）・取手付椀（83）・甕が出土している。

杯　明確な平底形態をとり、体部はほぼ直線的に斜外方にのびる。受部は、内外面をつまむような強いヨコナデ調整により、体部に対して明確な段をなし、直線的に斜外方にのびている。底部はヘラにより切り離され、その後内外面ともナデ調整により仕上げられている。他もナデ調整により仕上げられているが、体部外面には弱いヘラ削りが施されている。

取手付椀　球形の体部に対して明確な平底を有する。底部はヘラにより切り離され、弱い静止ヘラ削りが施されている。また、底部から体部外面にかけて火襷痕が認められる。体部外面上半には8条からなる波状文が施文され、この波状文の上下は、弱い横ナデが施されている。体部外面下半波状文帯より下側は、回転ヘラ削り後、その下半1／2が静止ヘラ削り（右→

左）により仕上げられている。

甕　体部片が出土しているが、小片のため図化できなかった。

土師器　小片のため、器種の特定も困難である。

時期　出土土器から判断して、古墳時代中期（第８期）と考えられる。

ＳＨ０５（写真図版23）

検出状況　Ｂ区南東部で検出した（第53図）。ＳＨ04の南側に位置する。大半は調査区外に拡がり、わずかに北東隅を検出できたのみである。他の遺構との切り合い関係は認められなかった。

形状・規模　平面形は方形を呈するものと考えられ（第58図）、主軸方向はＮ33°50″Ｅを示し、他の住居跡とは方向を異にする。北西辺で2.80ｍ、北東辺で1.40ｍ検出した。床面はほぼ平坦で、検出した床面積はわずか1.90㎡である。中央部における検出面からの深さは12㎝で、その標高は11.20ｍである。

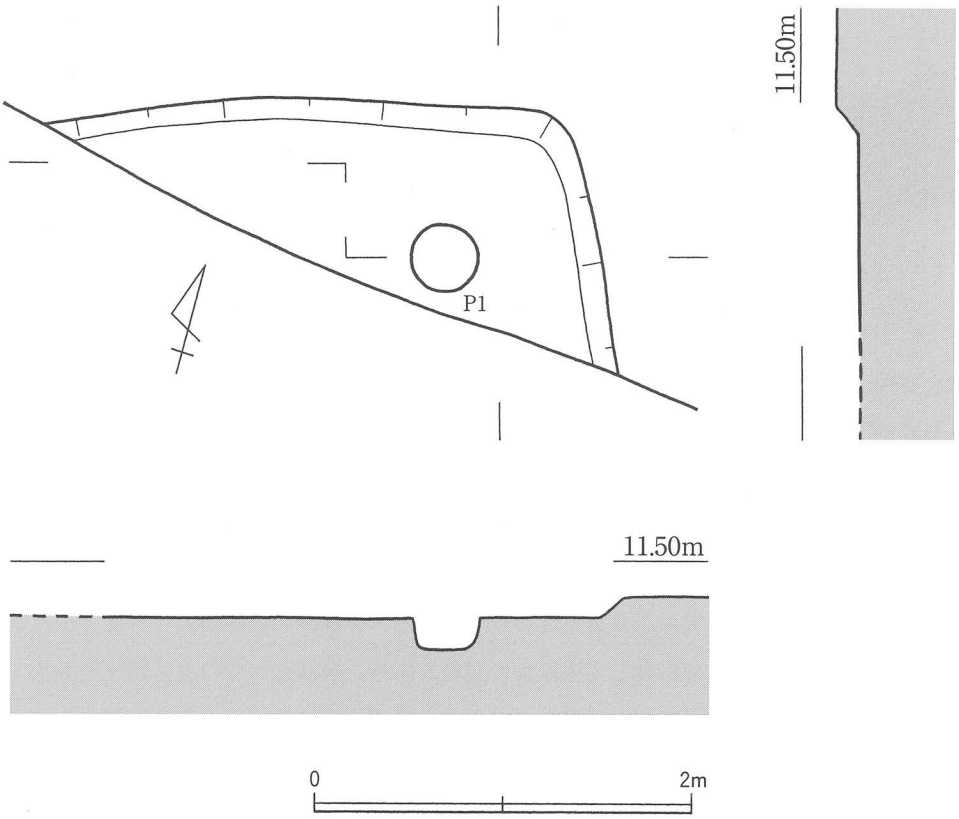
付属施設　主柱穴１穴（Ｐ１）を検出した。平面形は円形を呈し、その径は32㎝を測り、床面からの深さはわずか4.5㎝である。

出土遺物　土師器の甕と高坏が出土している。

甕は、84と85の２個体を図化した（図版４）。両個体とも同タイプの甕と考えられる。体部から頸部にかけての外面および口縁部内面をハケ調整後、口縁部内外面が横ナデ調整により仕上げられている。また、部分的に弱いヘラナデ調整が施されている。

高坏に関しては、脚裾部が出土しているが、小片のため図化できなかった。

時期　土師器の形態的特徴から、古墳時代中期（第10期）に位置付けられる。



第58図　ＳＨ05

ＳＨ０６（写真図版23）

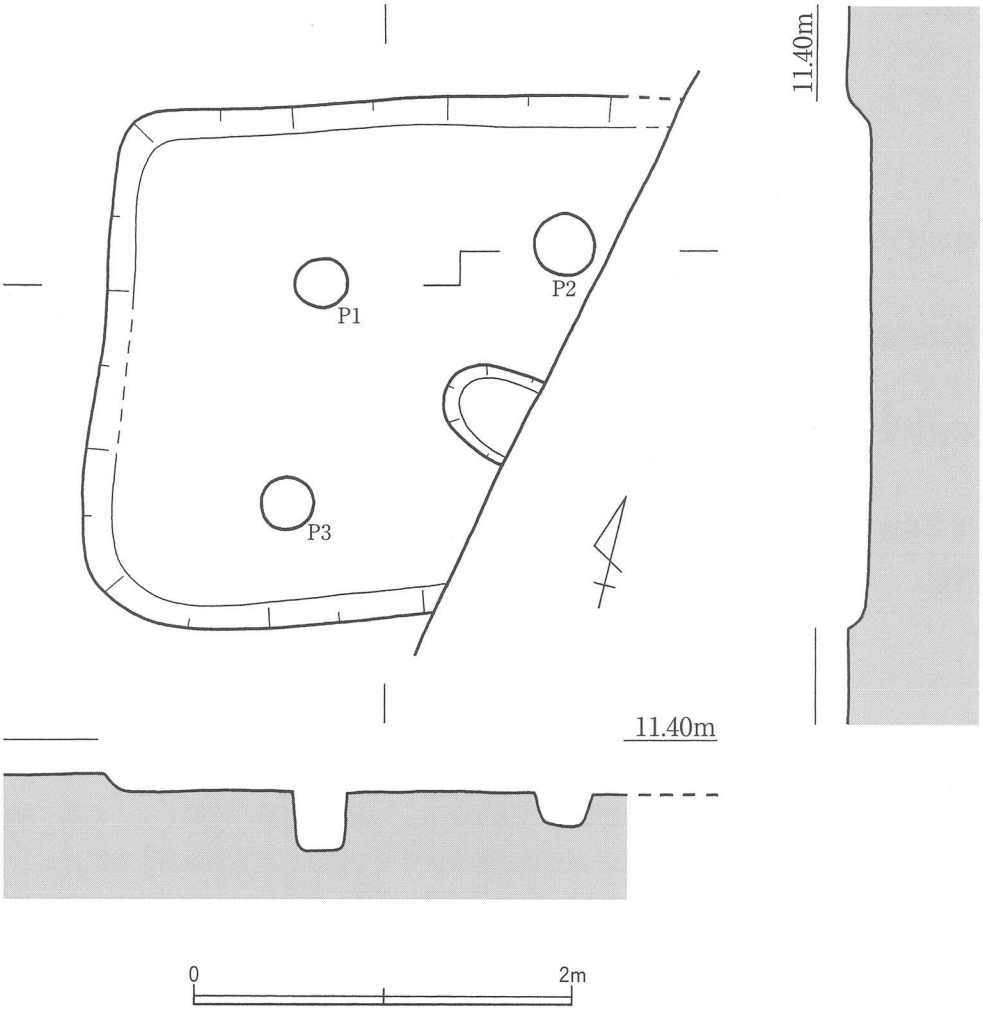
検出状況　Ｂ区東部で検出した（第53図）。ＳＨ04の東側に位置する。当住居跡の一部は調査区外に拡がっており、全体を検出することはできなかった。弥生時代の溝ＳＤ07との切り合い関係にあり、ＳＤ07を切っている。一方、北東隅においては、奈良時代の掘立柱建物跡ＳＢ05を構成する柱穴に切られている。

形状・規模　平面形は長方形を呈するが平行四辺形傾向にある（第59図）。主軸方向はＮ35°Ｅを示し、ＳＨ04と同方向を示す。規模の明確な西辺で2.50ｍを測り、北辺は2.90ｍ以上を測る。床面はほぼ平坦で、検出した床面積は5.30㎡である。中央部における検出面からの深さは13㎝で、その標高は11.10ｍである。

付属施設　主柱穴と土坑を検出した。

主柱穴　３穴検出した（Ｐ１～Ｐ３）。当住居跡の平面形と同様、３穴の配列は平行四辺形の傾向が認められる。柱穴間の距離は、Ｐ１－Ｐ２間で1.33ｍ、Ｐ１－Ｐ３間で1.20ｍを測る。主柱穴の床面における直径および床面からの深さは、Ｐ１が29㎝・31㎝、Ｐ２が34㎝・17㎝、Ｐ３が26㎝・12㎝を測る。

土坑　南東部で１基検出した。一部は調査区外へ拡がっているため、全体を検出することはできなかった。その位置から判断して、未検出の主柱穴に近接するものと考えられる。



第59図　ＳＨ06

平面形は楕円形を呈するものと考えられ、主軸直交方向で46cmを測る。横断面は逆台形を呈し、床面からの深さはわずか８cmである。暗灰褐色シルト混じり極細砂を埋土とするが、炭等は含まれていなかった。

出土遺物　土師器が２点（86・87）出土している（図版４）。

86・87とも同タイプの土器で、その形態から高坏もしくは椀と考えられる。両個体とも摩滅が著しいが、口縁部は内外面とも横ナデ調整により仕上げられている。体部の調整は、86の内面にわずかにヘラ磨きの痕跡が認められる。

時期　出土土器の特徴から、古墳時代中期（第９期）と考えられる。

（２）柱穴

前項で報告した建物を構成する柱穴以外に、いくつかの柱穴を検出している。このなかで、Ｐ10から良好な資料が得られているので、出土遺物を中心に報告する。

Ｐ１０

位置　Ａ－２区のほぼ中央北側で検出した（第52図）。ＳＨ01の南側に位置する。

出土遺物　須恵器の杯身（88）が出土している（図版４）。口縁端部は端面を有するが、シャープさを欠く。外面は受部下まで細かい単位で丁寧にヘラ削りが施されている。

時期　出土土器から古墳時代中期（第８期：Ⅱ期後）に位置付けられる。

（３）土坑

当該期の土坑として判断できる遺構は、ＳＫ11の１基のみである。

ＳＫ１１（写真図版24）

検出状況　Ａ－３区東端部で検出した（第53図）。弥生時代の溝ＳＤ06と切り合い関係にあり、ＳＤ06を切っている。このため、当遺構は完存する。

形状・規模　平面形は隅丸方形を呈し、その規模は94cm×72cmを測る。横断面はＵ字形をなし、最深部における検出面からの深さは20cmを測る。

埋没状況　灰色シルト質極細砂をブロック状に含む暗褐色シルト質極細砂１層の堆積が認められた。層相から判断して、人為的に埋められたものと考えられる。

出土遺物　須恵器の杯身の口縁部片が出土している。小片のため図化できなかった。

時期　出土土器から判断して、ＴＫ209（第11期）と考えられる。

（４）溝

当該期の溝として判断できる遺構は、ＳＤ08の１条のみである。

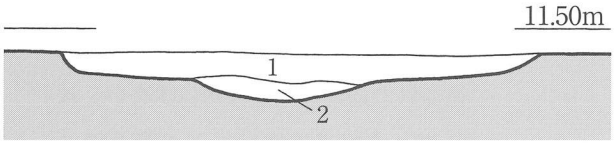
ＳＤ０８

検出状況　Ａ－３区西部で検出した（第53図）。ＳＤ09の西側に位置する。北東－南西方向にほぼ直線的にのびる溝で、南西端は調査区外までのび、北東部は第１面で検出したＳＫ05に切られている。

形状・規模　検出した長さは10.1ｍである。横断面は皿形をなし、最深部における検出面からの深さは、25cmを測る（第60図）。検出面における幅は北東側から南西側にかけて広くなり、北

東で80cm、南西部で3.80mを測る。底部のレベルはほぼ一定している。

埋没状況　2層からなり（第60図）、いずれも、層相から判断して、人為的に埋められたものと考えられる。



1．黒色シルト質極細砂混じり暗褐色シルト質極細砂（埋め土）

2．黄褐色シルト質極細砂（小礫含む：埋め土）

0　2m

第60図　ＳＤ08

出土遺物　土器（図版５）と金属製品（図版80）が出土している。

土器　須恵器と土師器が出土している。

須恵器　杯身・壷・甕・高杯が出土している。

杯身は、89～91の３個体を図化した。３個体とも同タイプのもので、受部が短くたちあがっている。ただし、89の口径が15.5cmと他の２個体より大きく、ヘラ削りが底部から体部の一部に限られ、受部近くまで施される89とは特徴を異にする。

壷は92の１個体を図化したが、横瓶と考えられる。体部内面がナデ調整により仕上げられている以外は、全て回転ナデ調整により仕上げられている。

甕は93・95・96の３個体を図化した。93は、口頸部境外面に断面三角形の凸帯を有し、口縁端部を上方につまみあげるようにナデ調整が施されている。凸帯の上下両側に15本を１単位とする波状文が施されている。95は直口壷の口縁部と考えられる。口縁部内外面は回転ナデ調整により仕上げられ、体部外面にはカキメが施されている。また、体部内面には同心円文が認められる。96は、93とは異なり、口縁端部が肥厚し玉縁状に仕上げられている。内外面とも回転ナデ調整により仕上げられ、体部外面にはカキメが認められる。

高杯については、脚部の筒部が２個体分出土しているが、いずれも小片のため図化できなかった。

土師器　甕と甑が出土している。

甕については、94の１個体を図化することができた。体部内外面をハケ調整後、口縁部内外面は横ナデ調整により仕上げられている。

甑については、把手部分が出土しているのみで、図化することはできなかった。

金属製品　耳環（Ｆ３）と鉄釘（Ｆ２）が出土している。耳環は、端部をわずかに欠くが、ほぼ完存する。外縁の規模は、1.95cm×2.15cmを測り、その断面形は７㎜×4.5㎜の楕円形を呈する。全面に鍍金が施されている。鉄釘は、断面5.5㎜×５㎜の方形を呈する和釘で、3.8cm残存する。頭部は頭巻に分類される。

第61図　耳環出土状況

時期　出土土器から判断して、第11期と考えられる。

Ⅲ：飛鳥～奈良時代

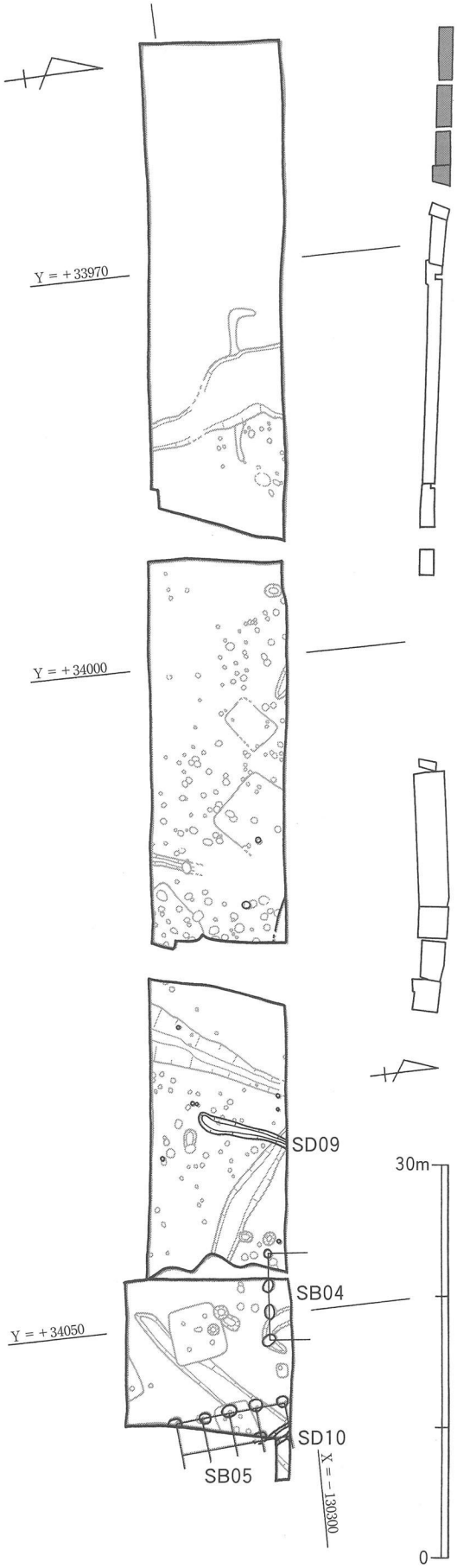
掘立柱建物と溝を検出している。検出された遺構は、全体的に少ない。地区ごとの検出遺構は以下の通りである。

A－１区　当地区では、遺構は全く検出されていない。

A－２区　当地区では、柱穴が２穴検出されているのみである。

A－３区　当地区では、B区にかけて掘立柱建物（ＳＢ04）と柱穴数穴と溝（ＳＤ09）が検出されている。

B区　東端部において、掘立柱建物跡１棟（ＳＢ05）と溝状遺構（ＳＤ10）が検出されている。



第62図　第２面　飛鳥時代～奈良時代

（1）掘立柱建物

ＳＢ04・ＳＢ05の２棟を検出している。

ＳＢ０４

検出状況　Ａ－３区北東隅からＢ区北西隅にかけて検出した（第62図）。ＳＢ05の北西側に位置する。検出できたのは建物の南側の柱穴列のみで、大半は調査区外に拡がっている。調査時には、各柱穴を土坑と考えていたが、同規模の遺構が一列に並ぶことから、掘立柱建物跡に伴う柱穴と判断した。

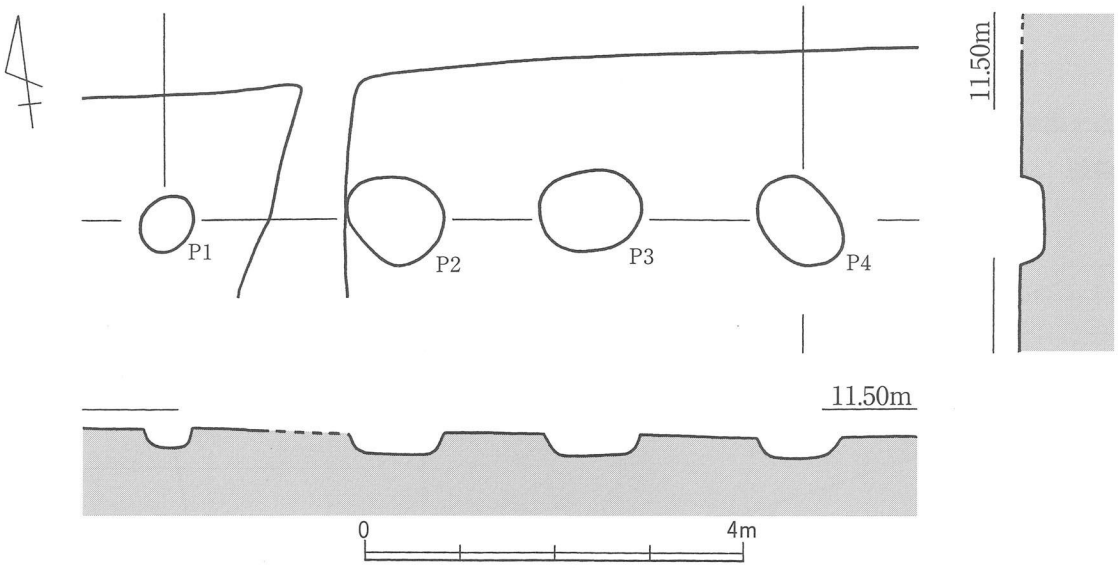
形状・規模　建物の南側のみしか検出できなかったため、建物の規模を明確にすることはできない。検出した柱穴列を基準とすると、N99°Ｅに棟軸方向をとる。

柱穴列延長は6.75mを測り、柱穴間の距離および柱間の平均値は第８表のとおりである。

柱穴　掘り形の平面形は、楕円形の傾向を示し、その規模は50cm×64cm～1.02m×90cmを測る。深さは15cm～23cmと、平面規模に比して浅い傾向にある。各柱穴の規模については、第９表のとおりである。埋土は、黒褐色シルト質極細砂を中心とした黒褐色系を主体とする。

出土遺物　Ｐ３から須恵器と土師器が出土している。須恵器は甕の体部片が出土しているが、小片のため図化できなかった。土師器は、器種の特定も困難である。

時期　出土土器の特徴及び、周囲の当該期の遺構との関連から、第12期～第14期と考えられる。



第63図　ＳＢ04

第８表　ＳＢ04建物規模一覧表

	柱穴間	柱穴間距離	側面距離	柱穴間平均距離
西桁行	Ｐ１－Ｐ２	2.45		
	Ｐ２－Ｐ３	2.00		
	Ｐ３－Ｐ４	2.30	6.75	2.25

※　第８表の単位はm

第９表　ＳＢ04柱穴規模一覧表

柱穴No.	平面規模	柱痕径	深さ
Ｐ１	50×64		23.0
Ｐ２	102×90		18.0
Ｐ３	107×80		15.0
Ｐ４	100×75		22.0

※　第９表の単位はcm

ＳＢ０５（写真図版24）

検出状況　Ｂ区東部で検出した（第62図）。検出できたのは建物西側の柱穴列と北側の柱穴に限られ、建物の大半は調査区外に拡がっているものと考えられる。後述するＳＤ10と平面的に重複するが、当建物の柱穴がＳＤ10を切っている。

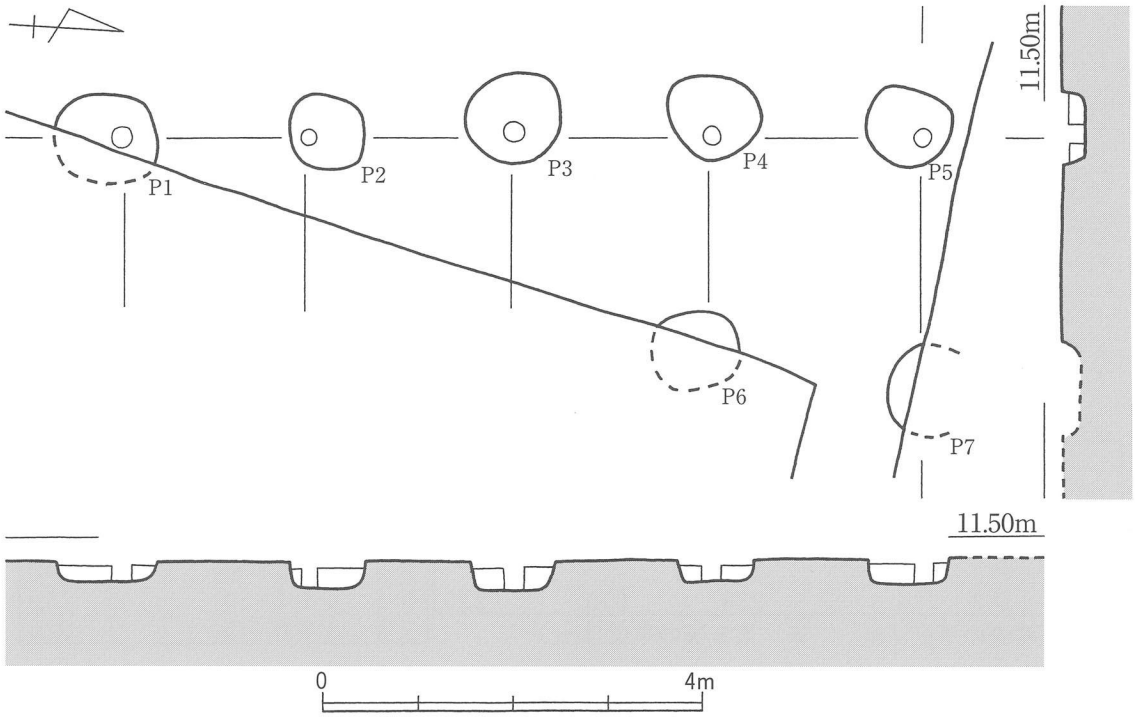
形状・規模　建物の一部を検出したにとどまるため、建物の規模を明確にすることはできない（第64図）。Ｐ７の検出から、Ｐ５－Ｐ７が当建物の北側梁行と考えられる。西桁行については、Ｐ１の南側が攪乱を受けているため、柱列が続くのかどうか明らかにできない。ただし、検出した柱穴底部のレベルが攪乱を受けたレベルより深いものが多いのに対して、Ｐ１の延長上にはその痕跡が認められないことから、Ｐ１が当建物南端の可能性が高いものと考えられる。よって、西桁行は４間からなり、建物の規模は４間×２間＋αの可能性が考えられる。そして、Ｐ６が当建物に伴うものとすると、総柱建物の可能性も考えられる。ただし、Ｐ６の南側では柱穴は確認できず、Ｐ１南側と同様の理由から、総柱にならない可能性が大きい。したがって、Ｐ６は当建物に伴わない可能性も考えられる。

西桁行方向の延長は8.50ｍを測り、これを基準とすると、棟軸方向はＮ４°30″Ｗを示す。柱穴間の距離および柱間の平均値は第10表のとおりである。

柱穴　掘り形の平面形は隅円方形もしくは方形気味の円形を呈し、その規模は80cm～1ｍを測る。深さは18cm～30cmを測る。また、掘り形内には柱痕が認められ、その径は16cm～20cmと、掘り形の規模に比して小規模である。各柱穴の規模については、第11表のとおりである。埋土は、黒褐色シルト質極細砂を主体とする。

出土遺物　いずれの柱穴からも土器の出土は認められなかった。

時期　土器が出土していないため時期の特定は困難であるが、Ｃ・Ｄ区で検出したＳＢ06と同じ方向性を示すことから、ＴＫ46（第13期）を中心とした時期と考えられる。



第64図　ＳＢ05

第10表　ＳＢ05建物規模一覧表

	柱穴間	柱穴間距離	側面距離	柱穴間平均距離
西桁行	Ｐ１－Ｐ２	2.00		
	Ｐ２－Ｐ３	2.15		
	Ｐ３－Ｐ４	2.10		
	Ｐ４－Ｐ５	2.25	8.50	2.12

第11表　ＳＢ05柱穴規模一覧表

柱穴No.	平面規模	柱痕径	深さ
Ｐ１	105	20	18.0
Ｐ２	80×77	16	23.5
Ｐ３	100×95	21	30.5
Ｐ４	90×95	17	20.0
Ｐ５	90×80	19	23.5
Ｐ６			
Ｐ７			

※　第10表の単位はｍ
※　第11表の単位はcm

A・B区

（２）溝

ＳＤ09とＳＤ10の２条を検出している。

ＳＤ０９（写真図版24）

検出状況　Ａ－３区中央部で検出した（第62図）。北東－南西方向にほぼ直線的にのびる溝で、ＳＤ08の東側にほぼ平行する。南西端は調査区内で収束し、北東部は調査区外までのびている。

形状・規模　検出した長さは6.95ｍである。横断面はＵ字形をなし、最深部における検出面からの深さは、37cmを測る。検出面における幅は、北東側から南西側にかけて広くなり、北東部で50cm、南西部で1.22ｍを測る。底部のレベルは、北東部で11.09ｍ、南西部で11.24ｍと、南西側へわずかに傾斜している。

埋没状況　暗褐色シルト質極細砂１層からなり、埋土中には拳大の礫もわずかに含まれていた。以上から、人為的に埋められたものと考えられる。

出土遺物　須恵器と土師器が出土している。

須恵器　平瓶（97）が出土している（図版５）。体部上半部には、把手の痕跡器官である径８㎜の釦状の浮文が貼り付けられている。体部内面をナデ調整により仕上げる以外は、回転ナデ調整により仕上げられている。焼成前の叩き締めが不十分で、火脹れが内外面に多く認められる。

土師器　甕の体部片と甑の把手が出土している。いずれも小片のため図化できなかった。

時期　出土土器から判断して、飛鳥時代後半～白鳳時代（第13期）と考えられる。

ＳＤ１０

検出状況　Ｂ区北東隅で検出した（第62図）。ＳＢ05と平面的に重複し、ＳＢ05を構成する柱穴に切られている。南北方向に直線的にのびる溝で、両端とも調査区外までのびている。

形状・規模　検出した長さはわずか1.90ｍである。横断面は浅いＵ字形をなし、最深部における検出面からの深さは、30cmを測る。検出面における幅は45cm～91cmを測る。底部のレベルは、ほぼ一定している。

埋没状況　黒褐色シルト質極細砂１層からなる。層相から判断して、人為的に埋められたものと考えられる。

出土遺物　須恵器の蓋（98）と甕が出土している（図版５）。

甕については、体部片が出土しているが、小片のため図化できなかった。

蓋の98は、つまみがその径（1.0cm）に対してつまみ高が高い宝珠つまみで、内面の返りは口縁端部より離れた位置にあるなど、特徴的な形態を有している。口縁部外面を弱いヘラ削りにより仕上げられている以外は、回転ナデ調整により仕上げられている。なお、返りの径は5.4cmである。壷の蓋と考えられる。

時期　出土土器及びＳＢ05との切り合い関係から判断して、第12期（ＴＫ217新段階）と考えられる。

Ⅳ：中世

溝を３条検出している。基本的には、Ａ・Ｂ区における中世の遺構に関しては、第1面に伴うものとして扱ってきた。しかし、Ａ－１区において、前項で扱った中世の遺構と切り合い関係にある。このため、より古い遺構について第２面に伴う遺構として扱うこととした。

ＳＤ１１

検出状況　Ａ－１区東部で検出した（第65図）。南北－東西方向に鍵形に屈曲する溝で、ＳＤ12の西側に位置する。北端部は調査区内で収束し、東端部はＳＤ12に切られている。

形状・規模　検出した長さは4.10ｍである。横断面は皿形を呈し、最深部における検出面からの深さは、わずか５㎝である。検出面における幅は42㎝を測る。底部のレベルは、ほぼ一定している。

埋没状況　褐灰色シルト混じり極細砂１層からなる。層相から判断して、人為的に埋められたものと考えられる。

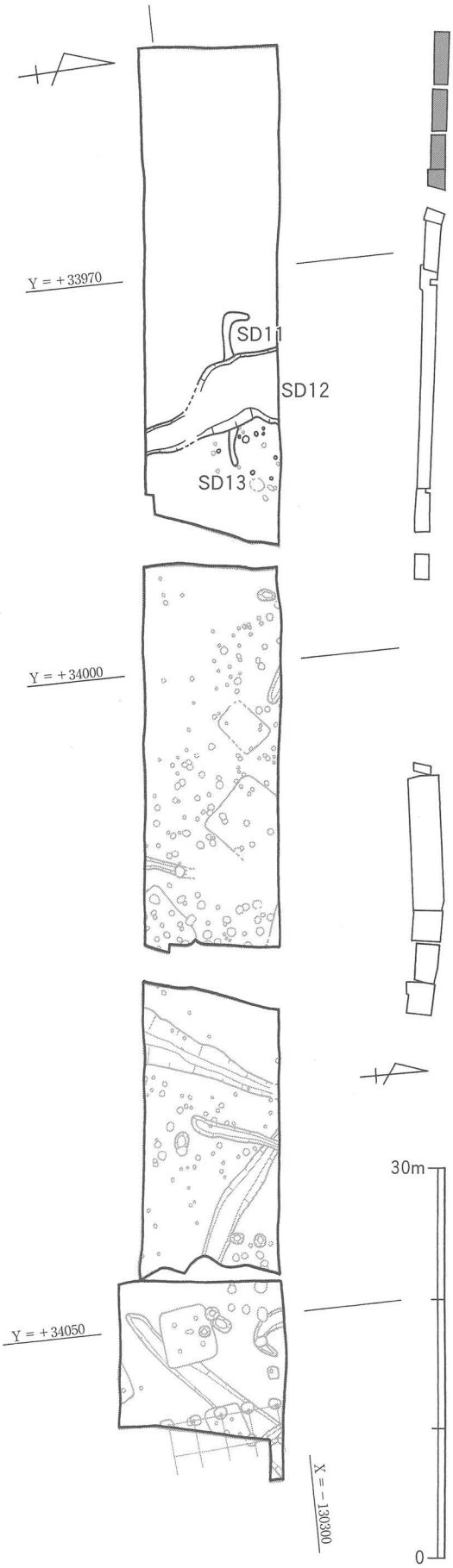
出土遺物　全く出土していない。

時期　土器が出土していないため、時期の特定は困難であるが、後述するＳＤ12との切り合い関係から、13世紀以前（第17期）と考えられる。

ＳＤ１２

検出状況　Ａ－１区東部で検出した（第65図）。ほぼ南北方向にのびる溝で、両端とも調査区外へ延びている。ＳＤ12の東側・ＳＤ13の西側に位置し、両溝を切っている。

形状・規模　検出した長さは11.20ｍである。横断面は逆台形を呈し、最深部における



第65図　第２面　中世

検出面からの深さは、42cmを測る（第66図）。検出面における幅は、調査区中央部で極端に変化し、南側が狭くなっている。その幅は、北端部で5.80m、南端部で2.00mを測る。底部のレベルは、ほぼ一定している。

埋没状況　灰色細砂～粗砂混じり褐灰色シルト質極細砂１層からなる（第66図）。その層相から判断して、人為的に埋められたものと考えられる。

出土遺物　須恵器・土師器・瓦質土器が出土している（図版５）。

須恵器　椀と甕が出土している。椀は口縁部片が出土しているが、小片のため図化できなかった。甕は99の１個体を図化した。体部から頸部にかけての内面がヘラナデ調整により仕上げられている以外は、内外面とも回転ナデ調整により仕上げられている。

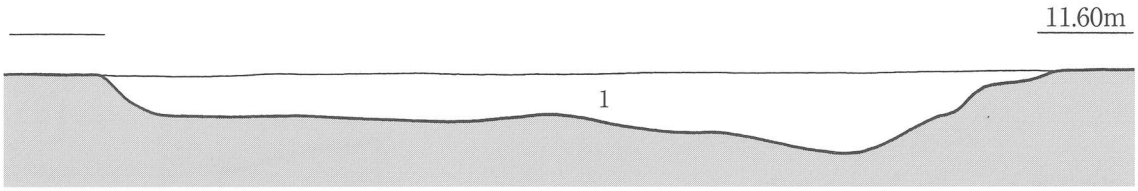
土師器　小皿と羽釜が出土している。

小皿は100と101の２個体を図化した。100は口縁部が２段の横ナデ調整により、底部が指オサエにより仕上げられている。101はひとつまみの横ナデ調整により口縁部を整形し、底部は回転ヘラ切りにより切り離されている。

羽釜は103の１個体である。内外面をハケ調整後、口縁部下に鍔が貼り付けられている。さらに、鍔から口縁部にかけては横ナデ調整により仕上げられている。鍔以下の外面には被熱の痕が認められ、部分的に煤が付着している。

瓦質土器　102は、体部のみの残存だが、その形態から三足鍋と考えられる。内傾する口縁部下に鍔を貼り付け、その貼り付け部から口縁部にかけて横ナデ調整により仕上げられている。また、体部内面はハケ調整、外面は指オサエとナデ調整により仕上げられている。

時期　出土土器から判断して、中世Ⅰ期後半（第18期）と考えられる。



１．灰色細砂～粗砂混じり褐灰色シルト質極細砂　　0　2m

第66図　ＳＤ12

ＳＤ１３

検出状況　Ａ－１区東部で検出した（第65図）。ほぼ東西方向にのびる溝で、西側はＳＤ12に切られ、東端は調査区内で収束している。その位置および規模等の特徴から、当初はＳＤ11と同一の溝であった可能性が考えられる。

形状・規模　検出した長さは2.80mである。横断面は皿形を呈し、最深部における検出面からの深さは８cmである。検出面における幅は、32cmを測る。底部の標高は、ほぼ一定している。

埋没状況　灰黄褐色シルト質極細砂１層からなる。その層相から判断して、人為的に埋められたものと考えられる。

出土遺物　全く出土していない。

時期　土器が出土していないため、時期の特定は困難であるが、後述するＳＤ12との切り合い関係及びＳＤ11との関係から、13世紀以前（第17期）と考えられる。

第３節　Ｃ・Ｄ区の調査

１．基本層序と遺構の検出

当地区は、今回報告する市之郷遺跡のなかで、遺構検出面が一段高くなっている。

基本層序　Ｃ区からＤ－２区にかけては、基本土層（第67図）はほぼ同じである。上から、盛土・旧耕作土層・床土層が認められ、この下面が遺構検出面となっている。遺構検出面の基盤となる層は場所によって異なり、複雑な様相を呈している。Ｄ－２区西側以西については、黒褐色シルト質極細砂からなる顕著な土壌層が基盤となっており、この箇所以東は洪水に起因する砂層を基盤としている。基盤層の下は礫層となっている。

遺構検出　Ｄ－２区中央部から西部にかけては、２面にわたって遺構を検出した。他の箇所については１面である。

出土遺物　遺構を検出するにあたり、多くの土器および石器・鉄製品が出土している。特に土器については、直接遺構に伴うものではないが、当地区における遺構の時期の推測、もしくは土地利用時期の検討材料になるものと考えられる。そこで、主だった遺物について報告する。また、石器・鉄製品についても、主なものについて報告する。

大きくみて、弥生時代前期・弥生時代中期・飛鳥時代～奈良時代・鎌倉時代の土器および石器が出土している。

弥生時代前期　壷・甕・鉢が出土している（図版６）。

壷　広口壷の口縁部（105）と体部から底部（110）が出土している。口縁部内面には3条の断面三角形をなす凸帯が貼り付けられている。また、口縁部内面端部付近には３本の棒状浮文が貼り付けられている。110は、内外面がハケ調整により仕上げられている。

甕　如意形を呈する口縁部（108）と底部片（106）が出土している。108は、摩滅が著しく、調整等は観察できない。底部片の106は、外面がハケ調整、内面がナデ調整により仕上げられている。

鉢　109の１個体が出土している。口縁部はいわゆる瀬戸内型甕の特徴を示し、指オサエとナデ調整により仕上げられている。

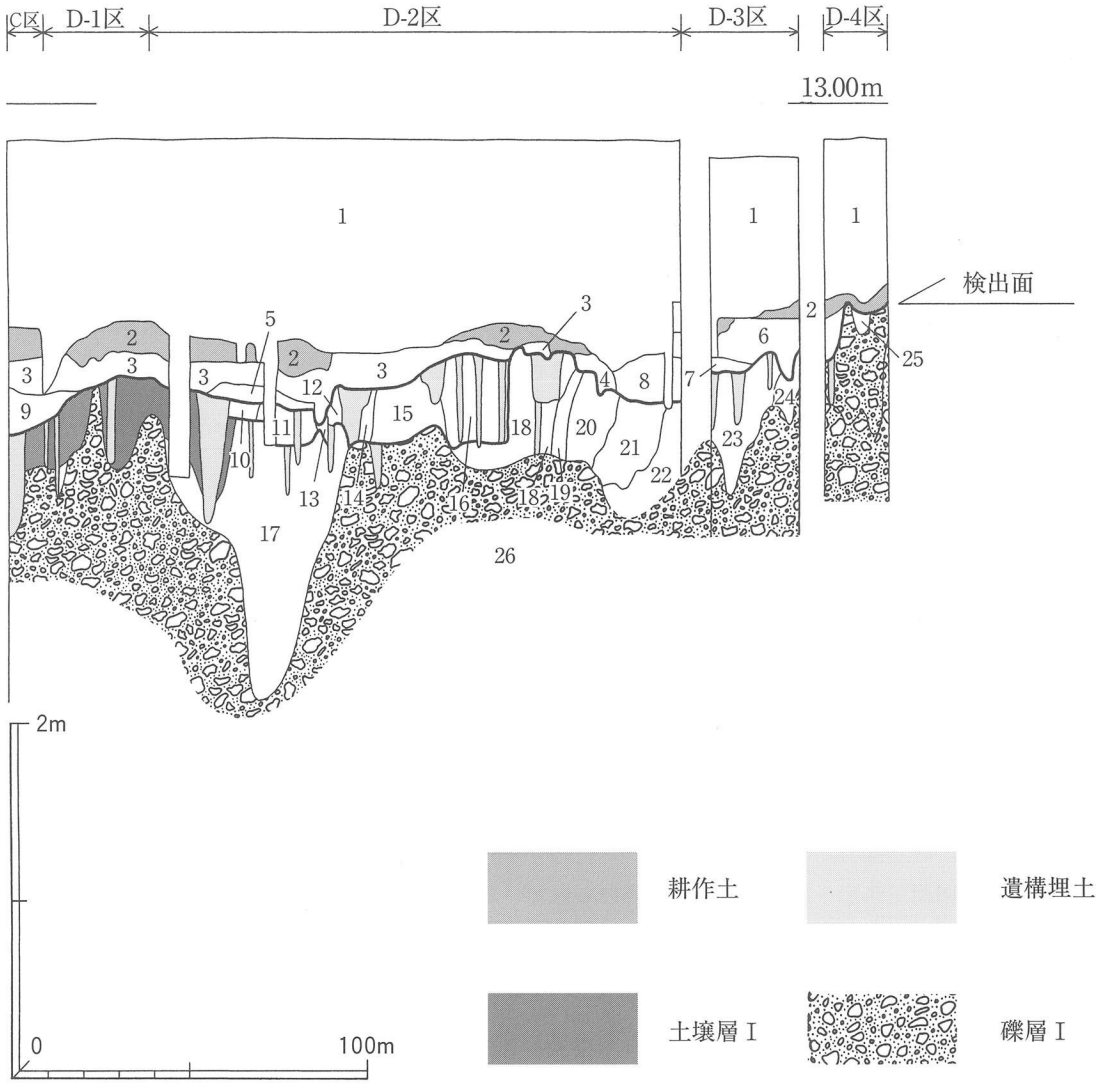
弥生時代中期　壷と甕が出土している（図版６）。中期中葉と後葉の２時期に細分することができる。

壷　広口壷（117）・短頸壷（116）・大型直口壷（111･112）が出土している。

117は、体部最大径部を中心とした個体である。上半部には、上から、10本を１単位とする櫛描直線文を３帯施文後、櫛描波状文間に同じく10本を１単位とする櫛描波状文を２帯施文されている。下半部はハケ調整後ヘラ磨きにより仕上げられている。最大径部を横方向に施された後、底部付近を縦方向に施されている。

116は、体部外面に刻み目文帯が２帯施されている。ただし、２帯の刻み目はその長さが異なる。口縁部は内外面が横ナデ調整により仕上げられている。体部内面は、摩滅のため観察できない。

111と112は、形態的には同様の特徴を有する。ただし、112は口縁部上半に５条の凹線が施されているのに対して、111は複合部に２条の凹線が施されている。また、112の頸部



1．盛土
2．耕作土
3．床土層
4．灰色極細砂
5．床土層
6．暗灰褐色シルト混じり極細砂（土壌層）
7．礫層
8．灰色極細砂
9．暗灰黄色シルト質極細砂
10．黄褐色シルト質極細砂混じり黒褐色シルト質極細砂
11．黒褐色シルト質極細砂（土壌層Ⅰ）
12．灰白色シルト質極細砂
13．灰白色シルト質極細砂（土器含む）
14．灰色極細砂～細砂（土器含む）
15．灰白色砂礫（土器含む）
16．褐灰色シルト質極細砂（土器含む）
17．暗灰黄色シルト質極細砂（洪水砂）
18．明褐色シルト質極細砂
19．灰色細砂～粗砂（洪水砂）
20．明褐色細砂～粗砂（洪水砂）
21．褐色シルト質極細砂～中礫（洪水砂）
22．褐色シルト質極細砂（洪水砂）
23．褐色極細砂～細砂（洪水砂）
24．暗褐色極細砂（洪水砂）
25．黒褐色極細砂混じりシルト（土壌層）
26．砂礫層

第67図　C・D区　基本土層

には刻み目凸帯が貼り付けられている。両個体とも、横ナデ調整により仕上げられている。

甕　口縁部（113）と底部（114·115）が出土している。113は、摩滅が著しいため調整を具体的に観察することは困難である。体部外面はハケ調整、口縁部は横ナデ調整により仕上げられている。底部の115は、外面がヘラ磨き、内面がナデ調整により仕上げられている。また114は、内外面ともナデ調整により仕上げられている。

飛鳥～奈良時代　須恵器を５点（118～122）図化した（図版６）。杯Ｂ蓋と杯からなる。杯Ｂ蓋（118・119）は、内面にかえりを持たないタイプである。杯は、120～122の３個体である。底部はともにヘラにより切り離されている。120は杯Ａの底部と考えられる。

鎌倉時代　土師器の皿（123）と鍋（124）が出土している（図版６）。皿は、口縁部を１段の横ナデ調整により外反させるもので、底部は指オサエにより仕上げられている。鍋は、体部外面が平行叩き、内面がナデ調整、口縁部内外面が横ナデ調整により、仕上げられている。

石器　刃器1点（Ｓ23）が出土している（図版79）。石鎌の可能性も考えられる。弥生時代の遺物であることは明らかであるが、包含層出土土器から判断して、前期もしくは中期のものと考えられる。

鉄製品　釘と用途不明品が出土している（図版80）。釘はＦ８・Ｆ11・Ｆ14の３点出土しているが、いずれも断面方形を呈する和釘である。Ｆ８は6.1cm、Ｆ11は4.2cm、Ｆ14は8.3cm残存する。いずれも中世を中心とした時期のものと考えられる。

用途不明品は、Ｆ10・Ｆ13の２点である。いずれも断面方形の柱状を呈するものである。Ｆ10は、全長9.6cmを測り、断面は8mm×１cmから1cm×1.4cmを測る。Ｆ13は折り曲げられた状態で出土しており、断面形は５mm×６mmを測る。

２．第１面（写真図版25～28）

当面（第68図）で検出した遺構は、弥生時代・古墳時代・飛鳥～奈良時代・中世と、大きく４時期からなる。遺構の種類は、時期ごとに異なる。

当地区は、Ｃ区・Ｄ－１区・Ｄ－２区・Ｄ－３区・Ｄ－４区の５地区からなる。これらの地区ごとの検出遺構および時期は、以下のとおりである。

Ｃ区　飛鳥時代・奈良時代・中世の掘立柱建物跡・溝状遺構が検出されている。古墳時代および弥生時代まで遡る遺構・遺物は認められない。

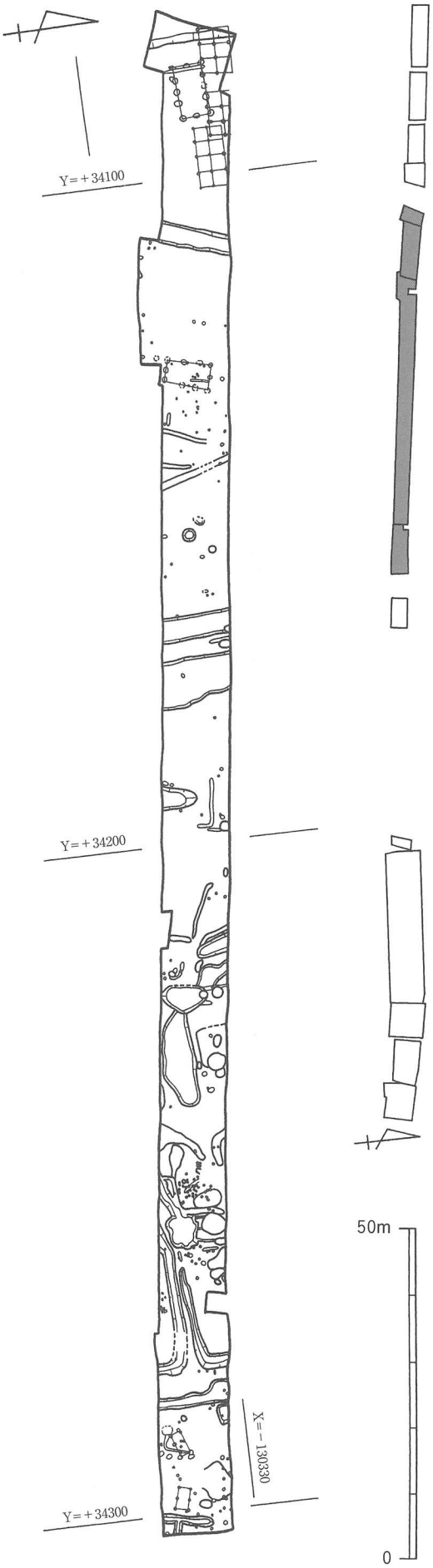
Ｄ－１区　Ｃ区と同様、飛鳥時代以降の遺構に限られ、古墳時代以前の遺構は認められない。

Ｄ－２区　弥生時代の溝状遺構・土坑、古墳時代の竪穴住居跡・溝状遺構、飛鳥～奈良時代の掘立柱建物跡・溝状遺構・瓦溜り・土坑、中世の土坑・溝状遺構・井戸と、各時代の多岐にわたる遺構・遺物が検出されている。

Ｄ－３区　弥生時代の竪穴住居跡、古墳時代の竪穴住居跡、飛鳥～奈良時代の掘立柱建物跡・溝状遺構、中世の掘立柱建物跡・溝状遺構と、Ｄ－２区同様、各時代の遺構・遺物が検出されている。

Ｄ－４区　柱穴・土坑・溝状遺構が検出されたが、時期の明らかにできる遺構・遺物は検出されていない（第69図・写真図版28）。

小　結　第１面で検出された遺構は、飛鳥時代以降が主である。弥生時代・古墳時代の遺構はわずかで、散漫な分布状況である。



第68図　Ｃ・Ｄ区　第１面

Ⅰ：弥生時代

検出した遺構は、竪穴住居跡・柱穴・土坑・溝からなる（第70図）。地区ごとの、検出遺構は以下の通りである。

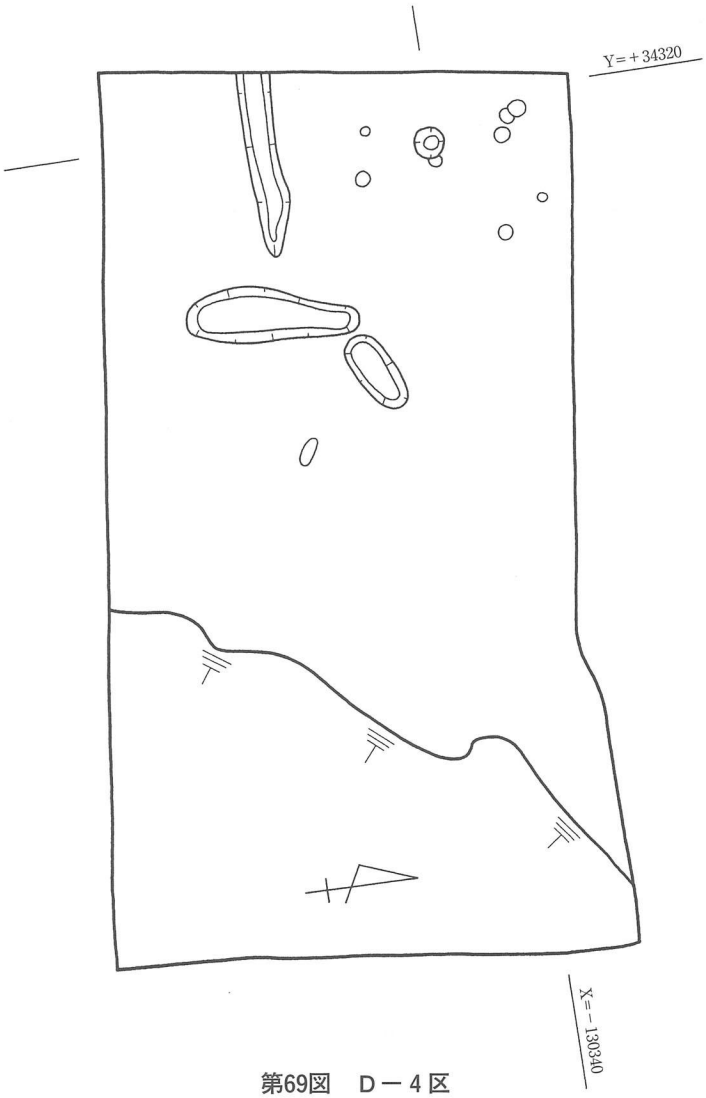
C区　当該期の遺構は全く検出されていない。

D－1区　C区同様、当該期の遺構は全く検出されていない。

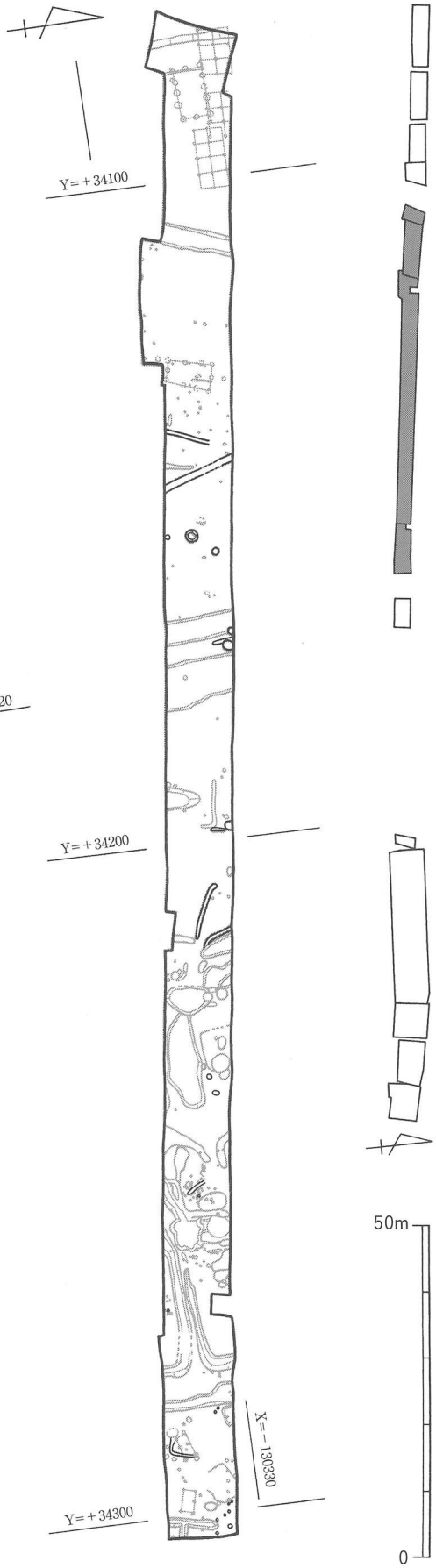
D－2区　柱穴・土坑・溝状遺構が検出されている。検出した遺構の数そのものが少ないことから、当地区内に分散する傾向にあり、遺構の集中は認められない（第71図・第72図）。

D－3区　竪穴住居跡1棟の他、土坑・柱穴を検出したが、その数はわずかである（第71図）。

D－4区　当該期の遺構・遺物は全く検出されなかった。

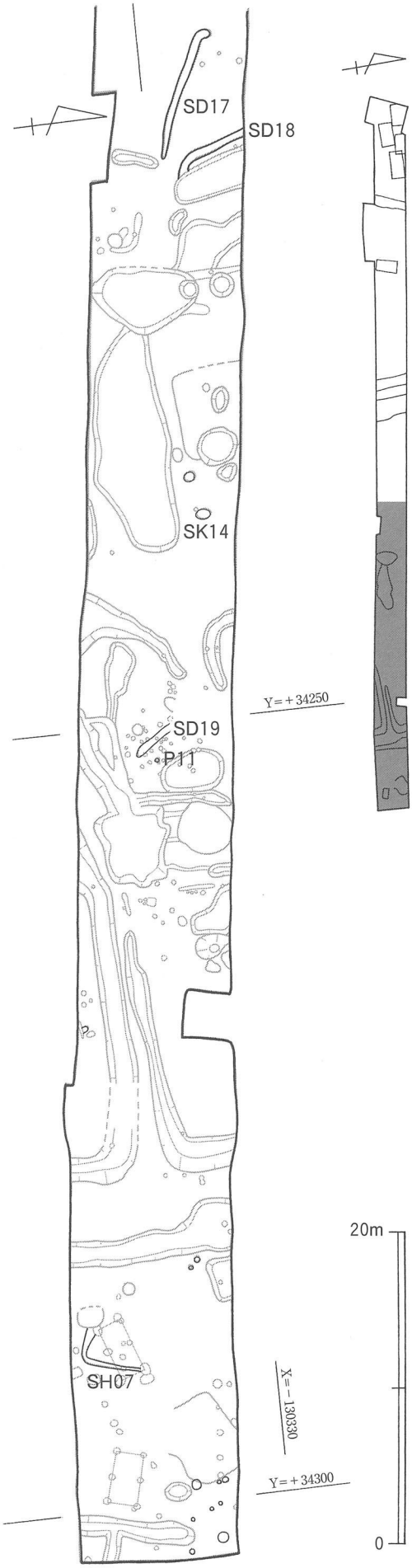


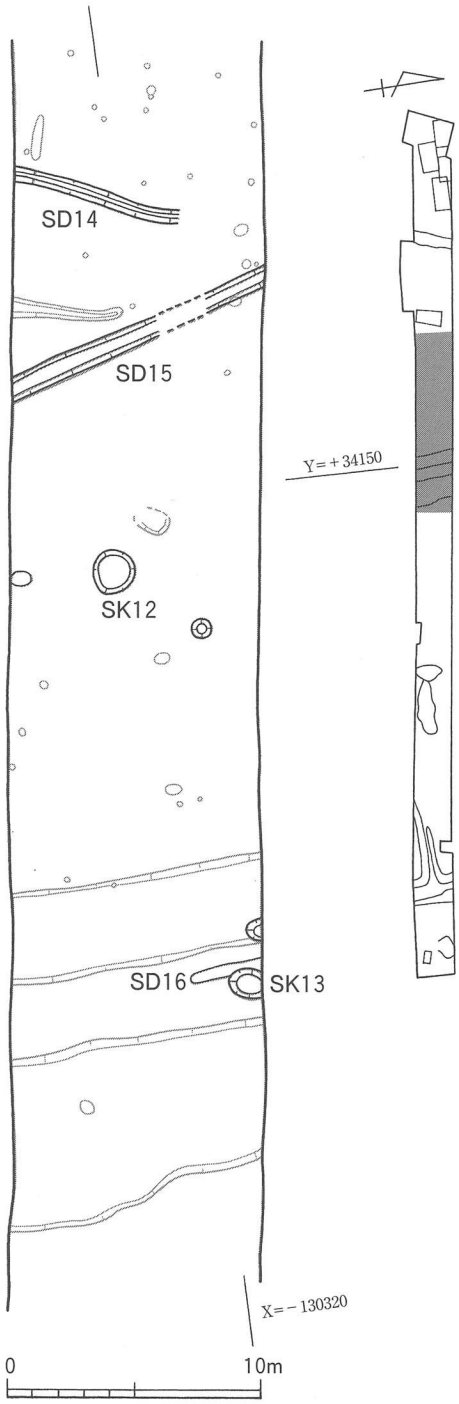
第69図　D－4区



第70図　C・D区第1面　弥生時代

第１面





第72図　C・D区第１面　弥生時代（西部）

第71図　C・D区第１面　弥生時代（東半部）

（1）竪穴住居跡

ＳＨ０７（写真図版29）

検出状況　Ｄ－３区東部で検出した（第71図）。平面方形を呈する住居跡であるが、大半は攪乱を受けており、検出できたのは、南東隅に限られる。さらに、飛鳥～奈良時代のＳＢ08と平面的に重複し、その柱穴に切られている。

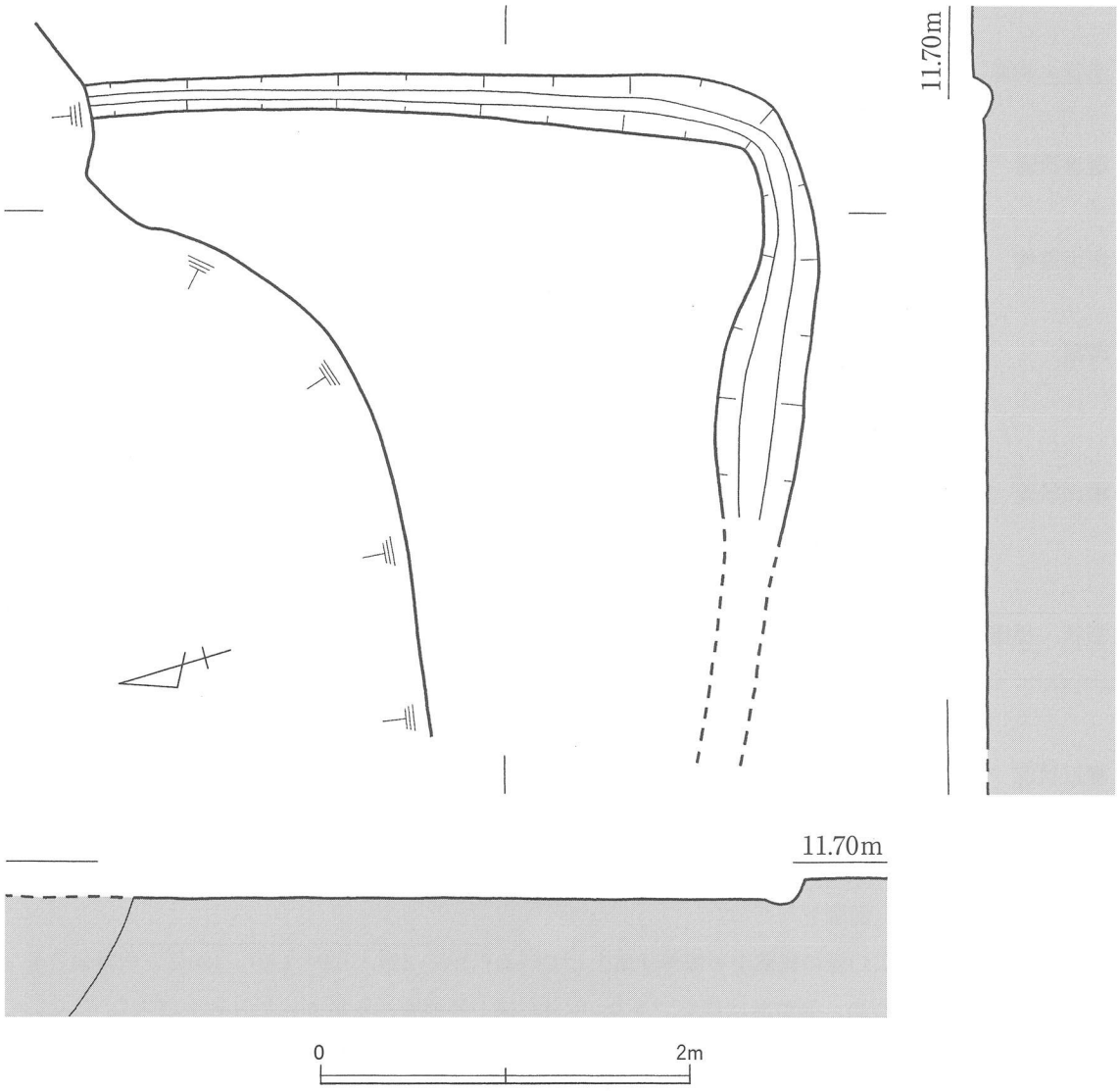
形状・規模　平面形は方形を呈する（第73図）。北東－南西方向に主軸をとり、南東辺で3.90m、南東辺で2.30mを測る。床面はほぼ平坦で、検出した床面積は5.10㎡である。中央部における検出面からの深さは８㎝と浅く、その標高は11.52mである。

付属施設　周壁溝を検出したのみで、主柱穴等は検出されなかった。周壁溝は住居跡プランに沿って鍵形に検出された。周壁溝の横断面はＵ字形をなし、床面における幅20㎝、床面からの深さ４㎝を測る。

出土遺物　壷・鉢・高坏が出土している。

壷は広口壷の底部、鉢と高坏は脚部が出土しているが、いずれも小片のため図化できなかった。いずれも弥生時代中期の特徴を有する土器である。

時期　住居跡の平面形及び出土土器から判断して、弥生時代中期後半（第３期）と考えられる。



第73図　ＳＨ07

（２）柱穴

当該期の柱穴がいくつか検出されているが、これらの柱穴から建物を復元することはできなかった。しかし、これらの柱穴のなかで、Ｐ11からは、良好な資料が得られているので、出土遺物を中心に報告する。

Ｐ１１

検出状況　Ｄ－２区東部で検出した（第71図）。ＳＤ19の東側に位置する。

出土遺物　脚部が１点（125）出土している（図版７）。脚部外面を縦方向のヘラ磨き、内面をナデ調整により仕上げ、その後脚端部が強い横ナデ調整により仕上げられている。体部は内外面ともナデ調整により仕上げられている。台付鉢の脚部と考えられる。

時期　弥生時代中期（第３期）と考えられる。

（３）土坑

３基の土坑（ＳＫ12～ＳＫ14）が検出されている。

ＳＫ１２

検出状況　Ｄ－２区西部で検出した（第72図）。ＳＤ15の東側に位置する。他の遺構との切り合い関係は認められず、完存する。

形状・規模　平面形はほぼ円形を呈し、その径は1.67ｍを測る。横断面は逆台形をなし、最深部における検出面からの深さは19㎝を測る。

埋没状況　埋土は、褐色シルト質極細砂混じり灰色シルト質極細砂１層からなる。埋土中に土器片を含み、人為的に埋められたものと考えられる。

出土遺物　広口壷と直口壷の口縁部片が出土しているが、いずれも小片のため図化できなかった。弥生時代中期の特徴を有する。

時期　出土土器から、弥生時代中期後半（第３期）と判断される。

ＳＫ１３（写真図版29）

検出状況　Ｄ－２区西部で検出した（第72図）。ＳＤ16と切り合い関係にあり、ＳＤ16を切っている。しかし、当土坑の北側は調査区外まで拡がっており、全体を検出することはできなかった。ＳＫ12の東側に位置する。

形状・規模　平面形は楕円形を呈し、長軸方向で1.52ｍ、その直交方向で1.22ｍを測る。横断面は皿形を呈し、最深部における検出面からの深さはわずか11㎝で、平面規模から判断して、遺構というより落ち込みに近いものと考えられる。

埋没状況　埋土は、灰色シルト質極細砂１層からなる。埋土中に土器片を多量に含み、凹地に廃棄された土器を覆うように堆積したものと考えられる。

出土遺物　土器が廃棄された状態で出土している（写真図版29）。壷・甕・高坏の各器種が出土している（図版７）。

壷は広口壷の底部が４個体分出土している（126・127・129・130）。126は、内外面とも摩滅のため、調整痕は観察できない。127は、外面がヘラ磨きにより仕上げられている。129は、体部内外面をハケ調整後、底部付近を除く外面がヘラ磨きにより仕上げられてい

る。胎土中には砂粒が多く含まれ、前期に近い特徴を有している。130は、内面がハケ調整、外面がヘラ磨きにより仕上げられている。底部は、指オサエとナデ調整により仕上げられている。

甕は、128の１個体のみである。大型の甕で、口縁端部はつまみ上げられていない。口縁部は、内外面が横ナデ調整により仕上げられている。体部の調整は、内外面とも摩滅が著しく、観察できない。

高坏は、坏部片が出土しているが、小片のため図化できなかった。

時期　出土土器から、弥生時代中期中葉（第２期）と判断される。

ＳＫ１４（写真図版30）

検出状況　Ｄ－２区東部で検出した（第71図）。他の遺構との切り合い関係は認められず、完存する。ＳＤ19の西側に位置する。

形状・規模　平面形は楕円形を呈し、長軸方向で89㎝、その直交方向で68㎝を測る。横断面は逆台形をなし、最深部における検出面からの深さは19㎝を測る。

埋没状況　埋土は、黒褐色シルト質極細砂１層からなる。

出土遺物　台付鉢の底部から体部にかけての小片が出土しているが、図化できなかった。弥生時代中期の特徴を有するものである。

時期　出土土器から、弥生時代中期後半（第３期）と判断される。

（４）溝

ＳＤ１４（写真図版30）

検出状況　Ｄ－２区西部で検出した（第72図）。北東－南西方向に直線的にのびる溝で、南西側は調査区外までのびている。北東側は攪乱を受けている。他の遺構との切り合い関係は認めらない。ＳＤ15の西側に位置する。

形状・規模　検出した長さは6.78ｍを測る。横断面は皿形を呈し、最深部における検出面からの深さは14㎝を測る。検出面における幅は52㎝を測り、底部のレベルは北東部で11.10ｍ、南西部で11.21ｍと、わずかに北東側へ傾斜している。

埋没状況　埋土は、上から灰色シルト混じり灰褐色シルト質極細砂、褐灰色シルト質極細砂の２層からなる。層相から判断して、上層については人為的に埋められたものと判断される。

出土遺物　壷と甕が出土している。壷は広口壷の頸部～体部片と体部片が、甕は体部片が出土している。いずれも小片のため図化できなかったが、特に広口壷の胎土は、前期末の特徴を示している。

時期　出土土器から、弥生時代前期末～中期初頭（第１期）と判断される。

ＳＤ１５（写真図版30）

検出状況　Ｄ－２区西部で検出した（第72図）。北西－南東方向に直線的にのびる溝で、両端とも調査区外までのびている。他の遺構との切り合い関係は認めらない。ＳＤ14の東側に位置する。

形状・規模　検出した長さは11.00ｍを測る。横断面は逆台形を呈し、最深部における検出面からの深さは16cmを測る。検出面における幅は84cmを測り、底部のレベルはほぼ一定している。

埋没状況　埋土は、褐色シルト質極細砂混じり暗灰色シルト質極細砂１層からなり、層相から判断して、人為的に埋められたものと判断される。

出土遺物　甕の体部片と底部片が出土している。小片のため図化できなかったが、中期の特徴を示している。

時期　出土土器から、弥生時代中期と判断される。

ＳＤ１６

検出状況　Ｄ－２区西部で検出した（第72図）。ほぼ南北方向に直線的にのびる溝で、北端は調査区外までのびている。南端は調査区内で収束している。ＳＫ13と切り合い関係にあり、ＳＫ13に切られている。

形状・規模　検出した長さは2.93ｍを測る。横断面は深い皿形を呈し、最深部における検出面からの深さは13cmを測る。検出面における幅は44cmを測り、底部のレベルはほぼ一定している。

埋没状況　埋土は、暗褐色シルト混じり暗灰色シルト質極細砂１層からなり、層相から判断して、人為的に埋められたものと判断される。

出土遺物　広口壷の頸部と体部片、直口壷の体部～底部片が出土している。小片のため図化できなかったが、広口壷の頸部には断面三角形を呈する突帯が貼り付けられている。

時期　出土土器から、弥生時代前期末～中期初頭（第１期）と判断される。

ＳＤ１７

検出状況　Ｄ－２区中央部で検出した（第71図）。北西－南東方向に直線的にのびる溝であるが、北西端は北方向にわずかに屈曲している。両端とも調査区内で収束している。他の遺構との切り合い関係は認められない。ＳＤ18の南西側に位置する。

形状・規模　検出した長さは8.98ｍを測る。横断面はＵ字形を呈し、最深部における検出面からの深さは24cmを測る。検出面における幅は43cmを測る。底部の標高は、北西端が11.40ｍ、南東端が11.22ｍと、北西側へ傾斜している。

埋没状況　埋土は、上から褐色シルト質極細砂、暗灰色細砂～粗砂の２層からなる。層相から判断して、上層については人為的に埋められたものと判断される。

出土遺物　広口壷の体部片が出土している。

時期　出土土器から、弥生時代中期と判断される。

ＳＤ１８（写真図版30）

検出状況　Ｄ－２区中央部で検出した（第71図）。ほぼ南北方向に直線的にのびる溝であるが、南側はわずかに弧状を呈している。北端は調査区外までのび、南側は古墳時代の溝ＳＤ20に切られている。ＳＤ17の北東側に位置する。

形状・規模　検出した長さは4.92ｍを測る。横断面はＵ字形をなし、最深部における検出面からの深さは16cmを測る。検出面における幅は42cmを測る。底部のレベルはほぼ一定している。

埋没状況　埋土は、灰色シルト混じり細砂～極細砂１層からなる。層相から判断して、人為的に埋められたものと判断される。

出土遺物　広口壷の体部片が出土している。小片のため図化できなかった。

時期　出土土器から、弥生時代中期と考えられる。

ＳＤ１９

検出状況　Ｄ－２区東部で検出した（第71図）。北西－南東方向に直線的にのびる溝で、北端は攪乱を受け、南端は調査区内で収束している。一部の柱穴に切られている以外は、他の遺構との明確な切り合い関係は認められない。Ｐ11の西側に位置する。

形状・規模　検出した長さは2.73ｍを測る。横断面は浅いＵ字形を呈し、最深部における検出面からの深さは９㎝を測る。検出面における幅は42㎝を測る。底部のレベルはほぼ一定している。

埋没状況　埋土は、灰色シルト混じり黒褐色シルト質極細砂１層からなる。層相から判断して、人為的に埋められたものと判断される。

出土遺物　広口壷の体部片が出土している。小片のため図化できなかったが、胎土中には砂粒が多く含まれ、前期の特徴を示している。

時期　出土土器から、弥生時代前期（第１期）と判断される。

Ⅱ：古墳時代

竪穴住居跡２棟と溝１条を検出した。

（１）竪穴住居跡

ＳＨ０８（写真図版31）

検出状況　Ｄ－２区東半部で検出した（第74図）。平面方形を呈する住居跡であるが、北側は調査区外まで拡がっている。また、一部は中世の土坑ＳＫ26に切られている。このため、住居跡全体を検出することはできなかった。ＳＤ20の東側に位置する。

形状・規模　平面形は方形を呈する（第75図）。ほぼ南北方向に主軸をとり、全体を検出できた南辺で5.28ｍを測る。また、東辺で3.50ｍ、西辺で5.60ｍ残存する。床面はほぼ平坦で、検出した床面積は20.68㎡である。中央部における検出面からの深さは15㎝で、その標高は11.32ｍである。

付属施設　主柱穴と土坑を検出した。

主柱穴　Ｐ１の１穴のみである。床面における径は45㎝、床面からの深さは20㎝である。

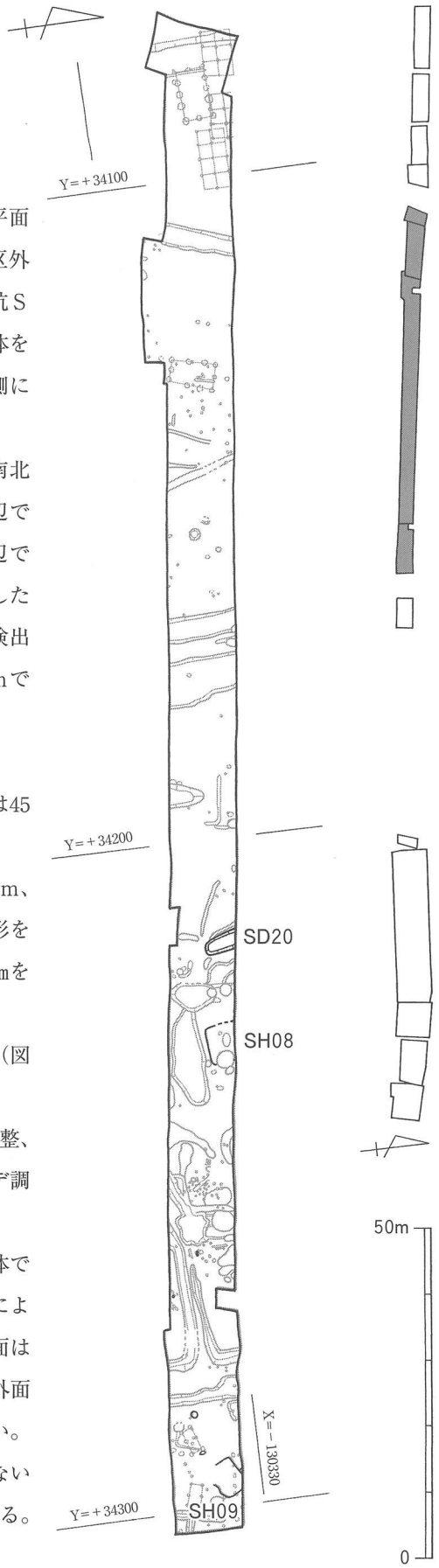
土坑　平面形は楕円形を呈する。長軸方向で1.70ｍ、その直交方向で1.10ｍを測る。横断面は皿形を呈し、最深部における床面からの深さは９㎝を測る。

出土遺物　高坏が２個体（135・136）出土している（図版７）。

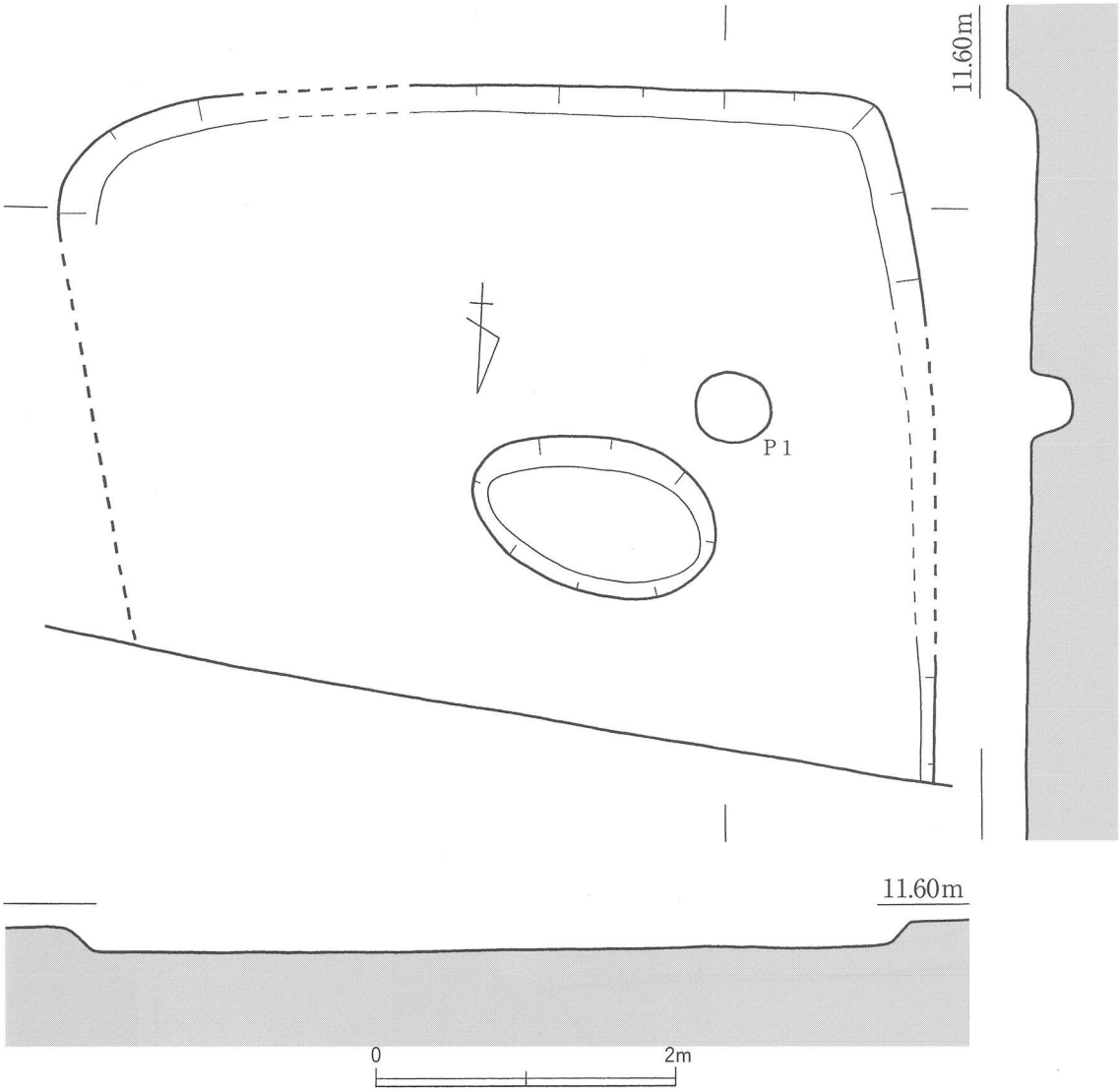
135は、摩滅が著しい。坏部外面はナデ調整、内面はヘラ磨き、口縁部は内外面とも横ナデ調整により仕上げられている。

136は、坏部を図上で完形に復元できる個体である。内面は、ハケ調整後受部がヘラ磨きにより仕上げられている。この後、口縁部内外面は横ナデ調整により仕上げられている。坏部外面の調整については、摩滅のため観察できない。

時期　出土土器の中に須恵器の出土が認められないことから、古墳時代中期（第６期）と考えられる。



第74図　Ｃ・Ｄ区第１面　古墳時代



第75図　ＳＨ08

ＳＨ０９（写真図版31）

検出状況　Ｄ－３区東端部で検出した（第74図）。平面長方形を呈する住居跡であるが、北隅は調査区外まで拡がっている。また、南隅は攪乱を受けている。このため、住居跡全体を検出することはできなかった。他の遺構との切り合い関係は認められなかった。

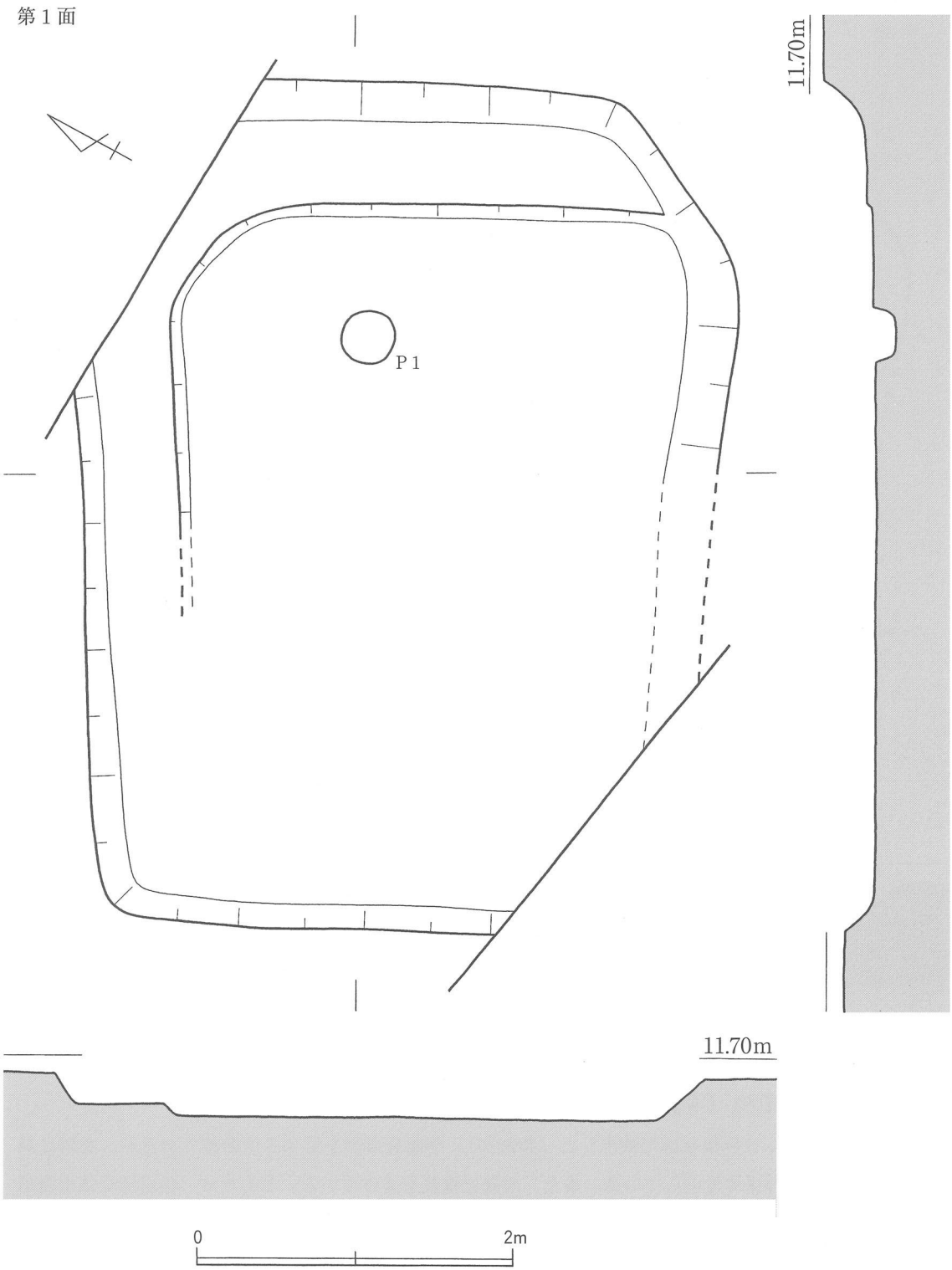
形状・規模　平面形は長方形を呈し、北東－南西方向に主軸をとる（第76図）。北西辺・南西辺・北東辺は直線的であるが、南東隅から南東辺にかけてはやや歪んでいる。全体を検出できた辺はないが、長軸方向で5.35m、その直交方向で4.00mを測る。床面はほぼ平坦で、検出面から床面までの深さは23cmを測り、床面における標高は11.38mである。

付属施設　主柱穴と高床部を検出した。カマドおよびその痕跡は確認できなかった。

主柱穴　Ｐ１のみである。床面における規模は径40cmを測り、床面からの深さは15cmである。

高床部　北東辺から北西辺に平行するように鍵形に検出された。高床部の幅は49cmを測り、住居跡床面との比高は３cmを測る。地山を削り込んで造られている。

出土遺物　須恵器と土師器が出土している。



第76図　ＳＨ09

須恵器　杯身の口縁部・底部と甕の体部片が出土しているが、小片のため図化できなかった。

土師器　甕と甑が出土している。

甕は２個体（131・132）図化した（図版７）。両個体については、別の土器として図化したが、胎土・色調等の特徴から、同一個体の可能性が高いものと考えられる。体部内面はヘラ削り、外面はナデ調整により、口縁部内外面は横ナデ調整により仕上げられている。

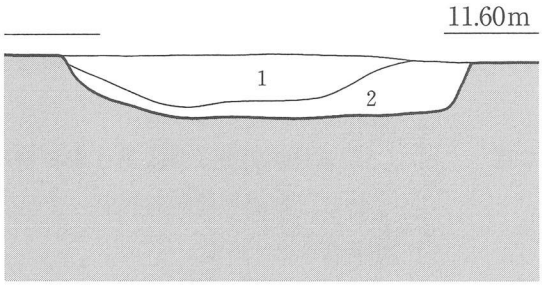
甑は把手が出土しているが、図化できなかった。

時期　図化できなかったが、土師器の特徴から、古墳時代中期（第７期）と考えられる。

（2）溝

ＳＤ２０

検出状況　Ｄ－２区中央部で検出した（第74図）。南北方向にほぼ直線的にのびる溝で、南端は調査区内で収束し、北側は調査区外までのびている。弥生時代の溝ＳＤ18と平面的に重複し、ＳＤ18を切っている。ＳＨ08の西側に位置する。



1．褐色シルト質極細砂混じり
黒褐色シルト質極細砂～細砂
（埋め土）
2．小礫混じり褐色シルト質極細砂

0　2m

第77図　ＳＤ20

形状・規模　検出した長さは11.18mを測る。横断面は逆台形を呈し、最深部における検出面からの深さは41cmを測る。検出面における幅は2.20mを測り、底部のレベルは北端部で11.13m、南端部で11.00mとわずかに南側へ傾斜している。

埋没状況　埋土は２層からなる（第77図）。上層は、人為的に埋められたものと判断される。

出土遺物　須恵器と土師器が出土している（図版７）。

須恵器　壷と甕が出土しているが、図化できたのは133の壷のみである。体部のみ残存し、内外面とも回転ナデ調整により仕上げられている。甕は、体部片が出土している。

土師器　高坏と甑が出土している。図化できたのは134の高坏のみである。坏部下半から脚部にかけて残存し、坏部は椀形を呈するものと考えられる。全体的に摩滅が著しく、調整痕を観察することはできない。わずかに、脚部外面にハケ目の痕跡が認められる。

甑は、把手が出土している。

時期　出土土器および、ＳＨ08と方向性を同じくすることから、古墳時代中期（Ⅱ期：第６期）と考えられる。

Ⅲ：飛鳥～奈良時代

掘立柱建物・柱穴・土坑・溝を検出した。このほか、瓦溜りを検出した。各地区における検出状況は、以下の通りである（第79図）。

C区　掘立柱建物跡１棟と溝１条が検出されている。掘立柱建物跡はD－１区にかけて検出されている。

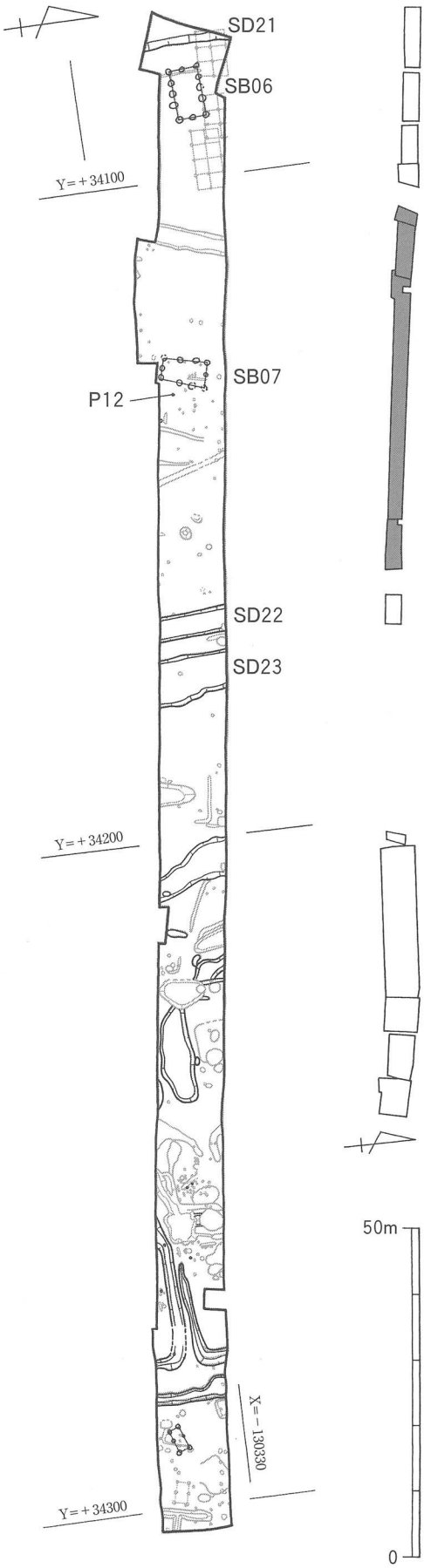
D－１区　先述したC区からの掘立柱建物跡１棟のみが検出されている。

D－２区　溝状遺構・土坑・瓦溜りが検出されており、今回の報告のなかで当該期の遺構・遺物が最も多く検出されている。特に、当地区の東部を中心に、市之郷廃寺に伴うと考えられる瓦が多量に出土している（第78図）。平行する２条の溝（ＳＤ22・ＳＤ23）及び瓦溜りと合わせて、市之郷廃寺を検討するにあたって、貴重な発見と考えられる。

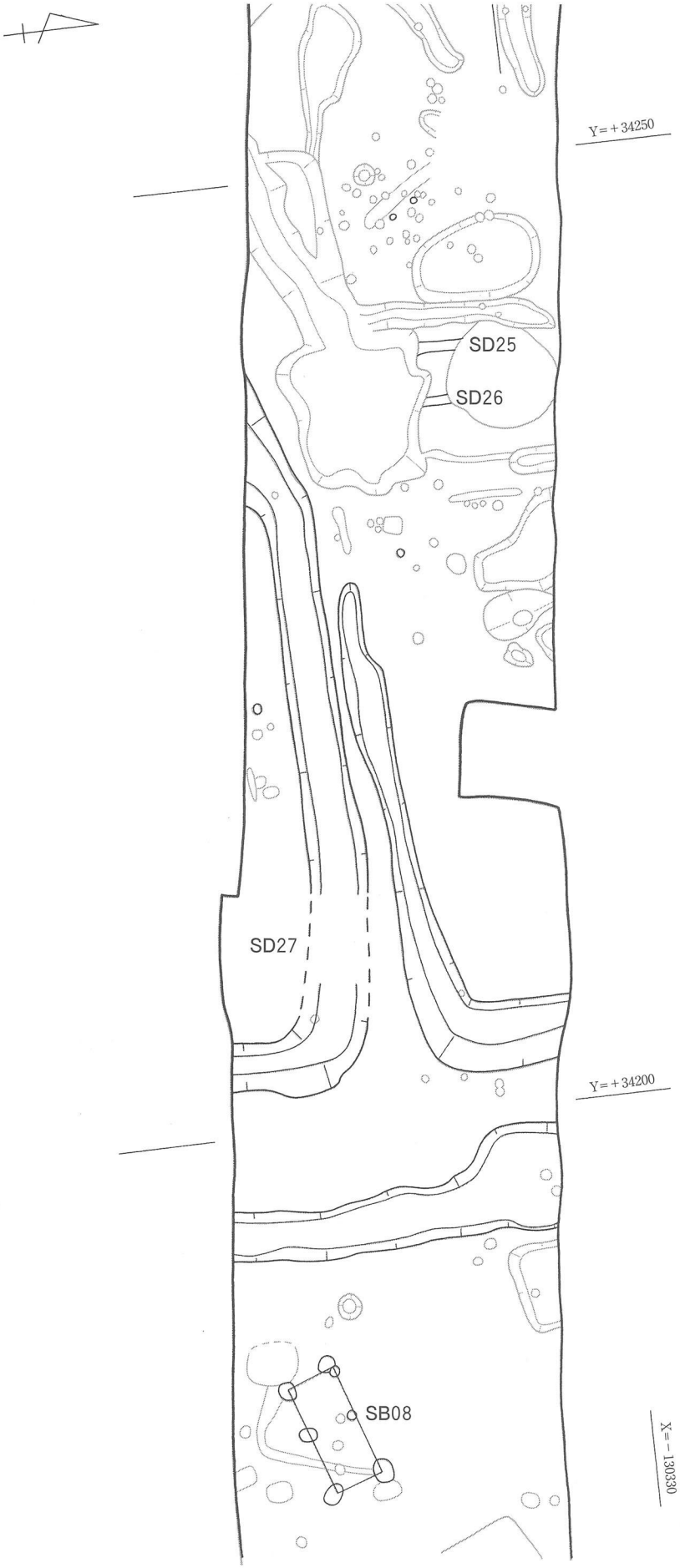
D－３区　掘立柱建物跡と溝状遺構が検出されている。

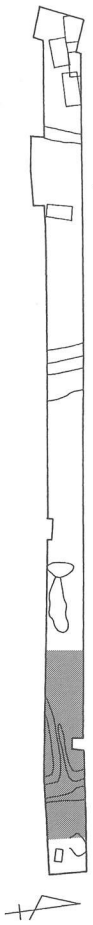
D－４区　当該期の遺構・遺物は全く検出されなかった。

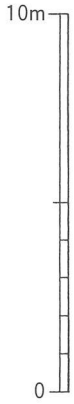
第78図　瓦溜り検出状況



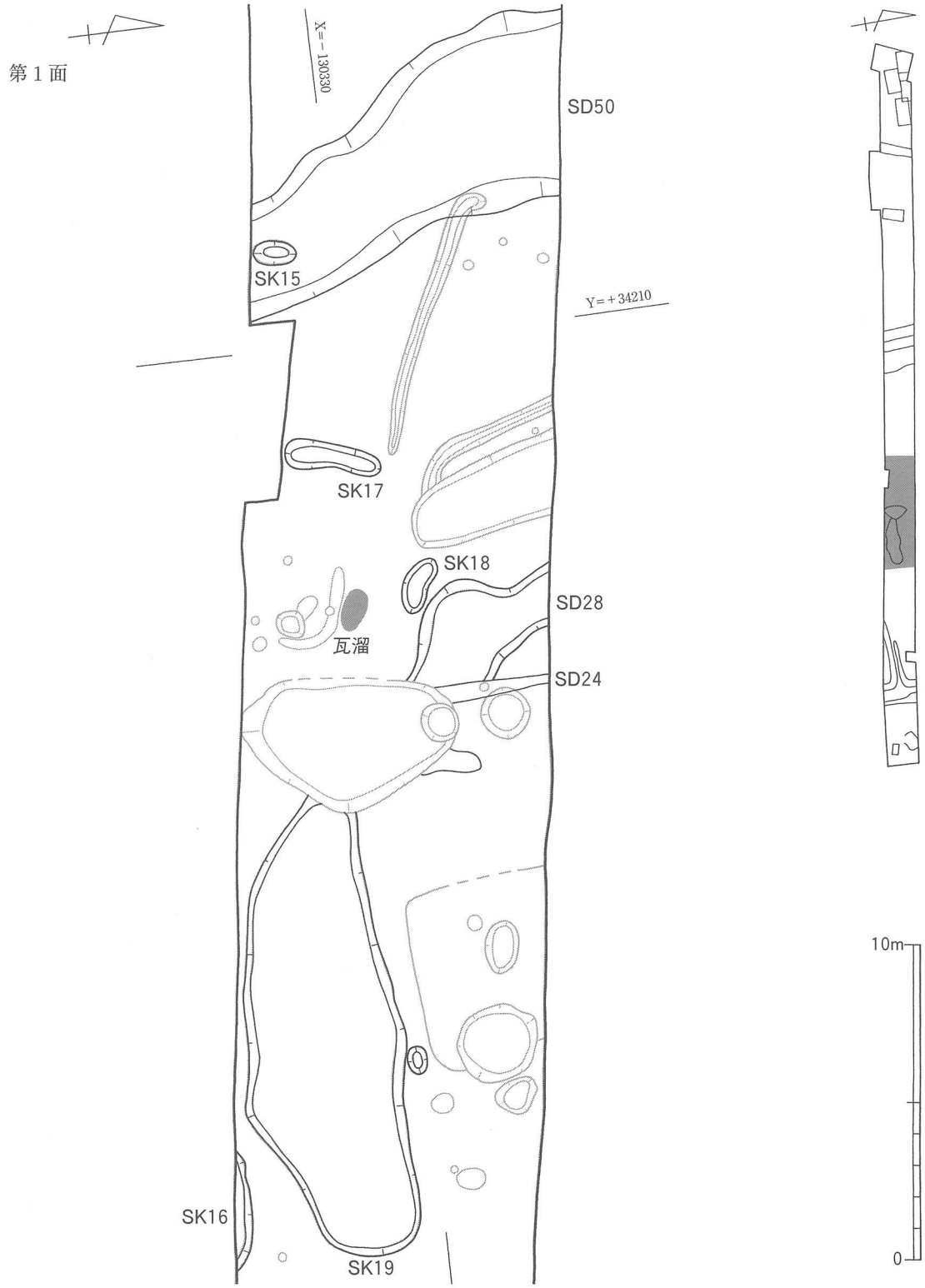
第79図　C・D区第１面　飛鳥～奈良時代







第80図　第１面　飛鳥～奈良時代（東部）



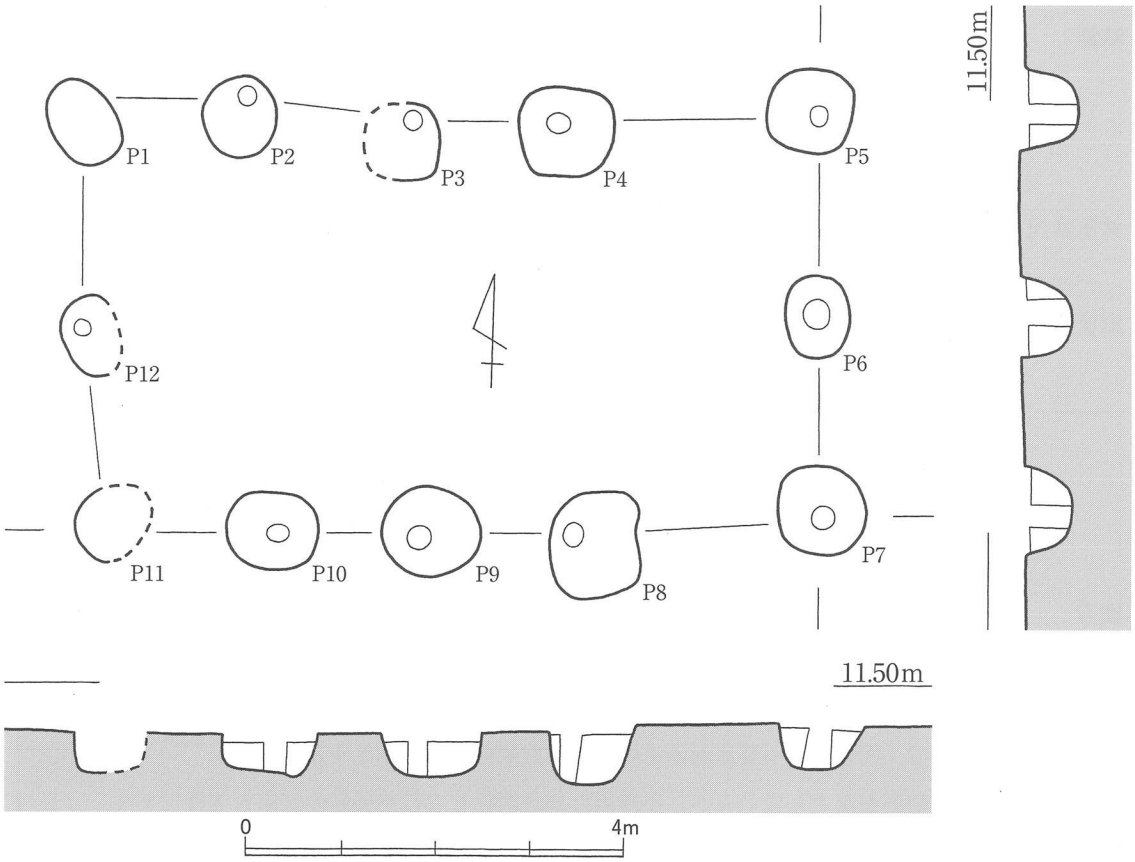
第81図　第１面　飛鳥～奈良時代（中央部）

（１）掘立柱建物跡

ＳＢ０６（写真図版32）

検出状況　Ｃ区からＤ－１区にかけて検出した（第79図）。ＳＤ21の東側に位置する。他の遺構との切り合い関係は認められず、建物全体を検出することができた。

形状・規模　梁行２間、桁行４間からなる側柱建物である（第82図）。平面形はやや台形傾向にあるが、梁行中央部の柱（Ｐ６・Ｐ12）を結ぶラインを基準とした棟軸方向は、N87°Ｅを示す。北桁行方向・東梁行方向・南桁行方向・西梁行方向の規模は、それぞれ7.87m・4.33m・7.60m・4.40mを測り、北桁行方向と東梁行方向を基準とした面積は34.07㎡である。



第82図　ＳＢ06

なお、柱穴間の距離および柱間の平均値は第12表のとおりである。

柱穴　掘り形の平面形は、隅丸方形もしくはそれに近い形態なし、その規模は60cm×84cm～1.06m×93cm、深さは30cm～36cmを測る。また、Ｐ１・Ｐ11を除いては柱痕を確認することができ、その径は18cm～28cmを測る。各柱穴の規模については、第13表のとおりである。

埋土は、灰色シルト質極細砂を中心とした灰色系を主体とする。

出土遺物　土師器と須恵器が出土している（図版８）。土師器については、小片のみからなり、器種を特定できるものは出土していない。

須恵器は、甕(138)が出土している。内外面とも回転ナデ調整により仕上げられている。

第12表　ＳＢ06建物規模一覧表

	柱穴間	柱穴間距離	側面距離	柱穴間平均距離
北桁行	Ｐ１－Ｐ２	1.80		
	Ｐ２－Ｐ３	1.80		
	Ｐ３－Ｐ４	1.55		
	Ｐ４－Ｐ５	2.72	7.87	1.96
東梁行	Ｐ５－Ｐ６	2.10		
	Ｐ６－Ｐ７	2.23	4.33	2.16
南桁行	Ｐ７－Ｐ８	2.65		
	Ｐ８－Ｐ９	1.65		
	Ｐ９－Ｐ10	1.50		
	Ｐ10－Ｐ11	1.80	7.60	1.90
西梁行	Ｐ11－Ｐ12	2.15	4.40	2.20
	Ｐ12－Ｐ１	2.25		

※単位はm

第13表　ＳＢ06柱穴規模一覧表

柱穴No.	平面規模	柱痕径	深さ
Ｐ１	70×95		34
Ｐ２	75×90	19	40
Ｐ３	80×80	20	37
Ｐ４	100×93	25	36
Ｐ５	90×90	19	60
Ｐ６	68×85	28	55
Ｐ７	92×93	24	46
Ｐ８	93×112	22	55
Ｐ９	93×106	25	34
Ｐ１０	95×80	24	45
Ｐ１１	72×85		44
Ｐ１２	60×84	18	30

※単位はcm

時期　出土土器の特徴および、ＳＤ22・ＳＤ23との方向性の一致から、飛鳥～白鳳時代（第13期）と考えられる。

ＳＢ０７（写真図版32）

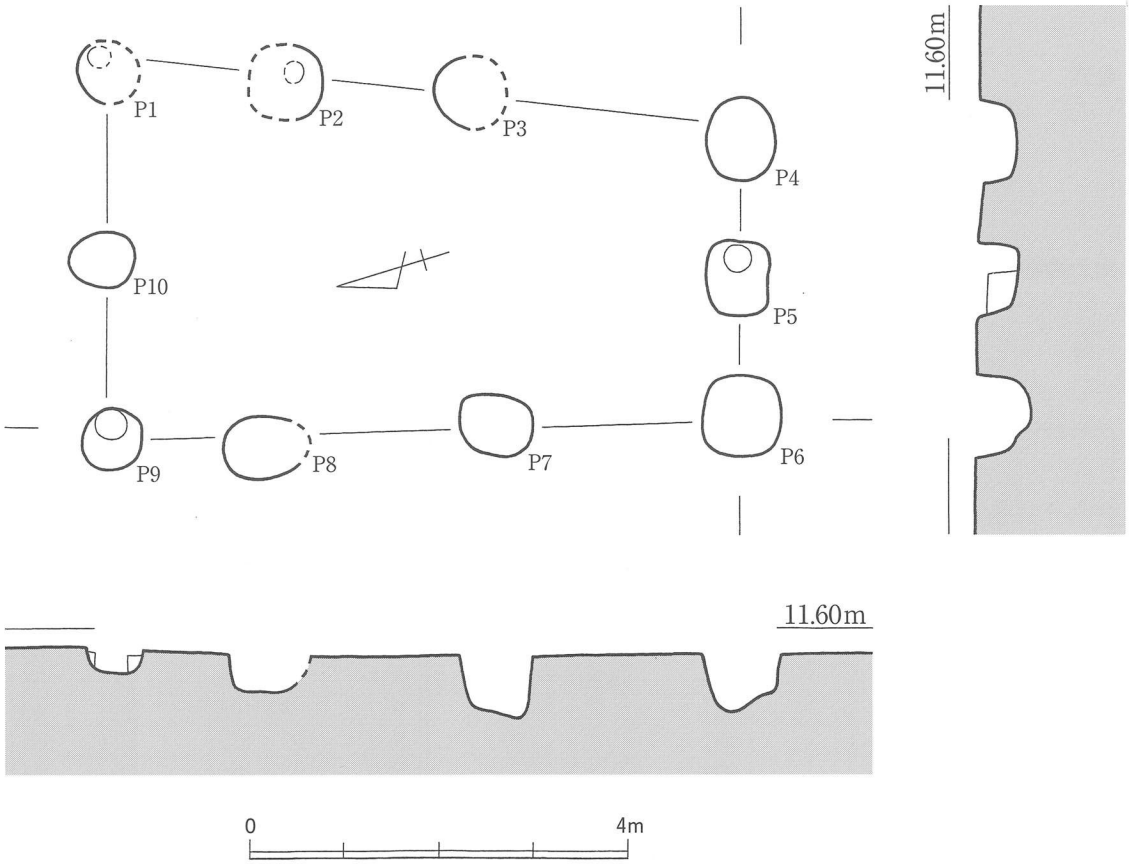
検出状況　Ｄ－２区東部で検出した（第79図）。ＳＢ06の東側に位置する。他の遺構との切り合い関係は認められず、建物全体を検出することができた。

形状・規模　梁行２間、桁行３間からなる側柱建物である（第83図）。北梁行と南梁行の規模に差が認められ、平面形は台形を呈する。梁行中央部の柱（Ｐ５・Ｐ10）を結ぶラインを基準とした棟軸方向は、Ｎ17°30′Ｅを示す。北梁行方向・東桁行方向・南梁行方向・西桁行方向の規模は、6.75m・3.00m・6.80m・3.90mを測り、東桁行方向と南北梁行方向の平均値を基準とした平面積は23.28㎡である。柱穴間の距離および柱間の平均値は第14表のとおりである。

柱穴　掘り形の平面形は隅丸方形もしくはそれに近い形態なし、その規模は62cm×67cm～83cm×85cm、深さ24cm～60cmを測る。また、Ｐ１・Ｐ２・Ｐ５・Ｐ９では柱痕を確認することができ、その径は21cm～32cmを測る。各柱穴の規模については、第15表のとおりである。埋土は、灰色シルト質極細砂を中心とした灰色系を主体とする。

出土遺物　土師器が出土しているが、小片のため、図化どころか器種の特定も困難である。

時期　出土土器から時期を特定することは困難で、柱穴掘り形の平面形から判断して、奈良時代を中心とした時期と考えられる。



第83図　ＳＢ07

第14表　ＳＢ07建物規模一覧表

	柱穴間	柱穴間距離	側面距離	柱穴間平均距離
北桁行	Ｐ１－Ｐ２	1.85		
	Ｐ２－Ｐ３	2.00		
	Ｐ３－Ｐ４	2.90	6.75	2.25
東梁行	Ｐ４－Ｐ５	1.50		
	Ｐ５－Ｐ６	1.50	3.00	1.50
南桁行	Ｐ６－Ｐ７	2.65		
	Ｐ７－Ｐ８	2.50		
	Ｐ８－Ｐ９	1.65	6.80	2.26
西梁行	Ｐ９－Ｐ10	1.90		
	Ｐ10－Ｐ１	2.00	3.90	1.95

※単位はｍ

第15表　ＳＢ07柱穴規模一覧表

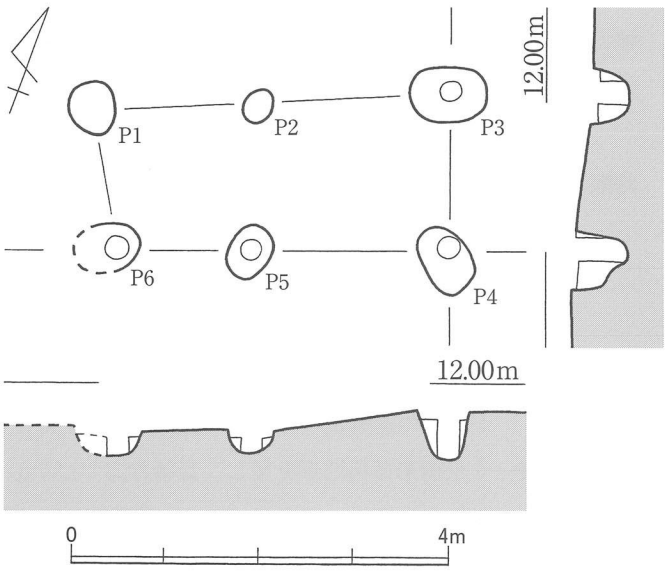
柱穴No.	平面規模	柱痕径	深さ
Ｐ１		28	45
Ｐ２		21	48
Ｐ３	78		60
Ｐ４	72×87		37
Ｐ５	67×80	30	43
Ｐ６	83×85		56
Ｐ７	75×65		68
Ｐ８	65		41
Ｐ９	62×67	32	24
Ｐ１０	69×61		36

※単位はcm

ＳＢ０８

検出状況　Ｄ－３区東部で検出した（第80図）。弥生時代の住居跡ＳＨ07と平面的に重複するが、当建物の柱穴が住居跡を切っている。このため、建物全体を検出することができた。

形状・規模　梁行１間、桁行２間からなる側柱建物である（第84図）。西梁行のラインが桁行方向と直角にはならず、平面形は台形傾向にある。南桁行を基準とした棟軸方向は、N70°30′Ｅを示す。



第84図　ＳＢ08

北桁行方向・東梁行方向・南桁行方向・西梁行方向の規模は、それぞれ3.83ｍ・1.65ｍ・3.55ｍ・1.50ｍを測り、東梁行方向と南桁行方向を基準とした平面積は5.85㎡である。

なお、柱穴間の距離および柱間の平均値は第16表のとおりである。

柱穴　掘り形の平面形は、Ｐ２を除いては、隅丸方形もしくはそれに近い形態なし、その規模は29cm×37cm～80cm×58cm、深さ12cm～57cmを測る。また、Ｐ１・Ｐ２を除いては柱痕を

第16表　ＳＢ08建物規模一覧表

	柱穴間	柱穴間距離	側面距離	柱穴間平均距離
北桁行	Ｐ１－Ｐ２	1.78		
	Ｐ２－Ｐ３	2.05	3.83	1.91
東梁行	Ｐ３－Ｐ４	1.65	1.65	1.65
南桁行	Ｐ４－Ｐ５	2.10		
	Ｐ５－Ｐ６	1.45	3.55	1.77
西梁行	Ｐ６－Ｐ１	1.50	1.50	1.50

※単位はｍ

第17表　ＳＢ08柱穴規模一覧表

柱穴No.	平面規模	柱痕径	深さ
Ｐ１	50×58		12
Ｐ２	29×37		15
Ｐ３	80×58	23	38
Ｐ４	50×72	22	57
Ｐ５	43×57	21	40
Ｐ６	52	23	48

※単位はcm

確認することができ、その径は21cm～23cmを測る。各柱穴の規模については、第17表のとおりである。埋土は、灰色シルト質極細砂を中心とした灰色系を主体とする。

出土遺物　土師器・須恵器・韓式系土器が出土している。

須恵器は杯Ｈ蓋（139）が出土している（図版８）。内外面とも回転ナデ調整により仕上げられている。残存する範囲では、ヘラ削りは認められない。土師器は高坏の小片が、韓式土器は器種の特定できない小片が出土しているが、いずれも図化できなかった。

時期　出土土器の特徴から、ＴＫ217（第12期）と考えられる。

（２）柱穴

当該期の柱穴がいくつか検出されているが、これらの柱穴から建物を復元することはできなかった。しかし、これらの柱穴のなかで、Ｐ12からは、良好な資料が得られているので、出土遺物を中心に報告する。

Ｐ１２

検出状況　Ｄ－２区西端部で検出した（第79図）。ＳＢ07の東側に位置する。

出土遺物　須恵器の杯Ａが１点（140）出土している（図版８）。内外面とも回転ナデ調整により仕上げられ、底部は回転ヘラ切りにより切り離されている。

時期　出土土器から、ＴＫ46（第13期）と考えられる。

（３）土坑

ＳＫ１５

検出状況　Ｄ－２区中央部で検出した（第81図）。ＳＫ17の西側に位置する。調査区南端に接するが、他の遺構との切り合い関係はなく、完存する。

形状・規模　平面形は楕円形を呈し、長軸方向で1.36m、その直交方向で68cmを測る。横断面は浅いＵ字形を呈し、最深部における検出面からの深さは16cmを測る。

埋没状況　埋土は、褐灰色シルト質極細砂１層からなり、その層相から判断して、人為的に埋められたものと考えられる。

出土遺物　須恵器・土師器・瓦類が出土している。須恵器は杯Ａの口縁部が出土しているが、小片のため図化できなかった。土師器は器種の特定が困難である。瓦類は、丸瓦と平瓦が比較的多く出土している。

時期　出土土器から、白鳳時代（第13期）を中心とした時期と考えられる。

ＳＫ１６

検出状況　Ｄ－２区中央部で検出した（第81図）。ＳＫ19の南側に位置する。当遺構の大半は調査区南側に拡がり、検出できたのはその一部と考えられる。他の遺構との切り合い関係は認められない。

形状・規模　検出できた範囲がわずかであるため、全体の形状・規模を明らかにすることはできない。検出した範囲では直線的であることから、方形傾向の遺構と考えられる。

出土遺物　瓦のみが出土している。丸瓦と平瓦が出土しているが、軒瓦は出土していない。

時期　瓦のみの出土であるため、時期の特定は困難である。白鳳時代以降と考えられる。

ＳＫ１７

検出状況　Ｄ－２区東部で検出した（第81図）。ＳＫ15の東側、ＳＫ18の西側に位置する。他の遺構との切り合い関係は認められず、完存する。

形状・規模　平面形は溝状を呈し、長軸方向で3.12m、その直交方向で68cmを測る。横断面は皿形を呈し、最深部における検出面からの深さは14cmを測る。

埋没状況　埋土は、褐色シルト混じり灰色シルト質極細砂１層からなる。層相から判断して、人為的に埋められたものと判断される。

出土遺物　瓦のみが出土している。平瓦が出土しているが、軒瓦は出土していない。

時期　瓦のみの出土であるため、時期の特定は困難である。白鳳時代以降と考えられる。

ＳＫ１８

検出状況　Ｄ－２区東部で検出した（第81図）。ＳＫ17の東側に位置する。他の遺構との切り合い関係は認められず、完存する。

形状・規模　平面形はやや歪な楕円形を呈し、長軸方向で1.87m、その直交方向で79cmを測る。横断面は皿形を呈し、最深部における検出面からの深さは10cmを測る。

埋没状況　埋土は、褐灰色シルト混じり細砂～極細砂１層からなる。層相から判断して、人為的に埋められたものと判断される。

出土遺物　瓦のみが出土している。平瓦が出土しているが、軒瓦は出土していない。

時期　瓦のみの出土であるため、時期の特定は困難である。白鳳時代以降と考えられる。

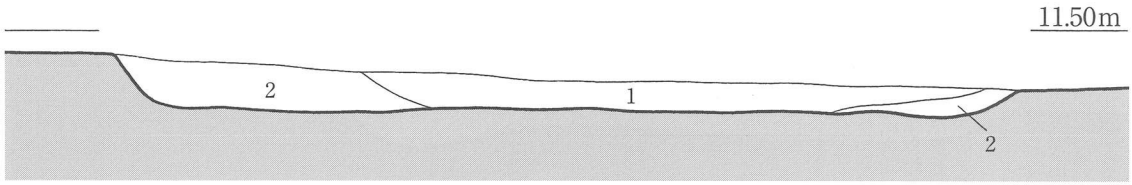
ＳＫ１９

検出状況　Ｄ－２区東部で検出した（第81図）。ＳＫ18の東側に位置する。当遺構の大半は残存するが、西端部の一部が中世のＳＫ25に切られている。

形状・規模　平面形は歪な紡錘形をなし、平面形からの溝状遺構との判別は明確ではない。長軸方向で14.52m、その直交方向で5.06mと、かなり大型の遺構である。横断面は逆台形を呈し、最深部における検出面からの深さは25cmを測る。

埋没状況　埋土は２層からなる（第85図）。層相から判断して、２層とも人為的に埋められたものと考えられる。

出土遺物　須恵器が出土している（図版７）。杯Ａ・杯蓋・高杯が出土しているが、図化できたの



1．褐色シルト質極細砂混じり灰白色シルト質極細砂（埋め土）
2．暗褐色シルト質極細砂混じり灰白色シルト質極細砂

第85図　ＳＫ19

は、杯Ａ（137）に限られる。137は、底部を中心に残存するが、内外面とも回転ナデ調整により仕上げられ、底部は回転ヘラ切りにより切り離されている。

この他、杯蓋は返りを有するタイプのものである。

時期　出土土器から判断して、白鳳時代（第13期）と考えられる。

（４）溝

ＳＤ２１（写真図版33）

検出状況　Ｃ区西端部で検出した（第79図）。ほぼ南北方向にのびる溝で、当遺構の大半は西側調査区外に拡がっており、東側肩部を検出したにとどまる。ＳＢ06の西側に位置する。

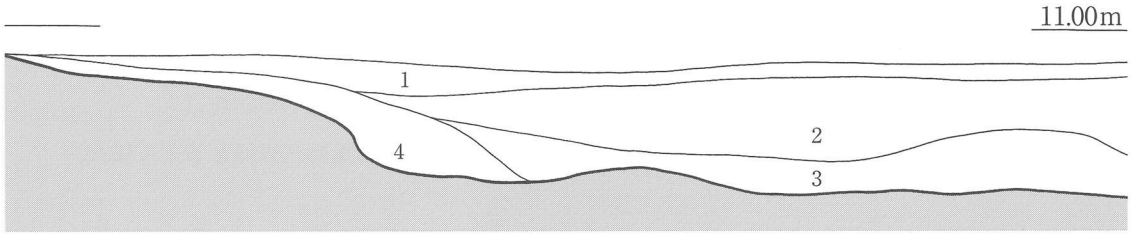
形状・規模　検出した長さは13.50ｍを測る。横断面は、検出した範囲では逆台形を呈し、最深部における検出面からの深さは75cmを測る。検出面における幅は、最大５ｍを測る。

埋没状況　埋土は４層からなる（第86図）。大半は洪水に起因して埋没し（２・３層）、その後凹地の段階（１層）で水田として利用されていたようである。

後述するように（第５章第２節）、本溝は、完新世段丘の埋没過程を示す溝と考えられる。

出土遺物　弥生時代前期から古墳時代後期の土器が出土しているが、小片のため図化は困難である。

時期　出土土器から時期を特定することは困難であるが、完新世段丘の形成時期から判断して、弥生時代前期以降と考えられる。

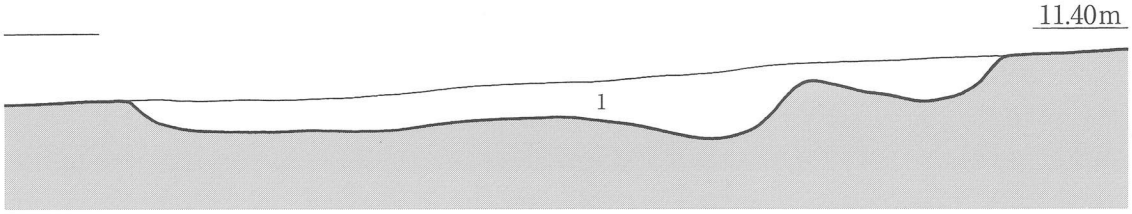


１．暗灰褐色極細砂混じりシルト（水田土壌）
２．黒褐色シルト混じり極細砂（洪水層）
３．暗褐色シルト混じり暗灰色細砂（洪水層）
４．黒褐色極細砂混じりシルト

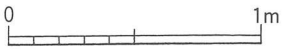
第86図　ＳＤ21

ＳＤ２２（写真図版33）

検出状況　Ｄ－２区西端部で検出した（第79図）。南北方向に直線的にのびる溝で、両端は調査区



１．灰白色シルト質極細砂混じり褐色シルト質極細砂



第87図　ＳＤ22

外にのびている。ＳＤ23の西側に位置し、ＳＤ23とは２ｍの間隔（検出面における肩部間）でほぼ平行している。

形状・規模　検出した長さは10.09ｍを測る。横断面は逆台形を基本形とし、東側肩部は２段にわたって掘り込まれている。最深部における検出面からの深さは26㎝を測り、検出面における幅は3.38ｍ～3.60ｍである。

埋没状況　埋土は１層からなる（第87図）。層相から、人為的に埋められたものと判断される。

出土遺物　軒丸瓦（1049）と須恵器の杯Ａ・杯Ｂ・杯Ｇ蓋・壷・甕の各器種が出土している（図版８）。瓦については第４章第５節で報告する。

杯Ｇ蓋　147の１個体を図化した。内面に返りが付き、天井部を除いては回転ナデ調整により仕上げられている。天井部は回転ヘラ削りにより仕上げられている。

杯Ａ　口縁部片が出土しているが、小片のため図化できなかった。

杯Ｂ　148と149の２個体を図化した。２個体とも底部のみの残存であるが、底部を回転ヘラ切りによる切り離し後、高台が貼り付けられている。他に、口縁部片も出土している。

壷　長頸壷の頸部から体部にかけての小片が出土している。

甕　体部片が数点出土している。

その他　ＳＤ22とＳＤ23は当初１条の溝として、調査を進めていった。その後、２条の溝からなることが明らかとなり、今回ＳＤ22とＳＤ23として報告するものである。この、当初１条と考えていた段階で、数点の土器が出土している。それが、150の杯Ｂと151の杯Ｈである。151の底部は、ヘラ切りにより切り離されている。ＳＤ22とＳＤ23の埋没時期を検討する資料となるものと考えられる。

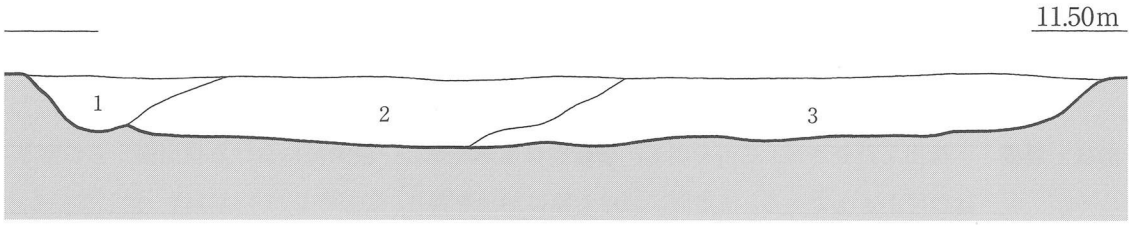
時期　出土土器から白鳳時代（第13期）と考えられる。

ＳＤ２３（写真図版33）

検出状況　Ｄ－２区西端部で検出した（第79図）。南北方向に直線的にのびる溝で、両端は調査区外へのびている。ＳＤ22の東側に位置し、ＳＤ22とほぼ平行している。

形状・規模　検出した長さは10.24ｍを測る。横断面は逆台形を呈し、最深部における検出面からの深さは38㎝を測る。検出面における幅は、北端で5.44ｍ、南端で7.12ｍと、溝中央部で検出幅が大きく変化している。

埋没状況　埋土は３層からなる（第88図）。３層を除いては人為的に埋められたものと考えられ、



1．褐色シルト質極細砂混じり灰白色シルト質極細砂（埋め土）
2．褐色シルト質極細砂混じり暗灰色シルト質極細砂（埋め土）
3．褐色シルト質極細砂混じり暗灰色シルト質極細砂～粗砂

第88図　ＳＤ23

少なくとも２回の再掘削がなされている。

出土遺物　瓦類（軒丸瓦・軒平瓦）と須恵器と土師器が出土している（図版８）。

須恵器　杯Ｂ・杯蓋・壷・甕・高杯・硯の各器種が出土している。

杯Ｂ　143の１個体を図化した。底部を回転ヘラ切り後、高台が貼り付けられている。

杯蓋　杯Ｂ蓋（141）と杯Ｈ蓋（142）の２タイプ出土している。141・142とも回転ナデ調整により仕上げられている。142の天井部には、残存する範囲で、ヘラ削りは認められない。

硯　ほぼ図上で完形に復元できる円面硯１個体（145）が出土している。脚部には台形の透孔が開けられており、計11箇所に開けられたものと復元される。陸部の径は8.7㎝、海部と陸部の比高は６㎜を測る。陸部は使用痕が顕著に認められるが、海部・陸部ともに墨痕は認められない。脚端部はヘラナデ、内面は縦方向のヘラ削りにより仕上げられている。

他　壷は短頸壷の口頸部片・体部片、高坏は脚部片、甕は口頸部片・体部片が出土しているが、いずれも図化できなかった。このなかで、甕の体部片（146）が出土している。

土師器　高坏の坏部（144）が出土している。内外面とも摩滅が著しく、調整は観察できないが、口縁部にわずかに横ナデ調整の痕が観察できる。

時期　出土土器から白鳳時代（第13期）と考えられる。

ＳＤ２４

検出状況　Ｄ－２区東部で検出した（第81図）。南北方向に直線的にのびる溝で、北端は調査区外へのびている。南端は、中世のＳＫ25に切られている。また、ＳＤ28と切り合い関係にあるが、ＳＤ28を切っている。

形状・規模　検出した長さは3.33ｍを測る。横断面は皿形を呈し、最深部における検出面からの深さはわずか４㎝である。検出面における幅は、北端で26㎝、南端で57㎝を測る。底部のレベルはほぼ一定している。

埋没状況　埋土は、褐色シルト質極細砂１層からなる。

出土遺物　全く出土していない。

時期　出土土器からの時期の特定は困難であるが、白鳳時代（第13期）のＳＤ28を切り、ＳＫ25等の中世の遺構に切られていることから、奈良時代を中心とした時期を考えたい。

ＳＤ２５

検出状況　Ｄ－２区東部で検出した（第80図）。南北方向に直線的にのびる溝で、北端はＳＥ05、南端はＳＤ33と、いずれも中世の遺構に切られている。ＳＤ26の西側に位置し、両者はほぼ平行する。

形状・規模　検出した長さは1.33ｍを測る。横断面は皿形を呈し、最深部における検出面からの深さはわずか４㎝である。検出面における幅は29㎝を測り、底部のレベルはほぼ一定している。

埋没状況　埋土は褐灰色シルト質極細砂１層からなる。層相から判断して、人為的に埋められたものと考えられる。

出土遺物　全く出土していない。

時期　出土土器から時期を特定することは困難である。ＳＥ05・ＳＤ33等の中世の遺構に切ら

れていること、および後述するＳＤ26と埋土の特徴が類似しほぼ平行することから、奈良時代を中心とした時期が考えられる。

ＳＤ２６

検出状況　Ｄ－２区東部で検出した（第80図）。南北方向に直線的にのびる溝で、北端はＳＥ05、南端はＳＤ33と、いずれも中世の遺構に切られている。ＳＤ25の東側に位置し、両者はほぼ平行する。

形状・規模　検出した長さは76cmを測る。横断面は皿形を呈し、最深部における検出面からの深さはわずか３cmである。検出面における幅は26cmを測り、底部のレベルはほぼ一定している。

埋没状況　埋土は褐灰色シルト質極細砂１層からなる。層相から判断して、人為的に埋められたものと考えられる。

出土遺物　須恵器の杯Ｂが出土しているが、小片のため図化できなかった。

時期　出土土器及び、ＳＥ05・ＳＤ33との切り合い関係から、奈良時代を中心とした時期を考えたい。

ＳＤ２７（写真図版33･40）

検出状況　Ｄ－２区東部からＤ－３区西部にかけて検出した（第80図）。直線的な溝で、東西方向から南北方向に屈曲している。他の遺構との切り合い関係は認められないが、溝中央部で一部攪乱を受けている。

形状・規模　検出した長さは22.22mを測る。横断面は逆台形を呈し、最深部における検出面からの深さは22cmを測る。検出面における幅は1.28mから2.20mを測り、底部のレベルはほぼ一定している。

埋没状況　埋土は部分的に２層からなる箇所も認められるが、基本的に灰色シルト質極細１層からなる。層相から判断して、人為的に埋められたものと考えられる。

出土遺物　須恵器の杯Ａ・杯Ｂ・皿・甕が出土している（図版８）。図化できたのは、154の皿と155の杯Ａである。両個体とも回転ナデ調整により仕上げられ、154の底部はヘラナデにより仕上げられている。杯Ｂと甕については、小片のため図化できなかった。

時期　出土土器から、奈良時代を中心とした時期と考えられる。

ＳＤ２８

検出状況　Ｄ－２区中央部で検出した（第81図）。溝の幅は一定しないが弧状を呈する溝で、北西方向から南東方向へのびている。北西側は調査区外までのび、南東側は中世のＳＫ25および奈良時代のＳＤ24に切られている。

形状・規模　検出した長さは5.64mを測る。横断面は皿形を呈し、最深部における検出面からの深さは14cmを測る。検出面における幅は1.56m～3.50mを測り、底部のレベルはほぼ一定している。

埋没状況　埋土は、褐色シルト質極細砂混じり灰色シルト質極細砂１層からなる。層相から判断して、人為的に埋められたものと考えられる。

出土遺物　須恵器の杯蓋と甕が出土している。

杯蓋は、杯Ｈ蓋（153）と杯Ｂ蓋（152）が出土している。152・153ともに、内外面とも回転ナデ調整により仕上げられている。153の天井部は、残存する範囲ではヘラ削りは認められない。甕は体部片が１点出土している。

時期　出土土器から、白鳳時代（第13期）を中心とした時期と考えられる。

ＳＤ５０

検出状況　Ｄ－２区中央部で検出した（第81図）。ほぼ南北方向にのびる溝で、両端とも調査区外までのびている。ＳＤ５１の西側に位置する。当遺構の底部で弥生時代のＳＫ50・ＳＫ51・ＳＤ47を検出したが、明確な切り合い関係は認められなかった。ただし、後述するＳＤ51との関係は、平面的上・断面上明確にできなかった。

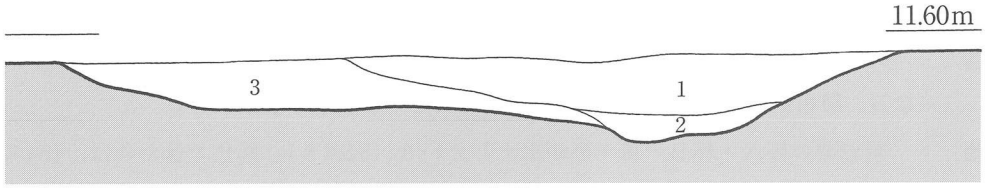
形状・規模　検出した長さは10.58ｍを測る。横断面は皿形を呈し、最深部における検出面からの深さは43㎝を測る。検出面における幅は3.64ｍ～6.00ｍを測り、底部の標高は、北端部で11.14ｍ、南端部で11.00ｍを測り、わずかに南側へ傾斜している。

埋没状況　埋土は３層からなる（第89図）。３層については、その層相から判断して、人為的に埋められたものと考えられる。

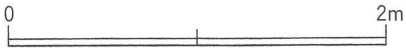
出土遺物　須恵器の杯Ａ・杯Ｈ・杯Ｇ蓋・杯Ｂ蓋・甕・長頸壷が出土している。このなかで図化できたのは、杯Ｈ・杯Ｇ蓋・杯Ｂ蓋の３個体である（図版31）。

杯Ｈ（484）は、口縁部のみ残存する。杯Ｇ蓋（483）は、かえりを有し、つまみの剥離痕も観察できる。杯Ｂ蓋（485）は、口縁部のみ残存し、ひずみが激しい。

時期　出土土器から判断して、飛鳥時代（第12期）と考えられる。



１．灰色シルト質極細砂混じり褐色シルト質極細砂
２．暗褐灰色細砂～粗砂
３．灰色シルト質極細砂混じり暗褐灰色シルト質極細砂



第89図　ＳＤ50

（５）瓦溜り（写真図版34）

検出状況　Ｄ－２区中央部で検出した。今回の調査で、市之郷廃寺に伴うと考えられる瓦が多量に出土しているが、最も集中して出土したのが、この瓦溜りである。この箇所については、明確な遺構を確認することはできなかったが、おそらく自然の凹地に集中していたものと考えられる。出土瓦の詳細については、第４章第５節で報告する。

Ⅳ：中世

掘立柱建物跡・柱穴・井戸・土坑・溝を検出した（第91図）。地区ごとの検出状況は以下の通りである。

C区　掘立柱建物跡が１棟検出されている。

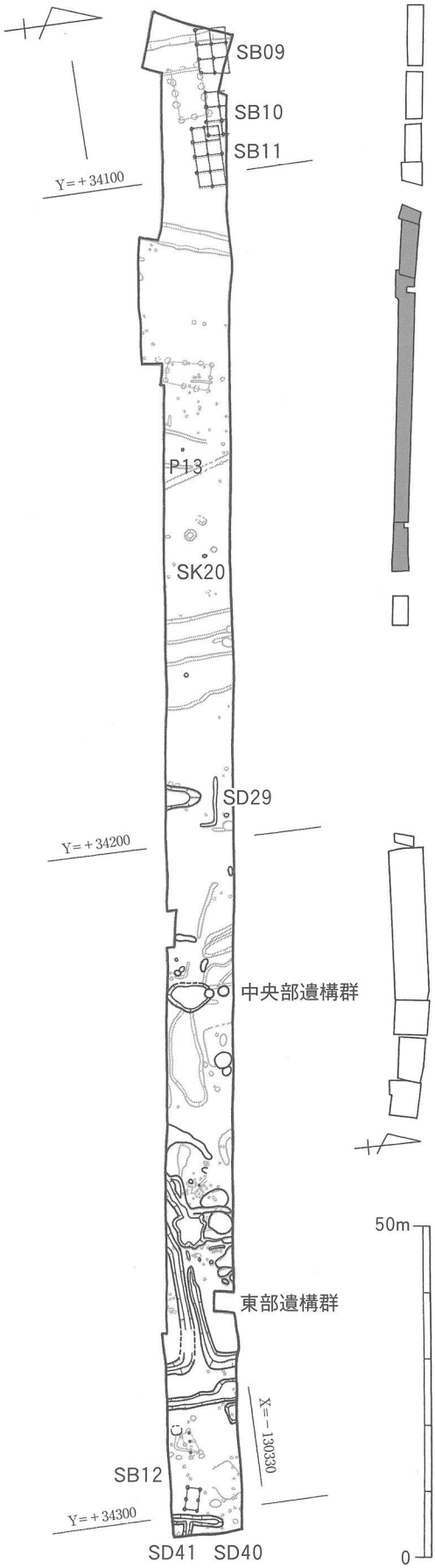
D－１区　掘立柱建物跡が２棟検出されている。２棟の建物は平面的に重複することから、異なる時期のものと考えられる。調査区北側に偏って検出されている。

D－２区　柱穴・井戸・土坑・溝状遺構が検出されている。当地区の東端からD－３区にかけて集中して検出されており、西側は散在する程度である。

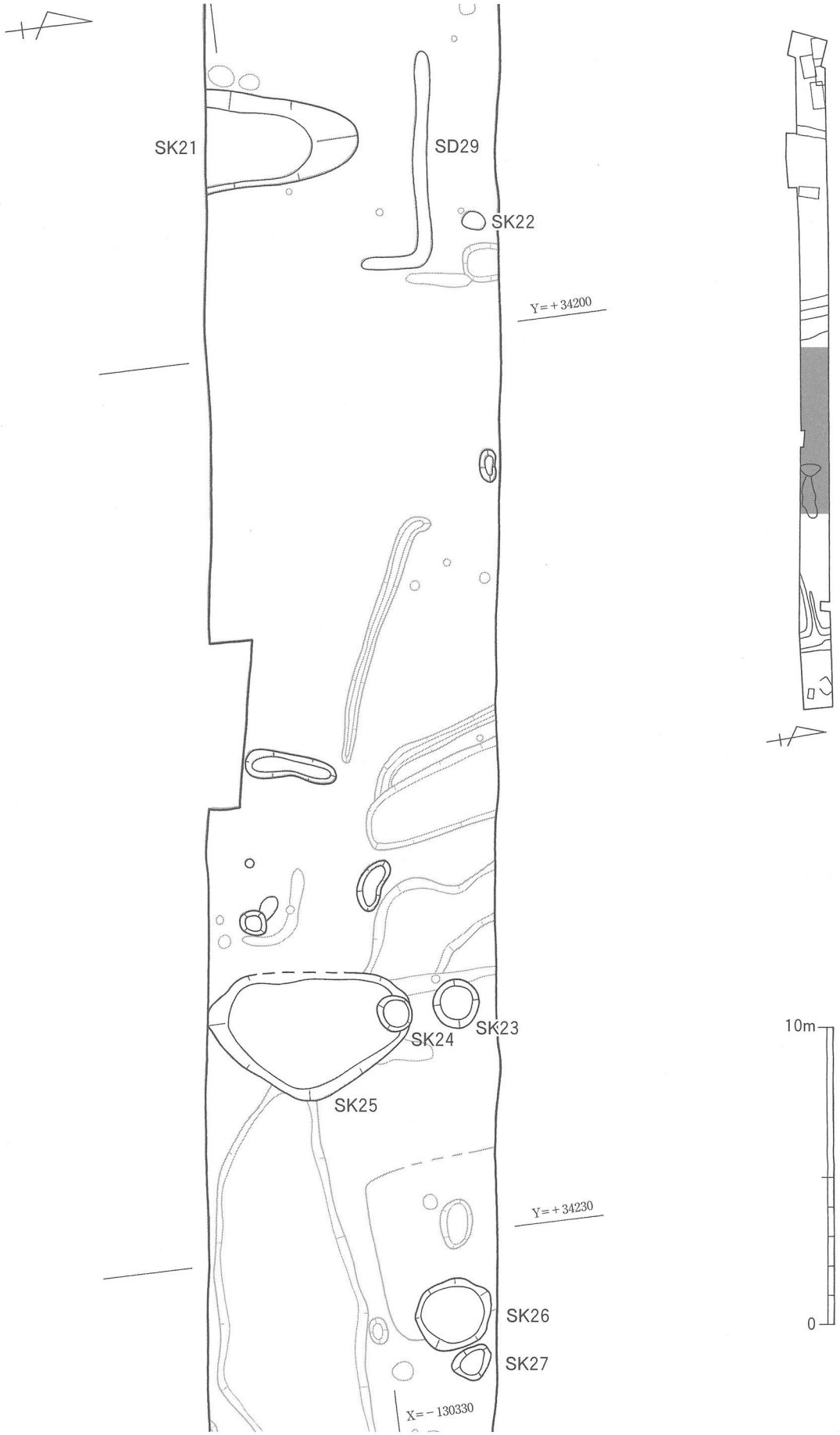
D－３区　掘立柱建物跡・柱穴・土坑・溝状遺構が検出されている。当地区全域で検出されている。

D－４区　当該期の遺構・遺物は全く認められなかった。

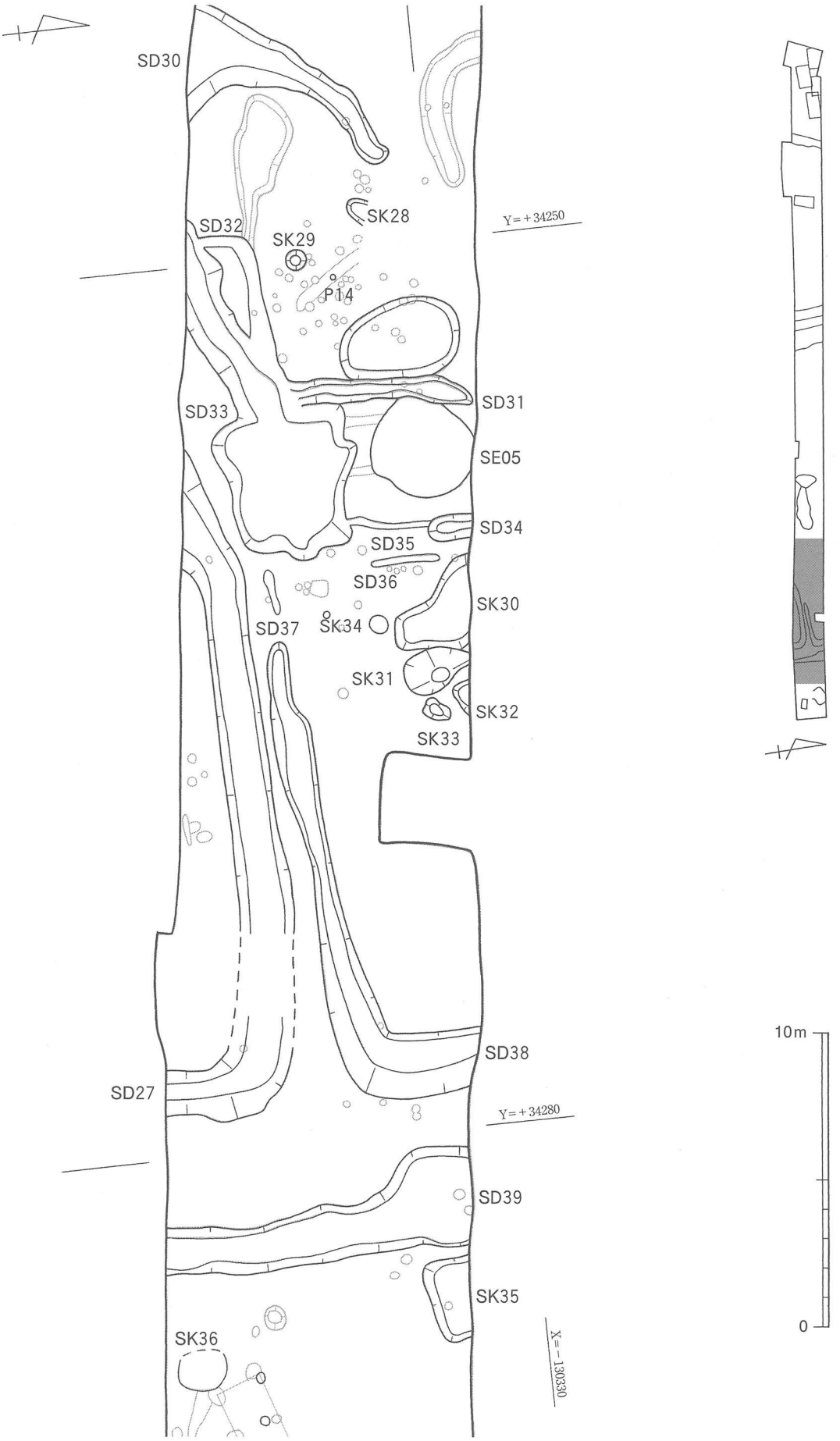
第90図　ＳＥ05検出作業



第91図　Ｃ・Ｄ区　第１面　中世



第92図　C・D区　第１面　中世（中央部遺構群）

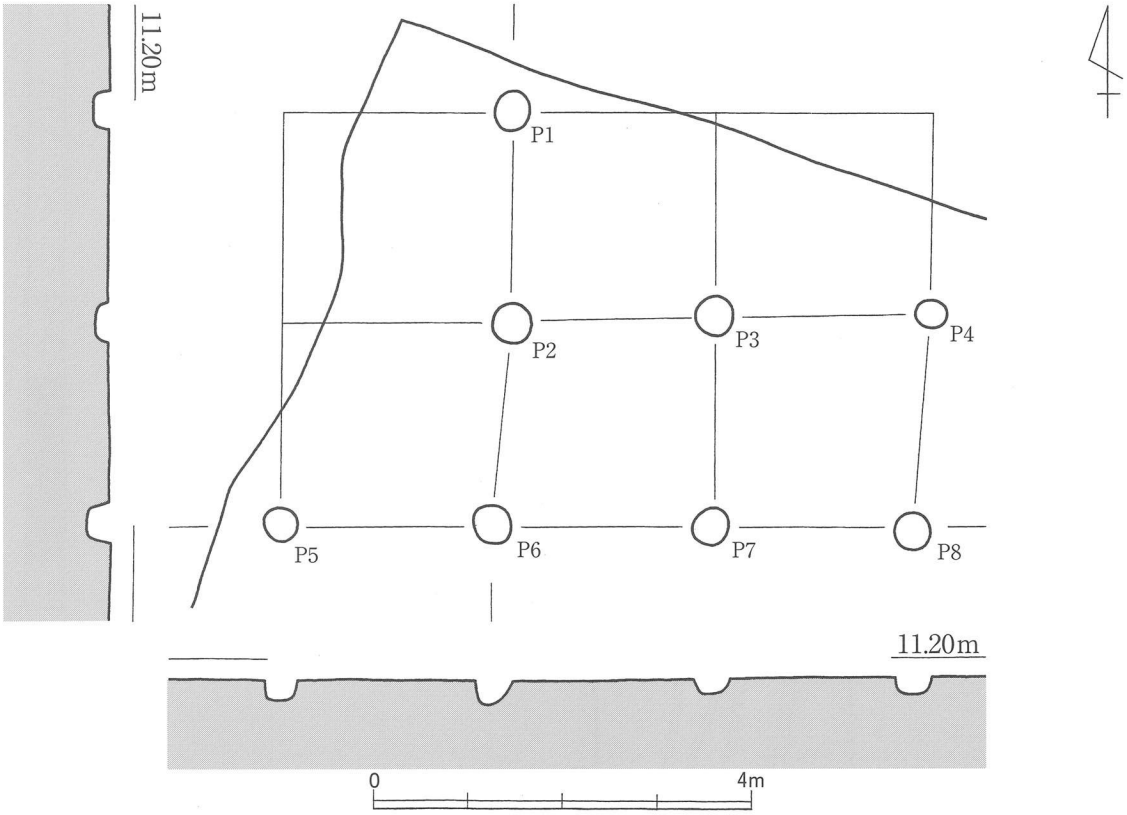


第93図　C・D区　第1面　中世（東半部遺構群）

（１）掘立柱建物跡

ＳＢ０９（写真図版35）

検出状況　Ｃ区北側で検出した（第91図）。ＳＢ10の西側に位置する。他の遺構との切り合い関係は認められないが、建物の北側から西側にかけては調査区外に拡がるものと考えられる。このため、建物の規模を明確にすることは困難である。



第94図　ＳＢ09

形状・規模　少なくとも梁行２間、桁行３間からなる総柱建物である（第94図）。南桁行方向を基準とした棟軸方向は、N88°30′Wを示す。桁行方向は、南桁行が最も柱穴が多く検出され、その規模は6.65mを測る。梁行方向については、Ｐ１・Ｐ２・Ｐ６を結ぶラインが最も柱穴が多く検出され、その規模は4.40mを測る。上記桁行・梁行を基準とした平面積は29.26㎡である。主な柱穴間の距離および柱間の平均値は第18表のとおりである。

柱穴　掘り形の平面形は円形をなし、その規模は35cm～40cm、深さ14cm～23cmを測る。また、

第18表　ＳＢ09建物規模一覧表

	柱穴間	柱穴間距離	側面距離	柱穴間平均距離
西梁行	Ｐ１－Ｐ２	2.25		
	Ｐ２－Ｐ６	2.15	4.40	2.20
南桁行	Ｐ５－Ｐ６	2.25		
	Ｐ６－Ｐ７	2.30		
	Ｐ７－Ｐ８	2.10	6.65	2.21

第19表　ＳＢ09柱穴規模一覧表

柱穴No.	平面規模	柱痕径	深さ
Ｐ１	35		17
Ｐ２	40		14
Ｐ３	40		17
Ｐ４	31		20
Ｐ５	32		20
Ｐ６	40		23
Ｐ７	38		15
Ｐ８	38		15

※　第18表の単位はm
※　第19表の単位はcm

いずれの柱穴においても柱痕を確認することはできなかった。各柱穴の規模については、第19表のとおりである。埋土は、灰色シルト質極細砂を中心とした灰色系を主体とする。

出土遺物　土師器・須恵器が出土している。

須恵器は椀の体部片・底部片および甕の体部片が、土師器は杯の体部片が出土しているが、いずれも小片のため図化できなかった。

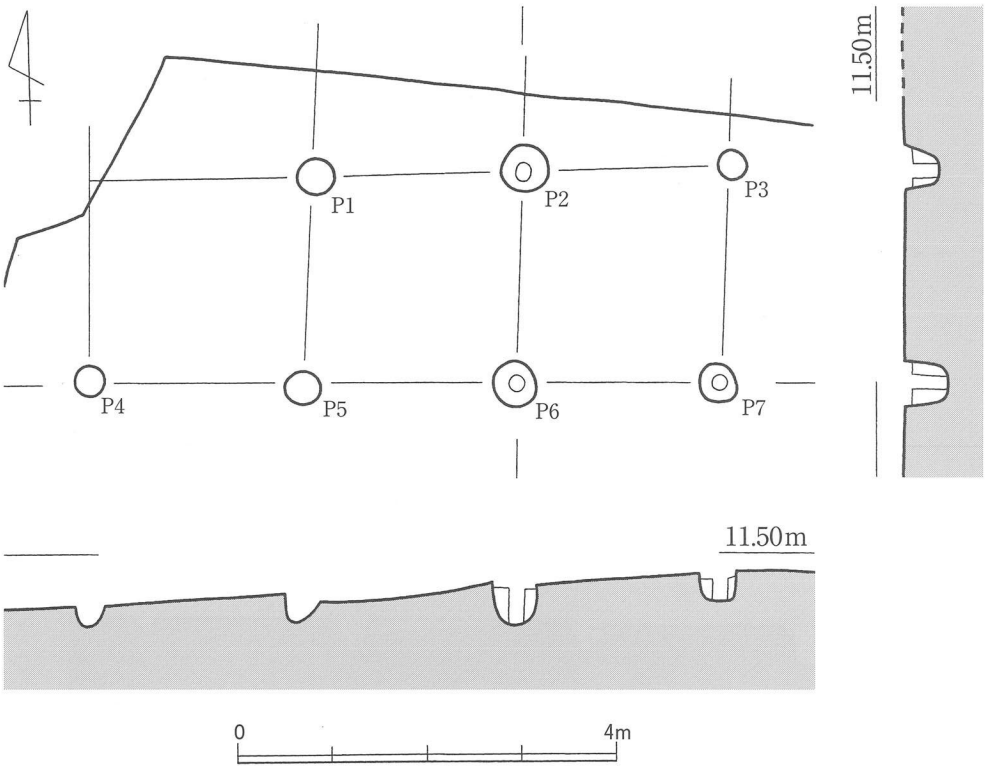
時期　出土土器の特徴から、中世Ⅰ期（第17～18期）と考えられる。

ＳＢ１０

検出状況　Ｄ－１区西端部で検出した（第91図）。ＳＢ09の東側に位置する。ＳＢ11と一部平面的に重複するが、建物を構成する柱穴相互には切り合い関係は認められない。また、建物の北側については調査区外に拡がるものと考えられる。

形状・規模　桁行３間、梁行１間＋αからなる総柱建物である（第95図）。南桁行方向を基準とした棟軸方向は、N89°Wを示す。南桁行で6.63mを測り、梁行方向については、東梁行のＰ３－Ｐ７間で2.35mを測る。南桁行と東梁行を基準とすると、平面積は15.58㎡以上となる。主な柱穴間距離および柱間の平均値は第20表のとおりである。

柱穴　掘り形の平面形は、円形をなし、その規模は31cm～40cm、深さ15cm～23cmを測る。また、Ｐ２・Ｐ６・Ｐ７においては、柱痕を確認することができた。各柱穴の規模については、第21表のとおりである。埋土は、黒色シルト質極細砂混じり灰色シルト質極細砂を中心とした灰色系を主体とする。



第95図　ＳＢ10

第20表　ＳＢ10建物規模一覧表

	柱穴間	柱穴間距離	側面距離	柱穴間平均距離
東梁行	Ｐ３－Ｐ７	2.35	2.35	2.35
南桁行	Ｐ４－Ｐ５	2.25		
	Ｐ５－Ｐ６	2.25		
	Ｐ６－Ｐ７	2.13	6.63	2.21

第21表　ＳＢ10柱穴規模一覧表

柱穴No.	平面規模	柱痕径	深さ
Ｐ１	35		17
Ｐ２	40		14
Ｐ３	40		17
Ｐ４	31		20
Ｐ５	32		20
Ｐ６	40		23
Ｐ７	38		15
Ｐ８	38		15

※　第20表の単位はｍ
※　第21表の単位はcm

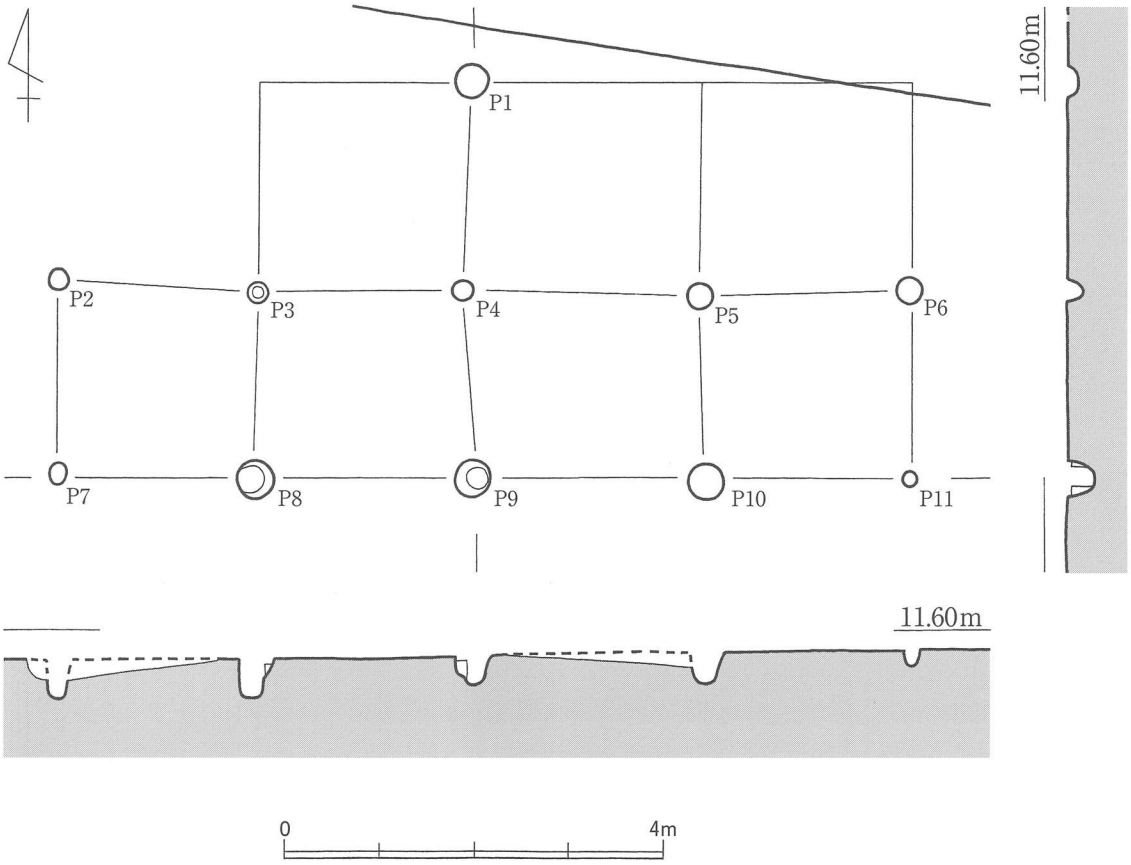
出土遺物　須恵器が出土している。椀の体部片・底部片および甕の体部片が出土しているが、いずれも小片のため図化できなかった。

時期　ＳＢ09との方向性の一致から、中世Ｉ期（第17期～18期）と考えられる。

ＳＢ１１（写真図版35）

検出状況　Ｄ－１区西端部で検出した（第91図）。ＳＢ10と一部平面的に重複するが、建物を構成する柱穴相互には、切り合い関係は認められない。また、建物の北側については、調査区外に拡がるのか、拡がらないのかについては、判断できない。

形状・規模　総柱建物で、桁行４間、梁行２間を検出した（第96図）。南桁行方向を基準とした棟軸方向は、Ｎ90°Ｗを示す。南桁行で9.02mを測り、梁行方向については、東梁行のＰ１－



第96図　ＳＢ11

第22表　ＳＢ11建物規模一覧表

	柱穴間	柱穴間距離	側面距離	柱穴間平均距離
東梁行	Ｐ１－Ｐ４	2.25		
	Ｐ４－Ｐ９	2.00	4.25	2.12
南桁行	Ｐ７－Ｐ８	2.10		
	Ｐ８－Ｐ９	2.35		
	Ｐ９－Ｐ10	2.42		
	Ｐ10－Ｐ11	2.15	9.02	2.25

第23表　ＳＢ11柱穴規模一覧表

柱穴No.	平面規模	柱痕径	深さ
Ｐ１	32		15
Ｐ２	22		16
Ｐ３	18	8	20
Ｐ４	22		24
Ｐ５	25		18
Ｐ６	22		13
Ｐ７	22		13
Ｐ８	20	10	17
Ｐ９	36	18	30
Ｐ１０	35		33
Ｐ１１	10		18

※　第22表の単位はｍ
※　第23表の単位はcm

Ｐ９間で4.25ｍを測る。南桁行と梁行（Ｐ１－Ｐ９間）を基準とすると、平面積は38.33㎡となる。主な柱穴間の距離および柱間の平均値は第22表のとおりである。

柱穴　掘り形の平面形は円形をなし、その規模は10cm～30cm、深さ13cm～23cmを測る。また、Ｐ８・Ｐ９においては柱痕を確認することができた。各柱穴の規模については、第23表のとおりである。埋土は、暗褐色シルト質極細砂混じり灰色シルト質極細砂を中心とした、灰色系を主体とする。

出土遺物　土師器・須恵器が出土している。

須恵器は椀の口縁部片が、土師器は器種の特定できない小片が出土しているが、いずれも図化できなかった。

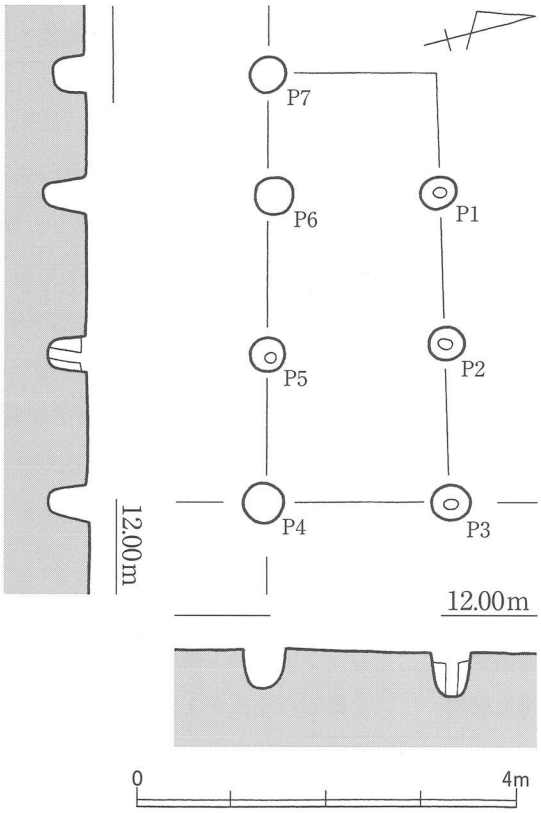
時期　ＳＢ10との方向性の一致および、出土土器の特徴から、中世Ｉ期（第17期～18期）と考えられる。

ＳＢ１２（写真図版35）

検出状況　Ｄ－３区東端部で検出した（第91図）。ＳＤ40の西側に位置する。他の遺構との切り合い関係は認められず、全体を検出することができた。

形状・規模　桁行３間、梁行１間の側柱建物である（第97図）。南桁行方向を基準とした棟軸方向は、Ｎ74°30′Ｗを示す。南桁行で4.60ｍを測り、東梁行方向で2.00ｍを測る。南桁行と東梁行を基準とすると、平面積は9.20㎡となる。主な柱穴間の距離および柱間の平均値は第24表のとおりである。

柱穴　掘り形の平面形は円形をなし、その規模は22cm～40cm、深さ36cm～45



第97図　ＳＢ12

第24表　ＳＢ12建物規模一覧表

	柱穴間	柱穴間距離	側面距離	柱穴間平均距離
西梁行	Ｐ３－Ｐ４	2.00		
	Ｐ４－Ｐ５	1.55	2.00	2.00
南桁行	Ｐ５－Ｐ６	1.75		
	Ｐ６－Ｐ７	1.30	4.60	1.53

第25表　ＳＢ12柱穴規模一覧表

柱穴No.	平面規模	柱痕径	深さ
Ｐ１	22	12	42
Ｐ２	32	12	46
Ｐ３	38	11	45
Ｐ４	40		44
Ｐ５	35	9	42
Ｐ６	38		43
Ｐ７	38		36

※　第24表の単位はｍ
※　第25表の単位はcm

cmを測る。また、Ｐ１・Ｐ２・Ｐ５においては柱痕を確認することができた。各柱穴の規模については、第25表のとおりである。埋土は、褐色極細砂混じり青灰色シルト質極細砂を中心とする。

出土遺物　土師器・須恵器が出土している。

須恵器は椀の口縁部片が、土師器は小皿が出土しているが、いずれも小片のため図化できなかった。

時期　出土土器の特徴、およびＳＢ10・ＳＢ11との方向性の一致から、中世Ｉ期（第17期～18期）と考えられる。

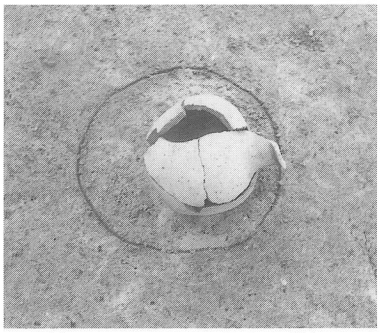
（２）柱穴

当該期の柱穴がいくつか検出されているが、これらの柱穴から建物を復元することはできなかった。しかし、これらの柱穴のなかで、Ｐ13とＰ14からは、良好な資料が得られているので、出土遺物を中心に報告する。

Ｐ１３

検出状況　Ｄ－２区西部で検出した（第91図）。

出土遺物　緑釉陶器の小瓶（176：図版９）が１点、柱抜き取り後に置かれた状態で出土している（第98図）。須恵質に焼成され、底部外面と体部下半に、わずかに釉の付着が認められる。底部内面がヘラナデ調整による以外は、内外面とも回転ナデ調整により仕上げられ、底部は回転糸切りにより切り離されている。



第98図　Ｐ13土器出土状況

時期　平安時代前半（第15期）と考えられる。

Ｐ１４

検出状況　Ｄ－２区東部で検出した（第93図）。ＳＫ29の北東側に位置する。

出土遺物　土師器の小皿が１点（175）出土している（図版９）。口縁部を１段の横ナデ調整による以外は、内外面とも指オサエにより仕上げられている。

時期　土師器の特徴から、中世Ⅱ期（第19期）に位置付けられる。

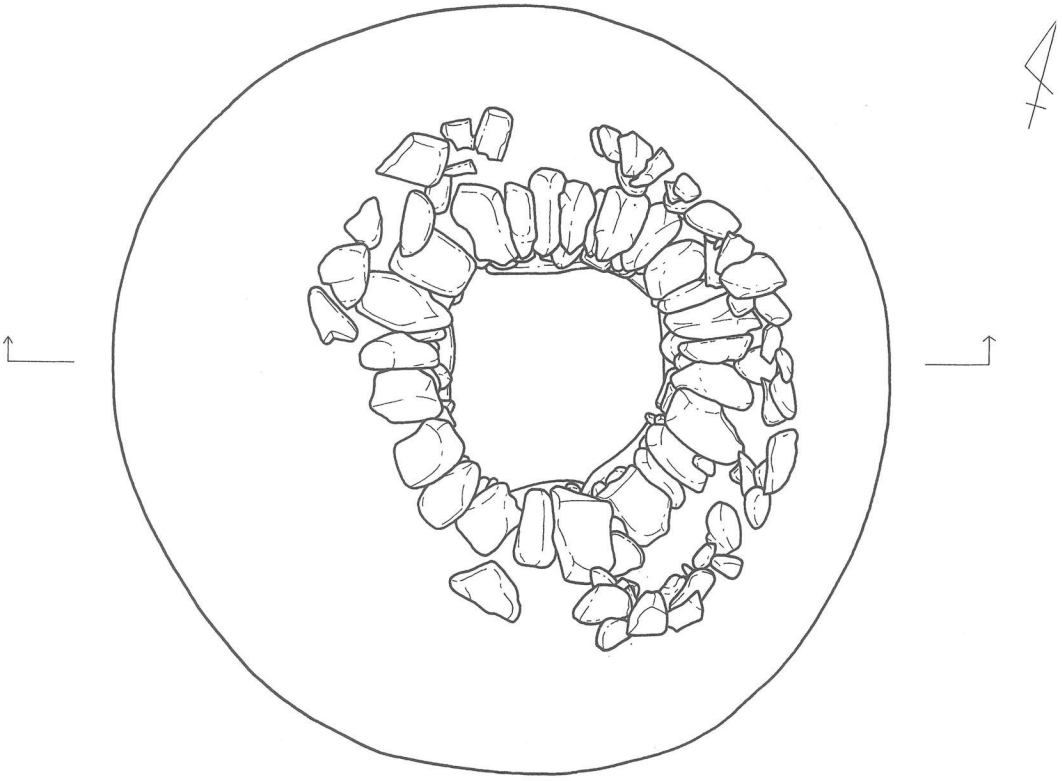
（3）井戸

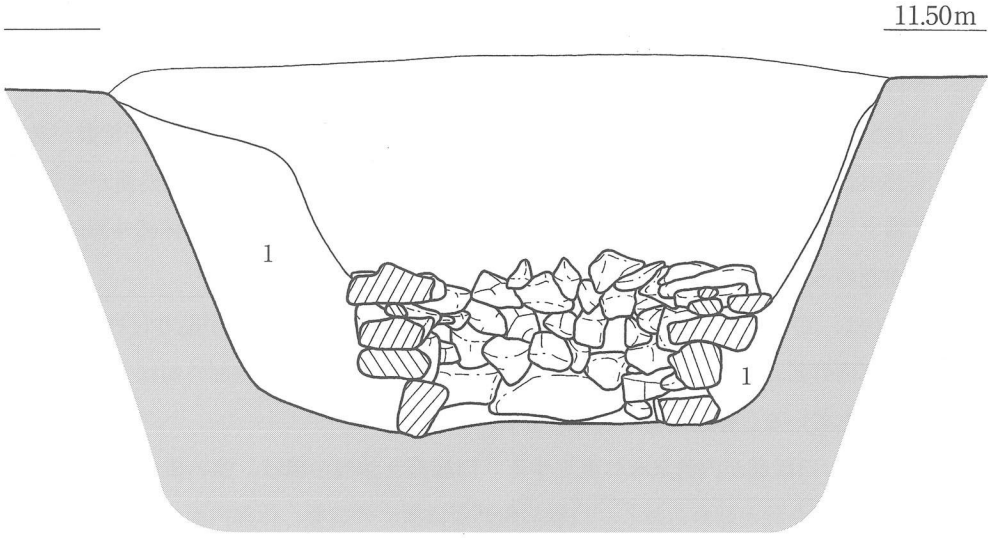
ＳＥ05の１基を検出した。

ＳＥ０５（写真図版36・37）

検出状況　Ｄ－２区東部で検出した（第93図）。ＳＤ31の東側、ＳＤ33の北側に位置する。ＳＤ31と切り合い関係にあり、西側掘り形がわずかに切られている。

形状・規模　石組みの井戸である（第99図）。





１．中礫混じり暗褐灰色細砂～粗砂

0　1m

第99図　ＳＥ05

掘り形　検出面における平面形は、一部を欠くがほぼ円形を呈する。その規模は、径3.15mを測る。砂礫層を基盤とし、この層を掘り抜いている。そして、この砂礫が石組みの裏込めとして掘り形内に埋められている。掘り形の断面形は逆台形を呈し、底部の検出面からの深さは1.47mを測る。また、底部における規模は、径1.90mを測る。

水溜　遺存していなかった。

石組み　井戸基底部に石材が直接積み上げられ、根太等の基礎は認められなかった。まず、基底部に50cm×20cm大の長方体もしくは楕円球形をなす石材の長側面を内側に向け、五角形状形に組まれていた。石材の一部には、他の石組の石材には認められない角礫が数石用いられていた。内径は１mを測る。

その上に砲弾形の円礫が、その主軸を基底石とは直交するように、小口側を内側に向け、これらの面が筒形になるように積み上げられていた。残存するのは３段分である。また、この石材とほぼ同規模もしくはそれ以下の石材が、石組みの裏込めとして使用されていた。円礫の規模は、30cm～10cmを測る。石組み内面の径は1.05mと、基底石よりわずかに大きくなっている。残存する石組みの高さは、井戸底部から70cmを測る。

埋没状況　瓦を含む砂礫によって、人為的に埋められていた。瓦類は、市之郷廃寺に伴うと考えられる瓦類である。これらの瓦類は、当井戸を埋めるにあたって、井戸周囲に散乱していた瓦類を土砂の一部として利用したものと考えられる。したがって、ここでは、井戸に伴う遺物としては扱わないものとする。

出土遺物　石組み内・掘り形内から出土している（図版８・９）。石組み内出土とした遺物の大半は、石組みを確認するより上層から出土したものである。したがって、これらの遺物の多くは、石組みが破壊されてから廃棄されたものと考えられる。

石組み内　土師器・瓦質土器・備前焼が出土している。

土師器　小皿と鍋が出土している。

小皿　156～158の３個体を図化した。３個体とも、底部から体部内外面が指オサエ、口縁部が横ナデ調整により仕上げられている点は、特徴を同じくする。ただし、法量的に156・158と157とでは大きく異なり、157は器高0.9cmとかなり浅くなっている。また、156は口縁部が外方に折り返すような強い横ナデ調整により仕上げられている。

鍋　159～162の４個体を図化した。それぞれ、口縁部形態及び調整法において特徴が異なる。

159は、内傾する口縁部に短い鍔状の突帯が付くもので、口縁部は内外面が突帯を含めて横ナデ調整、体部が内外面ともナデ調整により仕上げられている。体部外面には煤の付着が認められる。

160は、く字形を呈する口縁部下に、断面三角形を呈する突帯が貼り付けられている。口縁部内外面および体部内面は横ナデ調整により仕上げられ、体部外面は平行叩きにより整形されている。体部外面には煤の付着が認められる。

161は、口縁部が内湾気味に直立する。口縁部と体部の境は、強い横ナデ調整により内面にわずかな稜が認められる。口縁部内外面は横ナデ調整、体部内面はハケ調整により仕上げられている。体部外面は、格子状の叩きにより整形されている。口縁部から体部にかけての外面には、煤の付着が認められる。

162は、159～161と比較して、法量的に浅いタイプである。斜外方に直線的にのび、端部を上方に拡張させている。口縁部と体部の境は明確ではないが、体部外面は平行叩きにより整形されている。他の部位については、横ナデ調整により仕上げられている。また、口縁部から体部にかけての外面には、煤の付着が認められる。

瓦質土器　163の羽釜１個体が出土している。口縁部下に幅1.8cmの鍔が貼り付けられ、鍔から口縁部にかけて横ナデ調整により仕上げられている。鍔直下の体部外面は指オサエにより仕上げられている。

備前焼　壷・甕・擂鉢の各器種が出土している。

壷　164の１個体を図化した。口縁部は大きく折り返され、玉縁状を呈する。体部内面がヘラナデ調整により仕上げられている以外は、横ナデ調整により仕上げられている。

甕　165の１個体を図化した。壷同様、口縁部が大きく折り返され、扁平な玉縁状を呈する。内外面とも、横ナデ調整により仕上げられている。この他、体部の小片が数点出土している。

擂鉢　166～170の５個体を図化した。底部を中心に残存する170以外は、口縁部を中心とした個体である。166～169の４個体の口縁部形態には、口縁部に対して直交する端面を有するタイプ（167）から、口縁端部を上方に大きく拡張するタイプ（169）まで、バリエーションが認められる。また、166・168はその中間形態と考えられる。この他、170の底部調整は、未調整である。また、168と170の内面は、使用痕が顕著である。

掘り形内　土師器・須恵器・備前焼が出土している。

土師器　小皿と鍋が出土している。

小皿は、174の１個体を図化した。底部内外面は指オサエ、口縁部内外面は横ナデ調整により仕上げられ、両者の境には明確な段差が認められる。

鍋は173の１個体を図化した。石組み内出土の159と、形態・調整法ともに同様の特徴を有する。ただし、体部から底部にかけての外面は、叩き整形後ヘラ削りが施されている。鍔状の突帯より下方外面には煤の付着が認められる。

須恵器　捏鉢の口縁部片が出土している。13世紀後半の特徴が認められる。

備前焼　擂鉢と甕が出土している。擂鉢は、口縁部片（171）と底部片（172）が出土している。口縁部片は、石組み内出土の169と同タイプである。底部片内面は、石組み内出土の底部片170同様、使用痕が顕著である。甕は、体部の小片が１片出土している。

時期　本来なら、石組み内出土土器が井戸の廃絶時期を、井戸掘り方内出土土器が井戸の掘削時期を示すものと考えられる。しかし、備前焼に顕著なように、井戸枠内出土土器には大きな時期差が認められる。この一因として、石組みの上部が破壊されており、その際に混入した遺物が含まれている可能性が考えられる。また、石組み内の埋土は、人為的に埋められたものであり、埋めるにあたって周囲の遺構を破壊し、その土砂をもって埋めている可能性も考えられる。また、先述したように、石組み内上層から出土した遺物はより新しい可能性が考えられる。よって、石組み内下層から出土した土器が廃絶期に近いものと考えられ、掘り形内出土土器についても、ほぼ同時期のものと考えられる。以上から、15世紀代後半（中世Ⅱ期：第19期）と考えられる。

（４）土坑

ＳＫ２０

検出状況　Ｄ－２区西部で検出した（第91図）。Ｐ13の東側に位置する。他の遺構との切り合い関係はなく、完存する。

形状・規模　平面形は楕円形を呈し、長軸方向で63cm、その直交方向で44cmを測る。横断面は皿形を呈し、最深部における検出面からの深さは、14cmを測る。

埋没状況　埋土は、褐灰色シルト質極細砂１層からなる。

出土遺物　須恵器の椀の口縁部片が出土しているが、小片のため図化できなかった。鎌倉時代前半の特徴を有する個体である。

時期　出土土器から、13世紀を中心とした時期（第18期）と判断される。

ＳＫ２１

検出状況　Ｄ－２区中央部で検出した（第92図）。ＳＫ22・ＳＤ29の南側に位置する。遺構の多くは南側調査区外に拡がり、全体の規模の推定は困難である。また、当遺構に関しては、その残存する形状から、溝状遺構もしくは凹地になる可能性も否定できないが、本報告では土坑として報告する。他の遺構との切り合い関係は認められない。

形状・規模　平面形は舌状を呈し、長軸方向で5.25ｍ残存し、その直交方向で3.30ｍを測る。横断面は皿形を呈し、最深部における検出面からの深さは、わずか10cmである。

埋没状況　埋土は、暗褐灰色シルト質極細砂１層からなる。その層相から判断して、人為的に埋められたものと考えられる。

出土遺物　須恵器が出土している。椀と捏鉢の口縁部片が出土しているが、小片のため図化できなかった。この他、甕の体部片も出土している。

なお、当遺構内からは、市之郷廃寺に伴うと考えられる瓦類が数点出土している。これらの瓦類については、当遺構の埋土の一部と考え、ＳＥ05同様、当遺構に伴う遺物としては取り扱わないこととする。

時期　出土土器から、中世Ⅱ期（第19期）と判断される。

ＳＫ２２（写真図版38）

検出状況　Ｄ－２区中央部で検出した（第92図）。ＳＫ21・ＳＤ29の北側に位置する。他の遺構との切り合い関係は認められず、完存する。

形状・規模　平面形は方形に近い楕円形をなし、長軸方向で76cmを測り、その直交方向で69cmを測る。横断面は皿形を呈し、最深部における検出面からの深さは14cmである。

埋没状況　埋土は、灰白色シルト質極細砂～細砂１層からなり、その層相から判断して、人為的に埋められたものと考えられる。

出土遺物　須恵器と土師器の小片が出土している。いずれも、器種の特定は困難である。

時期　出土土器および埋土の特徴から、13世紀代（第18期）と判断される。

ＳＫ２３（写真図版38）

検出状況　Ｄ－２区中央部東側で検出した（第92図）。ＳＫ24の北側に位置する。飛鳥時代～奈良時代の溝ＳＤ24と切り合い関係にあり、ＳＤ24の一部を切っている。このため、当遺構は完存する。

形状・規模　平面形はほぼ円形を呈し、その規模は1.61ｍ×1.54ｍである。横断面は逆台形を呈し、最深部における検出面からの深さは46cmである。

埋没状況　埋土は、褐灰白色シルト質極細砂１層からなり、埋土中には瓦片や小礫が比較的多く含まれていた。その層相から判断して、人為的に埋められたものと考えられる。

出土遺物　土師器と青磁碗が出土している。土師器は小片のため器種の特定は困難である。青磁碗は底部片が出土している。

時期　青磁碗の特徴から、中世Ⅱ期（第19期）と判断される。

ＳＫ２４

検出状況　Ｄ－２区中央部東側で検出した（第92図）。ＳＫ23の南側に位置する。また、ＳＫ25と平面的に重複するが、ＳＫ25を切っている。このため、当遺構は完存する。

形状・規模　平面形はほぼ円形を呈し、その規模は1.20ｍ×1.18ｍを測る。横断面は逆台形を呈し、最深部における検出面からの深さは40cmである。

埋没状況　埋土は、褐色シルト質極細砂をブロック状に含む灰色シルト質極細砂１層からなる。埋土中には、中礫も含まれている。その層相から判断して、人為的に埋められたものと考えられる。

出土遺物　土器と鉄製品が出土している。

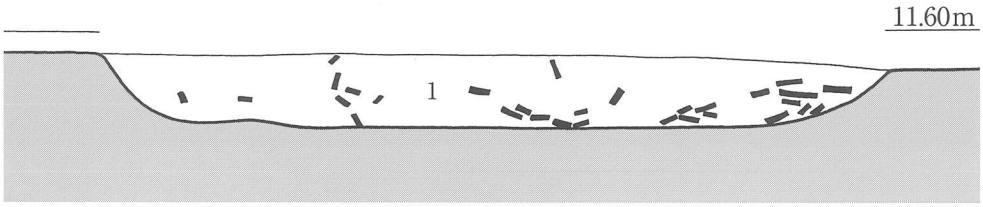
土器　備前焼の甕の体部～底部片が出土している。

鉄製品　Ｆ15の１点が出土している（図版80）。平面形は切先状を呈するが、厚さは1.0cm～1.1cmと一定している。完存しないため、用途を明確にすることは困難である。４cm残存する。

時期　出土土器の特徴から、中世Ⅱ期（第19期）判断される。

ＳＫ２５（写真図版38）

検出状況　Ｄ－２区中央部東側で検出した（第92図）。ＳＫ23の南側に位置する。また、当遺構の北側はＳＫ24と平面的に重複し、ＳＫ24に切られている。また、当遺構の南端の一部は調査区外まで拡がっているが、その範囲は極一部と考えられる。



１．中礫混じり灰白色シルト質極細砂　　0　2m

第100図　ＳＫ25

形状・規模　平面形は変形した紡錘形をなし、その規模は長軸方向で6.97m残存し、その直交方向は4.22mを測る。横断面は逆台形を呈し、最深部における検出面からの深さは39cmである。

埋没状況　埋土は、中礫混じり灰白色シルト質極細砂１層からなる（第100図）。また、埋土中には、市之郷廃寺に伴うと考えられる瓦類が多量に含まれていた。以上から、人為的に埋められたものと判断される。

出土遺物　土器と鉄製品が出土している。

土器　土師器・須恵器・備前焼・青磁の各器種が出土している（図版９）。

土師器　小皿と鍋が出土しているが、図化できたのは179の小皿１個体である。179は底部外面が指オサエにより仕上げられているが、底部から口縁部にかけての内面はハケ調整により仕上げられている。鍋は、口縁部片と体部片が、小片ではあるが比較的多く出土している。

須恵器　椀と甕が出土しているが、いずれも小片のため図化できなかった。椀は、口縁部と底部片が、甕は体部片が比較的多く出土している。

備前焼　壷の口縁部片（177）が出土している。口縁部は大きく折り返され、玉縁状を呈している。

青磁　碗が出土している（178）。龍泉窯系の碗である。

鉄製品　Ｆ５とＦ９の２点が出土している（図版80・写真図版184）。

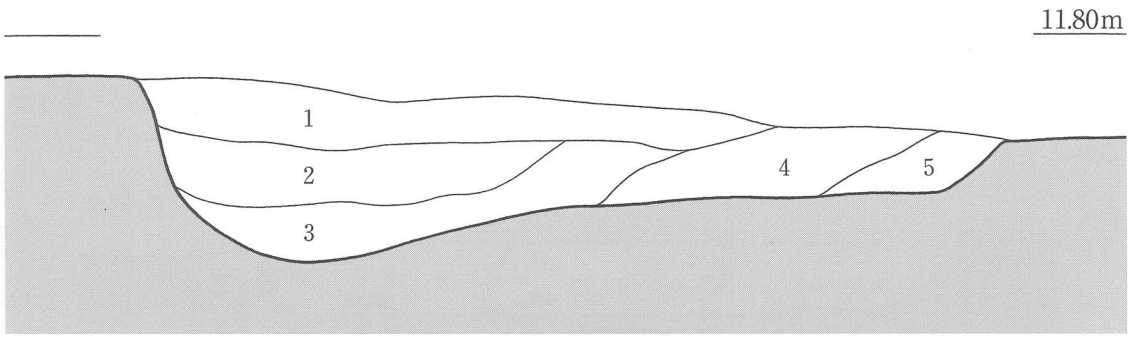
Ｆ５はほぼ完存する鉄釘である。7.65cm残存し、横断面は7.5mm×7mmの方形を呈する。頭部は叩き延ばされ、頭巻状を呈する。Ｆ９は一辺1.5cmの柱状を呈するものであるが、用途を明確にすることはできない。一端を欠き、7.4cm残存する。

時期　出土土器の特徴から、特に備前焼の特徴から、15世紀代（第19期）と判断される。

ＳＫ２６

検出状況　Ｄ－２区中央部東側で検出した（第92図）。ＳＫ27の西側に隣接する。古墳時代の竪穴住居跡ＳＨ08と切り合い関係にあるが、これを切っている。このため、当遺構は完存する。

形状・規模　平面形は変形した隅丸方形をなし、その規模は2.50m×2.36mを測る。当土坑は二段に掘り込まれ、上段の横断面は逆台形、下段の横断面は浅いＵ字形を呈する（第101図）。最



１．褐色シルト質極細砂混じり
　　灰白色シルト質極細砂（中礫多く含む）
２．暗褐色シルト質極細砂
３．灰色礫層（小礫）
４．暗褐色シルト質極細砂（炭・大礫含む）
５．黄褐色シルト質極細砂

0　2m

第101図　ＳＫ26

深部における検出面からの深さは44cmである。

埋没状況　５層からなる（第101図）。２層と５層には、中礫～大礫が多く含まれていることから、人為的に埋められたものと考えられる。

出土遺物　土師器・須恵器・備前焼の各器種が出土している。

土師器は鍋の口縁部片、須恵器は甕の体部片、備前焼は甕の体部と底部片が出土している。いずれも小片のため図化できなかった。

時期　出土土器がいずれも小片のため、時期の特定は困難である。ただし、備前焼が出土していることから、中世Ⅱ期（第19期）と判断される。

ＳＫ２７

検出状況　Ｄ－２区中央部東側で検出した（第92図）。ＳＫ26の東側に隣接する。他の遺構との切り合い関係は認められず、当遺構は完存する。

形状・規模　平面形は歪んだ隅丸三角形状を呈し、その規模は1.23ｍ×1.13ｍを測る。横断面は皿形を呈し、最深部における検出面からの深さは10cmである。

埋没状況　中礫を含む灰色シルト質極細砂１層からなる。瓦類も多く含まれていたことから、人為的に埋められたものと考えられる。

出土遺物　須恵器の甕の体部片が１片出土している。なお、市之郷廃寺に伴うと考えられる瓦類が多量に出土しているが、土砂の一部として埋められたものと判断され、出土遺物としては扱わないこととする。

時期　出土土器がいずれも小片のため、時期の特定は困難であるが、須恵器の特徴から、中世Ⅰ期（第17期・第18期）を中心とした時期と判断される。

ＳＫ２８

検出状況　Ｄ－２区東側で検出した（第93図）。ＳＫ29の北側に位置する。他の遺構との切り合い関係は認められないが、北側は攪乱を受け、残存しない。全体の約1/2検出できたものと推測される。

形状・規模　平面形は楕円形を呈していたものと推定される。その規模は、長軸方向で64cm検出し、その直交方向で73cmを測る。横断面は皿形を呈し、最深部における検出面からの深さは18cmである。

埋没状況　褐色シルト質極細砂混じり灰色シルト質極細砂１層からなる。層相から判断して、人為的に埋められたものと考えられる。

出土遺物　須恵器の甕の体部片が１片出土している。この他、土師器片が出土しているが、器種の特定も困難である。

時期　出土土器が小片のため、時期の特定は困難であるが、ＳＫ27同様、中世Ⅰ期を中心とした時期と判断される。

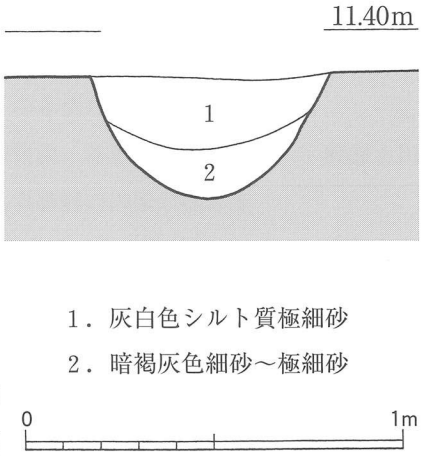
ＳＫ２９

検出状況　Ｄ－２区東側で検出した（第93図）。ＳＫ28の南側に位置する。一部、柱穴を切ってい

るが、基本的には、当遺構は完存する。

形状・規模　平面形はほぼ円形を呈し、その径は68cmを測る。横断面はＵ字形を呈し、最深部における検出面からの深さは33cmである。

埋没状況　埋土は２層からなる（第102図）。層相から判断して、人為的に埋められたものと考えられる。



第102図　ＳＫ29

出土遺物　土師器・須恵器・白磁の各器種が出土している。

土師器　小皿・甕・鍋が出土している。図化できたのは、180の鍋１個体である（図版９）。180は、口縁部内面を肥厚させ、段を有し、内外面とも横ナデ調整により仕上げられている。体部外面は平行叩きにより整形され、内面はハケ調整後ナデ調整により仕上げられている。また、底部付近外面には、ヘラ削りが施されている。また、この部位には煤の付着が認められる。

小皿と甕については、口縁部片が出土しているが、小片のため図化できなかった。

須恵器　椀と甕が出土しているが、いずれも小片のため図化できなかった。椀は、口縁部片が、甕は体部片が１片ずつ出土している。

白磁　碗の体部片が出土している。

時期　土師器の鍋の特徴から、中世Ⅱ期（第19期）と判断される。

ＳＫ３０

検出状況　Ｄ－２区東側で検出した（第93図）。ＳＫ31の西側、ＳＫ34の北側に隣接し、ＳＥ05の東側に位置する。ＳＫ31と切り合い関係にあり、肩部がわずかに切られている。当遺構の北側は調査区外まで拡がっている。

形状・規模　平面形は不定形で、その規模は2.60ｍ×3.60ｍを測る。横断面は皿形を呈し、最深部における検出面からの深さはわずか12cmである。平面形と検出面からの深さを考慮に入れると、凹地の可能性が考えられる。

埋没状況　埋土は、褐色砂質シルト混じり灰色砂１層からなる。層相から判断して、人為的に埋められたものと考えられる。

出土遺物　土師器・須恵器・白磁の各器種が出土している（図版９）。

土師器　小皿と鍋が出土している。

小皿　186の１個体を図化した。底部から口縁部にかけての外面は指オサエにより、内面はハケ調整後ナデ調整により、仕上げられている。

鍋　182～185の４個体を図化した。182と183は同タイプに分類されるもので、内傾する口縁部外面に短い鍔状の断面三角形の突帯を有する。ただし、口縁端部の形態は、特徴を異にし、突帯の貼付については確認できなかった。183は端面を有するのに対して、182には端面は認められない。183は、突帯から上側と口縁部～体部内面は横ナデ調整により仕上げられ、体部外面は平行叩きにより整形されている。また、体部最大径部以下の外面には、煤の付着が認められる。

184と185は、鉢形を呈する鍋で、口縁部を拡張させている。内外面とも横ナデ調整により仕上げられている。また、184の体部外面にはわずかに平行叩きを観察することができる。また、184は口縁部以下外面に、185は体部外面に、煤の付着が認められる。

須恵器　捏鉢が１個体出土している（181）。口縁端部の一部を欠くが、端部は上方に拡張されているものと考えられる。

備前焼　擂鉢の体部片が１片出土している。

青磁　碗の口縁部片が１片出土している。

時期　出土土器の特徴から、中世Ⅱ期（第19期）と判断される。

ＳＫ３１

検出状況　Ｄ－２区東側で検出した（第93図）。ＳＫ30の東側、ＳＫ32・ＳＫ33の西側に隣接する。他の遺構との切り合い関係は認められないが、当遺構の北側の一部は調査区外まで拡がっている。

形状・規模　平面形は無花果形を呈し、長軸方向で2.45ｍ検出し、その直交方向で1.50ｍを測る。横断面はＵ字形を呈し、最深部における検出面からの深さは47㎝である。

埋没状況　埋土は、上から白灰色極細砂～粗砂（１層）と暗灰色極細砂（２層）の２層からなる。２層が堆積後、再掘削が行われ、その後１層が堆積している。１層は、人為的に埋められたものと考えられる。

出土遺物　土師器と備前焼が出土している。

土師器　鍋の口縁部片と体部片が１片ずつ出土しているが、小片のため図化できなかった。体部片外面には、煤の付着が認められる。

備前焼　甕の体部片が１片出土している。

時期　出土土器がいずれも小片のため、時期の特定は困難である。ただし、備前焼の出土から、中世Ⅱ期（第19期）と判断される。

ＳＫ３２

検出状況　Ｄ－２区東側で検出した（第93図）。ＳＫ31の東側に隣接する。他の遺構との切り合い関係は認められないが、当遺構の約1/2以上は北側の調査区外まで拡がっている。このため、検出できたのは1/2以下と推定される。

形状・規模　検出状況から判断して、平面形は隅丸方形もしくは円形を呈するものと考えられる。北側調査区壁における検出幅は、1.20ｍを測る。検出した範囲での横断面は皿形を呈し、最深部における検出面からの深さは14㎝である。

埋没状況　埋土は、上から褐色シルト質極細砂混じり灰白色極細砂・灰白色極細砂の２層からなる。層相から判断して、少なくとも上層については、人為的に埋め戻されたものと考えられる。

出土遺物　土師器と須恵器が出土している。いずれも小片のため、図化できなかった。

土師器　小皿の体部片が１片出土している。

須恵器　椀の口縁部片が１片出土している。

時期　出土土器の特徴から、11世紀後半（第16期）と判断される。

ＳＫ３３（写真図版38）

検出状況　Ｄ－２区東側で検出した（第93図）。ＳＫ31の東側に隣接する。他の遺構との切り合い関係は認められず、当遺構は完存する。

形状・規模　平面形は歪な楕円形を呈し、長軸方向で89cm検出し、その直交方向で60cmを測る。横断面は皿形を呈し、最深部における検出面からの深さは12cmである。

埋没状況　埋土は、灰白色極細砂１層からなる。層相から判断して、人為的に埋め戻されたものと考えられる。

出土遺物　土師器の小皿の口縁部片が、１片出土している。

時期　出土土器の特徴から、13世紀前半（中世Ⅰ期：第18期）と判断される。

ＳＫ３４

検出状況　Ｄ－２区東側で検出した（第93図）。ＳＫ30の南側に隣接する。他の遺構との切り合い関係は認められず、当遺構は完存する。

形状・規模　平面形はほぼ円形に近く、その規模は68cm×56cmを測る。横断面は皿形を呈し、最深部における検出面からの深さは12cmである。

埋没状況　埋土は、褐色シルトをブロック状に含む灰白色極細砂１層からなる。層相から判断して、人為的に埋められたものと考えられる。

出土遺物　土師器と須恵器が出土している。いずれも小片のため、図化できなかった。

土師器　鍋の体部片が１片出土している。

須恵器　甕の体部片が１片出土している。

時期　出土土器の特徴から、中世Ⅱ期（第19期）と判断される。

ＳＫ３５

検出状況　Ｄ－３区で検出した（第93図）。ＳＫ36の北側、ＳＤ30の東側に位置する。柱穴に切られている以外、他の遺構との切り合い関係は認められないが、当遺構は北側調査区外へ拡がっている。

形状・規模　全体を検出することはできなかったが、平面形は、方形もしくは長方形を呈するものと推測される。東西方向で2.80mを測り、南北方向で1.30m検出した。横断面は皿形を呈し、最深部における検出面からの深さは12cmである。

埋没状況　埋土は、褐色シルト質極細砂をロック状に含む暗褐色シルト質極細砂１層からなる。層相から判断して、人為的に埋められたものと考えられる。

出土遺物　土師器の小皿（187）と鍋が出土している（図版９）。187は、口縁部が１段の横ナデ調整、他がナデと指オサエにより仕上げられている。鍋については、体部片が出土しているが、小片のため図化できなかった。

時期　出土土器の特徴から、中世Ⅰ期と考えられる。

ＳＫ３６

検出状況　Ｄ－３区で検出した（第93図）。ＳＫ35の南側に位置する。他の遺構との切り合い関係

は認められないが、後世の攪乱を受け、約1/3を欠く。

形状・規模　平面形は隅丸方形を呈するものと推測される。南北方向で1.68mを測り、東西方向で1.30m検出した。横断面は逆台形を呈し、最深部における検出面からの深さは35cmである。

埋没状況　埋土は、褐色シルトをブロック状に含む灰色極細砂１層からなる。層相から判断して、人為的に埋められたものと考えられる。

出土遺物　須恵器の甕の体部片が数点出土している。

時期　出土土器の特徴から、12世紀後半（中世Ⅰ期：第17期）と考えられる。

（５）溝

計13条検出した。

ＳＤ２９

検出状況　Ｄ－２区中央部で検出した（第92図）。東西方向から南北方向に屈曲する溝である。他の遺構との切り合い関係は認められず、両端とも調査区内で収束している。

形状・規模　検出した長さは、東西方向で7.00m、南北方向で2.20mを測る。横断面は浅いＵ字形を呈し、最深部における検出面からの深さは10cmを測る。検出面における幅は38cm～52cmを測り、底部のレベルはほぼ一定している。

埋没状況　埋土は、灰色シルト質細砂～極細砂１層からなる。層相から判断して、人為的に埋められたものと考えられる。

出土遺物　土器と金属製品が出土している。

土器　須恵器と土師器が出土している。いずれも小片のため図化できなかった。

須恵器　椀の口縁部片と甕の体部片が出土している。

土師器　小皿の口縁部片と羽釜の鍔が出土している。

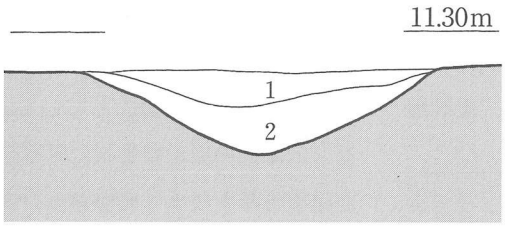
金属製品　鉄釘１点（Ｆ６）が出土している（図版80・写真図版184）。頭部を欠き、6.0cm存する。横断面は１cm×6.5mmの長方形を呈する。

時期　出土土器から、12世紀後半（中世Ⅰ期：第17期）と考えられる。

ＳＤ３０（写真図版39）

検出状況　Ｄ－２区東部で検出した（第93図）。北東方向から南北方向に弧状を呈する溝で、他の遺構との切り合い関係は認められない。ただし、南側は調査区外までのびており、全体を検出することはできなかった。

形状・規模　検出した長さは、7.94mを測る。横断面は浅いＶ形を呈し、最深部における検出面からの深さは22cmを測る。検出面における幅は、北東部で80cm、南端部で3.48mと、両端で大きく異なる。底部の



1．灰白色極細砂～細砂
2．灰白色中礫混じり細砂～粗砂

第103図　ＳＤ30

レベルは、北東部で標高11.15m、南端部で標高10.90mと、南側へ傾斜している。

埋没状況　埋土は、２層からなる（第103図）。

出土遺物　土師器の鍋が出土している。口縁部片と体部片が出土しているが、いずれも小片のため図化できなかった。

時期　出土土器から、14世紀代（中世Ⅱ期：第19期）と考えられる。

ＳＤ３１

検出状況　Ｄ－２区東部で検出した（第93図）。ほぼ南北方向に直線的にのびる溝で、南端部はＳＤ33と合流している。両遺構間の切り合い関係は、調査では明確にできなかった。また、東側に隣接するＳＥ05と切り合い関係にあり、これを切っている。北端部は調査区内で収束している。

形状・規模　検出した長さは、6.41mを測る。横断面は皿形を呈し、最深部における検出面からの深さは９cmを測る。検出面における幅は、60cm～96cmを測る。底部のレベルは、ほぼ一定している。

埋没状況　埋土は、灰白色シルト質極細砂１層からなる。層相から判断して、人為的に埋められたものと判断される。

出土遺物　全く出土していない。

時期　出土土器からの時期の特定は困難であるが、ＳＥ05との切り合い関係、およびＳＤ33との関係から、中世Ⅱ期以降と判断される。

ＳＤ３２

検出状況　Ｄ－２区東部で検出した（第93図）。東西方向から南北方向にほぼ鍵形に屈曲する溝で、両端ともＳＤ33に合流している。ただし、ＳＤ33との前後関係は明確にできず、両遺構がほぼ同時期に機能していた可能性も考えられる。ＳＤ33の北側に位置する。他の遺構との切り合い関係は認められない。

形状・規模　検出した長さは、東西方向で4.10m、南北方向で1.50mの、計5.60mである。横断面は皿形を呈し、最深部における検出面からの深さはわずか６cmである。検出面における幅は、30cm～79cmを測る。底部のレベルは、ほぼ一定している。

埋没状況　埋土は、灰白色細砂～極細砂１層からなる。

出土遺物　土師器と備前焼が出土している。

土師器　小皿・鍋・甕が出土している。図化できたのは、188の鍋１個体である（図版10）。188は、口縁部内面が突帯状に肥厚し、内外面が横ナデ調整により仕上げられている。体部外面は平行叩きにより成形され、内面はナデ調整により仕上げられている。また、口縁部付近の体部には、焼成後の穿孔が１箇所認められる。口縁部から体部にかけての外面には、煤が多量に付着している。

小皿は底部片が、甕は口縁部片が出土している。甕の外面には煤の付着が認められる。

備前焼　甕の体部片が２片出土している。

時期　ＳＤ33との関係、および出土土器から、第19期（中世Ⅱ期）と判断される。

ＳＤ３３（写真図版39）

検出状況　Ｄ－２区東部で検出した（第93図）。南西－北東方向に直線状にのびる部分と、方形気味の土坑状を呈する部分からなる。本来は、１条の溝と１基の土坑として、別々に報告すべきかもしれないが、両者を明確に分けることができなかったため、ここでは１条の溝状を呈する遺構として報告する。北東端が土坑状を呈し、溝状を呈する部分の南西端は調査区外までのびている。ＳＤ31・ＳＤ32・ＳＥ05の南側に位置する。

形状・規模　検出した長さは、溝状を呈する箇所で5.60ｍを測る。横断面は逆台形を呈し、最深部における検出面からの深さは38㎝である。検出面における幅は1.60ｍを測る。土坑状を呈する箇所の規模は、4.25ｍ×4.65ｍである。底部のレベルは、土坑状を呈する箇所より溝状部分の南西端の方が約15㎝低くなっている。

埋没状況　埋土は、４層からなる（第104図）。少なくとも、上の２層は人為的に埋められた層である。３層についても、人為的に埋められた可能性がたかい。

出土遺物　土師器・須恵器・備前焼・丹波焼・青磁が出土している（図版10）。

土師器　小皿・鍋・鉢が出土している。

小皿　190・191の２個体が出土している。２個体とも同じ特徴を有するもので、底部は指オサエとナデ調整、口縁部は１段の横ナデ調整により仕上げられている。

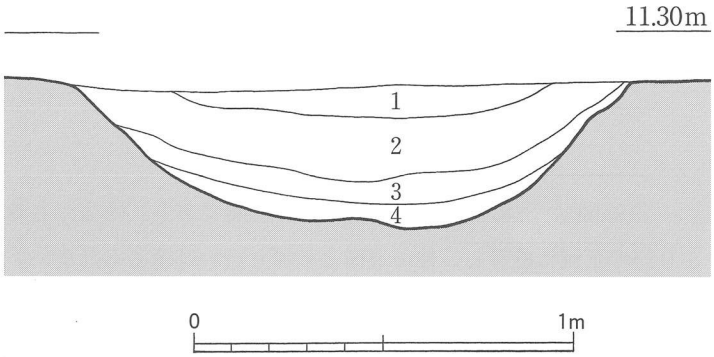
鍋　192～197の６個体が出土している。192～196は、いずれも口縁部を中心に残存するが、口縁部の特徴はほぼ同じである。内傾する口縁部外面には、短い鍔状を呈する断面三角形の突帯が認められる。特に194～196の突帯は、貼り付けられていることが観察できた。体部外面は平行叩きにより成形され、口縁部内外面は横ナデ調整、体部内面はナデ調整により仕上げられている。体部外面には煤の付着が認められる。

197は、体部から口縁部にかけて外方に直線的に開き、体部に対して口縁部の器壁が厚く仕上げられている。口縁部内外面は横ナデ調整、体部内面は指オサエとナデ調整により、仕上げられている。体部外面は、平行叩きにより成形されている。口縁部から体部にかけての外面には、煤の付着が認められる。

鉢　198の１個体が出土している。口縁部内外面は横ナデ調整、体部内外面は指オサエとナデ調整により、仕上げられている。

須恵器　捏鉢が２個体（199・200）出土している。いずれも、口縁部を中心に残存する。

備前焼　甕（201）と擂鉢（203）が出土している。甕は、口縁端部が折り返され、玉縁状を呈する。擂鉢は、口縁端部が、上方に大きくつまみ上げられている。



1．褐灰色シルト質極細砂（埋め土）
2．灰白色細砂～極細砂（埋め土）
3．灰白色シルト質極細砂混じり褐色シルト質極細砂
4．灰白色シルト質極細砂

第104図　ＳＤ33

丹波焼　甕が１個体（202）出土している。口縁部は、端部を折り返えした後、外上方にひきのばし、いわゆるＮ字形を呈する。口縁部内外面は横ナデ調整、体部内外面はナデ調整により仕上げられている。

青磁　碗の体部片と底部片が出土している。

時期　出土土器から、中世Ⅱ期（第19期）と判断される。

ＳＤ３４（写真図版39）

検出状況　Ｄ－２区東部で検出した（第93図）。南北方向に直線状にのびる溝である。南端は調査区内で収束し、北側は調査区外までのびている。北東端が土坑状を呈し、溝状を呈する部分の南西端は調査区外までのびている。ＳＤ35と切り合い関係にあり、ＳＤ35を切っている。ＳＥ05の東側、ＳＫ30の西側に位置する。

形状・規模　検出した長さは1.50ｍである。横断面は皿形を呈し、最深部における検出面からの深さは14cmを測る。検出面における幅は、74cmを測る。底部のレベルは、ほぼ一定している。

埋没状況　埋土は、中礫を含む灰白細砂１層からなる。層相から判断して、人為的に埋められたものと考えられる。

出土遺物　土師器・須恵器・青磁が出土している。土師器と須恵器については、小片のため図化できなかった。

須恵器　小皿の底部片が出土している。

土師器　大皿の底部と甕の体部片が出土している。

青　磁　189の碗１個体が出土している（図版10）。龍泉窯系の碗である。

時期　出土土器、特に青磁碗の出土から、中世Ⅱ期（第19期）と判断される。

ＳＤ３５

検出状況　Ｄ－２区東部で検出した（第93図）。南北方向に直線状にのびる溝である。南側はＳＤ33に、北側はＳＤ34に、それぞれ切られている。

形状・規模　検出した長さは、2.84ｍである。横断面は皿形を呈し、最深部における検出面からの深さはわずか４cmである。検出面における幅は、20cmを測る。底部のレベルは、わずかに南側へ傾斜している。

埋没状況　埋土は、褐色砂質シルトを含む灰白細砂１層からなる。層相から判断して、人為的に埋められたものと考えられる。

出土遺物　土師器の鍋の口縁部片が２点出土している。いずれも小片のため図化できなかった。

時期　ＳＤ33・ＳＤ34との関係および出土土器から、13世紀（中世Ⅰ期後半）と判断される。

ＳＤ３６

検出状況　Ｄ－２区東部で検出した（第93図）。南北方向に直線的にのびる溝である。両端とも調査区内で収束している。ＳＤ35の東側に位置し、他の遺構との切り合いは認められない。

形状・規模　2.32ｍ検出した。横断面は浅いＵ字形を呈し、最深部における検出面からの深さは８cmを測る。検出面における幅は、14cm～24cmを測る。底部のレベルは、ほぼ一定している。

埋没状況　埋土は、褐色砂質シルトを含む灰白細砂１層からなる。層相から判断して、人為的に埋められたものと考えられる。

出土遺物　須恵器の椀の底部片が１点出土している。いわゆる東播系の須恵器で、底部に糸切り痕が認められる。底部は、平高台が退化した形態をとる。

時期　出土土器から、12世紀後半（中世Ⅰ期：第17期）と判断される。

ＳＤ３７

検出状況　Ｄ－２区東部で検出した（第93図）。東西方向に直線状にのびる溝である。両端とも調査区内で収束している。ＳＤ33の東側に位置する。他の遺構との明確な切り合い関係は認められない。

形状・規模　検出した長さは、1.52ｍである。横断面は皿形を呈し、最深部における検出面からの深さはわずか３㎝である。検出面における幅は、16㎝～36㎝を測る。底部のレベルは、ほぼ一定している。

埋没状況　埋土は、褐色砂質シルトを含む灰白色細砂１層からなる。層相から判断して、人為的に埋められたものと考えられる。

出土遺物　土師器の鍋の体部片が１点出土している。

時期　出土土器から、13世紀代（中世Ⅰ期後半：第18期）と判断される。

ＳＤ３８（写真図版40）

検出状況　Ｄ－２区東部からＤ－３区にかけて検出した（第93図）。東西方向から南北方向にＬ字状に屈曲する溝である。西端は調査区内で収束するが、北端は調査区外までのびている。ＳＤ27の北側に位置する。他の遺構との切り合い関係は認められない。

形状・規模　検出した長さは、東西方向で14.24ｍ、南北方向で2.90ｍ、計17.14ｍに及ぶ。横断面は緩やかなＵ字形をなす。当溝の検出面は、東側～南側と北側～西側とでは明らかに異なり、前者のほうが約15㎝高いレベルで検出されている。

前者の検出面を基準とした最深部における深さは、49㎝である。検出面における幅は、75㎝～1.50ｍを測る。底部の標高は、北端部で10.78ｍ、屈曲部で11.07ｍ、西端部で11.12ｍと、西端部から北端部へと傾斜が認められる。

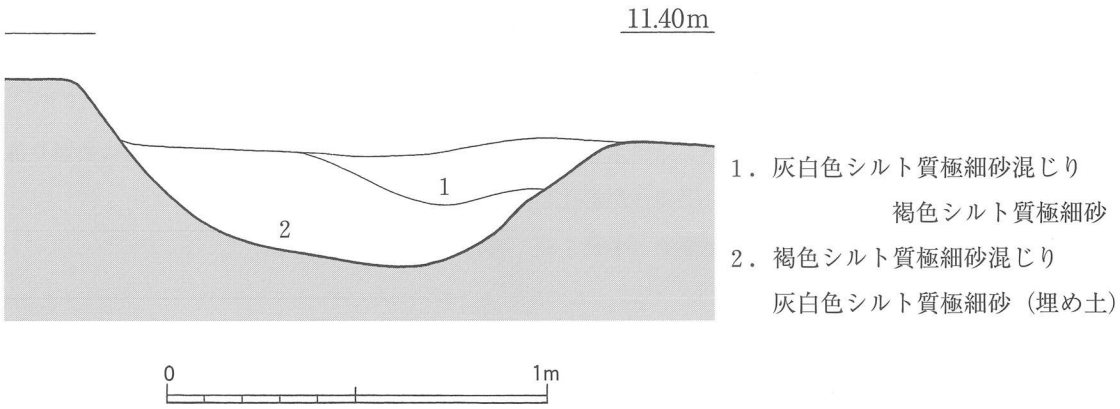
埋没状況　埋土は、２層からなる（第105図）。少なくとも下層に関しては、層相から判断して、人為的に埋められたものと考えられる。

ところで、当溝のＤ－２区の範囲内に限り、溝内に40㎝×20㎝大の砲弾形を呈する円礫が、その主軸を溝主軸方向に直交させて並べられていた（写真図版40）。東側に位置するＳＥ05の石材とほぼ同規模である。一見したところ、暗渠のようにも見受けられたが、円礫の下面は溝底部となっていた。これらの円礫を敷くと同時に、当溝が埋められているように観察された。

出土遺物　土器と鉄製品が出土している。

土器　土師器・須恵器・瓦質土器・備前焼・青磁が出土している（図版11）。

須恵器　208の１個体である。体部内外面は、指オサエの後横ナデ調整により、口縁部内外面は横ナデ調整により、仕上げられている。本品は還元焼成されておらず、一見したところ土



第105図　ＳＤ38

師器のようであるが、成形方法などから、須恵器と判断した。

他に、還元焼成された口縁部片も出土している。

土師器　小皿と鍋が出土している。

小皿　204と205の２個体が出土している。いずれも、底部から体部は指オサエとナデ調整、口縁部は１段の横ナデ調整により仕上げられている。ただし、法量的には異なる。

鍋　206･207･209･210の４個体が出土している。これらの鍋は、体部が袋状を呈する206と、鉢形を呈する207･209･210の２タイプに分類できる。206は、内傾する口縁部外面に、鍔状を呈する断面三角形の突帯が貼り付けられている。体部外面は平行叩きにより成形され、他は横ナデ調整により仕上げられている。207･209･210は、内湾する口縁部内面を肥厚させ、段をなす。体部外面は平行叩きにより成形され、内面はナデ調整により仕上げられている。その後、口縁部が内外面とも横ナデ調整により仕上げられている。なお、209･210の口縁部から体部外面にかけては、煤の付着が認められる。

瓦質土器　215の浅鉢１個体が出土している。内傾する口縁部外面には、高さ４㎜ほどの断面三角形を呈する突帯が２条認められ、その間に雷文が施文されている。体部外面がナデ調整により仕上げられている以外は、横ナデ調整により仕上げられている。

備前焼　211の擂鉢が出土している。口縁端部がわずかに上方につまみあげられている。内外面とも横ナデ調整により仕上げられている。

青　磁　212～214の３個体出土している。212は龍泉窯系の盤の口縁部と考えられる。213は、龍泉窯系の青磁碗である。214は同安窯系の青磁で、外面には櫛描文、内面には櫛描雷光文が施されている。底部はヘラ削りにより、高台が造り出されている。

鉄製品　鉄釘１点（Ｆ12）が出土している（図版80・写真図版184）。両端を欠き、くの字形に屈曲している。残存長は4.6㎝を測り、横断面は７㎜×９㎜の長方形を呈する。

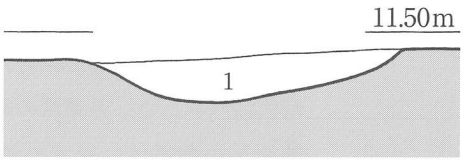
時期　出土土器から、中世Ⅱ期と判断される。しかし、後述するように（376ページ）、その掘削時期は、第13期（飛鳥～白鳳時代）まで遡る可能性が考えられる。

ＳＤ３９（写真図版40）

検出状況　Ｄ－３区で検出した（第93図）。南北方向に直線的な溝で、両端は調査区外までのびている。ＳＤ38の東側、ＳＫ35の西側に位置し、他の遺構との切り合いは認められない。

形状・規模　検出した長さは、10.66ｍである。横断面は皿形を呈し、最深部における検出面からの

深さは23cmである。検出面における幅は、北端部で3.48m、南端部で1.53mを測る。底部の標高は、北端部で11.30m、南端部で11.14mと、南側へ傾斜している。



1．灰白色細砂混じり褐色極細砂

0　2m

第106図　ＳＤ39

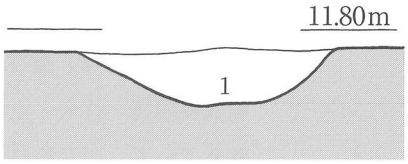
埋没状況　埋土は１層からなる（第106図）。層相から、人為的に埋められたものと判断される。

出土遺物　土師器と備前焼が出土しているが、いずれも小片のため図化できなかった。土師器は甕の口縁部片が、備前焼は擂鉢の底部片が出土している。

時期　出土土器から、14世紀代（中世Ⅱ期：第19期）と判断される。ただし、掘削時期については、飛鳥時代まで遡る可能性が考えられる（第５章第１節）。

ＳＤ４０

検出状況　Ｄ－３区東部で検出した（第91図）。南北方向に直線的にのびる溝である。南端は調査区外までのび、北端は調査区内で収束している。当溝と東西方向にのびるＳＤ41とはＴ字形に直交するが、両遺構間の切り合い関係を明らかにすることはできなかった。同時期に機能していた可能性も考えられる。ＳＢ12の東側に位置し、その方向性をほぼ同じくする。



1．灰白色細砂混じり
暗灰褐色細砂～極細砂

0　2m

第107図　ＳＤ40

形状・規模　検出した長さは7.33mである。横断面は逆台形を呈し、最深部における検出面からの深さは40cmを測る。検出面における幅は、1.04m～1.44mを測る。底部の標高は、ほぼ一定している。

埋没状況　埋土は、白灰色細砂をブロック状に含む暗灰褐色極細砂１層からなる。層相から判断して、人為的に埋められたものと考えられる。

出土遺物　須恵器の捏鉢の体部片が出土している。

時期　出土土器およびＳＢ12との方向性の一致から、中世Ⅰ期（第17期）と判断される。

ＳＤ４１

検出状況　Ｄ－３区東部で検出した（第91図）。東西方向に直線的にのびる溝である。東端は調査区外までのび、西端はＳＤ40と合流している。先述したように、ＳＤ40とはＴ字形に直交するが、両遺構間の切り合い関係を明らかにすることはできなかった。

形状・規模　検出した長さは、1.44mである。横断面はＵ字形を呈し、最深部における検出面からの深さは39cmを測る。検出面における幅は97cmを測る。底部の標高は、ほぼ一定している。

埋没状況　埋土は、暗灰褐色細砂～極細砂１層からなる。ＳＤ40の埋土とほぼ同じである。土器片・炭片を若干含む層で、その層相から判断して、人為的に埋められたものと考えられる。

出土遺物　土師器の小皿と甕の口縁部片が出土している。いずれも小片のため図化できなかった。

時期　出土土器およびＳＤ40との関係から、中世Ⅰ期（第17期）と判断される。

３．第２面（写真図版41・42）

当面で検出した遺構は、弥生時代と古墳時代に限られる。各地区の遺構分布とその時期との関係は、以下の通りである（第108図）。

C区　当地区で検出された遺構で、時期を明らかにできるのは、弥生時代に限られる。遺構としては、柱穴と木棺墓（ＳＸ02）が検出されている（第111図）。

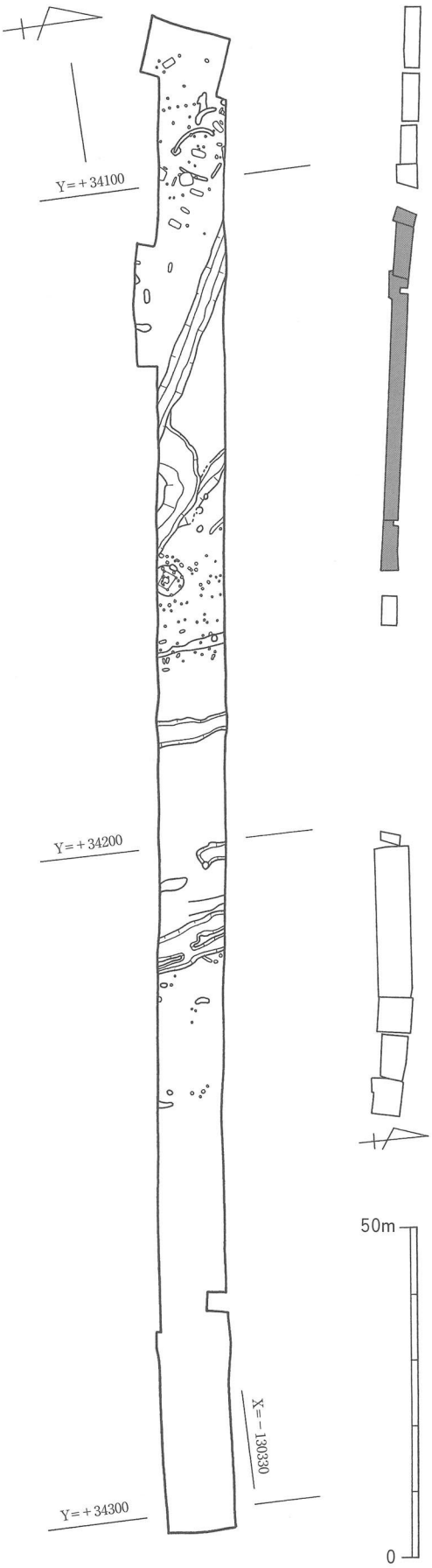
D－１区　当地区で検出された遺構で、時期を明確にできるのは弥生時代に限られる。検出した遺構としては、柱穴・周溝墓群・木棺墓群・土坑がある（第111図）。

D－２区　当該地区においても、時期を明確にできる遺構の大半は、弥生時代の遺構である。竪穴住居跡・柱穴・土坑・溝状遺構が検出されている。西半部に集中する傾向が認められる（第112図）。

当地区で、唯一、古墳時代の遺構が検出されている。溝状遺構と土坑である。ただし、その数はわずかで、溝状遺構に関しては、流路に近いものである。

D－３区　当該地区は、検出面が１面に限られることから、第２面としては遺構を検出していない。

D－４区　Ｄ－３区と同様である。



第108図　C・D区　第２面

Ⅰ：弥生時代

検出した遺構は、竪穴住居跡・柱穴・埋葬遺構・土坑・溝からなる。

各地区における遺構の検出状況は以下の通りである（第110図）。

C区　当地区では、柱穴と木棺墓１基（ＳＸ02）が検出されている（第111図）。この木棺墓については、Ｄ－1区にかけて検出された埋葬遺構群と一帯のものと考えられるが、ＳＸ02の方が時期的に古いため、この考えについては否定的である。

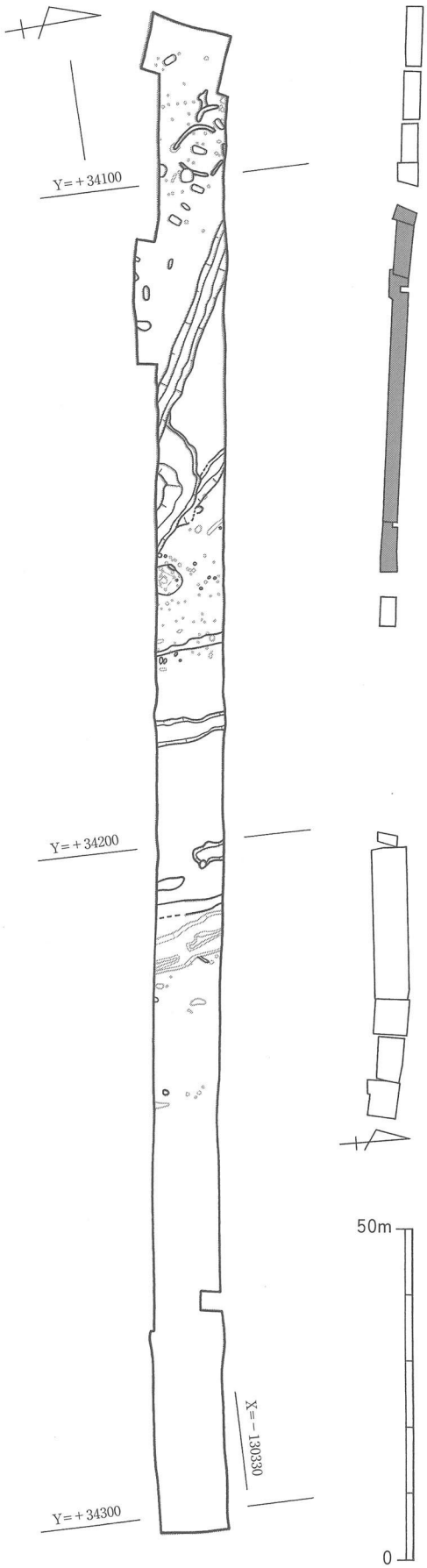
Ｄ－１区　Ｃ区で述べた、墓域の中心部分にあたる。周溝墓２基（周溝墓１・周溝墓２）を中心に、木棺墓・土坑墓が数基検出されている。この他、土坑・柱穴も検出されている（第111図）。

Ｄ－２区　竪穴住居跡・柱穴・土坑・溝状遺構が検出されている。当地区の西側、つまりＤ－1区との境付近で検出された溝は、Ｄ－1区で検出された墓域との区画をなすものと考えられ、この溝の東側で竪穴住居跡が検出されている（第112図・第113図）。

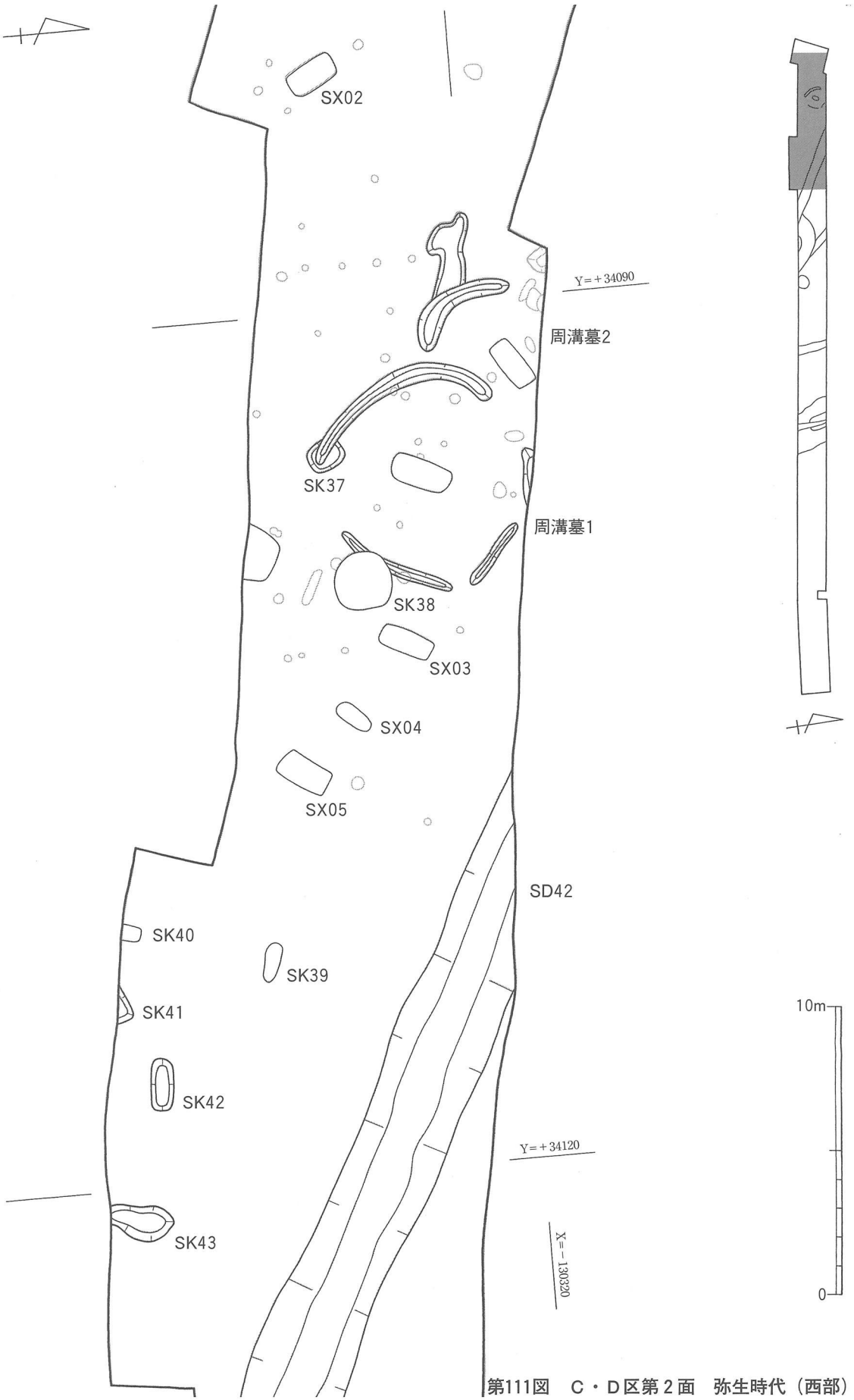
Ｄ－３区　先述したように、当地区では、当該期の遺構は検出されていない。

Ｄ－４区　Ｄ－３区と同様である。

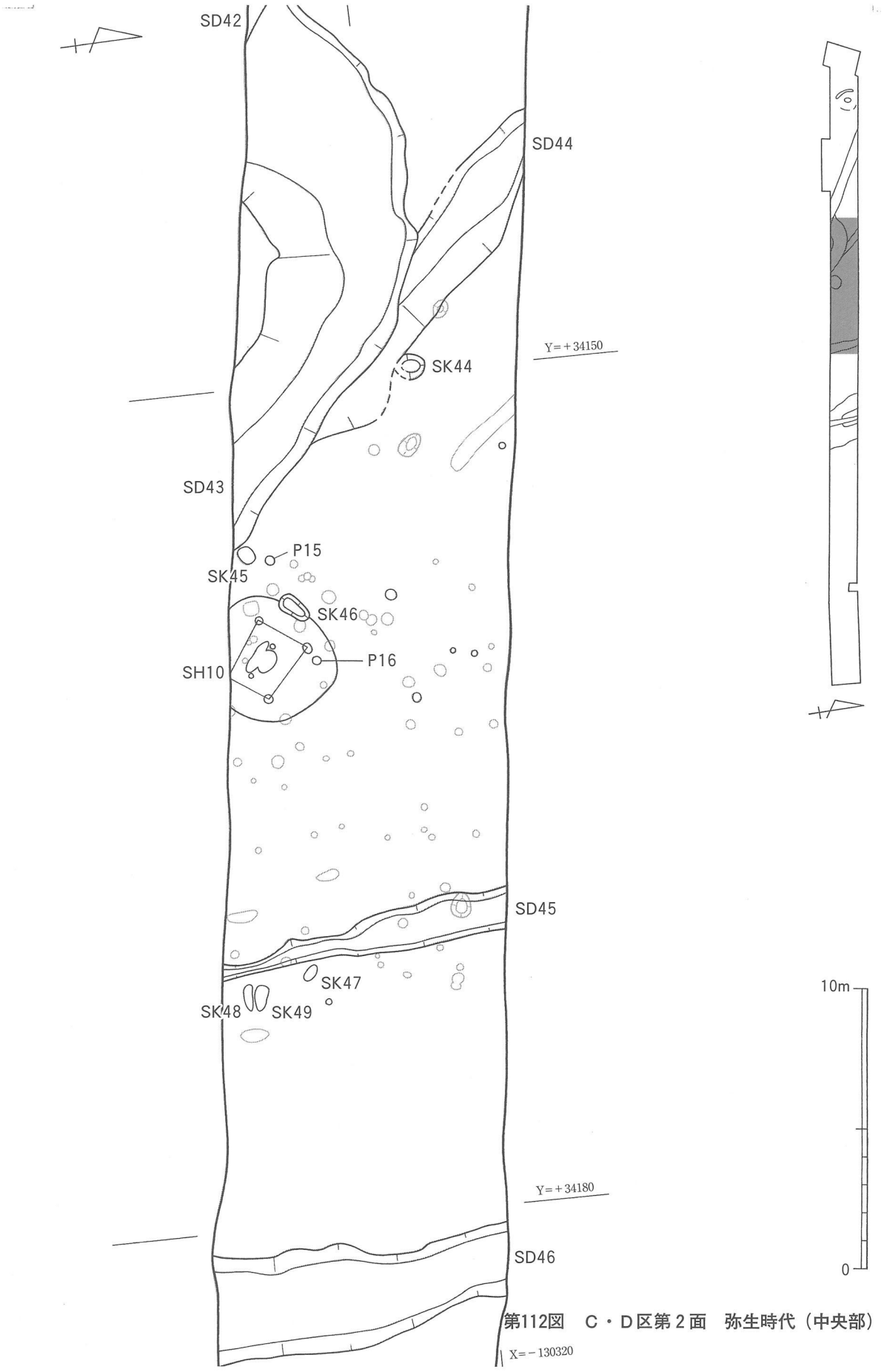
第109図　周溝墓１の検出



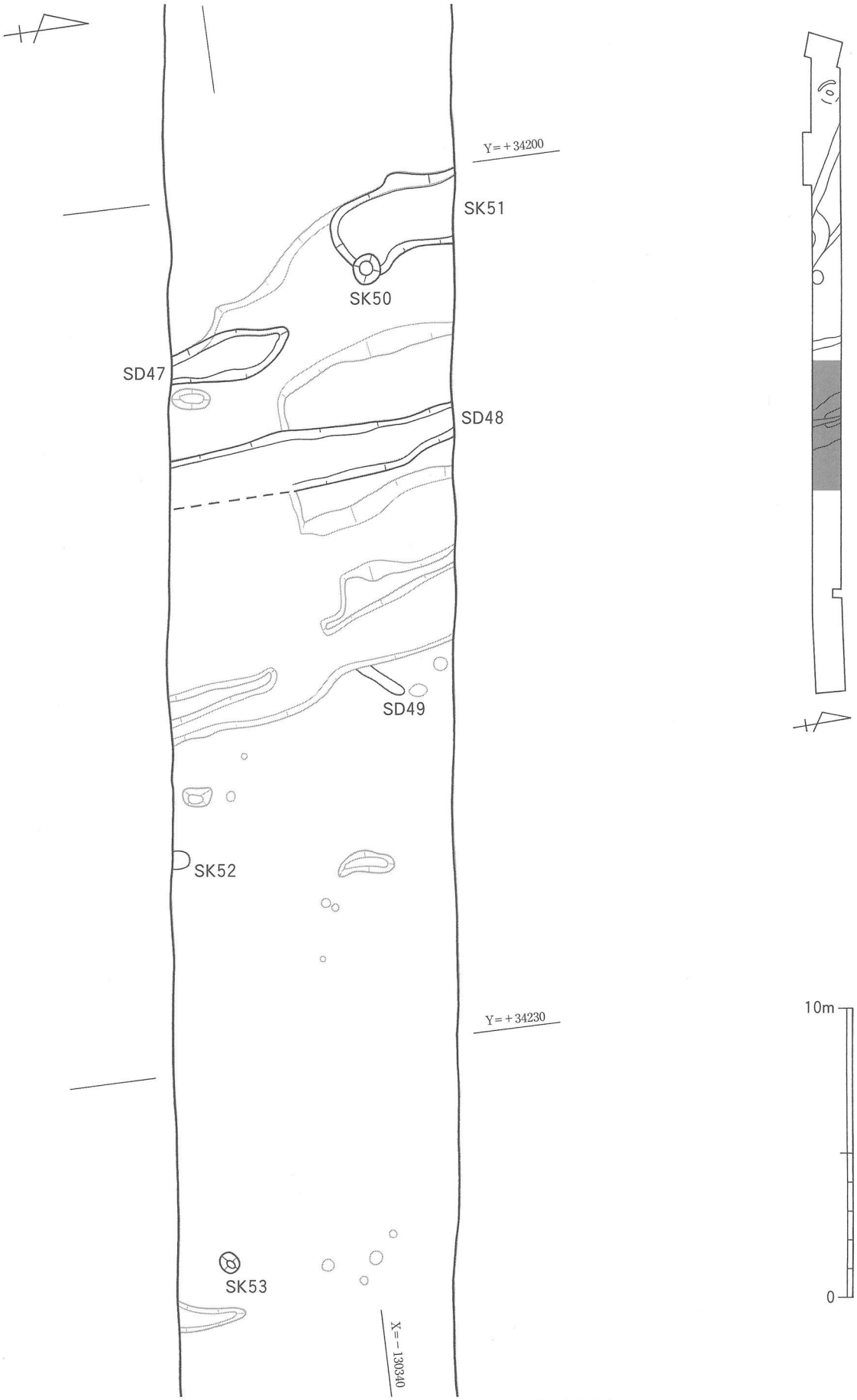
第110図　Ｃ・Ｄ区第２面　弥生時代



第111図　C・D区第２面　弥生時代（西部）



第112図　C・D区第2面　弥生時代（中央部）



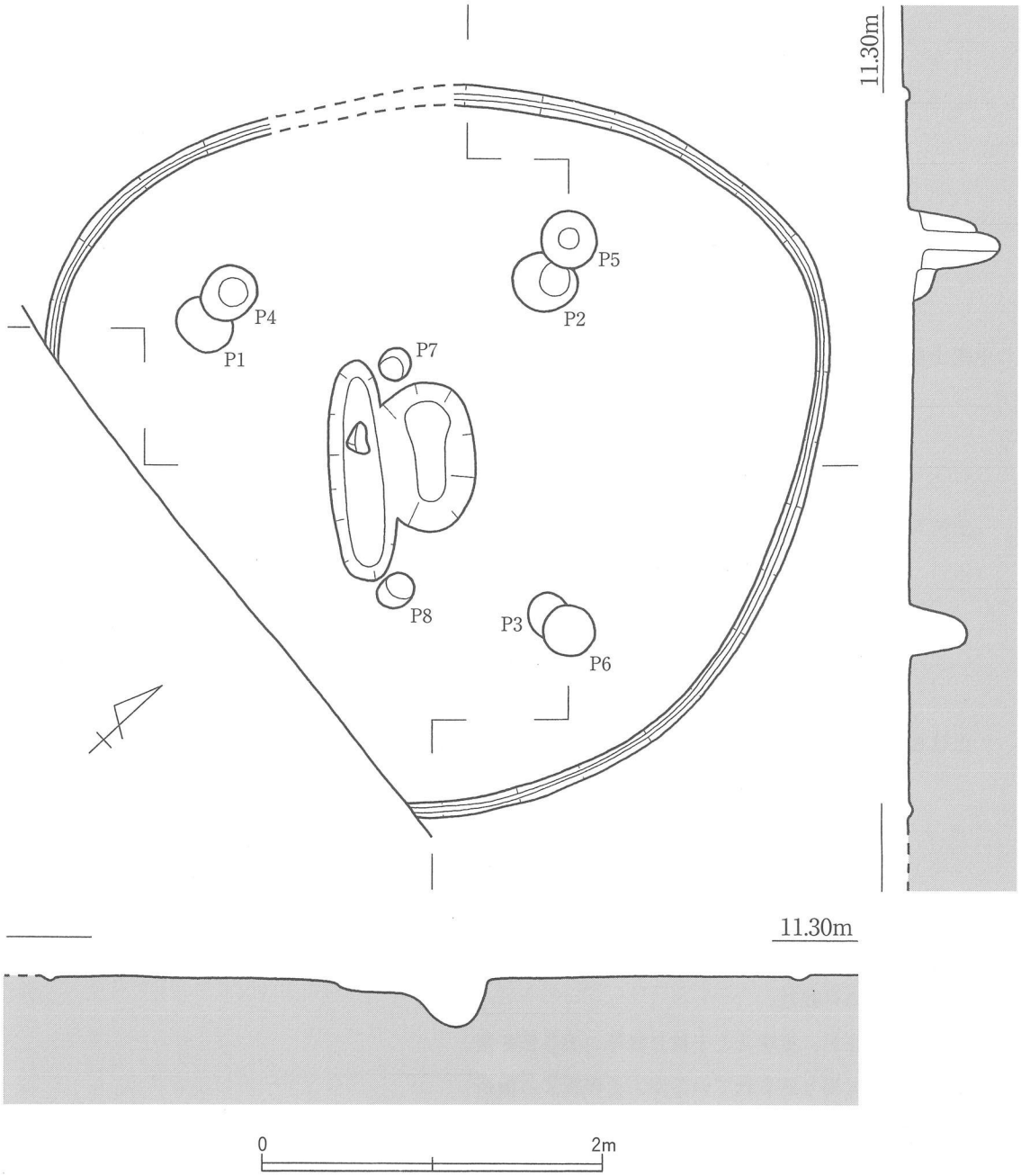
第113図　C・D区第２面　弥生時代（東部）

（1）竪穴住居跡

ＳＨ１０（写真図版43）

検出状況　Ｄ－３区西部で検出した（第112図）。ＳＤ43の東側に位置する。当住居跡の一部は、南側調査区外まで拡がるため、検出できたのは全体の約3/4に限られる。また、かなりの削平を受けたようで、周壁の立ち上がりは検出できず、わずかに周壁溝の検出によって、住居跡と確認できたものである。ＳＫ46と切り合い関係にあり、これを切っている。

形状・規模　平面形は、隅丸方形を呈するものと考えられるが、全体的に歪んでいる（第114図）。南東－北西方向に主軸をとり、主軸方向で4.27m、その直交方向で4.59mを測る。床面はほぼ平坦で、その検出した床面積は12.92㎡を測り、全体では約18㎡あったものと推定される。また床面の標高は、11.06mである。



第114図　ＳＨ10

付属施設　主柱穴・中央土坑・周壁溝を検出した。

主柱穴　６穴検出した（Ｐ１～Ｐ６）。

主柱穴は４本からなると考えられるが、南側の主柱穴については調査区外にあたり、検出できなかった。主柱穴は、建替えが行われたようで、各主柱穴とも切り合い関係が認められる。Ｐ１～Ｐ３とＰ４～Ｐ６がそれぞれセットとなり、後者が前者を切っている。これらの位置関係から、全体的に約15cm北東側へ平行移動している。なお、これに伴う周壁溝の掘り直しは認められない。

第26表　ＳＨ10柱穴規模一覧表

柱穴No.	平面規模（cm）	柱痕径（cm）	深さ（cm）
Ｐ１	23		5
Ｐ２	26	19	11
Ｐ３	36		8
Ｐ４	28	10	31
Ｐ５	22	14	52
Ｐ６	22		33

柱穴の規模は、６穴ともほぼ同じで、掘り形の径は22cm～36cmの円形を呈する。床面からの深さは５cm～52cmと差が目立つが、全体的にＰ１～Ｐ３は浅く、Ｐ４～Ｐ６は深い傾向が認められる。

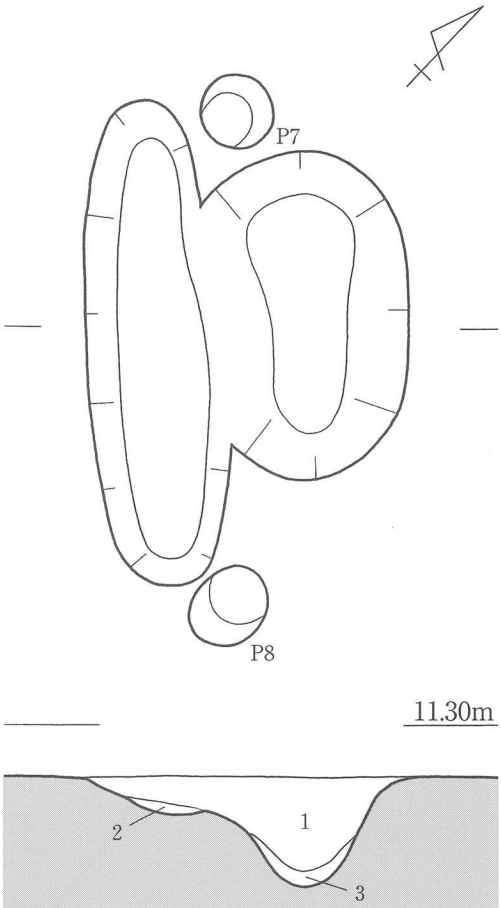
なお、各柱穴の規模は第26表のとおりである。また、柱穴間の距離は、Ｐ１－Ｐ２間・Ｐ２－Ｐ３間がそれぞれ2.05ｍ・1.98ｍ、Ｐ４－Ｐ５間・Ｐ５－Ｐ６間が2.00ｍ・2.30ｍを測る。

中央土坑　いわゆるイチマル土坑を検出した（第115図）。土坑Ａと土坑Ｂの２基がセットとなり、主軸方向は、当住居跡の主軸方向とほぼ一致する。

土坑Ａ　溝状を呈し、長軸方向で1.20ｍ、その直交方向で36cmを測る。横断面は皿形を呈し、中央部における床面からの深さは７cmを測る。埋土は、２層からなり、底部には炭層が認められた。

土坑Ｂ　平面形が方形傾向を示す楕円形を呈し、長軸方向で86cm、その直交方向で57cmを測る。横断面はＵ字形を呈し、最深部における床面からの深さは28cmである。埋土は２層からなるが、上層は土坑Ａと同じ段階で埋められている。下層にはわずかに炭片が認められた。

なお、土坑Ａと土坑Ｂはその掘り形を接して掘り込まれているが、その接する箇所を挟むように２穴の柱穴を検出した（Ｐ７・Ｐ８）。その規模は、主柱穴よりやや



第115図　ＳＨ10　中央土坑

小規模で、掘り形の径は18cm、床面からの深さは26cm（Ｐ７）～22cm（Ｐ８）を測る。

周壁溝　全周する。床面における幅は、６cmを測る。横断面は箱形に近いＵ字形を呈し、床面からの深さは２cmである。

出土遺物　土器と石器が出土している。

土器　甕と鉢が出土している（図版12）。甕は床面直上から（第116図）、鉢は柱穴から出土している。

甕　216･218の２個体が出土している。両個体とも同タイプに分類される甕である。216は、体部外面がハケ調整後下半を中心にヘラ磨きが、内面が下半をヘラ削り、上半を指オサエとナデ調整により、仕上げられている。口縁部は横ナデ調整により仕上げられ、端面には１条の凹線が施されている。外面には煤の付着が認められる。218も、216の下半と同様の調整法により仕上げられている。

鉢　217の１個体が出土している。口縁部は内外面とも横ナデ調整により仕上げられ、体部屈曲部外面に５条の凹線が施された後、刻み目が施されている。体部の調整については、摩滅が著しく観察できない。

石器　石鏃1点（Ｓ８）が出土している（図版78・写真図版180）。

時期　出土土器から判断して、弥生時代中期後半（第３期）と考えられる。

第116図　ＳＨ10　土器出土状況

（２）柱穴

数穴の柱穴を検出したが、これらの柱穴では建物を復元することはできなかった。しかし、これらの柱穴のいくつかからは、良好な資料が得られている。以下、これらの柱穴について、出土遺物を中心に報告する。

Ｐ１５

位置　Ｄ－３区西部で検出した（第112図）。ＳＨ10の西側、ＳＫ45の北側に位置する。他の遺構との切り合い関係は認められない。

出土遺物　鉢（220）が出土している（図版12）。口縁端部内面をつまみ出しにより、外面を貼り付けにより、内外両方向に拡張し平端面を形成する。外面拡張部には刻み目が施されている。また、口縁部外面には断面三角形を呈する突帯が１条貼り付けられ、その頂部にも刻み目が施されている。

時期　出土土器から判断して、弥生時代中期後半（第３期）と考えられる。

Ｐ１６

位置　Ｄ－３区西部で検出した（第112図）。ＳＨ10と平面的に重複して検出されたが、両者の前後関係を明らかにすることはできなかった。

出土遺物　壷（219）が頸部を中心に残存する（図版12）。頸部には、８条のヘラ描沈線紋が施されている。１条ごとに描かれており、それぞれ継ぎ目が認められる。全体的に摩滅が顕著であるが、内面は指オサエとナデ調整が、外面はヘラ磨きの痕が認められる。

時期　出土土器から判断して、弥生時代前期末～中期初頭（第１期）と考えられる。

（３）墓（写真図版44）

周溝墓２基と木棺墓群を検出した（第111図）。これらの遺構は位置的にもまとまっており、ひとつの墓域を形成していたものと考えられる。

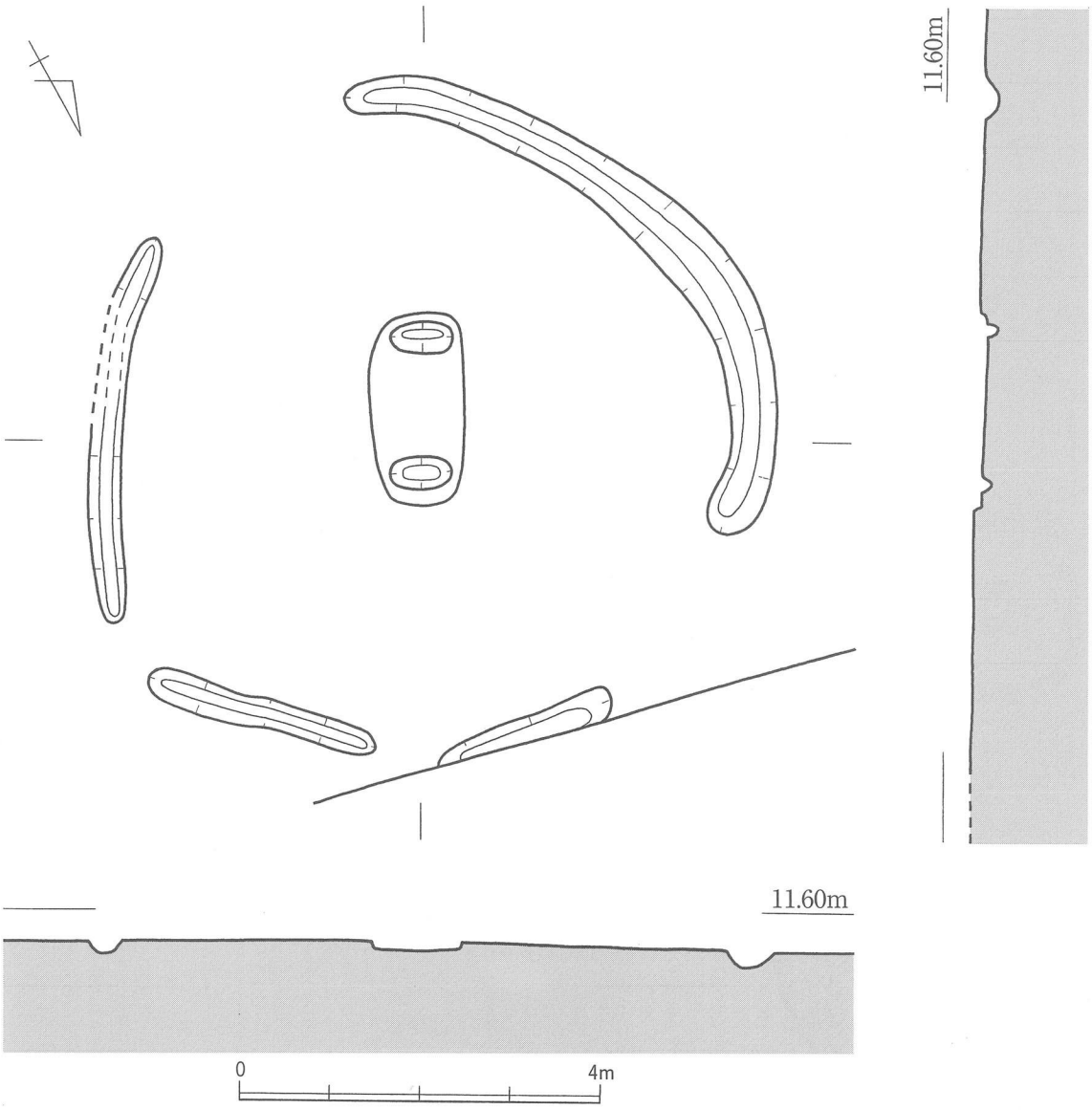
周溝墓１（写真図版45・46）

検出状況　Ｄ－１区西部で検出した（第111図）。ＳＤ42の西側に位置する。周溝は全周するものではないが、北側の一部は調査区外まで拡がり、わずかに全体を検出することはできなかった。周溝墓２と切り合い関係にあり、これを切っている。

形状・規模　平面形は、南西側を中心に円形傾向も認められるが、基本的には方形を指向するものと考えられる（第117図）。周溝に囲まれた中央部に主体部が１基認められ、この主体部を基準とすると、北東－南西方向に主軸をとる。

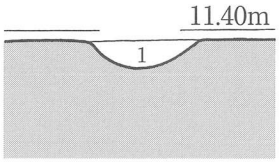
周溝底部中央を基準とした平面規模は、主軸方向で7.20m、その直交方向で7.10mを測る。墳丘部は削平を受け、盛土を確認することはできなかった。墳丘中央部における標高は、11.35mを測る。

周溝　全周せず、西周溝・北周溝・北東周溝・南東周溝の４条の溝からなる。西周溝の南端はＳＫ37と切り合い関係にあり、これを切っている。逆に、南東周溝の南部はＳＫ38に切られている。また、北周溝は一部調査区外まで拡がっている。埋土は、いずれも１層からなり（第118図）、その層相から判断して、人為的に埋められたものと考えられる。

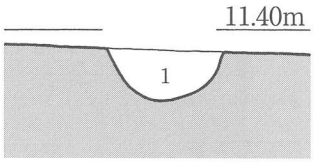


第117図　周溝墓１

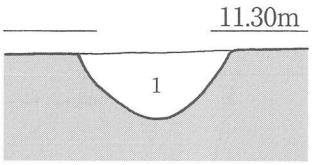
西周溝は弧状を呈し、6.78m検出した。横断面はU字形を呈し、検出面における幅は43cm～68cmを測る。また、最深部における検出面からの深さは19cmを測り、北端部の立ち上がりは緩やかである。最深部における底部の標高は11.02mである。北端部と中央部の



１．灰白色シルト質極細砂混じり
灰褐色シルト質細砂
北東周溝（南東から）

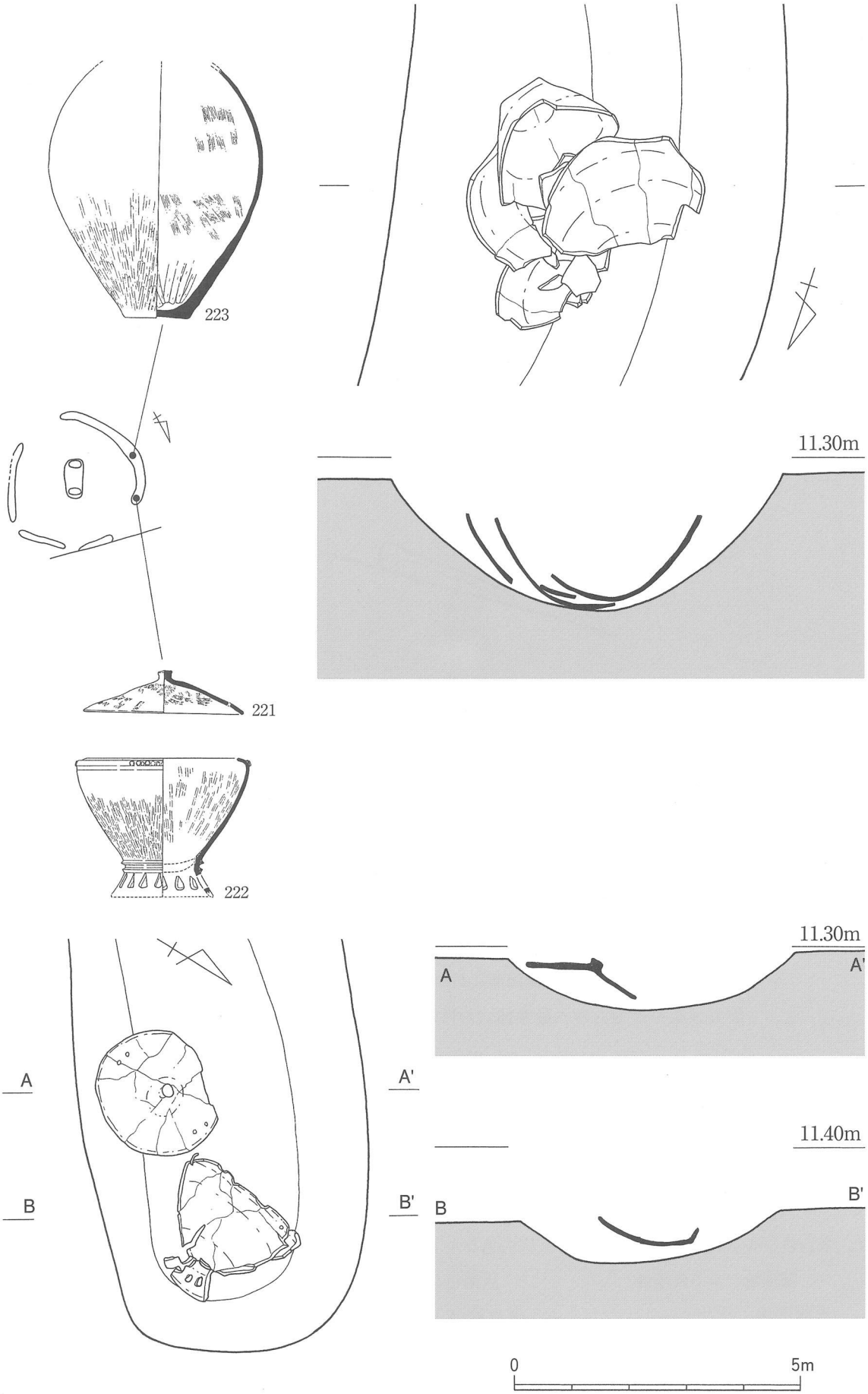


１．灰白色シルト質極細砂混じり
灰褐色シルト質細砂
南東周溝（南から）



１．褐灰色シルト質極細砂混じり
灰色シルト質細砂
西周溝（南から）

第118図　周溝墓１　周溝



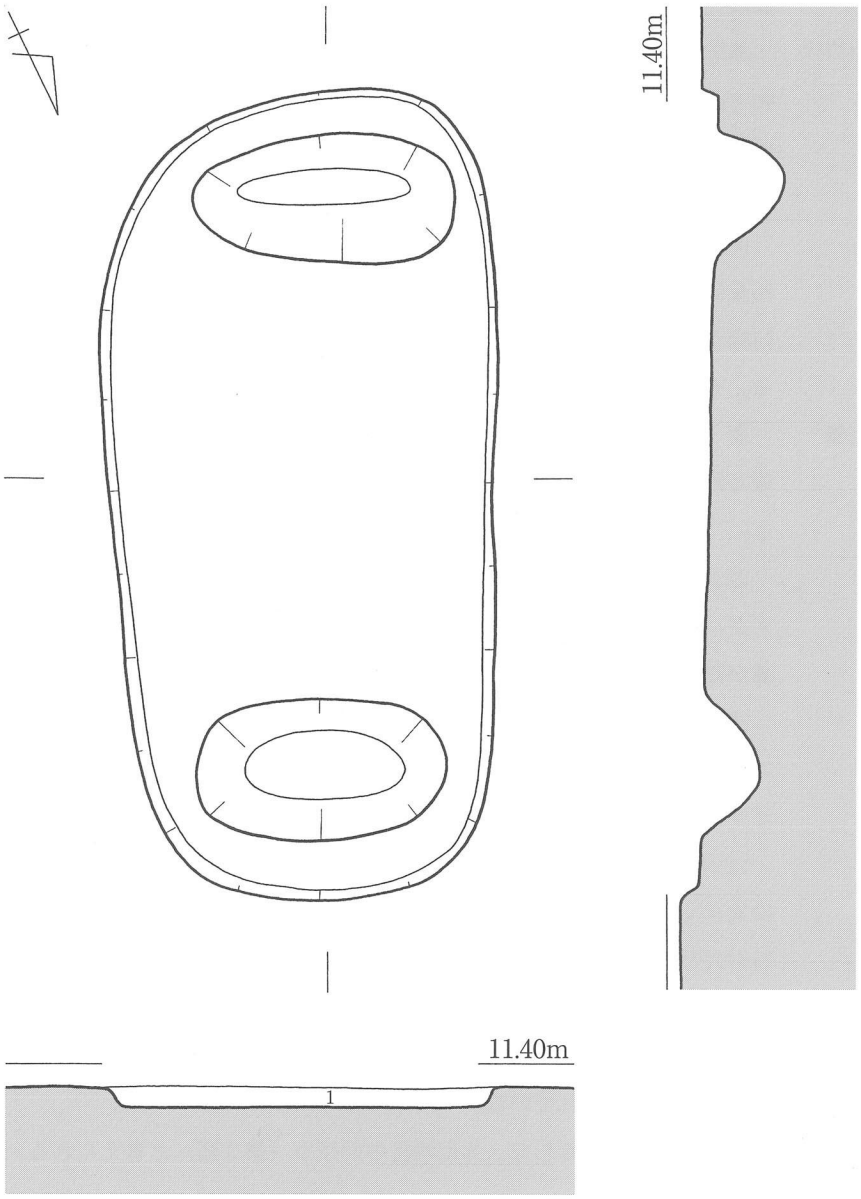
第119図　周溝墓１　土器供献位置

周溝底部から、供献土器（221～223）が出土している（第119図）。

北周溝は直線的で、2.05m検出した。横断面は緩やかなU字形を呈するものと考えられ、最深部における検出面からの深さは12cmを測る。最深部での底部の標高は、11.22mである。

北東周溝も直線的で、2.60m検出した。横断面は皿形を呈し、検出面における幅は26cm～37cmを測る。最深部における検出面からの深さは、わずか8cmである。最深部における底部の標高は、11.30mである。

南東周溝は、わずかに弧状を呈し、4.36m検出した。横断面はU字形を呈し、検出面における幅は27cm～38cmを測る。最深部における検出面からの深さは14cmである。底部の標高は南側ほど低くなる傾向が認められ、北端部で11.32m、南端部で11.16mである。



1．褐灰色シルト質極細砂混じり

灰白色シルト質細砂

0　1m

第120図　周溝墓1　主体部

陸橋部　検出状況からは、４箇所に陸橋が存在したように見受けられる。しかし、微地形的にみて北側ほど標高が高いことから、より多くの削平を受けている可能性が考えられる。したがって、全てについて陸橋部と判断することは困難と考えられる。ただし、西周溝の両端側については、その可能性が高いものと考えられる。

主体部　周溝に囲まれたほぼ中央部で１基確認した（第120図）。

墓坑　平面形は隅丸長方形を指向するものと考えられるが、小口側を中心に弧状傾向が強い。検出面における規模は、主軸方向で2.13ｍを測り、その直交方向で1.10ｍを測る。横断面は浅い逆台形を呈し、墓坑中央部における検出面からの深さは９㎝である。

棺　棺の痕跡を平面的に検出することはできなかった。ただし、棺底において小口穴を２穴検出したことから、組合せ木棺により埋葬されていたものと判断される。

小口穴　墓坑底部の北東側と南西側で検出した。平面形は楕円形を呈し、その主軸方向は墓坑主軸方向に直交する。南西側小口穴は、長軸方向で70㎝、その直交方向で38㎝を測る。横断面はＵ字形を呈し、墓坑底部からの深さは20㎝を測る。北東側小口穴は、長軸方向で68㎝、その直交方向で34㎝を測る。横断面はＵ字形を呈し、墓坑底部からの深さは22㎝を測る。

両小口穴の主軸ラインを基準とした小口間の距離は1.52ｍを測り、この規模が組合せ木棺長側部の規模を示すものと考えられる。また、小口穴の長軸方向の規模から、木棺の小口幅が68㎝～70㎝と推測されるとともに、その規模から南西側に頭位を求めることができる。その頭位方向はＮ154°Ｗを示す。

供献土器　甕・蓋・鉢が出土している（図版12）。いずれも西周溝に供献されたものである。特に、蓋と鉢は近接して出土していることから、両者がセットで供献されていたものと考えられる。

甕　223の１個体である。体部外面は、上半がナデ調整、下半がヘラ磨きにより、内面は上半がハケ調整、下半がヘラ削りにより、それぞれ仕上げられている。外面下半には煤の付着が認められる。

蓋　221の１個体である。ほぼ完存する個体で、内外面がハケ調整により仕上げられている。この後、口縁部内外面をつまむような横ナデ調整により仕上げられている。つまみは、指オサエにより仕上げられている。また、口縁部には２個１対の紐穴が２箇所に認められる。

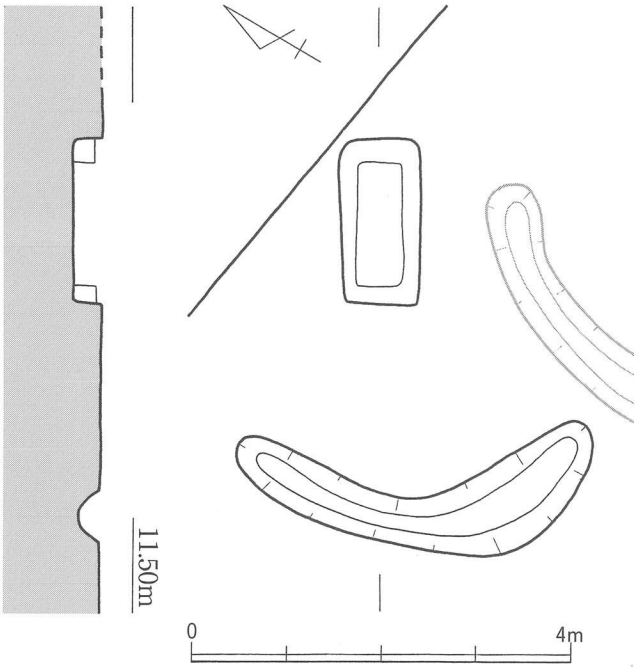
鉢　222の１個体である。体部内外面は、ヘラ磨きにより仕上げられている。口縁部は内側に大きく屈曲し、内外面が横ナデ調整により仕上げられている。この屈曲部の外面には径7㎜の円形浮文が貼り付けられている。円形浮文は16個残存する。脚部は上半部のみの残存であるが、三角形（高さ2.2㎝、底辺1.1㎝）の透孔が焼成前に穿たれている。計16箇所に穿たれていたものと復元される。脚部と体部の境外面には、断面三角形を呈する２条の突帯が貼り付けられている。

時期　出土土器から判断して、弥生時代中期後半（第３期）と考えられる。

周溝墓２（写真図版47・48）

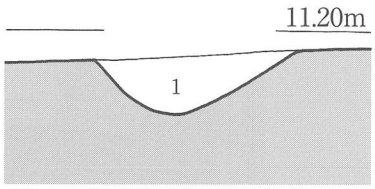
検出状況　Ｄ－１区西部で検出した（第111図）。周溝墓１の西側に位置し、周溝墓１に切られている。また、主体部１基とその南西側の周溝を検出したにとどまり、北側の一部は調査区外に拡がっている。このため、検出できたのは、全体の約1/2と考えられる。

形状・規模　平面形は、周溝の平面形から、隅丸方形とも円形とも捉えることができ、検出範囲では明確にできない（第121図）。ただし、主体部との位置関係から判断すると、円形傾向が強いものと考えられる。周溝底部中央を基準とした主軸方向で、4.40m検出した。周溝墓１よりは、小規模であったものと考えられる。周溝墓１同様、墳丘部は削平を受け、盛土層は確認できなかった。墳丘中央部における標高は、11.18mを測る。



第121図　周溝墓２

周溝　主体部の南西側で弧状を呈する周溝を検出した。検出した長さは4.14mを測る。横断面は浅いＵ字形を呈するが、その立ち上がりは、墳丘部側の方が緩やかな傾向が認められる。検出面における幅は43cm～87cmを測り、最深部における検出面からの深さは16cmである。埋土は、１層からなり（第122図）、その層相から判断して、人為的に埋められたものと考えられる。



１．暗灰色シルト質極細砂混じり褐灰色シルト質細砂

第122図　周溝墓２　周溝

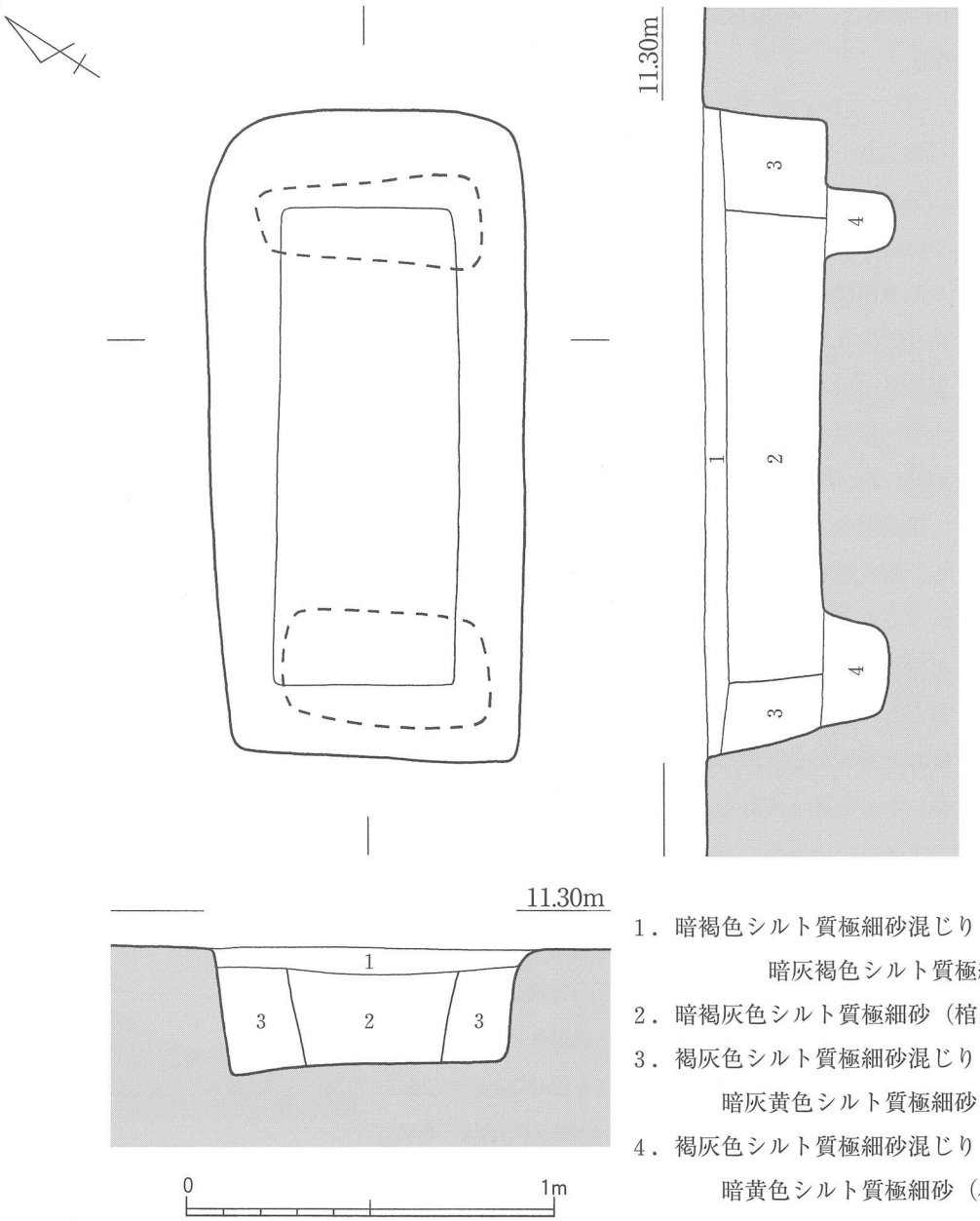
主体部　１基検出した（第123図）。

墓坑　平面形は隅丸長方形呈する。検出面における規模は、主軸方向で1.76m、その直交方向で86cmを測る。横断面は逆台形を呈し、墓坑中央部における検出面からの深さは35cmである。

棺　墓坑検出面から約５cm掘り下げたレベルで、棺の痕跡を平面的に検出することができた（第123図）。組合せ式箱形木棺と考えられる。

棺の平面形は長方形を呈し、棺底部は墓坑底部とほぼ一致する。棺底部における規模は、主軸方向で1.29mを測る。小口幅は、北東側で46cm、南西側で50cmを測る。また、棺底部における主軸ライン上での小口間の距離は、1.30mを測る。

小口穴　墓坑底部の北東側と南西側で検出した。この位置は、平面的に検出した木棺小口部分と一致する。平面形は長方形を呈し、その主軸方向は墓坑主軸方向に直交する。



1．暗褐色シルト質極細砂混じり
　　暗灰褐色シルト質極細砂
2．暗褐灰色シルト質極細砂（棺内埋土）
3．褐灰色シルト質極細砂混じり
　　暗灰黄色シルト質極細砂（埋め土）
4．褐灰色シルト質極細砂混じり
　　暗黄色シルト質極細砂（小口穴埋土）

第123図　周溝墓２　主体部

北東側小口穴は、長軸方向で61cm、その直交方向で20cmを測る。横断面は箱形を呈し、墓坑底部からの深さは25cmを測る。南西側小口穴は、長軸方向で55cm、その直交方向で31cmを測る。横断面は箱形を呈し、墓坑底部からの深さは26cmを測る。

また、小口穴の規模から判断して、北東側に頭位を求めることができ、その頭位方向はN58°Eを示す。

供献土器　周溝内から甕１個体（224）が出土している（図版12）。体部内外面をハケ調整後、口縁部内外面が横ナデ調整により仕上げられている。体部外面には煤の付着が認められる。

時期　出土土器から判断して、弥生時代中期後半（第３期）と考えられる。

ＳＸ０２（写真図版49）

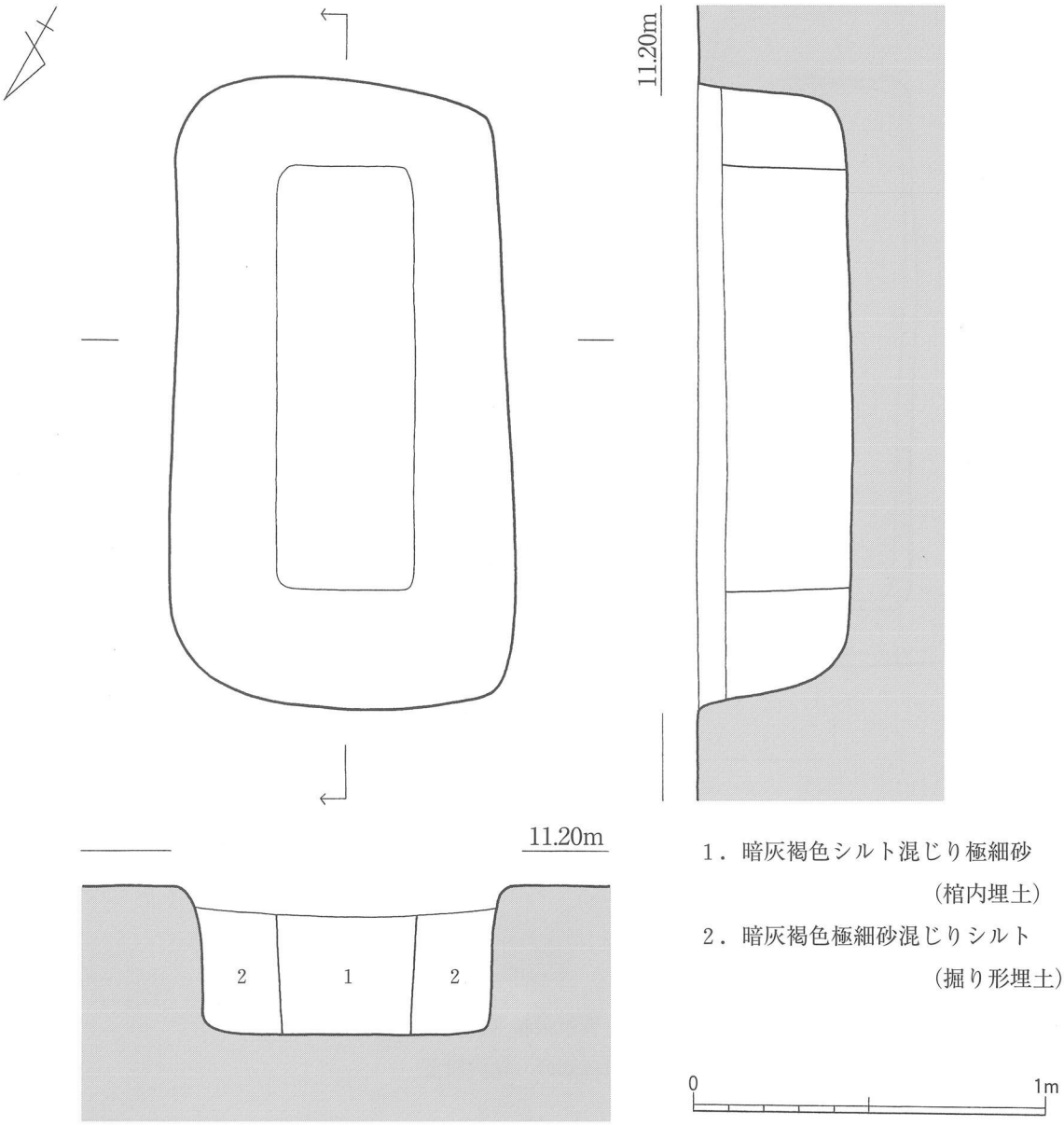
検出状況　Ｃ区で検出した（第111図）。他の遺構との切り合い関係は認められず、完存する。

墓坑　平面形は隅丸長方形を呈する。検出面における規模は、長軸方向で1.78m、その直交方向で98cmを測る。横断面は箱形を呈し、中央部における検出面からの深さは43cmを測る。墓坑底部はほぼ平坦で、その規模は、長軸方向で1.67m、その直交方向で85cmを測る。

棺　組合せ式箱形木棺を埋葬施設とする。墓坑検出面から約５cm掘り下げたレベルで、棺の痕跡を確認することができた。平面形は長方形を呈し、棺底部における規模は、長軸方向で1.16mを測る。また、小口幅は、両小口とも38cmで、小口幅からは頭位方向を明らかにすることは困難である。その方位は、Ｎ150°Ｅを示す。棺底部は、墓坑底部とほぼ一致し、ほぼ平坦である。なお、棺底部において、小口穴を確認することはできなかった。

供献土器　広口壷の体部片が出土している。前期末の特徴が認められる。

時期　出土土器から判断して、弥生時代前期末（第１期）と考えられる。



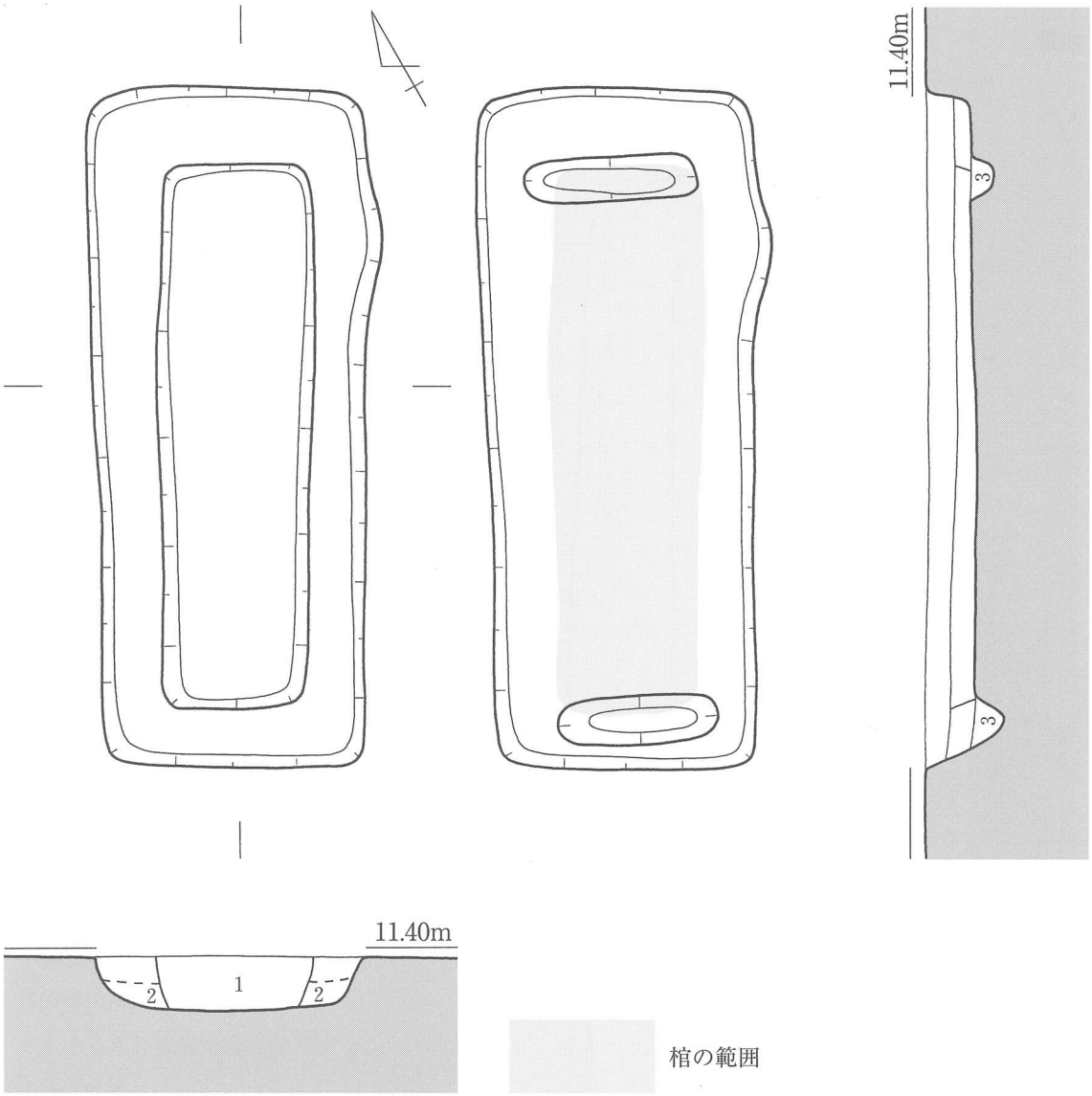
第124図　ＳＸ02

ＳＸ０３（写真図版49）

検出状況　Ｄ－１区西部で検出した（第111図）。周溝墓１の東側、ＳＫ38の北東側、ＳＸ04の北西側に位置する。他の遺構との切り合い関係は認められず、完存する。

墓坑　平面形は隅丸長方形を呈する（第125図）。検出面における規模は、長軸方向で1.86m、その直交方向で75cmを測る。横断面は逆台形を呈し、中央部における検出面からの深さは15cmを測る。墓坑底部はほぼ平坦で、その規模は、長軸方向で1.80m、その直交方向で68cmを測る。

棺　組合せ式箱形木棺を埋葬施設とする。墓坑検出面から約10cm掘り下げたレベルで、棺の痕跡を確認することができた。平面形は隅丸長方形を呈し、棺底部における規模は、長軸方向で1.46mを測る。また、小口幅は、北東側で33cm、南西側で30cmを測り、北東側に頭



1．暗灰色シルト質極細砂混じり暗褐色シルト質極細砂（掘り形埋土）
2．灰色シルト質極細砂混じり暗褐色シルト質極細砂（棺内埋土）
3．暗灰色極細砂混じりシルト（小口穴埋土）

0　1m

第125図　ＳＸ03

位を求めることができる。その方向は、N30°30′Eを示す。棺底部は、墓坑底部とほぼ一致し、平坦である。

棺底部においては、2穴の小口穴を検出した。いずれも溝状を呈し、その主軸方向は棺の主軸方向に直交する。北東側小口穴の棺底部における規模は、長軸方向で43cm、その直交方向で12cmを測り、棺底部からの深さは18cmである。南西側小口の規模は、長軸方向で44cm、その直交方向で13cmを測り、棺底部からの深さは21cmである。

供献土器　広口壷の体部片と甕の体部片が出土している。いずれも弥生時代中期の特徴を示すものである。

時期　出土土器および周溝墓群との関係から判断して、弥生時代中期後半（第3期）と考えられる。

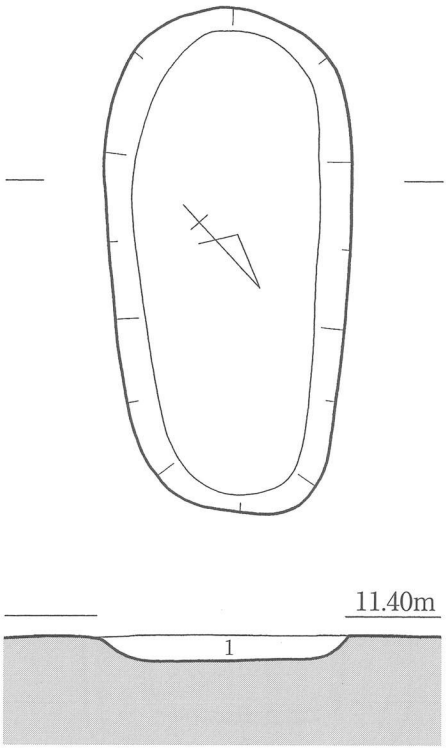
ＳＸ０４

検出状況　Ｄ－１区西部で検出した（第111図）。ＳＸ03の南東側、ＳＸ05の北西側に位置する。他の遺構との切り合い関係は認められず、完存する。

形状・規模　平面形は、隅丸長方形にちかい長楕円形を呈する（第126図）。検出面における規模は、長軸方向で1.32m、その直交方向で64cmを測る。横断面は逆台形を呈し、中央部における検出面からの深さは、わずか6cmである。底部はほぼ平坦である。

埋没状況　黒褐色シルト質極細砂をブロック状に含む灰褐色シルト質極細砂1層からなる（第126図）。層相から判断して、人為的に埋められたものと考えられる。

遺構の性格　当遺構に関しては、棺の痕跡を確認することはできなかった。しかし、ＳＸ03・ＳＸ05の近くに位置し、その主軸方向がほぼ一致すること等から、ＳＸ03・ＳＸ05と一連の埋葬遺構の可能性が高いものと考えられる。



第126図　ＳＸ04

出土土器　全く出土していない。

時期　出土遺物から時期を特定することは困難であるが、ＳＸ03・ＳＸ05と一連の埋葬遺構と考えられることから、これらの遺構と同様の時期、弥生時代中期後半（第3期）の可能性が高いものと考えられる。

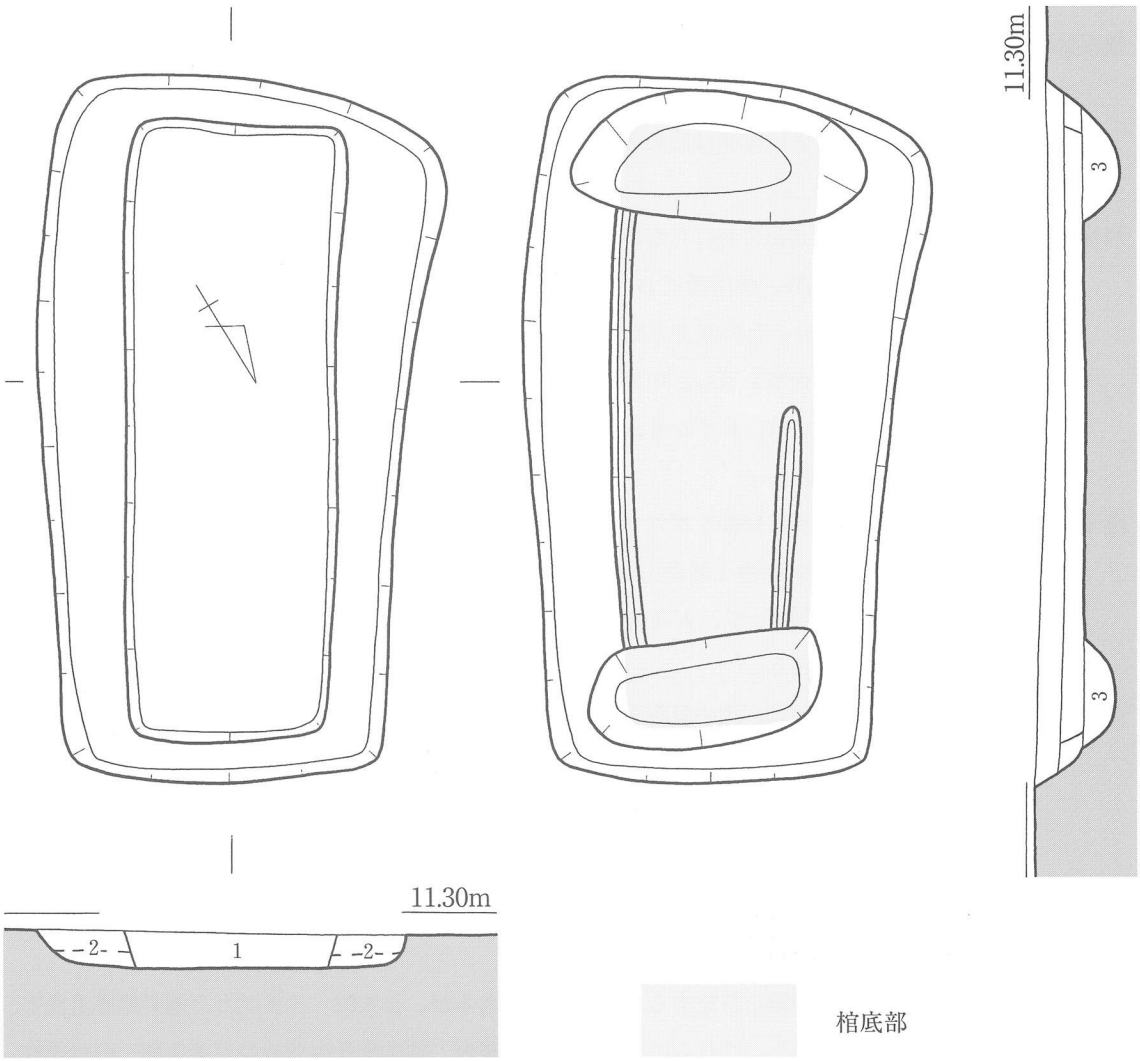
ＳＸ０５（写真図版50）

検出状況　Ｄ－１区西部で検出した（第111図）。ＳＸ04の南東側に位置する。他の遺構との切り合い関係は認められず、完存する。

墓坑　平面形は、隅丸長方形を呈する（第127図）。検出面における規模は、長軸方向で1.86ｍを測る。小口幅は北東側で83㎝、南西側で1.00ｍと、南西側の方が広くなっている。横断面は逆台形を呈し、中央部における検出面からの深さは13㎝を測る。墓坑底部はほぼ平坦で、その規模は、長軸方向で1.78ｍ、その直交方向で92㎝を測る。

棺　組合せ式箱形木棺を埋葬施設とする。墓坑検出面から約５㎝掘り下げたレベルで、棺の痕跡を確認することができた。平面形は長方形を呈し、棺底部は墓坑底部とほぼ一致し、平坦である。棺底部における規模は、長軸方向で1.56ｍを測る。

また、墓坑底部において、小口穴と長側板の痕跡を検出することができた（第127図）。



１．灰白色シルト質極細砂（棺内埋土）
２．褐灰色シルト質極細砂灰白色シルト質極細砂（掘り形埋土）
３．暗褐灰色シルト質極細砂混じり暗灰色シルト質極細砂（小口穴埋土）

0　1m

第127図　ＳＸ05

２穴の小口穴の平面形は、北側が長方形、南側が長楕円形を呈し、その主軸方向は、棺の主軸方向に直交する。北東側小口穴の規模は、長軸方向で60cm、その直交方向で29cmを測り、墓坑底部からの深さは21cmである。南西側小口穴の規模は、長軸方向で78cm、その直交方向で33cmを測り、棺底部からの深さは21cmである。横断面はいずれも緩やかなＵ字形をなす。

長側板の痕跡は、両側で検出された。しかし、南東側については両小口穴に接しているが、北西側については、南側小口穴に接するのみで、棺のほぼ中央で途切れている。このため、北東側において小口幅を求めることができ、その幅は34cmを測る。南西側小口幅については、東側長側板の痕跡から推測されるラインを基準とすると、44cmと復元できる。以上から、南西側に頭位を求めることができ、その頭位方向は、Ｎ32°Ｅを示す。

なお、棺の主軸方向の規模は、平面的に検出した規模から判断すると1.56ｍであるが、小口穴中央部を基準とすると、1.38ｍとなる。つまり、小口板を小口穴の中央部に据えたのか、より外側に据えたのかにより、棺の規模が異なってくる。この点については、調査では明らかにすることはできなかった。

供献土器　棺内埋土中から、広口壷の体部片と甕の体部片が出土している。いずれも弥生時代中期の特徴が認められる。

時期　出土土器および他の木棺墓との関係から判断して、弥生時代中期後半（第３期）と考えられる。

第128図　ＳＸ05の検出

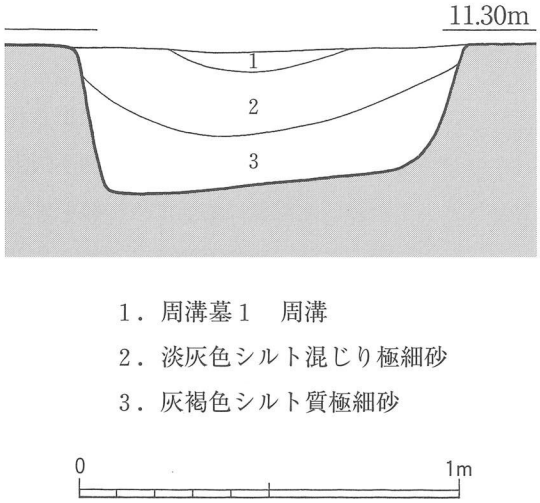
（４）土坑

17基検出した。

ＳＫ３７（写真図版51）

検出状況　Ｄ－１区西部で検出した（第111図）。周溝墓１主体部の西側に位置し、同墓西周溝に大半が切られている。

形状・規模　平面形は隅丸方形を呈し、長軸方向で1.24m、その直交方向で1.04mを測る。横断面は逆台形を呈し、最深部における検出面からの深さは、38cmを測る。底部は平坦で、その規模は、長軸方向で1.04m、その直交方向で86cmを測る。



1．周溝墓１　周溝
2．淡灰色シルト混じり極細砂
3．灰褐色シルト質極細砂

第129図　ＳＫ37

埋没状況　埋土は、２層からなる（第129図）。少なくとも上層に関しては、その層相から判断して、人為的に埋められたものと考えられる。

出土遺物　広口壷と鉢が出土している（図版31）。

広口壷（491）は体部片が出土している。体部上半部の小片であるが、外面に２種の貼り付け突帯が認められる。一つは、体部上部に貼り付けられたもので、４条の突帯が水平方向に平行する。もう一つは、その下側に、平行する３条の突帯が、緩やかな山形を呈するように貼り付けられている。この山形は、２セット残存し、全体では8セットあったものと考えられる。内面は、ナデ調整により仕上げられている。胎土中には５㎜以下の砂粒が多く含まれている。

鉢（492）は、直口鉢に分類されるもので、体部内外面を指オサエとナデ調整後、口縁部が横ナデ調整により仕上げられている。胎土中には４㎜以下の砂粒が多く含まれている。

時期　出土土器から判断して、弥生時代前期末～中期初頭（第１期）と考えられる。

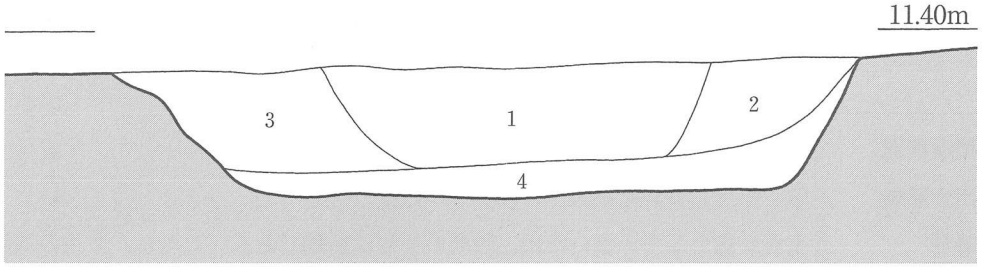
ＳＫ３８

検出状況　Ｄ－１区西部で検出した（第111図）。周溝墓１主体部の東側、ＳＸ03の南西側に位置する。周溝墓１南東周溝と切り合い関係にあり、これを切っている。このため、当土坑は完存する。

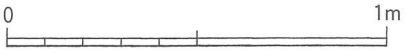
形状・規模　平面形は円形に近い隅丸方形を呈し、長軸方向で2.04m、その直交方向で2.02mを測る。横断面は逆台形を呈し、最深部における検出面からの深さは35cmを測る。底部は平坦で、その規模は、長軸方向で1.78m、その直交方向で1.70mを測る。

埋没状況　埋土は、４層からなる（第130図）。少なくとも上の３層に関しては、その層相から判断して、人為的に埋められたものと考えられる。

出土遺物　甕の口縁部片・体部片・底部片が出土している（図版12）。図化できたのは、口縁部片（225）と底部片（226）である。



1．暗褐灰色シルト質極細砂（中礫多量に含む：埋め土）
2．暗褐色シルト質極細砂混じり灰色シルト質極細砂（埋め土）
3．暗褐灰色シルト質極細砂



第130図　ＳＫ38

225は、口縁部がく字形に屈曲する大型の甕で、頸部に指頭圧痕文突帯が貼り付けられている。内外面とも横ナデ調整により仕上げられている。226は、外面をヘラ磨き、内面を指オサエ後縦方向（下→上）のヘラナデ調整により、仕上げられている。

時期　出土土器および周溝墓１との切り合い関係から、弥生中期後半（第３期）と考えられる。

ＳＫ３９

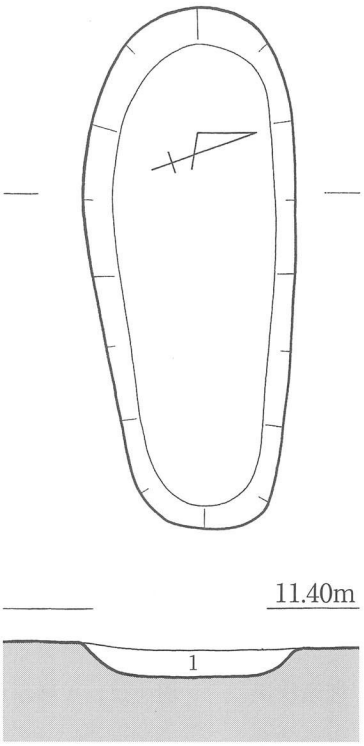
検出状況　Ｄ－１区西部で検出した（第111図）。ＳＫ40の北側、ＳＤ42の南側に位置する。他の遺構との切り合い関係は認められず、当土坑は完存する。

形状・規模　平面形は溝状に近い隅丸長方形を呈し、長軸方向で1.34m、その直交方向で55cmを測る。横断面は逆台形を呈し、最深部における検出面からの深さはわずか７cmである。底部は平坦で、その規模は、長軸方向で1.20m、その直交方向で42cmを測る。

埋没状況　埋土は、１層からなる（第131図）。

出土遺物　全く出土していない。

時期　土器が出土していないため、時期の特定は困難である。ただし、埋土の特徴、および周辺の埋葬遺構との関連が考えられることから、弥生時代中期後半（第３期）を中心とした時期と考えたい。



1．灰色シルト混じり極細砂

第131図　ＳＫ39

ＳＫ４０

検出状況　Ｄ－２区西部で検出した。ＳＫ39の南側、ＳＫ41の西側に位置する。他の遺構との切り合い関係は認められないが、当遺構は調査区外まで拡がっている。このため、全体を検出することはできなかった。

形状・規模　平面形は隅丸長方形を呈するものと考えられる。長軸方向で73cm残存し、その直交方向で52cmを測る。横断面は逆台形を呈し、最深部における検出面からの深さはわずか７cmである。

埋没状況　埋土は、灰色シルト混じり極細砂１層からなる。

出土遺物　全く出土していない。

時期　土器が出土していないため、時期の特定は困難である。ただし、埋土の特徴、および周辺の埋葬遺構との関連が考えられることから、弥生時代中期後半（第３期）を中心とした時期と考えたい。

ＳＫ４１

検出状況　Ｄ－２区西部で検出した（第111図）。ＳＫ42の西側、ＳＫ40の東側に位置する。他の遺構との切り合い関係は認められないが、当遺構の大半は調査区外まで拡がっている。このため、検出できたのは一部に限られる。

形状・規模　平面形は隅丸長方形もしくは長楕円形を呈するものと考えられる。長軸方向で1.10m残存する。横断面は逆台形をなすものと考えられ、最深部における検出面からの深さは14cmである。

埋没状況　埋土は、灰色シルト混じり極細砂１層である。

出土遺物　全く出土していない。

時期　土器が出土していないため、時期の特定は困難である。ただし、埋土の特徴及び周辺の埋葬遺構との関連から、弥生時代中期後半（第３期）を中心とした時期と考えたい。

ＳＫ４２（写真図版51）

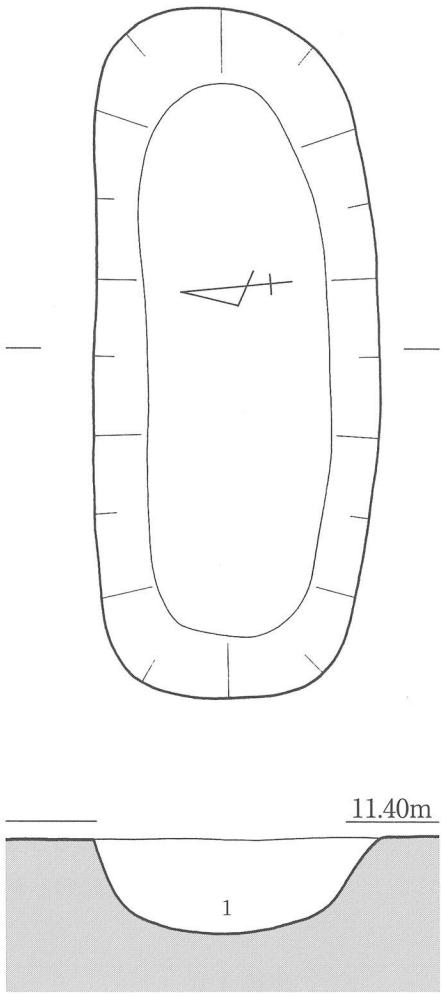
検出状況　Ｄ－２区西部で検出した（第111図）。ＳＫ41の東側、ＳＫ43の西側に位置する。他の遺構との切り合い関係は認められず、完存する。

形状・規模　平面形は隅丸長方形を呈する。長軸方向で1.82m、その直交方向で75cmを測る。横断面は逆台形をなし、最深部における検出面からの深さは26cmである。

埋没状況　埋土は、１層からなる（第132図）。

出土遺物　弥生土器と考えられる小片が出土しているが、器種の特定は困難である。

時期　出土土器、および周辺の埋葬遺構との関連が考えられることから、弥生時代中期後半（第３期）を中心とした時期と考えたい。



第132図　ＳＫ42

ＳＫ４３

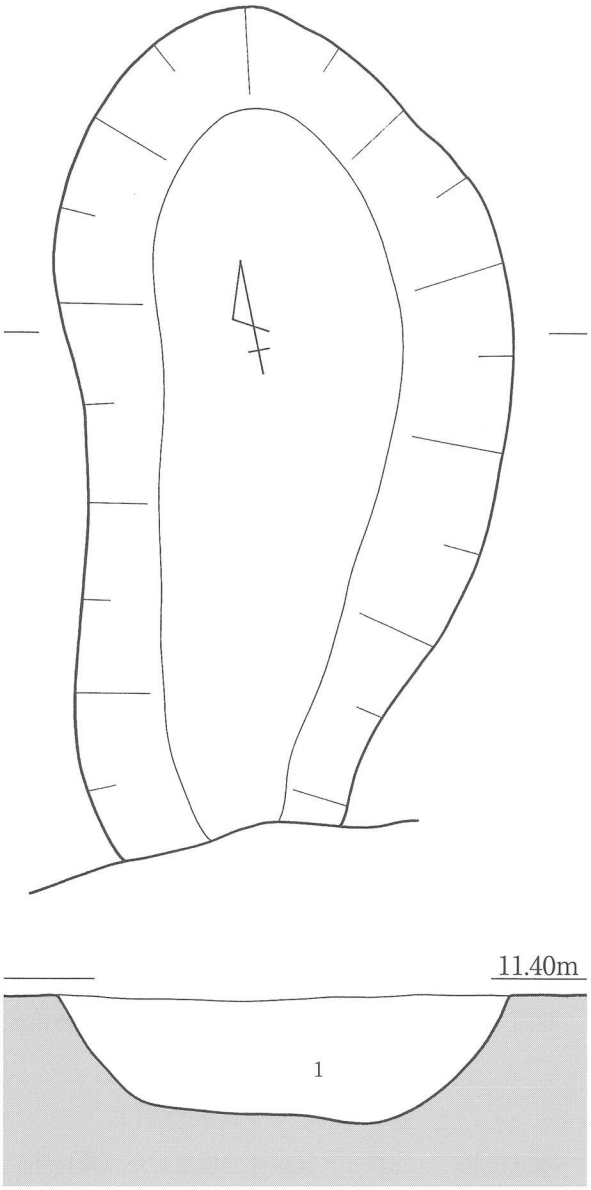
検出状況　Ｄ－２区西部で検出した（第111図）。ＳＫ42の東側に位置する。他の遺構との切り合い関係は認められないが、遺構の一部が調査区外まで拡がっている。

形状・規模　平面形は、かなり歪んだ長楕円形を呈する。長軸方向で2.37m残存し、その直交方向は1.20mを測る。横断面は逆台形をなし、最深部における検出面からの深さは33cmである。

埋没状況　埋土は、１層からなる（第133図）。

出土遺物　中期の甕の口頸部片と広口壷の体部片が出土している。いずれも小片のため図化できなかった。

時期　出土土器から判断して、弥生時代中期後半（第３期）と考えられる。



第133図　ＳＫ43

ＳＫ４４（写真図版51）

検出状況　Ｄ－２区西部で検出した（第112図）。ＳＤ43とＳＤ44の合流部の北側に位置する。ＳＤ44と切り合い関係が認められ、わずかに切られているが、ほぼ完存する。

形状・規模　平面形は楕円形を呈する。長軸方向で94cmを測り、その直交方向は88cmである。横断面はＵ字形をなし、最深部における検出面からの深さは49cmである。

埋没状況　埋土は、上から、褐色シルト質極細砂、灰色極細砂混じり褐色シルト質極細砂の２層からなる。下層については、周囲からの流れ込みによるものと考えられる。

出土遺物　中期の甕の体部片と広口壷の体部片・底部片がわずかに出土している。いずれも小片のため図化できなかった。

時期　出土土器から判断して、弥生時代中期後半（第３期）と考えられる。

ＳＫ４５（写真図版52）

検出状況　Ｄ－２区西部で検出した（第112図）。ＳＨ10の西側・ＳＫ46の南西側に位置する。ＳＤ44と肩部を接するが、明確な切り合い関係は認められず、当遺構は完存する。

形状・規模　平面形は隅丸方形を呈する。長軸方向で68cmを測り、その直交方向は58cmである。横断面は緩やかなＵ字形をなし、最深部における検出面からの深さは24cmである。

埋没状況　埋土は、上から、暗灰色極細砂、灰褐色シルト混じり極細砂、淡灰褐色極細砂の３層からなる。最上層には、炭片が比較的多く含まれていた。下の２層に関しては、その層相から判断して、人為的に埋められたものと考えられる。

出土遺物　中期の甕の底部片が１点出土している。小片のため図化できなかった。

時期　出土土器から判断して、弥生時代中期後半（第３期）と考えられる。

ＳＫ４６（写真図版52）

検出状況　Ｄ－２区西部で検出した（第112図）。ＳＫ45の北東側に位置する。ＳＨ10と切り合い関係にあり、ＳＨ10に切られている。ただし、周壁溝に切られているのみで、最終的に、当遺構を完存に近い形で検出することができた。

形状・規模　平面形は長楕円形を呈する。長軸方向で1.21ｍ、その直交方向で60cmを測る。横断面はＵ字形をなし、最深部における検出面からの深さは31cmである。

埋没状況　埋土は、上から、褐色シルト質極細砂と暗褐色シルト質極細砂がブロック状に混ざる層、暗褐色極細砂をブロック状に含む褐灰色極細砂の２層からなる。両層中には、炭片が比較的多く含まれている。その層相から判断して、人為的に埋められたものと考えられる。

出土遺物　前期の広口壷の頸部を中心とした破片が１点出土している。小片のため図化はできなかった。

時期　出土土器から判断して、弥生時代前期（第１期）と考えられる。

ＳＫ４７（写真図版51）

検出状況　Ｄ－２区西部で検出した（第112図）。ＳＫ49の北側、ＳＤ45の東側に位置する。他の遺構との切り合い関係は認められず、完存する。

形状・規模　平面形は楕円形を呈する。長軸方向で82cm、その直交方向で42cmを測る。横断面はⅢ形を呈し、最深部における検出面からの深さは６cmである。

埋没状況　埋土は、灰色シルト質極細砂をブロック状に含む褐色シルト質極細砂１層からなる。層相から判断して、人為的に埋められたものと考えられる。

出土遺物　中期の甕の口縁部と体部片が１点ずつ出土している。

時期　出土土器から判断して、弥生時代中期後半（第３期）と考えられる。

ＳＫ４８

検出状況　Ｄ－２区西部で検出した（第112図）。ＳＫ49の南側、ＳＤ45の東側に位置する。ＳＫ49とほぼ接するが、明確な切り合い関係は認められず、完存する。

形状・規模　平面形は弧状を呈する。長軸方向で87cm、その直交方向で26cmを測る。横断面はⅢ形を

なし、最深部における検出面からの深さは6㎝である。

埋没状況　埋土は、灰色シルト質極細砂をブロック状に含む褐色シルト質極細砂1層からなる。層相から判断して、人為的に埋められたものと考えられる。

出土遺物　器種を特定できないが、体部の小片が1点出土している。

時期　出土土器から判断して、弥生時代中期後半（第3期）と考えられる。

ＳＫ４９

検出状況　Ｄ－２区西部で検出した（第112図）。ＳＫ48の北側、ＳＤ45の東側に位置する。ＳＫ48とほぼ接するが、明確な切り合い関係は認められず、完存する。

形状・規模　平面形はやや歪んだ長楕円形を呈する。長軸方向で92㎝、その直交方向で48㎝を測る。横断面は緩やかなＵ字形をなし、最深部における検出面からの深さは12㎝である。

埋没状況　埋土は、灰色シルト質極細砂をブロック状に含む褐色シルト質極細砂1層からなる。層相から判断して、人為的に埋められたものと考えられる。

出土遺物　中期の特徴を示す甕の体部片が1点出土している。

時期　出土土器から判断して、弥生時代中期後半（第3期）と考えられる。

ＳＫ５０

検出状況　Ｄ－２区中央部で検出した（第113図）。第1面で検出した飛鳥時代の溝ＳＤ50と平面的に重複し、ＳＤ50を完掘した段階で、その底部において確認できた遺構である。ＳＤ47の北側に位置し、ＳＫ51の南東隅を切っている。このため、当遺構は平面的に完存する。

形状・規模　平面形はやや隅丸方形を呈する。長軸方向で1.04m、その直交方向で92㎝を測る。横断面は皿形を呈し、最深部における検出面からの深さは10㎝である。

埋没状況　埋土は、褐色細砂をブロック状に含む白灰色極細砂～細砂1層からなる。層相から判断して、人為的に埋められたものと考えられる。埋土中には、炭片が含まれていた。

出土遺物　広口壷の口縁部片と底部片が出土している。前期末～中期初頭の特徴を示す土器である。

時期　出土土器から判断して、弥生時代前期末～中期初頭（第1期）と考えられる。

ＳＫ５１

検出状況　Ｄ－２区中央部で検出した（第113図）。ＳＫ50同様、飛鳥時代の溝ＳＤ50と平面的に重複し、ＳＤ50を完掘した段階で、その底部において確認できた遺構である。当遺構の南東隅をＳＫ50に切られている他、北側は調査区外まで拡がっている。

平面形からは溝状遺構の可能性も否定できないが、完掘できなかったことも加味して、本報告では土坑として報告する。

形状・規模　平面形は舌状を呈する。長軸方向で4.38m残存し、その直交方向で2.78mを測る。横断面は皿形を呈し、最深部における検出面からの深さは15㎝である。

埋没状況　埋土は、灰色細砂をブロック状に含む褐色極細砂～細砂1層からなる。層相から判断して、人為的に埋められたものと考えられる。

出土遺物　壷と甕が出土している。

壷は、広口壷の頸部片と体部片が比較的多く出土している。前期末～中期初頭の特徴を示す土器である。

甕は、口縁部片（227）と底部片（228）が１点ずつ出土している（図版12）。227は、いわゆる瀬戸内型甕と称されるもので、口縁部は逆Ｌ字形を呈する。口縁端部には刻み目が施され、口縁部下外面には、６条のヘラ描沈線が施されている。全体的に摩滅傾向が顕著で、口縁部の横ナデ調整以外、調整痕は観察できない。228は、底部中央部に径1.2cmの穿孔が焼成前に施されている。外面はハケ調整、内面は指オサエとナデ調整により仕上げられている。

時期　出土土器から判断して、弥生時代前期末～中期初頭（第１期）と考えられる。

ＳＫ５２

検出状況　Ｄ－２区中央部で検出した（第113図）。ＳＤ49の南東側、ＳＫ53の西側に位置する。他の遺構との切り合い関係は認められないが、一部は調査区外まで拡がっている。

形状・規模　平面形は楕円形を呈するものと考えられる。長軸方向で84cm、その直交方向で60cmを測る。横断面は皿形をなし、最深部における検出面からの深さは６cmである。

埋没状況　埋土は、灰色細砂をブロック状に含む褐色シルト質極細砂１層からなる。層相から判断して、人為的に埋められたものと考えられる。

出土遺物　器種を特定できない小片が出土しているが、胎土の特徴から判断して、前期末～中期初頭の土器と考えられる。

時期　出土土器から判断して、弥生時代前期末～中期初頭（第１期）と考えられる。

ＳＫ５３

検出状況　Ｄ－２区中央部東側で検出した（第113図）。ＳＫ52の東側に位置する。他の遺構との切り合い関係は認められず、完存する。

形状・規模　平面形は楕円形を呈する。長軸方向で77cm、その直交方向で64cmを測る。横断面は深い皿形をなし、最深部における検出面からの深さは16cmである。

埋没状況　埋土は、灰色極細砂をブロック状に含む褐色シルト質極細砂１層からなる。層相から判断して、人為的に埋められたものと考えられる。

出土遺物　器種を特定できない小片が出土しているが、胎土の特徴から判断して、前期末～中期初頭の土器と考えられる。

時期　出土土器から判断して、弥生時代前期末～中期初頭（第１期）と考えられる。

（5）溝

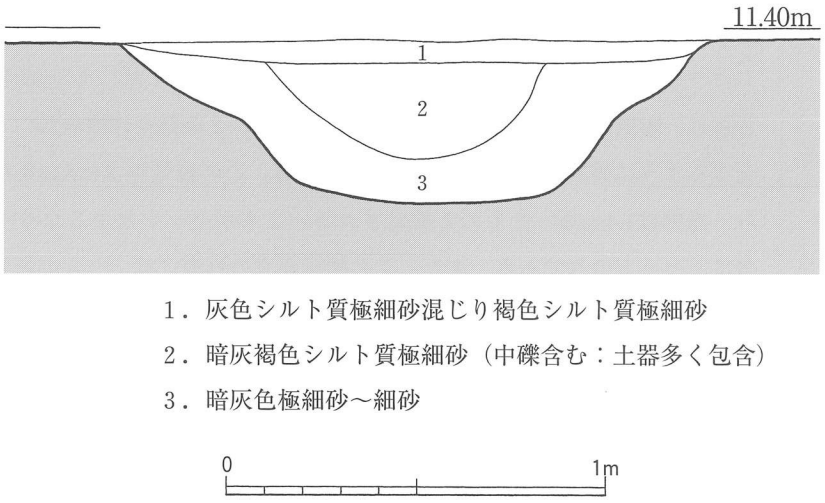
8条検出した。

ＳＤ４２（写真図版53）

検出状況　Ｄ－１区からＤ－２区西部にかけて検出した（第111図）。西北西－東南東方向に直線的にのびる溝で、両端とも調査区外までのびている。南東端でＳＤ43と切り合い関係が認められるが、ＳＤ43を切っている。ＳＤ43の西側、周溝墓群の東側に位置する。

形状・規模　検出した長さは28.70mを測る。横断面は逆台形を呈し、最深部における検出面からの深さは85cmを測る。検出面における幅は2.88m～3.52mを測る。底部の標高は、北西部で10.62m、南東部で10.49mと、わずかに南東側へ傾斜している。

埋没状況　埋土は３層からなり（第134図）、２層と３層については、層相から判断して、人為的に埋められたものと考えられる。この両層中から多くの土器が出土している。一方、最上層については、下層埋没後の凹地状態の際に埋没し土壌化した層と考えられる。



１．灰色シルト質極細砂混じり褐色シルト質極細砂
２．暗灰褐色シルト質極細砂（中礫含む：土器多く包含）
３．暗灰色極細砂～細砂

第134図　ＳＤ42

出土遺物　弥生時代前期と中期の土器が出土している（図版13～図版15）。量的には後者の土器が圧倒的に多い。

前期　図化できたのは、229～231の壷３個体である。いずれも、下層および底部から出土している。

229は、広口壷の口頸部で、口縁端部内面に断面三角形の突帯を貼り付け、端部を拡張している。体部から頸部外面はハケ調整、内面はナデ調整、口縁部内外面は横ナデ調整により、仕上げられている。頸部外面には、ハケ調整後６条の篦描沈線が施されている。

230は、広口壷の口頸部で、頸部外面はヘラ磨き、内面はナデ調整、口縁部内外面は横ナデ調整により、仕上げられている。口縁端部には刻み目が、頸部外面には３条の篦描沈線が施されている。

231は壷の底部と考えられる。外面はハケ調整後ヘラ磨き、内面は指オサエとナデ調整により仕上げられている。内面の一部には、ハケ目を観察することができる。

この他、図化できなかったが、258の壷の口縁部片が出土している（写真図版97）。内面

には４条の平行する突帯が弧状に貼り付けられ、端面には１条の沈線が施された後、キザミ目が施されている。

中期　壷・甕・蓋・高坏・脚部の各器種が出土している。

壷　広口壷・直口壷・底部片が出土している。

広口壷は、232～236の５個体を図化した。232は、口縁端部を下方に拡張し、端面に4条の凹線が施されている。内外面とも横ナデ調整により仕上げられている。

233も、口縁端部を下方に拡張させ、端面に４条の凹線が施されている。体部から頸部にかけての外面はハケ調整により仕上げられ、その後体部上半部には刻み目が２段にわたって施されている。また、体部下半は縦方向（下→上）のヘラ削り後、上部は横方向のヘラ磨きにより仕上げられている。体部内面は、指オサエ後ハケ調整により仕上げられ、下半部は縦方向（下→上）のヘラ削りが施されている。口縁部内面は、横ナデ調整により仕上げられている。

234は、口縁部を下方に大きく屈曲させ、端面をわずかに肥厚させるとともに、円形浮文が貼り付けられている。剥離痕から、円形浮文は２個がセットとなるが、残存するのは１セットのみである。また、口縁部内面にはヘラ先状の工具による渦巻文が施されている。さらに、屈曲部上面には断面三角形をなす突帯が２条貼り付けられ、この２条の突帯に直交するように棒状浮文が貼り付けられている。この棒状浮文は8㎜残存し、その剥離痕から、当初は1.4㎝あったものと推定される。２本がセットとなるようであるが、残存するのは１セットのみである。また、この棒状浮文の外側には、２穴の紐穴が認められる。焼成前に穿孔されたもので、上から下方向に穿たれている。内外面とも、横ナデ調整により仕上げられている。

讃岐産　235は、口縁端部を上下方向にわずかに拡張し、端面に３条の凹線を施し、その後刻み目を施し、さらにその上に３列３段の９個からなる円形浮文が貼り付けられている。残存状況から判断して、９個を１セットとする円形浮文が、数箇所に貼り付けられていたものと考えられる。また、内面には、ヘラ描きによる斜格子文が施され、その下側に列点文が施されている。胎土・色調等も他と異なり、施文方法等の特徴から、讃岐地域からの搬入と考えられる。内外面とも横ナデ調整により仕上げられている。

236の口縁部形態は、234に近いが、明確な屈曲は認められず、大きく折り曲げられている。この屈曲部の頂部には、断面三角形を呈する突帯が２条貼り付けられ、その突帯間に穿孔が１箇所認められる。また、頸部外面にも断面三角形を呈する突帯が３条貼り付けられている。口縁部より大型の突帯である。口頸部は内外面ともハケ調整により仕上げられ、その後、口縁部は内外面とも横ナデ調整により仕上げられている。

直口壷は、237と238の２個体である。237は、口縁部が内湾気味に立ち上がる小型の壷である。内面は指オサエとナデ調整、外面はハケ調整により仕上げられ、その後口縁部内外面が横ナデ調整により仕上げられている。最後に、口縁部外面に1条の凹線が、端部外面に刻み目が施されている。238は、ほぼ完形に近い土器である。全体的に摩滅が顕著で、体部内面に指オサエ、口縁部に横ナデ調整の痕跡がわずかに観察できる程度である。

底部は９個体（239～247）を図化した。多くは広口壷の底部と考えられる。239は摩滅

が顕著なため、調整痕は観察できないが、胎土が他の土器と明らかに異なる。240も摩滅が顕著であるが、内面にわずかにハケ調整痕が観察できる。241～244・246は、外面がヘラ磨き、内面がハケ調整と、ほぼ同様の調整法により仕上げられている。このなかで、242の体部下半には、焼成後と考えられる穿孔が認められる。この他245は、外面のヘラ磨きは同じであるが、内面下半が縦方向のヘラ削り、上半が指オサエとナデ調整により仕上げられている。また247の内面は、ヘラナデおよびナデ調整により仕上げられている。

甕　口縁部を中心とした個体を５点（248～252）図化した。いずれも、口縁部の基本形態は同じタイプに分類されるものである。調整を観察できるものは、体部内外面をハケ調整後、口縁部内外面が横ナデ調整により仕上げられている。ただし、法量的に、大型（248･249）と小型（250～252）に細分することができる。

蓋　253の１個体が出土している。口径9.1cmと小型の蓋である。内外面とも指オサエとナデ調整により仕上げられている。口縁部付近には、焼成前に穿孔された紐穴が１箇所に認められる。口縁部の残存状況が良好ではないため、本来の数を復元することはできない。

高坏　いわゆる木器形高坏が１個体（254）出土している。坏部と口縁部境上面には、断面方形を呈する突帯が貼り付けられている。坏部内外面は、ヘラ磨きにより仕上げられている。口縁部は、内外面を横ナデ調整後、外面がヘラ磨きにより仕上げられている。

脚部　255～257の３個体を図化した。255は、脚部外面がヘラ磨き、内面がヘラ削り、坏部内面がヘラ磨きにより、仕上げられている。脚端部は、ヘラ磨き後横ナデ調整により仕上げられている。256は、254タイプの高坏の脚部と考えられる。外面はヘラ磨き、内面はナデ調整により仕上げられている。257も同様の調整により、仕上げられている。

時期　出土土器から判断して、弥生時代中期後半（第３期）に埋められたものと考えられる。

第135図　ＳＤ42検出状況

ＳＤ４３（写真図版54）

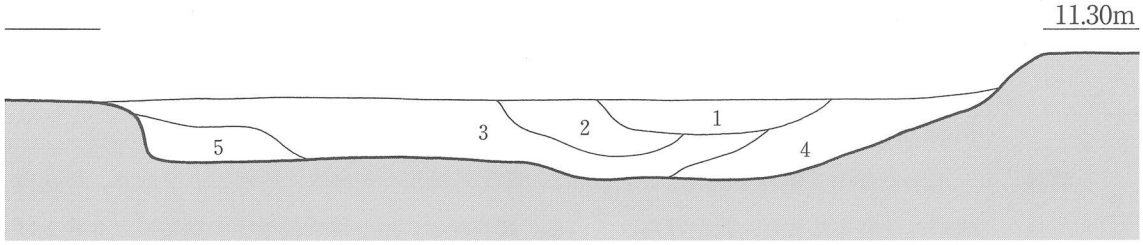
検出状況　Ｄ－２区西部で検出した（第112図）。南西－北東方向から北西－南東方向に大きく屈曲する溝で、両端とも調査区外までのびている。南西端でＳＤ42と、屈曲部でＳＤ44と切り合い関係が認められ、ＳＤ42に切られ、ＳＤ44を切っている。ＳＨ10の西側に位置する。

形状・規模　検出した長さは、18.10ｍを測る。横断面は逆台形を呈し、最深部における検出面からの深さは、51㎝～74㎝を測る。検出面における幅は、3.54ｍから6.64ｍを測る。底部の標高は、南西端で10.45ｍ、南東端で10.08ｍと、南東側へ傾斜している。

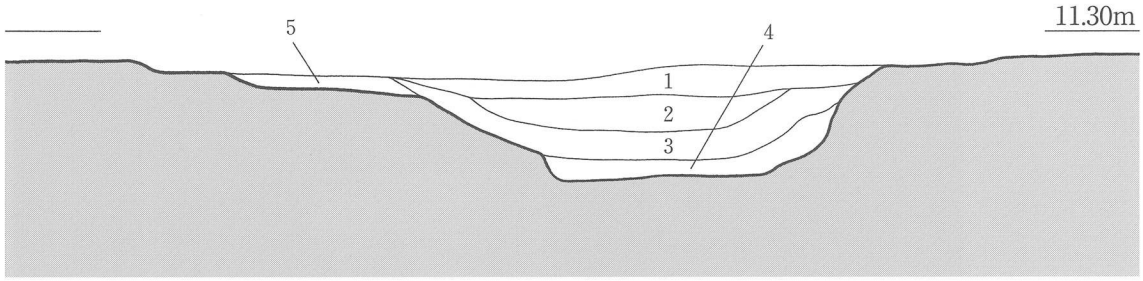
埋没状況　埋土は５層からなり（第136図）、各層とも、その層相から判断して人為的に埋められたものと考えられる。

出土遺物

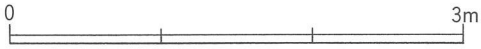
土器　壷・甕・鉢・高坏・器台・台形土器・蓋の各器種が多量に出土している（図版15～図版27）。出土状況から判断して。人為的に廃棄されたものと考えられる。これらの土器は、



１．褐色シルト質極細砂混じり灰褐色シルト質極細砂
２．灰褐色シルト質極細砂混じり褐色極細砂～細砂
３．灰褐色極細砂～細砂混じり褐色極細砂～粗砂（中礫若干含む）
４．灰褐色シルト質極細砂混じり褐色シルト質極細砂
５．灰色極細砂～細砂混じり褐色シルト質極細砂



１．灰褐色シルト質極細砂混じり褐色シルト質極細砂
２．褐色シルト質極細砂混じり灰褐色シルト質極細砂（中礫若干含む）
３．灰褐色極細砂～細砂混じり暗褐色シルト質極細砂（中礫若干含む）
４．褐色極細砂～粗砂混じり灰色極細砂～細砂
５．灰色シルト質極細砂混じり褐色シルト質極細砂



第136図　ＳＤ43

埋土中の上層から下層の各層から出土している。しかし、上層と下層の土器片の接合関係が少なからず認められることから、上層と下層に大きな時期差は認められないものと考えられる。このため、前期と考えられる261の壷については、混入したものと考えられる。

壷　広口壷・直口壷・短頸壷水差・底部等が出土している。

広口壷　259・260・262～279の20個体を図化した。

259・260・262～266は、口縁端部を上下方向にわずかに拡張し、端面を有するタイプである。259・263は、頸部に断面三角形の突帯が貼り付けられ、口頸部外面はヘラ磨き、内面はナデ調整により仕上げられている。ただし、286の口縁端部には、4条の凹線が施された後、刻み目が施されているのに対して、259は横ナデ調整のみで、施文は認められない。

260と262は、口縁端面に刻み目が施され、頸部には指頭圧痕文突帯が貼り付けられている。260の調整は摩滅のため観察できないが、262は外面がヘラ磨き、内面がナデ調整により仕上げられている。

264は、口縁部端面に3本を単位とする櫛描波状文が2単位施されている。また、同様の櫛描波状文が2単位、口縁部内面にも施されている。口頸部外面はヘラ磨き、内面はハケ調整後ナデ調整により、仕上げられている。265は、口縁端部には施文されず、横ナデ調整により仕上げられている。頸部には指頭圧痕文突帯が貼り付けられている。体部外面はヘラ磨き、口頸部内外面はハケ調整により、仕上げられている。体部内面については、摩滅のため観察できない。266は、口縁端面に刻み目が施され、頸部には指頭圧痕文突帯が貼り付けられている。全体的に摩滅が著しく、わずかに口頸部外面にヘラ磨き、内面にナデ調整の痕跡を観察することができる。

267は、口縁端部を下方に大きく拡張させ、端面に6条の凹線が施され、その上に円形浮文が2箇所貼り付けられている。その位置関係から、当初は4箇所に貼り付けられていたものと考えられる。頸部外面は、縦方向のハケ調整後、3条の凹線が施されている。内面はナデ調整により仕上げられている。

268と269は、口縁部内面に2条の断面三角形の突帯が貼り付けられている。特に、外側の突帯は口縁端部に貼り付けられ、外端面を形成する。2条の突帯頂部には刻み目が施されている。また、内側の突帯の下側には2個がセットとなった紐穴が焼成前に穿たれている。269において2セット確認され、その位置関係から判断して、当初は4セットあったものと考えられる。さらに、268の頸部外面には指頭圧痕文突帯が貼り付けられている。268・269とも頸部外面はヘラ磨きにより仕上げられ、269の頸部内面は横ナデ調整により仕上げられている。268の内面については、摩滅のため観察できない。

270～275の6個体は、口縁部内面に断面三角形状の突帯が1条貼り付けられるタイプである。いずれも、高さ3～4㎜と、小規模な突帯である。275を除いては、外反する口縁部の頂部に貼り付けられている。275は、口縁部のやや下がった位置に1条貼り付けられている。6個体とも、口縁部内外面は横ナデ調整により仕上げられている。さらに、271と273の頸部外面はハケ調整により仕上げられている。また、274の口頸部内面は横方向のヘラ磨きにより仕上げられている。270は、頸部外面をハケ調整後、指頭圧痕文突帯が貼り付けられている。口縁端面には刻み目が施されている。271と272は、頸部に断面三角形

を呈する突帯が２条貼り付けられている。さらに、271の口縁端部および口縁部突帯上には、刻み目が施されている。273は突帯頂部、274は口縁端面に刻み目が施されている。275は、口縁端部に刻み目が、口縁部内面に５条からなる櫛描扇状文が、それぞれ施されている。頸部外面は縦方向のヘラ磨きにより仕上げられている。

276は、口縁端部内面と頸部外面に、それぞれ２条の断面三角形を呈する突帯が貼り付けられ、口縁部の突帯上には刻み目が施されている。また、口縁部の突帯間には、３穴の紐穴が焼成前に穿たれている。頸部外面はハケ調整、口縁部は横ナデ調整により仕上げられている。

277は、口縁部を下方に屈曲させるが、この屈曲部内面に断面三角形の突帯が貼り付けられている。突帯より外側には、ヘラ描による渦巻文が施され、また紐穴が２穴穿たれている。ただし、いずれの紐穴も貫通していない。口縁部は内外面とも横ナデ調整、頸部外面はハケ調整、頸部内面はナデ調整により仕上げられている。

278は、口縁端部に面を有し、端面に刻み目が施されている。口縁部内外面は横ナデ調整により仕上げられている。頸部は内外面とも摩滅のため観察できない。279は、口縁部が折り曲げられ、玉縁状を呈している。内面は横方向の、外面は縦方向のハケ調整後、横ナデ調整により仕上げられている。

大型広口壷　大型の広口壷である。284～288の５個体を図化した。287については、286との比較から、同タイプの壷の底部と判断したものである。

これらはほぼ同タイプの壷で、直立する頸部に受け口状の口縁部が付くとともに、頸部には指頭圧痕文突帯が貼り付けられている。完形に復元された286は、体部内外面をハケ調整後、外面下半がヘラ磨き、内面肩部・底部付近がナデ調整により仕上げられている。頸部は内外面ともハケ調整により仕上げられ、その後口縁部が横ナデ調整により仕上げられている。

なお、285は284～286とは特徴を若干異にし、指頭圧痕文突帯の指頭圧痕が、２段に施されている。また、口縁部の立ち上がりも外反傾向にあり、他の２個体とは若干特徴を異にする。また、288は他の個体と比較して口径と頸径の差が少なく、口縁部には３条の凹線が施されている。

短頸壷　280・281の２個体を図化した。

２個体とも、頸部が斜外方に直線的に立ち上がり、口縁部を大きく外反させ、端部を拡張させている。280は、口縁部内外面が横ナデ調整、頸部内外面がナデ調整により仕上げられている。281は、280より大型で、口縁端面には横ナデ調整後刻み目が施されている。頸部は内外面ともナデ調整、体部は内外面ともハケ調整により仕上げられている。

直口壷　282・283の２個体を図化した。

２個体とも口縁部が斜方向に直線的にのび、端部を横ナデ調整により拡張させている。頸部は内外面とも横ナデ調整により仕上げられ、外面には指頭圧痕文突帯が貼り付けられている。体部外面はヘラ磨き、内面はハケ調整により仕上げられている。

短頸壷　289～291の３個体を図化した。算盤玉形の体部に短く外反する口縁部が付くタイプである。口縁部から体部にかけて残存する289は、体部内外面がハケ調整後外面をヘラ磨き、

口縁部内外面が横ナデ調整により、仕上げられている。その後、体部外面には、上から順に、6条1単の櫛描波状文3単位、同櫛描直線文2単位、同櫛描波状文2単位、同櫛描直線文2単位が施されている。櫛描文の原体は同じものが用いられている。

体部のみ残存する291は、体部外面がハケ調整後下半をヘラ磨き、内面がナデ調整により仕上げられている。また、体部外面上半部には、貝殻施文が2段にわたって施されている。

290は、摩滅が著しく、外面の調整は観察できなかった。口縁部は内外面とも横ナデ調整により仕上げられている。

短頸壷　短頸壷Gに分類される短頸直口壷である。292～296の5個体を図化した。

292については、頸部外面に指頭圧痕文突帯が貼り付けられ、短頸直口壷に近い。口縁部内外面を横ナデ調整、頸部外面がナデ調整、頸部内面がヘラナデ調整により、仕上げられている。

293～296は、ほぼ同タイプに分類されるものである。完形に近い294を中心にみると、体部から口縁部にかけて縦方向のハケ調整後、体部下半を縦方向のヘラ磨きが施されている。また、体部中位には、ヘラ先による刻み目が施されている。内面は、ナデ調整により仕上げられている。口縁部内外面は、ひとつまみの横ナデ調整により仕上げられている。ただし、295･296の内面は、ハケ調整により仕上げられている。

短頸壷　短頸壷B・Cに分類される短頸直口壷である。297～300の4個体を図化した。いずれも口縁部が斜外方に直線的に開き、口縁端部は肥厚し、明瞭な端面を有する。

297は、口縁部から頸部にかけてハケ調整により仕上げられている。この後、頸部に断面三角形の突帯が3条貼り付けられ、これらの突帯を横断するように棒状浮文が貼付けられている。2本が1単位と考えられるが、1単位のみの残存である。また、貼り付け突帯上方の口縁部には、ヘラ先によると考えられる刻み目が施されている。

298は、一見したところ脚部と形態的に類似するが、内面の調整法から壷の口縁部と判断した。頸部外面はヘラ磨きにより仕上げられている。内面はナデ調整により仕上げられている。299は、頸部から口縁部にかけての外面に指頭圧痕文突帯が3条貼り付けられている。300は、強い横ナデ調整により口縁端部が上下方に拡張され、外面がハケ調整、内面がナデ調整により、仕上げられている。

短頸壷　短頸壷Fに分類される短頸壷である。301と302の2個体を図化した。

301は、口縁部外面をハケ調整後、6条からなる櫛描直線文と櫛描波状文がそれぞれ1単位施されている。また頸部下にも同様の櫛描直線文が施されている。さらに、口縁端部外面には、刻み目が施されている。内面は、横ナデとナデ調整により仕上げられている。

302は、口縁部は内外面をつまむような横ナデ調整により仕上げられ、その後、頸部に指頭圧痕文突帯が貼り付けられている。体部外面は、上半を縦方向、下半上部を横方向、下半下部を縦方向のヘラ磨きにより、それぞれ仕上げられている。体部内面は、ハケ調整とナデ調整により仕上げられている。

水差　303と304の2個体を図化した。

303は、底部を欠く以外は、ほぼ完形に復元できる。いわゆる摂津型の水差で、口縁端

部のラインは水平ではない。体部から口縁部にかけて縦方向のハケ調整後、口縁部・頸部・体部上半に、それぞれ3段からなる竹管文帯が施されている。また、口縁端部外面には刻み目が施されている。内面は、指オサエとナデ調整後、体部上半が縦方向のハケ調整により仕上げられている。底部は、短い脚が付くものと考えられ、横ナデ調整により仕上げられている。

304は、把手付の台付水差壷で、ほぼ完存する。体部上半に半環状の把手が1箇所に付けられ、この把手側の口縁部の一部が片口状に抉れる（写真図版102）。体部と台部の接合は円板充填法による。体部はハケ調整後、下半がヘラ磨きにより仕上げられている。また、体部最大径部には断面三角形の突帯が貼り付けられている。さらに、その上部には貝殻施文が施されている。頸部には、指頭圧痕文突帯が貼り付けられている。体部内面も、ハケ調整により仕上げられ、その後、上半部はナデ調整が加えられている。台部内面はヘラ削り、外面はヘラ磨きにより、端部は横ナデ調整により仕上げられている。

底部　305～308の4個体を図化した。いずれも、壷の底部ではあるが、どのタイプに分類されるのか特定できないものである。

305は、外面がヘラ磨き、内面が指オサエとハケ調整により仕上げられている。306も外面はヘラ磨きによるが、内面は摩滅のため観察できない。307は、外面が粗いヘラナデ調整により、内面がハケ調整により仕上げられている。また、底部には焼成前に穿孔が施され、ヘラ削りにより仕上げられている。308は、外面がハケ調整、内面がナデ調整により仕上げられている。

甕　量的に最も多く出土した器種で、309～360の52個体を図化した。これらの甕は、法量的な差は認められるものの、形態・調整はほぼ同様の特徴を有する。体部外面はハケ調整後、下半部が縦方向のヘラ磨きにより仕上げられている。内面は、下半の器壁がヘラ削り後ハケ調整により、薄く仕上げられている。口縁部は内外面とも横ナデ調整により仕上げられている。

なお、320についても、一見したところ鉢形土器の可能性も考えられるが、これら上記の特徴、特に内面のヘラ削りから、甕と判断した。

また、314・334・343の肩部外面には、ヘラ先によると考えられる刻み目が施されている。さらに、343の肩部外面については、水差304と同様の貝殻施文が施されている（写真図版105）。また、334は、形態的に他と異なる上、胎土・色調等の特徴から、搬入品と考えられる。

この他、310・330・335・336・351・356・357の底部中央には、焼成前の穿孔が認められる。さらに、335の体部中位付近には、焼成後の穿孔が認められる。

鉢　直口鉢・台付鉢が出土している。

直口鉢　361～364の4個体を図化した。361については、形態的には甕と類似するが、内面がヘラ磨きにより仕上げられていることから、鉢に分類し、直口鉢と判断した。

361･363･364は同タイプと考えられる。完形に復元される364は、外面がヘラ磨き、内面が指ナデ調整により、口縁部内外面が横ナデ調整により、仕上げられている。また、底部外面にはヘラ削りが認められる。これに対して、361の内面はヘラ磨き、363の内面はハケ

調整とナデ調整により、仕上げられている。また、363の口縁端部外面には、刻み目が施されている。

362については、甕とは調整法が異なることから、鉢と判断した。体部外面はハケ調整、同内面はナデ調整、底部内外面は指オサエとナデ調整により、仕上げられている。

台付鉢　台付無頸鉢と他に分類できる。

無頸鉢は、365～371の7個体を図化した。口縁部まで残存する365～368は、ほぼ直線的にのびる体部に対して、口縁部を内側にく字形に屈曲させ、横ナデ調整により仕上げられている。また、366・367の屈曲部外面には刻み目が施されている。365の体部外面はハケ調整、内面はナデ調整により、367は内外面ともハケ調整により仕上げられている。その後、屈曲部直下に2穴1対となる紐穴が焼成前に穿たれている。368は脚部がわずかに残存し、三角形の透孔の頂部が8箇所認められる。脚柱部には、断面三角形を呈する突帯が貼り付けられている。369は脚部を中心に残存する。外面はハケ調整後ナデ調整により、内面はナデ調整により仕上げられている。透孔は隅丸三角形を呈し、調整前に4箇所に穿たれている。また、脚柱部には断面三角形を呈する突帯が貼り付けられている。また、体部内面はヘラ磨きにより仕上げられている。

370と371は、前者と脚部の形態的特徴が異なる。370は、脚高が1.8cmと低く、円形の透孔が焼成前に穿たれている。3穴残存するが、当初は15穴穿たれていたものと復元される。脚柱部には、断面三角形を呈する突帯が貼り付けられている。ナデおよび横ナデ調整により仕上げられている。371は、370とは対象的に脚高が7.5cm以上と高く、三角形状の透孔が焼成前に穿たれている。6箇所に穿たれていたものと復元される。また、脚下端部外面には、断面三角形を呈する突帯が2条貼り付けられ、その頂部には刻み目が施されている。

他の台付鉢は、372の1個体を図化した。体部外面はヘラ磨き、内面はナデ調整、脚部は横ナデ調整により、仕上げられている。

椀形鉢　373～376の4個体を図化した。これらの個体は、無頸壷あるいは高坏との峻別が困難なものが多く、その可能性が含まれている。

373は、口縁端部外面に粘土紐を貼り付け、上端面を拡張し、玉縁状を呈する。体部内面はナデ調整、口縁部内外面は横ナデ調整により仕上げられている。体部外面は、摩滅のため調整を観察できない。

374は、口縁端部を内側水平方向に拡張させ、強い横ナデ調整により仕上げられている。口縁部外面には4条の凹線文を施し、凹線文間には刻み目が施されている。体部は、内外面ともヘラ磨きにより仕上げられている。

375も、形態的には374と類似する。口縁部外面下端は、強い横ナデ調整により凹線状を呈する。体部は、内外面ともヘラ磨きにより仕上げられている。

376は、口縁部上半を内側に屈曲させ、深い椀形を呈する。口縁部外面には、5条の凹線が施されている。体部内外面はヘラ磨きにより仕上げられている。口縁部には、2穴の紐穴が穿たれている。2穴で1対となるものと考えられる。

大型鉢　377と378の2個体を図化した。377と378の坏部は、内外面ともハケ調整により仕上げられている。

高坏　　皿形高坏・木器形高坏・脚部が出土している。

皿形高坏　口縁部外面に断面三角形の突帯を貼り付けるタイプ（380）と、突帯を貼り付けないタイプ（379・381～383）とに分類できる。

380は突帯が２条貼り付けられている。突帯頂部に刻み目が施されるとともに、下段の突帯下側にも刻み目が施されている。また、口縁端部外面および上端面には、同規模の円形浮文が貼り付けられている。外面の円形浮文は連続して貼り付けられているが、上端面の円形浮文は３個がセットとなっている。

379・381～383のなかで、379と382はほぼ同タイプに分類できる。坏部内外面はヘラ磨き、口縁部は横ナデ調整により、仕上げられている。381については、口縁端部に粘土帯を貼り付け、口縁部を肥厚させ、横ナデ調整により仕上げられている。坏部外面はハケ調整により仕上げられているが、内面は摩滅のため観察できない。383については、坏部内面がナデ調整、外面がハケ調整、口縁部が横ナデ調整により仕上げられている。

木器形高坏　384～387の４個体を図化した。このなかで、385の１個体をほぼ完形に復元することができた。脚部から坏部にかけての外面は、ハケ調整後筒部を中心にヘラ磨き、坏部内面はハケ調整後ナデ調整、脚部内面はナデ調整により、仕上げられている。口縁部は、内外面とも横ナデ調整により仕上げられている。脚部外面には、上から３条・３条・４条の篦描沈線文帯が、３段にわたって施されている。

384は、坏部内外面がヘラ磨きにより仕上げられている。385同様、口縁部は内外面とも横ナデ調整により仕上げられている。また、脚柱部には断面三角形を呈する突帯が１条貼り付けられている。

386と387は、わずかに残存するのみで、摩滅も著しいことから、調整方法等は詳細に観察できない。

脚部　　388～394の７個体を図化した。脚部内面は、394のヘラ削りを除いては、ナデおよび横ナデ調整により仕上げられている。外面については、388と392はハケ調整、389～391・393はヘラ磨きにより、仕上げられている。また、394の外面には、篦描による鋸歯文および鋸歯文状の刻み目がそれぞれ１段施され、両者の間には４条からなる篦描沈線が施されている。また、上段の鋸歯文帯の上側にも２条の篦描沈線が認められる。なお、鋸歯文と沈線文とでは、異なる工具が用いられている。

この他、388の脚部には、長方形状の透孔が５箇所、焼成前に穿たれている。鋭利なヘラ先状の工具により穿たれた痕が認められる。さらに、脚柱部に２条、脚部に１条の、断面三角形を呈する突帯が貼り付けられている。

なお、390については、脚柱部内面に剥離痕が認められないことから、器台の可能性も考えられる。

台形土器　395の１個体が出土している。外面はヘラ磨き、内面はヘラナデ調整により、上面はナデ調整により仕上げられている。

蓋　　396の１個体が出土している。つまみが指オサエとナデ調整、体部内外面がハケ調整により、仕上げられている。

石器　　石鏃６点（Ｓ３～６・９・10）、石錐２点（Ｓ14・15）、不定形刃器１点（Ｓ22）が出土

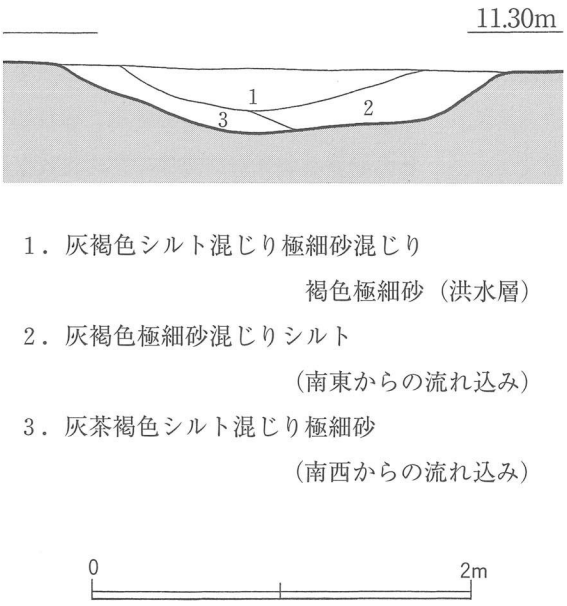
している（図版78・79：写真図版180）。石鏃は、平基式のものが大半で、Ｓ９のみ柳葉形をなす。また、Ｓ22の不定形刃器は、使用痕が顕著に認められる。

時期　出土土器から判断して、弥生時代中期後半（第３期）に埋められたものと考えられる。

ＳＤ４４（写真図版54）

検出状況　Ｄ－２区西部で検出した（第112図）。北西－南東方向に直線的にのびる溝で、北西端は調査区外までのび、南東端はＳＤ43に切られている。西側に位置するＳＤ42とほぼ平行する。ＳＫ44と切り合い関係にあり、ＳＫ44を切っている。

形状・規模　検出した長さは5.96ｍを測る。横断面は逆台形を呈し、最深部における検出面からの深さは34㎝、検出面における幅は1.82ｍ～2.60ｍを測る。底部の標高は北西端で10.76ｍ、南東端で10.58ｍと、南東側へわずかに傾斜している。



第137図　ＳＤ44

埋没状況　埋土は３層からなり（第137図）、２層・３層は両側からの流れ込みによる堆積層で、最上層は洪水により堆積した層である。

出土遺物　全く出土していない。

時期　出土土器が出土していないため時期の特定は困難であるが、ＳＤ43との切り合い関係から、弥生時代中期後半（第３期）と考えられる。

ＳＤ４５

検出状況　Ｄ－２区西部で検出した（第112図）。南北方向にほぼ直線的にのびる溝で、両端とも調査区外までのびている。ＳＨ10の東側・ＳＫ47～ＳＫ49・ＳＤ46の西側に位置し、他の遺構との明確な切り合い関係は認められない。

形状・規模　検出した長さは10.30ｍを測る。横断面は皿形をなし、最深部における検出面からの深さは22㎝を測る。検出面における幅は35㎝～1.64ｍを測る。底部のレベルはほぼ一定しており、傾斜は認められない。

埋没状況　埋土は２層からなり、上から灰色シルト質極細砂をブロック状に含む暗褐灰色シルト質極細砂、灰色シルト質極細砂をブロック状に含む褐灰色シルト質極細砂の堆積が認められた。いずれも層相から判断して、人為的に埋められた層と考えられる。

出土遺物　壷と甕が出土している（図版31）。

壷　図化できたのは481の１個体のみである。外面はハケ調整、内面は指オサエとナデ調整により仕上げられている。

甕　口縁部片・体部片・底部片が出土しているが、図化できたのは口縁部片の480のみである。口縁部は、内外面とも横ナデ調整により仕上げられているが、体部の調整については、摩滅のため観察できない。

時期　出土土器から判断して、弥生時代中期後半（第３期）と考えられる。

ＳＤ４６

検出状況　Ｄ－２区ほぼ中央部で検出した（第112図）。南北方向にほぼ直線的にのびる溝で、両端とも調査区外までのびている。ＳＤ45の東側に位置し、ＳＤ45とほぼ平行する。他の遺構との明確な切り合い関係は認められない。

形状・規模　検出した長さは10.48ｍを測る。横断面は皿形を呈し、最深部における検出面からの深さは20㎝を測る。検出面における幅は2.34ｍ～3.84ｍを測る。底部のレベルはほぼ一定しており、傾斜は認められない。

埋没状況　埋土は１層からなり、暗褐灰色シルト混じり極細砂～粗砂の堆積が認められた。

出土遺物　土器と石器が出土している。

土器　壷・甕・鉢・高坏・脚部・台形土器・蓋の各器種が多量に出土している（図版27～図版30）。出土状況から判断して、これらの土器は投棄されたものと考えられる。

壷　広口壷・直口壷・短頸直口壷・有段口縁壷・無頸壷・体部片・底部片が出土している。

広口壷　397～409の13個体を図化した。

397～399は、口縁端部を肥厚させ、明確な外端面を形成するとともに、頸部には指頭圧痕文突帯が貼り付けられるタイプである。また、頸部外面のハケ調整、口縁部の横ナデ調整も共通する。頸部内面は、397は横ナデ調整によるが、他はハケ調整により仕上げられている。口縁部端面には、397は３条の凹線を施文後刻み目が、398は刻み目が施されている。

400は、口縁端部を横ナデ調整により水平方向に拡張させ、上端面を形成させている。頸部外面はハケ調整、内面はナデ調整により仕上げられている。頸部外面には、指頭圧痕文突帯が貼り付けられている。

401は、口縁端部を上方に拡張し、外端面を形成するタイプであるが、施文等は認められない。内外面ともナデ調整により仕上げられている。

402～409は、口縁部を大きく折り返す、もしくは折り曲げるタイプである。402は、折り返すタイプで、内外面とも横ナデ調整により仕上げられている。頸部外面はハケ調整により仕上げられている。

403は、口縁部を折り曲げ、外端面と上端面に円形浮文が貼り付けられている。外端面と上端面では、円形浮文の大きさが異なる。また、上端面の円形浮文列の内側には、２条の断面三角形を呈する突帯が貼り付けられ、この突帯間に２穴で１対となる紐穴が２対認められる。当初は４対あったものと考えられる。また、頸部にも断面三角形を呈する突帯が２条貼り付けられ、２条の突帯に直交するように棒状浮文（長さ2.7㎝）が貼り付けられている。棒状浮文は１本のみ残存する。頸部外面はハケ調整、他は横ナデ調整により仕上げられている。

404は、口縁部を短く折り曲げるタイプである。屈曲部上面には2条の断面三角形を呈する突帯が貼り付けられ、この突帯間に1対をなす2穴の紐穴が穿たれている。2対残存するが、当初は4対あったものと考えられる。頸部には、4条の断面三角形を呈する突帯が貼り付けられている。頸部は内外面ともハケ調整により、口縁部は横ナデ調整により仕上げられている。

405と406は、口縁部を大きく折り曲げるタイプである。口縁部内外面は横ナデ調整、頸部内面はナデ調整により仕上げられている。405の頸部はハケ調整により仕上げられ、その後指頭圧痕文突帯が貼り付けられている。406の口縁部折り返し面には、刻み目が綾杉状に施されている。

407は、口縁部を折り返し、さらに端部を下方に拡張させている。屈曲部には紐穴が3穴穿たれている。また、外端面には2条の凹線が施されている。内外面とも横ナデ調整により仕上げられている。

408は口縁部を折り曲げるタイプで、口縁頂部はわずかに断面三角形の突帯状を呈する。この頂部が貼り付けによるのかどうかについては、観察できない。また、突帯の内側には、2穴の紐穴が穿たれている。

409は、口縁部を下方に大きく拡張させるタイプである。拡張部外面には6条の凹線が施されている。また、頸部には2条の凹線が施されている。頸部外面はハケ調整、口縁部外面は横ナデ調整により、仕上げられている。内面は、摩滅のため観察できない。

この他小片のため図化できなかったが、口縁部内面に列点文・外端面に凹線を施した口縁部片（470）、口縁部を大きく折り曲げ籾殻状の圧痕を施す個体（471）なども出土している（写真図版112）。

直口壷　410～412の3個体を図化した。410は、口縁部外面がハケ調整、内面がナデ調整により仕上げられ、頸部外面には指頭圧痕文突帯が貼り付けられている。411は、内外面がハケ調整により仕上げられている。体部内面のナデ調整は粗く、粘土紐痕が顕著に残存している。412は、口縁端部を肥厚させ、横ナデ調整により上端面が形成されている。頸部は摩滅が著しく、調整は観察できない。

短頸壷　短頸壷Ｅに分類されるもので、413の1個体を図化した。短く直立する口縁部外面には4条の凹線が施され、これに直交するように棒状浮文が2本貼り付けられている。口縁端部は、横ナデ調整により仕上げられている。

短頸壷　短頸壷Ｄ・Ｅに分類されるもので、414～416の3個体を図化した。頸部から斜外方に直線的にのびる口縁部を有し、端部を肥厚させている。口縁部外面には、断面三角形を呈する突帯が貼り付けられている。414は8条、415は4条貼り付けられ、その後突帯と直交するように2本の棒状浮文が貼り付けられている。416は、2条がセットとなって2段にわたって貼り付けられている。また、415の口縁端部には刻み目が施されている。414と415は、ともに口頸部が横ナデ調整により仕上げられている。416は、口縁部が横ナデ調整、頸部内面がヘラ磨き、外面がハケ調整により仕上げられている。

広口壷　広口壷Ｇに分類されるもので、417～419の3個体を図化した。口縁部は複合口縁状をなし、端部が水平方向に拡張され、横ナデ調整により仕上げられている。417は、その祖形

タイプと考えられるタイプで、口頸部外面にハケ調整後3条の凹線が施されるとともに、頸部には指頭圧痕文突帯が貼り付けられている。内面はナデ調整により仕上げられている。

418の頸部は、417と同様の特徴が認められる。口縁部上端面と屈曲部外面には刻み目が施されている。419は、頸部内外面と口縁部内面がハケ調整により、口縁部外面が横ナデ調整により仕上げられている。刻み目・凹線等の施文は認められない。

無頸壷　420の1個体である。口縁端部を内外両方向に拡張し、横ナデ調整により仕上げられている。また、体部は内外面ともヘラ磨きにより仕上げられている。

台付無頸壷　小片のため図化できなかったが、台付無頸壷の体部片と考えられるものが3片（464）出土している（写真図版110）。これらは、胎土・色調の特徴から同一個体と考えられ、細い突帯が貼り付けられるとともに、櫛描波状文が施されている。

体部片　421の1個体を図化した。広口壷の体部と考えられる。内面はハケ調整、外面下半はハケ調整後ナデ調整により仕上げられている。外面上半は、摩滅のため観察でない。

この他、図化できなかったが、櫛描直線文と櫛描波状文が施された小片（465・467・479）、円形浮文を貼り付け貝殻施文が施された個体（466）、櫛描直線文・櫛描波状文と櫛描による格子文を施した個体（468）、櫛描による格子文を施した個体（469）、などが出土している（写真図版111・112）。

底部片　422～425の4個体を図化した。甕の底部との峻別が困難な個体も認められるが、内面下半にヘラ削り痕が認められない点を根拠に、壷と判断した。4個体とも外面はヘラ磨きにより仕上げられ、内面はハケ調整（422・424）もしくはナデ調整（423・425）により仕上げられている。

甕　底部も含めて、426～447の22個体を図化した。口縁部が残存する個体は、基本的にはほぼ同タイプに分類できるものである。口縁部内外面は横ナデ調整、体部内外面はハケ調整により仕上げられている。ただし、法量的にはバリエーションが認められる。このなかで、435の口縁端部には凹線が施されている。

底部片については、外面がヘラ磨き、内面がヘラ削りにより仕上げられている。だだし、439と441の内面にはヘラ削りが認められず、壷に分類される可能性も考えられる。また、446と447の底部中央には、焼成前に穿たれた孔が認められる。

鉢　448・449・452の3個体を図化した。448と449は同タイプに分類できるものである。448は、口縁部内外面が横ナデ調整、体部外面がハケ調整、内面がナデ調整により、それぞれ仕上げられている。脚部外面はハケ調整、内面はナデ調整により仕上げられ、三角形状の透孔が8箇所に穿たれている。また、脚柱部には、断面三角形を呈する突帯が2条貼り付けられている。

452は、口縁部外面に断面三角形を呈する突帯が2条貼り付けられ、口縁部外端部とともに、その頂部に刻み目が施されている。外面はハケ調整、内面は横ナデ調整により仕上げられている。

高坏　450・451・453～456の6個体を図化した。坏部が残存するものは、いずれも皿形に分類されるものである。

450は坏部から脚部にかけて残存し、脚部には三角形の透孔が4箇所に穿たれている。

脚柱部には、断面三角形を呈する突帯が3条貼り付けられている。脚部外面と坏部内面は、ヘラ磨きにより仕上げられている。

451と454は、口縁端部を内外面両水平方向に拡張させ、横ナデ調整により仕上げられている。451は、外面がハケ調整後ナデ調整により仕上げられている。454は、内外面をハケ調整後、ヘラ磨きにより仕上げられている。

453は、口縁部を外方に屈曲させるタイプで、横ナデ調整により仕上げられている。また、坏部は内外面ともヘラ磨きにより仕上げられている。

455は、体部に対して口縁部を上方に屈曲させるタイプで、口縁部は内外面とも横ナデ調整、体部は内外面ともヘラ磨きにより仕上げられている。

456は、皿形高坏と455の中間形態と考えられる。調整方法は、455と同じである。

この他図化できなかったが、口縁部に突帯を貼り付け刻み目を施す個体（472～476・478）が出土している。これらのなかには、474のように外面に櫛状工具による同心円文を施した例や、櫛描による格子文を施した例が認められる。（写真図版112）。

脚部　457～460・463の5個体を図化した。いずれも高坏・鉢のいずれに分類できるのか判別できないものである。

457は、内面がナデ調整、外面がハケ調整後、ヘラ磨きにより仕上げられている。さらに、脚端部にはヘラ状のものによると考えられる刻み目が、2段にわたり連続して施されている。計20箇所に施されているものと推定される。

458は、内面がハケ調整後横ナデ調整、外面も横ナデ調整により仕上げられている。

459は、内面がナデもしくはヘラナデ調整、外面がハケ調整により仕上げられている。その後、外面下半には4条の凹線が施されている。

460は、内外面が横ナデ調整により仕上げられている。内面上半にわずかに絞り痕が認められる。

463は、台付鉢の可能性が高い。脚部外面はヘラ磨き、内面はナデ調整により、端部は横ナデ調整により、仕上げられている。

この他図化できなかったが、篦描沈線により施文し、三角形状の刻みを入れた個体（477）も出土している（写真図版112）。

台形土器　461の1個体が出土している。体部外面はヘラ磨き、内面は指オサエ後ハケ調整とナデ調整により仕上げられている。台部上面はヘラ磨き、内面は指オサエにより仕上げられている。また、台部縁辺部は横ナデ調整により仕上げられている。

蓋　462の1個体が出土している。つまみ部は指オサエとナデ調整により、体部内面はナデ調整、外面はハケ調整後横ナデ調整により、仕上げられている。

石器　石鏃1点（S7）と石錐1点（S16）が出土している（図版78・写真図版180）。

時期　出土土器から判断して、弥生時代中期後半（第3期）と考えられる。

SD47

検出状況　D－2区ほぼ中央部で検出した（第113図）。舌状を呈する溝で、主軸方向はほぼ南北方向を示している。南端は調査区外までのび、北端は調査区内で収束している。SK50の南

東側に位置する。飛鳥時代の溝ＳＤ50と平面的に一致し、ＳＤ50の底部で当遺構を確認することができた。他の遺構との明確な切り合い関係は認められない。

形状・規模　検出した長さは4.25mを測る。横断面は皿形を呈し、最深部における検出面からの深さは19cmを測る。検出面における幅は1.00m～1.72mを測り、底部のレベルはほぼ一定しており、傾斜は認められない。

埋没状況　埋土は１層からなり、灰色シルト混じり暗褐灰色シルト質極細砂～細砂が認められた。

出土遺物　壷と甕が出土している。

壷は482の１個体を図化することができた（図版31）。広口壷の底部と考えられ、外面はヘラ磨き、内面はナデ調整により仕上げられている。

甕は、中期の特徴を有する体部片が出土している。

時期　出土土器から判断して、弥生時代中期後半（第３期）と考えられる。

ＳＤ４８

検出状況　Ｄ－２区ほぼ中央部で検出した（第113図）。ほぼ南北方向に直線的な溝で、両端は調査区外までのびている。当溝の南半は、第１面で検出した飛鳥時代の溝ＳＤ50と第２面で検出した古墳時代の溝ＳＤ51の底部で当遺構を確認することができた。他の遺構との明確な切り合い関係は認められない。ＳＤ47の東側に位置する。

形状・規模　検出した長さは10.14mを測る。横断面は逆台形をなし、最深部における検出面からの深さは44cmを測る。検出面における幅は1.12m～1.98mを測り、底部の標高は、北端部で11.06m、南端部で10.99mと、わずかに南側へ傾斜している。

埋没状況　埋土は１層からなり、灰色シルト混じり暗褐色シルト質細砂～粗砂の堆積が認められた。

出土遺物　広口壷の口縁部片と体部片が出土しているが、いずれも小片のため図化できなかった。胎土は、弥生時代前期の特徴を示している。

時期　出土土器から判断して、弥生時代前期（第１期）と考えられる。

ＳＤ４９

検出状況　Ｄ－２区ほぼ中央部で検出した（第113図）。北東－南西方向に直線的な溝で、北東端は調査区内で収束し、南西端は古墳時代の溝ＳＤ51に切られている。ＳＤ48の東側に位置する。

形状・規模　検出した長さは1.64mを測る。横断面はＵ字形を呈し、最深部における検出面からの深さは19cmを測る。検出面における幅は33cm～38cmを測り、底部のレベルはほぼ一定している。

埋没状況　埋土は、灰白色シルト質極細砂１層からなる。

出土遺物　広口壷の体部片が出土しているが、いずれも小片のため図化できなかった。胎土は、弥生時代前期の特徴を示している。

時期　出土土器から判断して、弥生時代前期（第１期）と考えられる。

Ⅱ：古墳時代

検出した遺構は、土坑と溝に限られる。

（1）土坑

ＳＫ５４

検出状況　Ｄ－１区北側で検出した（第138図）。ＳＢ06の北東側に位置する。時期不明の遺構と切り合い関係にあるが、これを切っている。このため、当遺構は完存する。

形状・規模　平面形は楕円形を呈する。長軸方向で67㎝、その直交方向で44㎝を測る。横断面はＵ字形をなし、最深部における検出面からの深さは19㎝である。

埋没状況　埋土は、褐色シルト質極細砂をブロック状に含む灰白色シルト質極細砂１層からなる。小礫を含み、その層相から判断して、人為的に埋められたものと考えられる。

出土遺物　須恵器の杯と器種不明の土師器片が出土しているが、小片のため図化できなかった。

時期　出土土器からＴＫ209（第11期）と考えられる。

ＳＫ５５（写真図版52）

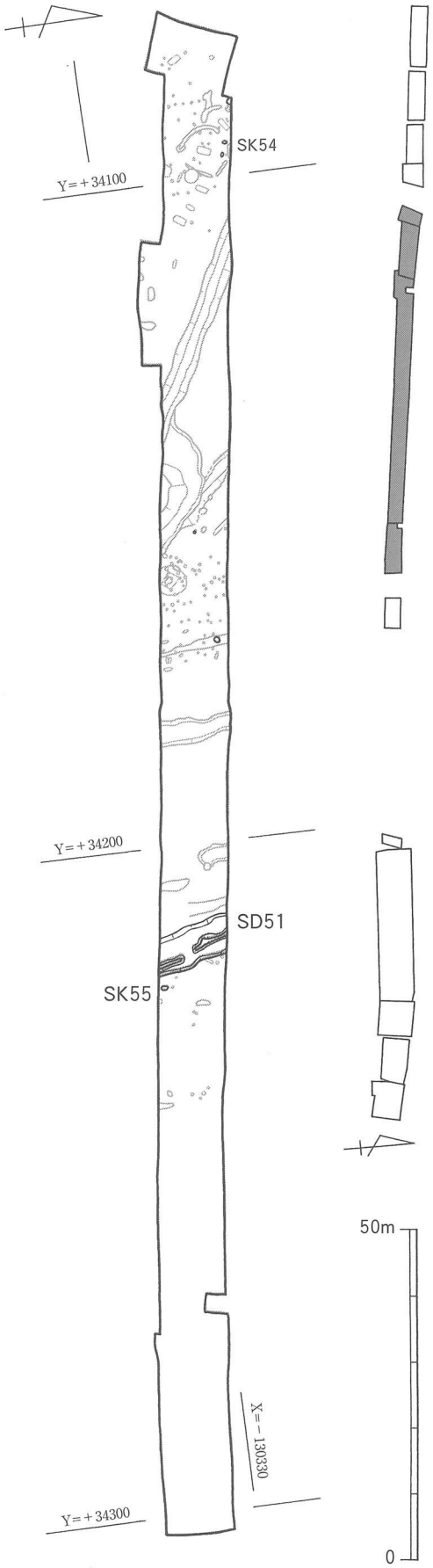
検出状況　Ｄ－２区中央部で検出した（第138図）。ＳＤ51の東側に位置する。他の遺構との切り合い関係は認められず、完存する。

形状・規模　平面形は楕円形を呈する。長軸方向で1.00ｍ、その直交方向で62㎝を測る。横断面はＵ字形を呈し、最深部における検出面からの深さは48㎝である。

埋没状況　埋土は、褐色シルト質極細砂をブロック状に含む灰白色シルト質極細砂１層からなる。その層相から判断して、人為的に埋められたものと考えられる。

出土遺物　全く出土していない。

時期　土器が出土していないが、古墳時代の土器を含む層を掘り下げた面で検出されたため、古墳時代と考えられる。



第138図　Ｃ・Ｄ区第２面　古墳時代

（２）溝

ＳＤ５１

検出状況　Ｄ－２区中央部で検出した（第138図）。ほぼ南北方向にのびる溝で、両端とも調査区外までのびている。他の遺構との明確な切り合い関係は認められなかった。

形状・規模　検出した長さは9.92mを測る。横断面は皿形をなし、最深部における検出面からの深さは28cmを測る。検出面における幅は2.48m～3.20mを測る。底部のレベルはほぼ一定しており、傾斜は認められない。

埋没状況　埋土は２層からなる（第139図）。層相から判断して、洪水砂による埋没と考えられる。

出土遺物　須恵器・土師器・韓式土器が出土している（図版31）。

須恵器　器台（486・487）と甕（488）が出土している。

器台は、高杯形器台に分類されるもので、口縁部を中心とした破片（486）と体部を中心とした破片（487）が出土している。

486は、口縁部外面に断面三角形を呈する突帯が２条付き、その下側に10条を１帯とし２帯からなる組紐文が施されている。487は、上から２条の突帯と１条の突帯があり、２条の突帯の上側には10条からなる組紐文が、その下側には２帯の波状文が施されている。

両個体は、胎土などの特徴および組紐文の特徴から同一個体の可能性が考えられ、突帯もシャープに造られている。

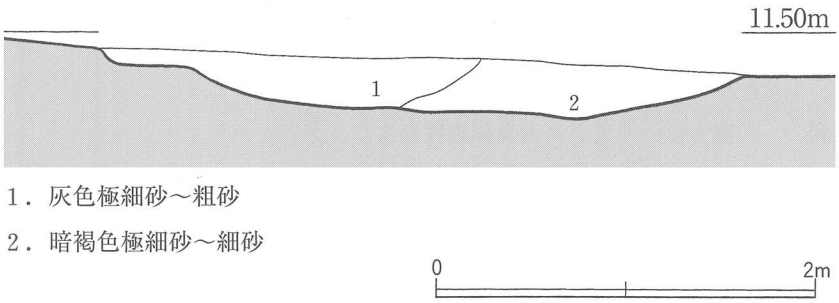
甕は、体部の肩部付近を中心に残存する。外面は瓦質土器のように研磨されている。内面には同心円文が認められるが、ナデ調整により観察できるのは部分的である。今回報告する須恵器のなかで、最も古く位置付けられるものと考えられる。

土師器　高坏の坏部片が出土しているが、小片のため図化できなかった。

韓式土器　小片が２点（489・490）出土している（写真図版113）。

489は、器種の特定は困難であるが、正格子の叩き目を明瞭に観察することができる。490は、格子目の叩き目が認められるとともに、強い横ナデ調整による沈線文が認められる。このような沈線文は把手を貼り付けるための割り付けと考えられることから、鍋もしくは甑の一部と考えられる。

時期　出土土器から判断して、古墳時代中期（第７期）と考えられる。



１．灰色極細砂～粗砂

２．暗褐色極細砂～細砂

第139図　ＳＤ51

第４節　Ｅ区の調査

１．基本層序と遺構の検出

基本層序　当地区は、第１章第１節における分析の結果、遺構検出面のレベルは、東部においてはＣ・Ｄ区とほぼ同じであるが、西側ほど低くなっている。

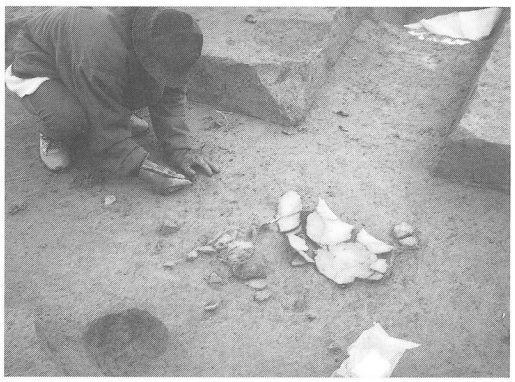
基本層序（第141図）は、上から、耕作土層（１層）・床土層（２～８・10・11層）・基盤層（12～19層）からなり、基盤層の上面が遺構検出面なっている。基盤層は、大きく礫層と洪水砂からなり、礫層の凹部を埋積するように洪水砂が堆積している。礫層上面のレベル差は顕著で、当地区の最も東側のレベルが最も高く、一部では耕作土直下まで達している。このため、この箇所では、礫層上面が遺構検出面となっている。そして、遺構検出面のレベルは、この箇所が最も高く、西側へ傾斜している。これと逆比例するように、西側ほど床土層が厚く認められる。

また、基盤層と床土層の間に顕著な土壌層が認められなかった。このことから、当地区で最も新しい遺構が確認された鎌倉時代以降に、この土壌層は開墾等により、床土化していったものと考えられる。

遺構の検出　遺構を検出した面は、層位的には１面である。ただし、遺構相互の切り合い関係が多く認められ、中世とそれ以前の遺構埋土の色調の差が明らかであったため、両者を第１面と第２面とに分け、遺構を検出していった。

出土遺物　基盤層出土土器と遺構検出過程で出土した土器・石器からなる。

基盤層出土　基盤層から出土した土器は、基盤層の堆積時期を考える上で、良好な資料と考えられる。出土した土器は、縄文時代晩期の長原式に分類される鉢（493）で、１個体出土している（第140図）。口縁端部よりやや下側と頸部と体部の境に断面三角形を呈する突帯が貼り付けられ、頂部には刻み目が施されている。体部外面はヘラ磨き、内面は指オサエとナデ調整、口頸部内外面は横ナデ調整により、仕上げられている（図版32）。



第140図　縄文土器出土状況

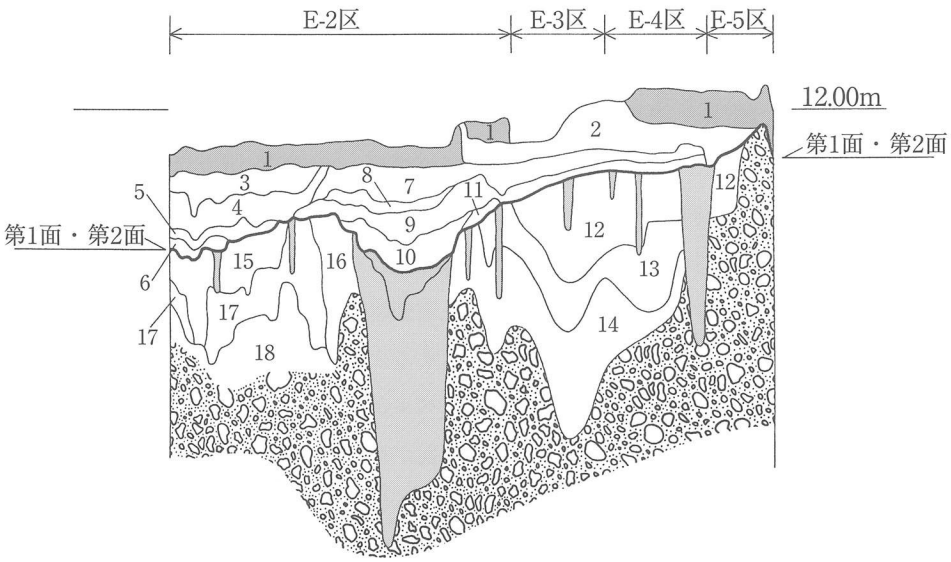
検出面出土　遺構検出過程で出土した土器は、直接遺構に伴うものではないが、当地区における土地利用の開始時期、さらには遺構の時期の、推測材料になるものと考えられる。そこで、これらの主だった遺物について報告する。

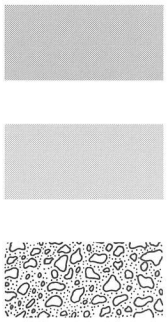
大きくみて、弥生時代・古墳時代・奈良時代・平安時代～鎌倉時代の土器が出土している（図版32・33）。

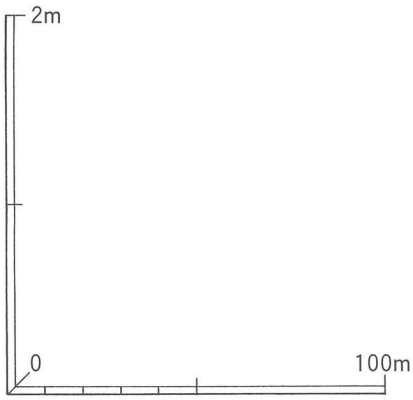
弥生時代　中期と後期の土器および石器が出土している。

中期　甕が出土しており、底部片1個体（503）を図化することができた。外面はヘラ磨き、内面はヘラ削りにより仕上げられている。

後期　器種としては、壷・甕・鉢・高坏が出土している。







1．耕作土
2．黄灰色シルト混じり極細砂～細砂（床土層）
3．黄灰色シルト混じり極細砂（床土層）
4．黄灰色極細砂混じりシルト（床土層）
5．暗黄色極細砂混じりシルト（床土層）
6．黒褐色極細砂混じりシルト（土壌層）
7．灰黄色シルト混じり極細砂～細砂（床土層）
8．灰黄色極細砂質シルト（床土層）
9．黄灰色極細砂質シルト～褐黄色シルト（整地層？）
10．暗黄灰色シルト混じり極細砂～細砂（床土層）
11．暗黄色シルト（床土層）
12．褐色シルト質極細砂（基盤層）
13．黄褐色極細砂質シルト～極細砂（洪水層）
14．暗黄褐色極細砂混じりシルト～細砂（洪水砂）
15．暗灰褐色シルト質極細砂（洪水層：若干土壌化）
16．黄褐色極細砂～細砂（洪水砂：若干土壌化）
17．暗褐色細砂～極細砂（洪水砂）
18．黄褐色極細砂～細砂（洪水砂）
19．礫層

第141図　E区基本土層

壷　　直口壷・広口壷・台付無頸壷・底部片に分類できる。

直口壷は、494・500～502の4個体を図化した。494は、外面がハケ調整、内面が横ナデ調整により仕上げられている。500は、内外面がヘラ磨きにより仕上げられた後、口縁部外面に5条の凹線が施されている。また、体部内面はヘラ削りにより仕上げられている。501は、外面がハケ調整、体部内面がヘラ削り、頸部内面が指オサエとナデ調整により、

仕上げられている。

広口壺は、499の１個体である。頸部から体部にかけての外面はハケ調整、体部内面はヘラ削り、頸部内面は指ナデ、口縁部内外面は横ナデ調整により、仕上げられている。

底部は、495・498の２個体で、ハケ調整を中心に仕上げられている。なお、498の体部外面下半の一部にはヘラ磨きが認められる。

台付無頸壺は、508の１個体である。全体的に摩滅が著しいため、詳細な観察はできないが、体部・脚部外面はヘラ磨き、脚部内面はナデ調整により仕上げられている。また、口縁部内外面は横ナデ調整により仕上げられている。

甕　いわゆるＶ様式系甕とそれ以外の甕の２タイプが認められる。Ｖ様式系甕は、496の１個体で、外面は叩き整形後一部をハケ調整により、内面はナデ調整により仕上げられている。504～506は、Ｖ様式系甕に分類されない甕で、504と505の体部外面はハケ調整、506はナデ調整により仕上げられている。体部内面は、504はハケ調整、505と506はヘラ削りにより仕上げられている。505内面のヘラ削りは、下半から中位を縦方向（下→上）、肩部付近を横方向（右→左）に、それぞれ施されている。

鉢　507の１個体を図化した。507は、把手付鉢であるが、把手そのものは剥離している。体部内外面がヘラ磨きにより、口縁部内外面が横ナデ調整により仕上げられている。

高坏　497の1個体を図化することができた。後期中葉に特徴的な高坏である。

石器　石鏃３点（Ｓ11～13）が出土している（図版78・写真図版181）。これらの石鏃については、出土土器から判断して、中期もしくは後期に位置付けられるものと考えられるが、具体的な時期の特定は困難である。

古墳時代　須恵器・土師器・韓式土器が出土している。

須恵器　杯身１個体（509）と杯蓋２個体（534・535）を図化した。杯身は、６世紀後半の特徴を示すものである。杯蓋（534・535）は、６世紀末～７世紀初頭の特徴を示す。

土師器　甕１個体（510）を図化した。体部内外面はハケ調整により仕上げられ、その後底部内面は指オサエとナデ調整により仕上げられている。口縁部は、内外面とも横ナデ調整により仕上げられている。

韓式土器　511と512の２個体を図化したが、いずれも甑である。外面に、格子状の叩き目が観察される。口縁部内外面は横ナデ調整、体部内面はナデ調整により仕上げられている。

奈良時代　須恵器と土師器が出土している。

須恵器　杯Ａ（514）・杯Ｂ（522～525）・杯Ｂ蓋（513・521）・皿（520）の各器種が出土している。杯Ａの底部はヘラにより切り離され、皿の底部はヘラ削りにより仕上げられている。

土師器　杯Ａ・椀・甕が出土している。杯Ａは515～517の３個体を図化することができたが、これらの３個体は、須恵器の杯Ａ（514）・土師器の椀（518）とともにほぼ同じ地点から出土しており、一括性の高い資料である。須恵器の杯Ａが出土していることから、515～517についても、当該期の土器と判断したものである。いずれも、底部の切り離しはヘラにより、体部から口縁部内外面は横ナデ調整により仕上げられている。また、515の口縁部内面には１条の沈線が認められる。

椀は518の１個体を図化することができた。515～517と一括性が高いことから、当該期

の土器と判断したものである。底部から口縁部にかけての外面はヘラ削りにより仕上げられ、その後、口縁部内外面を横ナデ調整により仕上げられている。体部内面は指オサエとナデ調整により仕上げられている。

甕は519の１個体を図化することができた。体部外面は指オサエとハケ調整、内面はナデ調整により仕上げられている。口縁部は、内外面とも横ナデ調整により仕上げられている。

平安時代　須恵器と土師器、および鉄釘が出土している。

須恵器　椀が出土している。528と529は、輪高台を有する椀で、全体を回転ナデ調整により仕上げられている。528については、突帯椀と考えられる。533は、平高台を有する椀と考えられるが、やや小型である。

土師器　皿・杯・椀の各器種が出土している。皿は、小皿（531）と大皿（532）が出土しており、531の底部はヘラにより切り離され、532はナデ調整により仕上げられている。口縁部はいずれも１段の横ナデ調整により仕上げられている。

杯は、526と527の２個体を図化することができた。形態的には奈良時代の杯Ａと類似するが、底部の調整方法の違いから時期が異なるものと判断した。底部外面は指オサエ、底部内面はナデ調整、口縁部内外面は横ナデ調整により、仕上げられている。

椀は、530の1個体のみである。断面三角形の輪高台を有する椀で、横ナデ調整により仕上げられている。

鉄釘　Ｆ18の１点が出土している（図版80・写真図版185）。5.3cm残存し、断面は７㎜×８㎜の方形を呈する。

小結　当地区においては、弥生時代中期から平安時代にかけての遺物の出土が認められ、検出した遺構も当該期に限られる。以上から、一見したところ、当地区の大半は完新世段丘Ⅱ面上にあたるものと考えられる。しかし、基盤層中から縄文時代晩期の土器（493）が出土している。したがって、Ｅ区が立地する段丘面は完新世段丘Ⅰ面になる可能性が考えられる。この問題については、第５章第２節にて検討したい。

2．第１面（写真図版56～58）

当面で検出した遺構（第142図）は、すべて平安時代以降である。地区ごとの検出遺構は、以下の通りである。

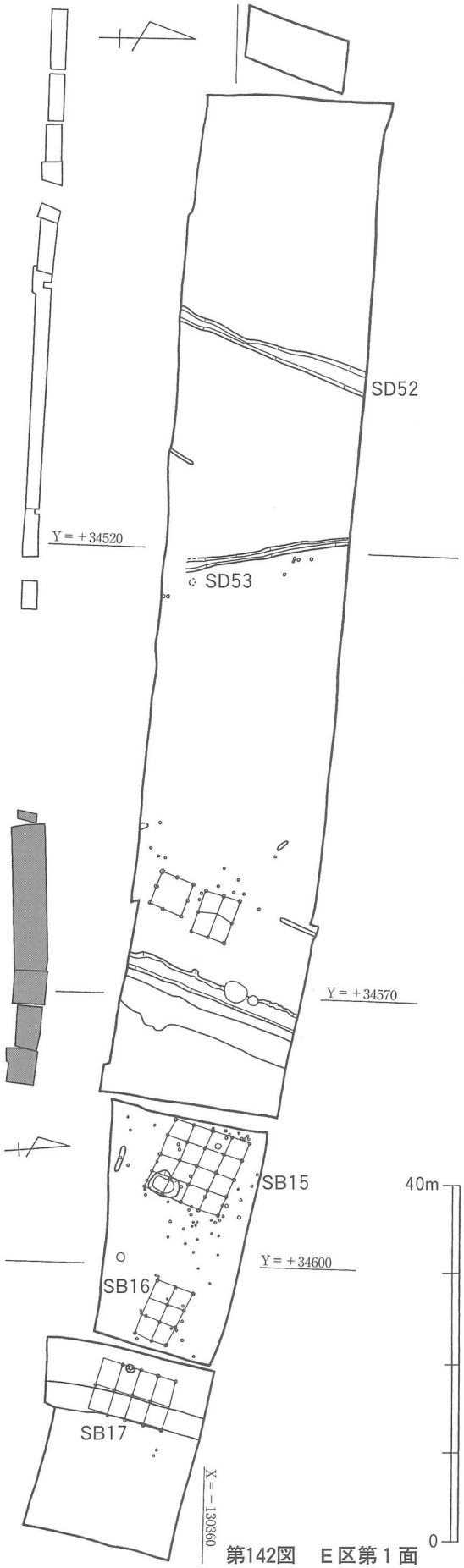
Ｅ－１区　遺構は全く検出されなかった。また、遺物も、平安時代の須恵器・土師器が小片でわずかに出土したにすぎない。

Ｅ－２区　溝状遺構・土坑・柱穴および掘立柱建物跡の一部を検出した。溝状遺構は西側に集中する。逆に、柱穴・掘立柱建物跡は東側に集中する傾向が認められる（第143図）。

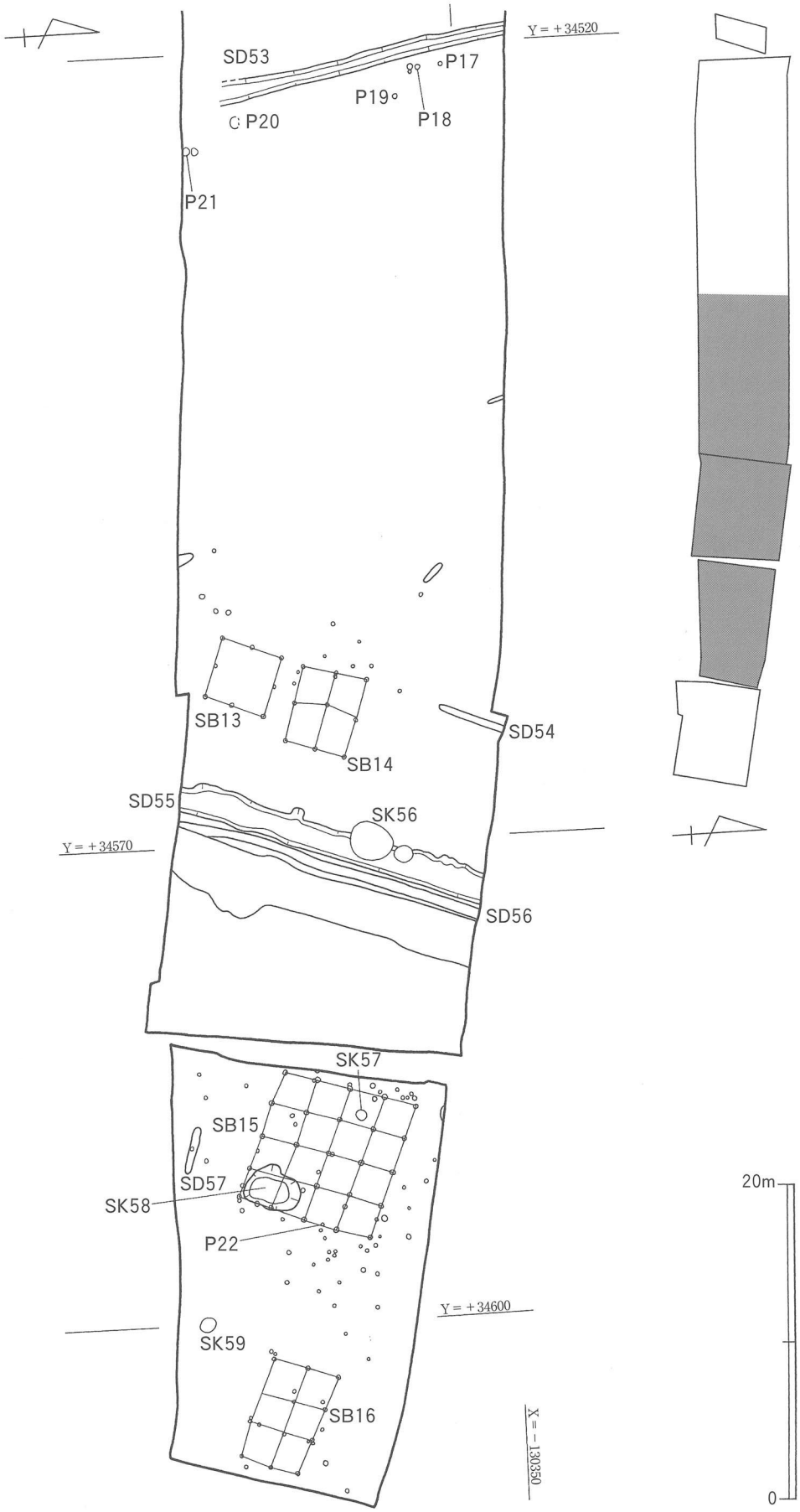
Ｅ－３区　掘立柱建物跡・柱穴および溝状遺構が検出されている。掘立柱建物跡と溝状遺構に関しては、ほぼ同様の方向性を示していることから、両者は有機的な関係があったものと考えられる（第143図）。

Ｅ－４区　掘立柱建物跡・柱穴および土坑が検出されている（第143図）。

Ｅ－５区　掘立柱建物跡と柱穴が検出されている（第143図）。



第142図　Ｅ区第１面



第143図　E区第１面　中世

（1）掘立柱建物跡

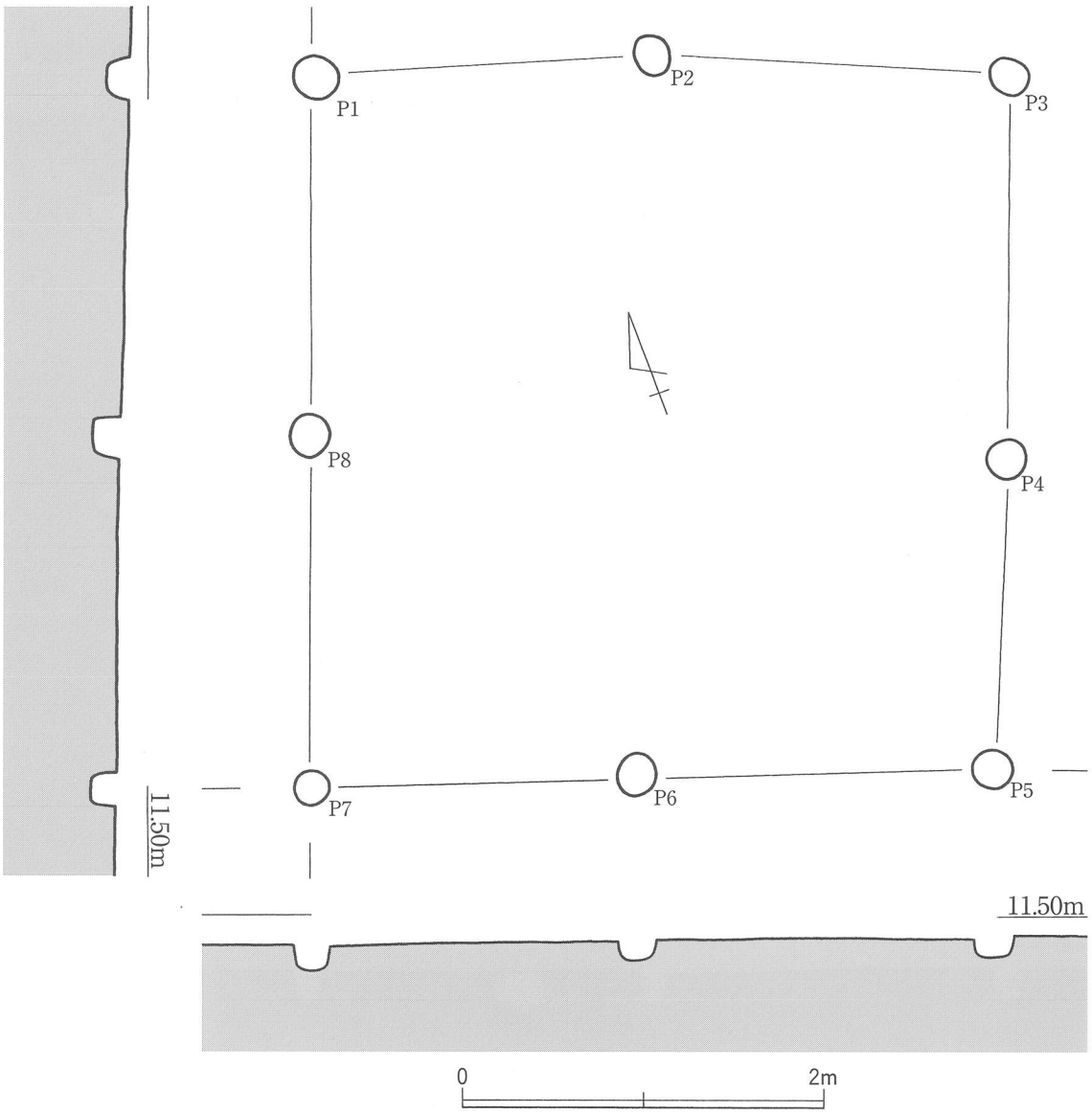
ＳＢ13～ＳＢ17の５棟を検出した。

ＳＢ１３

検出状況　Ｅ－３区東端からＥ－４区西端部にかけて検出した（第143図）。ＳＢ14の南側に位置し、ほぼ同様の方向性を示す。当建物は、調査区外まで拡がることもなく、全体を検出することができた。

形状・規模　２間×２間の側柱建物である（第144図）。西側桁行を基準とした棟軸方向は、Ｎ20°Ｅを示す。北梁行方向で3.86ｍ、東桁行方向で3.80ｍ、南梁行方向で3.76ｍ、西側桁行方向で3.92ｍを測り、面積は14.66㎡を測る。柱穴間の距離および柱間の平均値は、第27表のとおりである。

柱穴　掘り形の平面形は全て円形からなり、その規模は直径18cm～24cmを測る。深さは、10cm～14cmを測る。各柱穴の規模については、第28表のとおりである。埋土は、灰色シルト質極細砂を中心とした灰色系が主体である。



第144図　ＳＢ13

第27表　ＳＢ13建物規模一覧表

	柱穴間	柱穴間距離	側面距離	柱穴間平均距離
北梁行	Ｐ１－Ｐ２	1.88	3.86	1.93
	Ｐ２－Ｐ３	1.98		
東桁行	Ｐ３－Ｐ４	2.10	3.80	1.90
	Ｐ４－Ｐ５	1.70		
南桁行	Ｐ５－Ｐ６	1.96	3.76	1.88
	Ｐ６－Ｐ７	1.80		
西桁行	Ｐ７－Ｐ８	1.94	3.92	1.96
	Ｐ８－Ｐ１	1.98		

※　第27表の単位はｍ

第28表　ＳＢ13柱穴規模一覧表

柱穴No.	平面規模	柱痕径	深さ
Ｐ１	24		13
Ｐ２	19		10
Ｐ３	20		13
Ｐ４	20		14
Ｐ５	22		13
Ｐ６	20		14
Ｐ７	18		13
Ｐ８	21		13

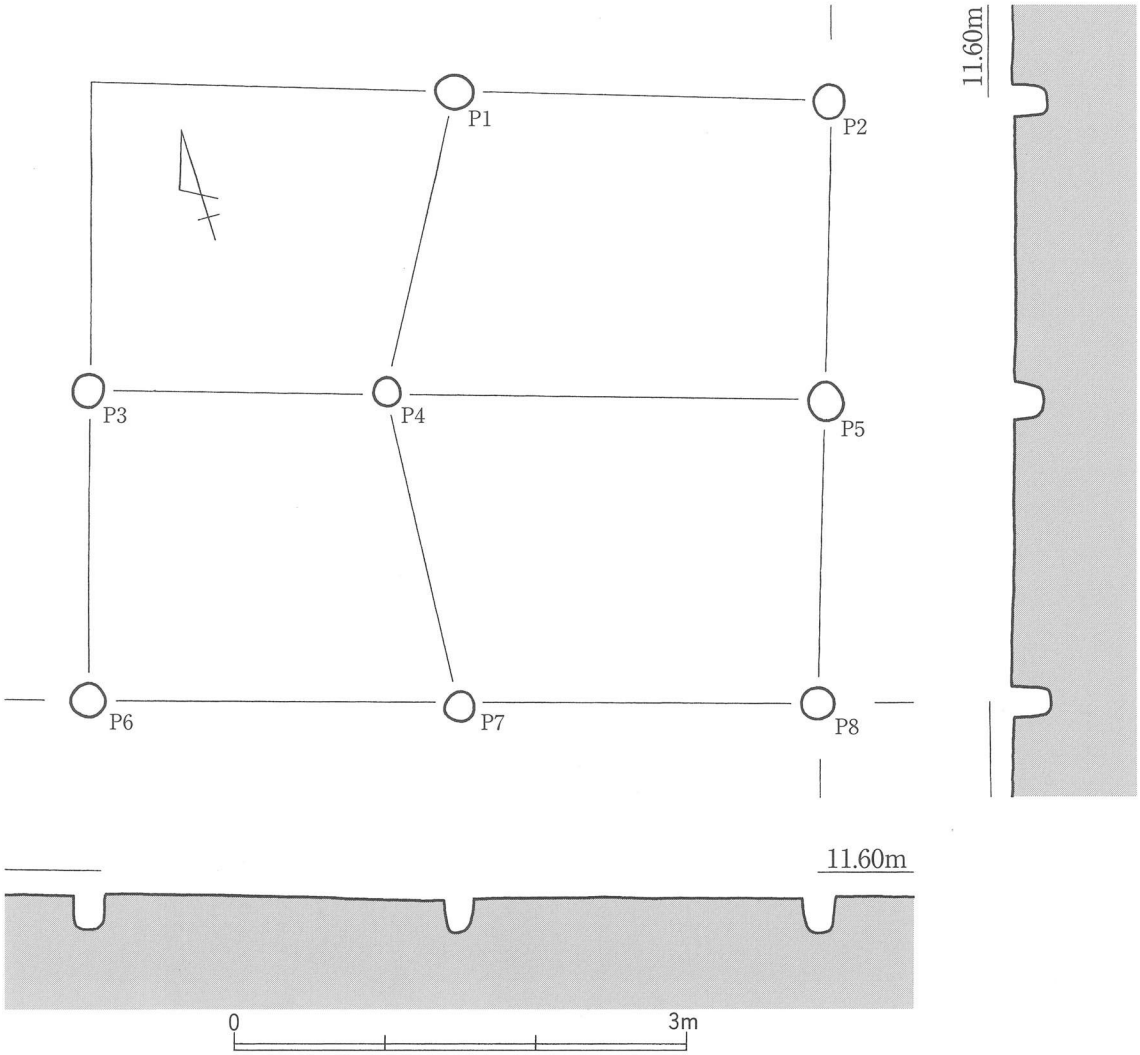
※　第28表の単位はcm

出土遺物　Ｐ８から須恵器の椀が出土している。11世紀～12世紀にかけての特徴を示している。

時期　出土土器及びＳＢ15・ＳＤ55との方向性の一致から、12世紀前半（第17期）と考えられる。

ＳＢ１４

検出状況　Ｅ－３区東端からＥ－４区西端部にかけて検出した（第143図）。ＳＢ13の北側に位置する。当建物は、調査区外まで拡がることもなく、全体を検出することができた。



第145図　ＳＢ14

第29表　ＳＢ14建物規模一覧表

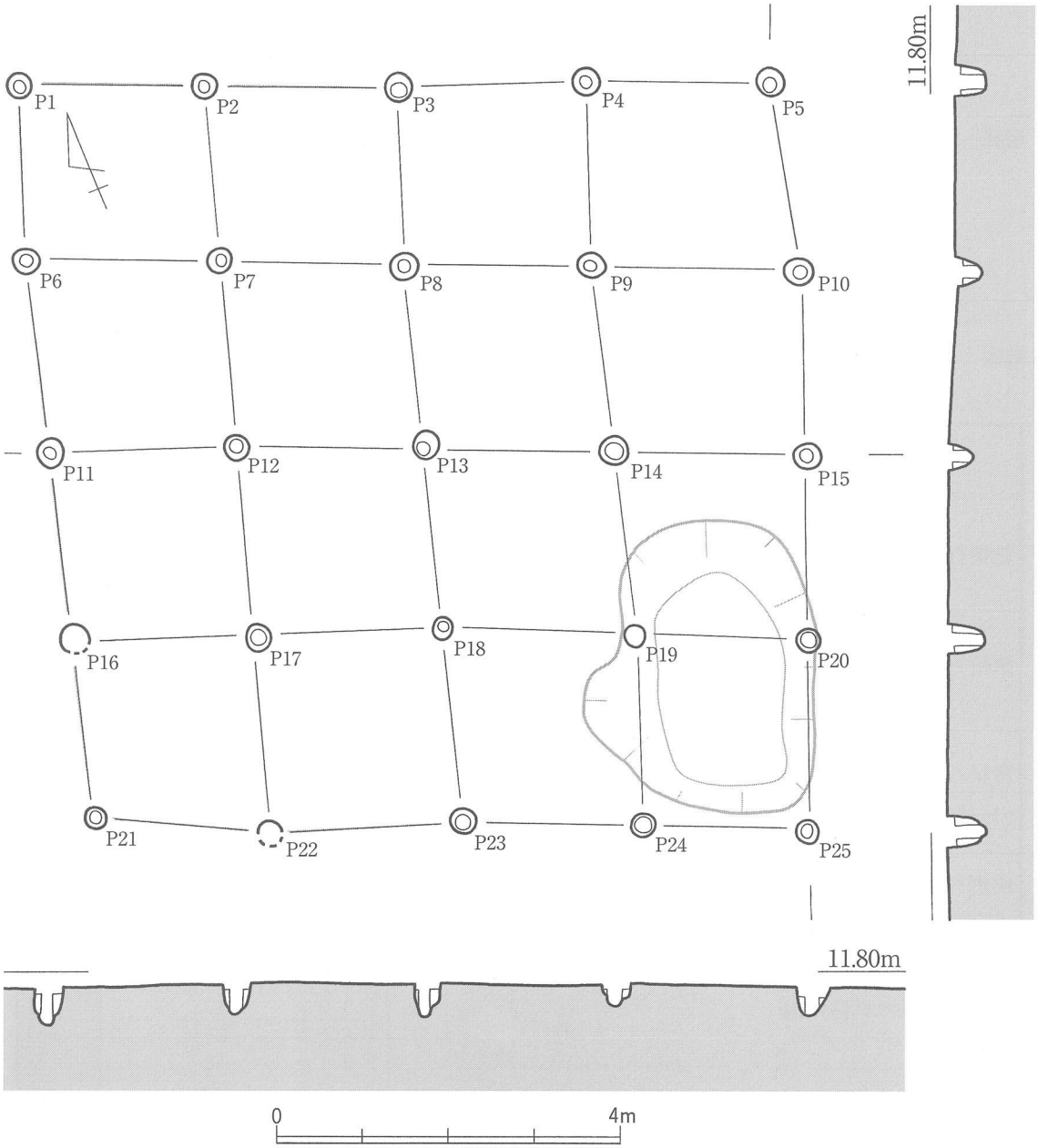
	柱穴間	柱穴間距離	側面距離	柱穴間平均距離
東梁行	Ｐ２－Ｐ５	2.00		
	Ｐ５－Ｐ８	1.98	3.98	1.99
南桁行	Ｐ６－Ｐ７	2.44		
	Ｐ７－Ｐ８	2.38	4.82	2.41

※　第29表の単位はｍ
※　第30表の単位はcm

第30表　ＳＢ14柱穴規模一覧表

柱穴No.	平面規模	柱痕径	深さ
Ｐ１	18		20
Ｐ２	20		22
Ｐ３	21		21
Ｐ４	18		18
Ｐ５	22		18
Ｐ６	20		23
Ｐ７	20		21
Ｐ８	20		22

形状・規模　２間×２間の総柱建物である（第145図）。東梁行を基準とした棟軸方向は、Ｎ18°Ｅを示す。ただし、北西隅の柱を検出できなかった。また、Ｐ４の位置が、南北方向の通りと



第146図　ＳＢ15

してはずれている。東梁行方向で3.98m、南桁行方向で4.82mを測り、面積は19.18㎡を測る。柱穴間の距離およびその平均値は、第29表のとおりである。

柱穴　掘り形の平面形は全て円形からなり、その規模は直径18cm～22cmを測る。深さは、18cm～23cmを測る。各柱穴の規模については、第30表のとおりである。埋土は、灰色シルト質極細砂を中心とした灰色系が主体である。

出土遺物　全く出土していない。

時期　出土土器から時期を特定することは困難であるが、埋土の特徴およびＳＢ13との方向性の一致から、ＳＢ13とほぼ同様の時期（第17期）と考えられる。

ＳＢ１５（写真図版59）

検出状況　Ｅ－４区西側で検出した（第143図）。ＳＢ16の西側に位置する。当建物は、他の遺構との切り合い関係が認められず、建物全体を検出することができた。ただし、当建物の南東部において、ＳＫ58（第149図）が平面的に重複して検出されている。土坑の主軸方向と建物の棟軸方向がほぼ一致することから、両者は一体のものと考えたい。

形状・規模　４間×４間の総柱建物である（第146図）。Ｐ６－Ｐ10を結ぶラインを基準とした棟軸方向は、N68°Wを示す。ただし、柱の通りは直線的ではなく、建物の平面形もやや歪んでいる。北梁行方向で8.75m、東桁行方向で8.60m、南梁行方向で8.35m、西桁行方向で8.50mを測り、面積は73.10㎡を測る。柱穴間の距離および柱間の平均値は、第31表のとおりである。

柱穴　掘り形の平面形は全て円形からなり、その規模は直径17cm～33cmを測る。深さは、22cm

第31表　ＳＢ15建物規模一覧表

	柱穴間	柱穴間距離	側面距離	柱穴間平均距離
北梁行	Ｐ１－Ｐ２	2.15		
	Ｐ２－Ｐ３	2.25		
	Ｐ３－Ｐ４	2.20		
	Ｐ４－Ｐ５	2.15	8.75	2.18
東桁行	Ｐ５－Ｐ10	2.15		
	Ｐ10－Ｐ15	2.15		
	Ｐ15－Ｐ20	2.10		
	Ｐ20－Ｐ25	2.20	8.60	2.15
南梁行	Ｐ21－Ｐ22	2.10		
	Ｐ22－Ｐ23	2.20		
	Ｐ23－Ｐ24	2.10		
	Ｐ24－Ｐ25	1.95	8.35	2.08
西桁行	Ｐ１－Ｐ６	2.00		
	Ｐ６－Ｐ11	2.25		
	Ｐ11－Ｐ12	2.15		
	Ｐ16－Ｐ21	2.10	8.50	2.12

※　第31表の単位はm
※　第32表の単位はcm

第32表　ＳＢ15柱穴規模一覧表

柱穴No.	平面規模	柱痕径	深さ
Ｐ１	27	14	40
Ｐ２	27	15	53
Ｐ３	30	16	24
Ｐ４	30	14	50
Ｐ５	28	16	26
Ｐ６	29	14	46
Ｐ７	27	16	22
Ｐ８	30	14	54
Ｐ９	25		25
Ｐ１０	26	13	24
Ｐ１１	30	14	43
Ｐ１２	30	16	35
Ｐ１３	30	14	37
Ｐ１４	25		29
Ｐ１５	28	15	30
Ｐ１６	33		42
Ｐ１７	30	16	40
Ｐ１８	21	13	38
Ｐ１９	17		31
Ｐ２０	21		44
Ｐ２１	18		38
Ｐ２２	29		35
Ｐ２３	19		29
Ｐ２４	22		39
Ｐ２５	20		22

～53cmを測る。各柱穴の規模については、第32表のとおりである。埋土は、灰褐色シルト質中砂～細砂を中心とした灰色系が主体である。

出土遺物　土師器・須恵器・白磁が出土している（図版34）。

土師器　皿と杯が出土している。

皿は536と537・538の３個体を図化することができた。536と537は同タイプの皿で、底部の切り離しはヘラによっている。また、口縁部は１段の横ナデ調整により仕上げられている。538は、底部の切り離しは回転ヘラ切りにより、体部から口縁部は回転ナデ調整により仕上げられている。

杯は、539と540の２個体図化することができた。２個体とも同タイプと考えられる。539の底部の切り離しについては、摩滅のため観察できない。

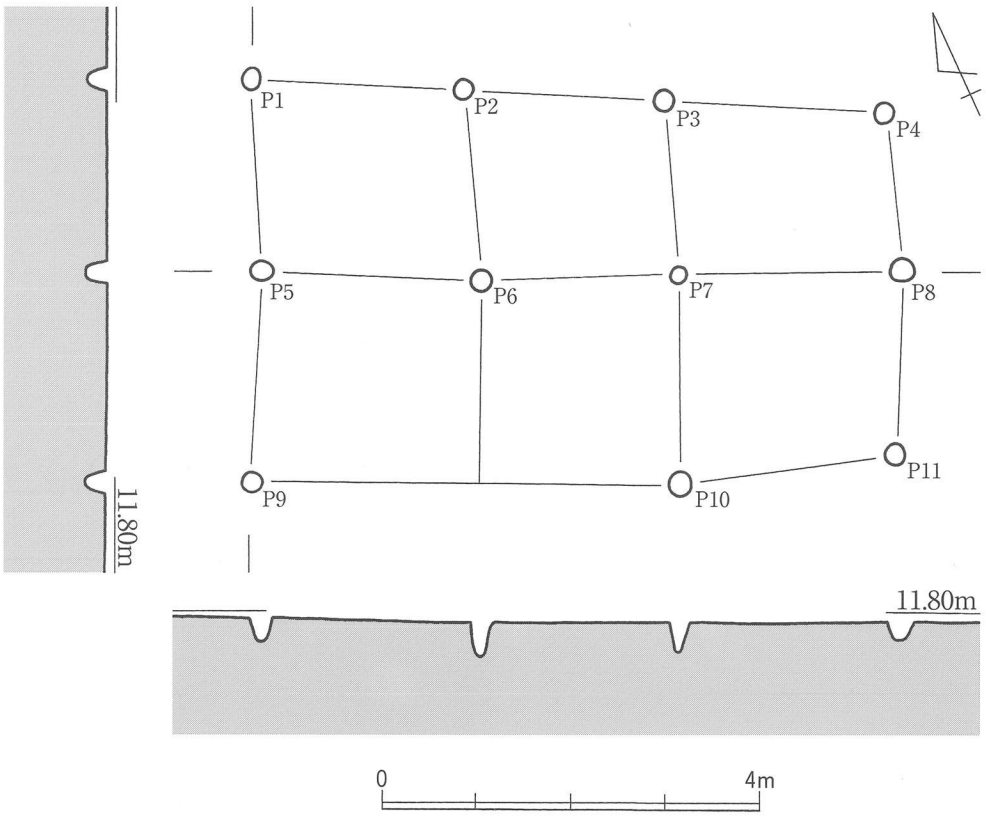
須恵器　椀１個体（541）を図化することができた。底部の切り離しは回転糸切りにより、体部から口縁部は回転ナデ調整により仕上げられている。

白磁　椀の口縁部（542）と底部（543）が各１点出土している。同タイプで、Ⅳ類に分類されるものである。

時期　出土土器及びＳＫ58の時期からから、12世紀前半（第17期）と判断される。

ＳＢ１６（写真図版59）

検出状況　Ｅ－４区東側で検出した（第143図）。ＳＢ15の東側に位置する。当建物は、他の遺構との切り合い関係は認められず、建物全体を検出することができた。ただし、南桁行において、Ｐ９とＰ10の間の柱穴を欠く。



第147図　ＳＢ16

第33表　ＳＢ16建物規模一覧表

	柱穴間	柱穴間距離	側面距離	柱穴間平均距離
北桁行	Ｐ１－Ｐ２	2.25		
	Ｐ２－Ｐ３	2.15		
	Ｐ３－Ｐ４	2.33	6.73	2.24
東梁行	Ｐ４－Ｐ８	1.67		
	Ｐ８－Ｐ11	1.97	3.64	1.82
南桁行	Ｐ５－Ｐ６	2.35		
	Ｐ６－Ｐ７	2.10		
	Ｐ７－Ｐ８	2.35	6.80	2.26
西梁行	Ｐ１－Ｐ５	2.05		
	Ｐ５－Ｐ９	2.25	4.30	2.15

※　第33表の単位はｍ

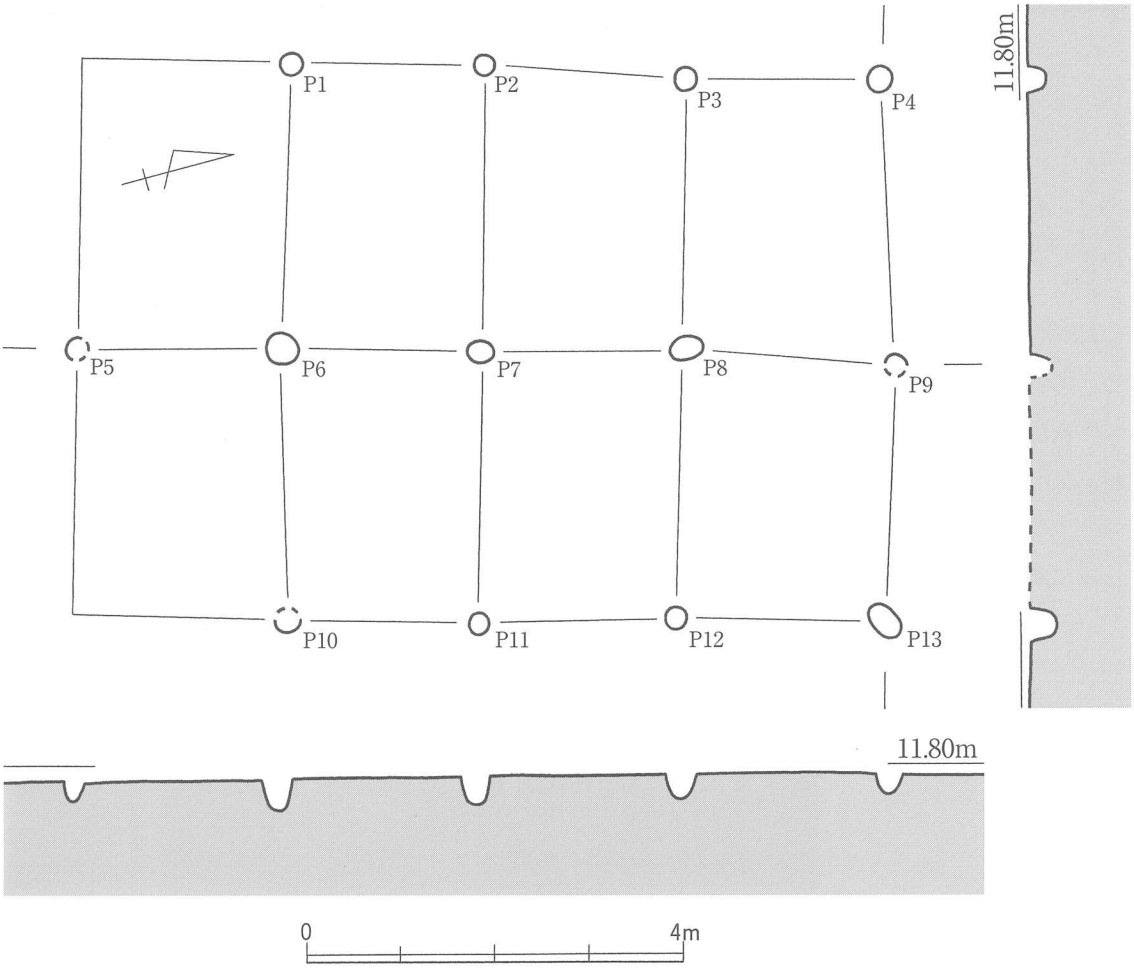
第34表　ＳＢ16柱穴規模一覧表

柱穴No.	平面規模	柱痕径	深さ
Ｐ１	20		20
Ｐ２	21		22
Ｐ３	20		17
Ｐ４	20		18
Ｐ５	23		15
Ｐ６	17		34
Ｐ７	25		32
Ｐ８	21		20
Ｐ９	20		20
Ｐ１０	23		18
Ｐ１１	22		16

※　第34表の単位はcm

形状・規模　２間×３間の総柱建物である（第147図）。Ｐ９－Ｐ10を基準とした棟軸方向はＮ64°30′Ｗを示す。ただし、一部柱の通りは直線的ではなく、建物の平面形もやや歪んでいる。北桁行方向で6.73ｍ、東梁行方向で3.64ｍ、南桁行方向で6.80ｍ、西梁行方向で4.30ｍを測り、面積は26.83㎡を測る。柱穴間の距離および柱間の平均値は、第33表のとおりである。

柱穴　掘り形の平面形は全て円形からなり、その規模は直径17cm～25cmを測る。深さは、15cm～34cmを測る。各柱穴の規模については、第34表のとおりである。埋土は、灰色シルト質極細砂を中心とした灰色系が主体である。



第148図　ＳＢ17

出土遺物　須恵器の甕の体部片が出土している。いわゆる東播系の甕の一部である。

時期　出土土器及びＳＢ15との方向性の一致から、12世紀代（第17期）と判断される。

ＳＢ１７（写真図版59・60）

検出状況　Ｅ－５区西側で検出した（第142図）。ＳＢ16の東側に位置する。当建物は、調査直前まで機能していた水路による攪乱を受け、南東隅の柱穴を欠く。また、Ｐ10・Ｐ９の一部を欠く。さらに、南西隅の柱穴についても攪乱を受け、検出することはできなかった。なお、他の遺構との切り合い関係は認められなかった。

形状・規模　２間×４間の総柱建物である（第148図）。Ｐ５－Ｐ９を基準とした棟軸方向は、Ｎ15°30′Ｅを示す。桁行方向（Ｐ５～Ｐ９）で8.63ｍ、東梁行方向で5.70ｍを測り、面積は49.19㎡を測る。柱穴間の距離および柱間の平均値は、第35表のとおりである。

柱穴　掘り形の平面形は全て円形からなり、その規模は直径20㎝～32㎝を測る。深さは、11㎝～50㎝を測る。各柱穴の規模については、第36表のとおりである。埋土は、灰色シルト質極細砂を中心とした灰色系が主体である。

出土遺物　須恵器と土師器が出土している（図版34）。

須恵器　椀１個体（544）を図化することができた。底部の切り離しは回転糸切りによるが、平高台の痕跡はほとんど認められない。

土師器　小皿・杯・甕が出土しているが、図化できたのは小皿１個体（545）である。545は、底部がヘラにより切り離され、口縁部は横ナデ調整により仕上げられている。

時期　出土土器から、12世紀代（第17期）と判断される。

第35表　ＳＢ17建物規模一覧表

	柱穴間	柱穴間距離	側面距離	柱穴間平均距離
桁行	Ｐ５-Ｐ６	2.15		
	Ｐ６-Ｐ７	2.10		
	Ｐ７-Ｐ８	2.16		
	Ｐ８-Ｐ９	2.22	8.63	2.15
東梁行	Ｐ４－Ｐ９	3.00		
	Ｐ９－Ｐ13	2.70	5.70	2.85

第36表　ＳＢ17柱穴規模一覧表

柱穴No.	平面規模	柱痕径	深さ
Ｐ１	22		18
Ｐ２	23		29
Ｐ３	22		16
Ｐ４	24		19
Ｐ５	25		18
Ｐ６	32		29
Ｐ７	24		25
Ｐ８	26		50
Ｐ９	20		11
Ｐ１０	25		15
Ｐ１１	21		16
Ｐ１２	20		23
Ｐ１３	24		16

※　第35表の単位はｍ
※　第36表の単位は㎝

（２）柱穴

(1) で報告した建物を構成する柱穴以外に、多くの柱穴が検出されている。これらの柱穴のいくつかからは、良好な資料が得られている。以下、これらの柱穴について、出土遺物を中心に報告することにする。

Ｐ１７

位置　Ｅ－２区のほぼ中央北側で検出した（第143図）。ＳＤ53の東側に位置する。

出土遺物　土師器の杯１点（548）が出土している（図版34）。横ナデ調整により仕上げられている。

時期　12世紀代（中世Ｉ期：第17期）と考えられる。

Ｐ１８（写真図版60）

位置　Ｅ－２区のほぼ中央北側で検出した（第143図）。ＳＤ53の東側、Ｐ17の南側に位置する。

出土遺物　土師器の皿・杯・椀が出土している（図版34）。

皿　553の１個体が出土している。口径15.1cmと大型の皿で、底部は指オサエとナデ調整により、口縁部は横ナデ調整により仕上げられている。ただし、整形にあたっては、回転台は使用されていない。

杯　554～557の４個体を図化することができた。いずれも同タイプに分類されるものである。ただし、554の底部はヘラにより切り離されているが、他は指オサエとナデ調整により仕上げられている。体部～口縁部は、４個体とも横ナデ調整により仕上げられている。特に、557の観察から、この土器は、回転台はほとんど使用されず、手づくねにより回転台使用土器を模倣したものと考えられる。

椀　558の１個体を図化した。底部のみの残存で、底部をヘラ切り後、断面三角形を呈する輪高台が貼り付けられている。

時期　中世Ｉ期（第17期）と考えられる。

Ｐ１９

位置　Ｅ－２区のほぼ中央北側で検出した（第143図）。ＳＤ53の東側、Ｐ18の南東側に位置する。

出土遺物　土師器の椀１個体（549）が出土している（図版34）。断面三角形を呈する輪高台が貼り付けられた底部片である。高台は横ナデ調整により貼り付けられ、内面はナデ調整により仕上げられている。

時期　12世紀代（中世Ｉ期：第17期）と考えられる。

Ｐ２０

位置　Ｅ－２区のほぼ中央南側で検出した（第143図）。ＳＤ53の東側、Ｐ21の北側に位置する。

出土遺物　土師器の椀１点（547）が出土している（図版34）。断面三角形を呈する輪高台が貼り付けられた底部片である。高台は、横ナデ調整により貼り付けられ、内面は回転ナデ調整により貼り付けられている。

時期　12世紀代（中世Ｉ期：第17期）と考えられる。

Ｐ２１

位置　Ｅ－２区のほぼ中央南側で検出した（第143図）。ＳＤ53の東側、Ｐ20の南側に位置する。

出土遺物　土師器の皿１点（546）が出土している（図版34）。底部は指オサエとナデ調整、口縁部は１段の横ナデ調整により仕上げられている。

時期　中世Ｉ期（第17期）と考えられる

Ｐ２２

位置　Ｅ－４区で検出した。ＳＢ15の東桁行と平面的に重複する。

出土遺物　須恵器と土師器が出土している（図版34）。

須恵器　椀１個体（550）が出土している。体部から口縁部は比較的薄く仕上げられている。

土師器　小皿と杯が各１点出土している。小皿（552）は、底部の切り離しは回転ヘラ切りにより、口縁部は１段の回転ナデ調整により仕上げられている。杯（551）は、底部が回転ヘラ切りにより切り離され、体部から口縁部が横ナデ調整により仕上げられている。

時期　中世Ｉ期（第17期）と考えられる。

（３）土坑

ＳＫ５６

検出状況　Ｅ－３区中央部で検出した（第143図）。ＳＤ55と切り合い関係にあり、これを切っている。このため、当遺構は完存する。

形状・規模　平面形はやや歪んだ楕円形を呈し、長軸方向で2.64ｍ、その直交方向で2.52ｍを測る。横断面は逆台形をなし、最深部における検出面からの深さは94㎝を測る。

埋没状況　埋土は、暗灰褐色シルト質極細砂１層からなる。層相から判断して、人為的に埋められたものと考えられる。

出土遺物　須恵器の椀と捏鉢が出土しているが、いずれも小片のため図化できなかった。椀は体部片が、捏鉢は口縁部片が出土している。

時期　出土土器から判断して、12世紀前半（中世Ｉ期：第17期）と考えられる。

ＳＫ５７

検出状況　Ｅ－４区西端部で検出した（第143図）。ＳＢ15と平面的に重複するが、明確な切り合い関係は認められない。このため、当遺構は完存する。

形状・規模　平面形は円形を呈し、その直径は60㎝を測る。横断面は逆台形をなし、最深部における検出面からの深さは35㎝を測る。

出土遺物　須恵器と土師器が出土している（図版34）。

須恵器　椀と小皿が各１個体出土している。椀（566）は、底部が回転糸切りにより切り離され、平高台の痕跡をほとんど残さない。小皿（567）も、底部の切り離しは回転糸切りによっている。

土師器　小皿と杯が出土している。小皿は、559～563の５個体を図化した。いずれも同タイプの小皿で、底部は回転ヘラ切りにより切り離され、口縁部は横ナデ調整により仕上げられて

いる。杯は564と565の２個体を図化した。２個体とも同タイプの杯と考えられ、底部が回転ヘラ切りにより切り離され、体部から口縁部は横ナデ調整により仕上げられている。

時期　出土土器から判断して、12世紀中頃（中世Ｉ期：第17期）と考えられる。

ＳＫ５８（写真図版60）

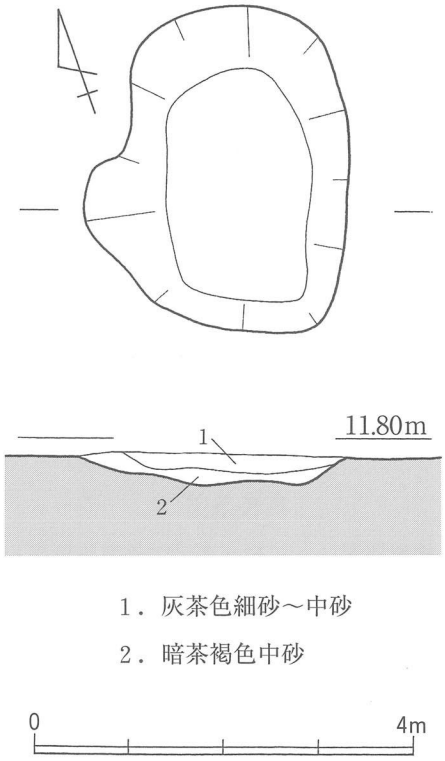
検出状況　Ｅ－４区西部で検出した（第143図）。ＳＢ15の南東隅に平面的に重複する。先述したように（192ページ）、ＳＢ15の棟軸方向と当土坑の主軸がほぼ一致することから、当土坑はＳＢ15に伴う施設と考えられる。他の遺構との切り合い関係は認められず、完存する。

形状・規模　平面形は歪んだ隅丸長方形を呈し、長軸方向で3.42m、その直交方向で3.60mを測る。横断面は逆台形をなし、最深部における検出面からの深さは33cmを測る。

埋没状況　埋土は、２層からなる（第149図）。２層とも、層相から判断して、人為的に埋められたものと考えられる。

出土遺物　量的に多く出土しており、土器と鉄釘が出土している。

土器　須恵器・土師器・瓦器が出土している（図版34～図版36）。これらの土器は、廃棄されたものと考えられ、良好な一括資料と考えられる。



第149図　ＳＫ58

土師器　杯・椀・皿・小壷・鍋の各器種が出土している。

杯　568～570・572・573の５個体図化した。いずれも同タイプに分類されるもので、底部が残存する個体は、回転ヘラ切りにより切り離されている。また、体部から口縁部にかけては、回転ナデ調整により仕上げられている。

椀　574と575の２個体を図化した。575の底部は糸切りにより切り離され、２個体とも回転ナデ調整により仕上げられている。

皿　571・576～602の28個体を図化した。571を除いては小皿に分類されるもので、底部が残存する個体は、いずれも回転ヘラ切りにより切り離され、体部から口縁部は回転ナデ調整により仕上げられている。また、579・586・590・595～597・600の底部は、底部切り離し後、部分的にナデ調整がくわえられている。この他、576の内面には煤の付着が認められる。571は、大皿に分類されるものである。回転ヘラ切りにより切り離されている。

小壷　603の１個体のみである。体部内面はヘラナデ、外面は指オサエとナデ調整により、口縁部は指オサエにより仕上げられている。

鍋　604と605の２個体を図化した。両個体とも同タイプの甕と考えられ、口縁部はく字形に屈曲する。604は、体部内外面がナデ調整、口縁部内外が横ナデ調整により仕上げられて

いる。605は、口縁部内外面がハケ調整により仕上げられている。

須恵器　椀と小皿が出土している。

椀　606～629の24個体を図化したが、629を除いては、いずれも同タイプに分類されるものである。底部が残存するものは、その切り離しは全て回転糸切りにより、体部～口縁部は回転ナデ調整により仕上げられている。629は、底部に輪高台が付くタイプである。底部が回転糸切りにより切り離された後、断面逆台形を呈する高台が貼り付けられている。体部～口縁部は回転ナデ調整により仕上げられている。なお、623の内面には墨の付着が認められる。

小皿　630～636の７個体を図化した。いずれも同タイプに分類されるもので、底部が残存するものは回転糸切りにより切り離され、体部～口縁部は回転ナデ調整により仕上げられている。なお。636の底部外面にはヘラ描きが認められる。

瓦器　637の椀１個体が出土している。底部には断面逆台形を呈する高台が貼り付けられ、体部外面は指オサエ、口縁部は横ナデ調整により、仕上げられている。なお、この土器は摩滅が著しく、内外面の暗文の有無を確認することはできなかった。

鉄釘　Ｆ17の１点が出土している（図版80・写真図版185）。やや歪んだ状態で出土しているが、ほぼ完存する。全長6.8cmを測り、断面は７㎜×９㎜の方形を呈する。

時期　出土土器から判断して、12世紀中頃（中世Ｉ期：第17期）と考えられる。

ＳＫ５９

検出状況　Ｅ－４区で検出した（第143図）。ＳＢ16の南西側に位置する。他の遺構との切り合い関係は認められず、完存する。

形状・規模　平面形は楕円形を呈し、長軸方向で1.08m、その直交方向で91cmを測る。横断面は逆台形をなし、最深部における検出面からの深さは25cmを測る。

埋没状況　埋土は、上から灰色細砂～粗砂・暗灰色粗砂～中礫・灰褐色粗砂～中礫の３層からなる。３層とも、層相から判断して、人為的に埋められたものと考えられる。

出土遺物　須恵器と土師器が出土している。いすれも小片のため図化できなかった。

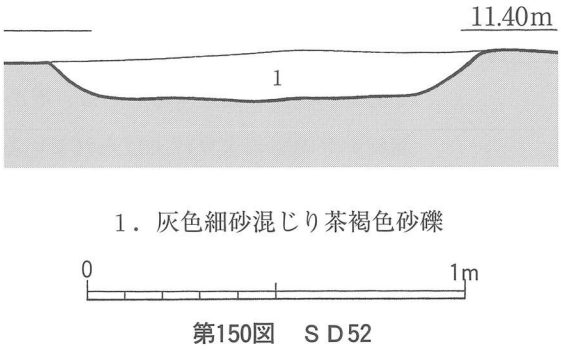
須恵器　椀の体部片・底部片と甕の体部片が出土している。

土師器　甕の体部片が出土している。

時期　出土土器から判断して、11世紀後半～12世紀前半（中世Ｉ期：第17期）と考えられる。

（４）溝

ＳＤ５２（写真図版61）



第150図　ＳＤ52

検出状況　Ｅ－２区西部で検出した（第142図）。北東－南西方向に直線的にのびる溝で、両端とも調査区外までのびている。他の遺構との切り合い関係は認められない。

形状・規模　検出した長さは21.90ｍである。横断面は逆台形をなし、最深部における検出面からの深さは19㎝を測る。検出面における幅は55㎝～2.28ｍを測る。底部のレベルはほぼ一定している。

埋没状況　埋土は１層からなる（第150図）。層相から、人為的に埋められたものと判断される。

出土遺物　土師器の椀と甕が出土している。椀は底部と体部片が、甕は体部片がわずかに出土している。いずれも小片のため図化できなかった。

時期　出土土器から判断して、平安時代後半（第16期）と考えられる。

ＳＤ５３

検出状況　Ｅ－２区中央部で検出した（第142図）。ほぼ南北方向に直線的にのびる溝で、両端とも調査区外までのびている。他の遺構との切り合い関係は認められない。Ｐ17～Ｐ21の西側に位置する。

形状・規模　検出した長さは20.80ｍである。横断面は皿形をなし、最深部における検出面からの深さは９㎝である。検出面における幅は68㎝～1.04ｍを測る。底部の標高は、北端が11.23ｍ、南端が11.06ｍと、南側へ傾斜している。

埋没状況　埋土は、暗灰色シルト混じり中砂～粗砂１層からなる。

出土遺物　黒色土器の椀（646）が出土している（図版36）。内面のみ黒化させ、ヘラ磨きにより仕上げられている。また、外面は指オサエとナデ調整により仕上げられている。

時期　出土土器から判断して、平安時代前半（第15期）と考えられる。

ＳＤ５４

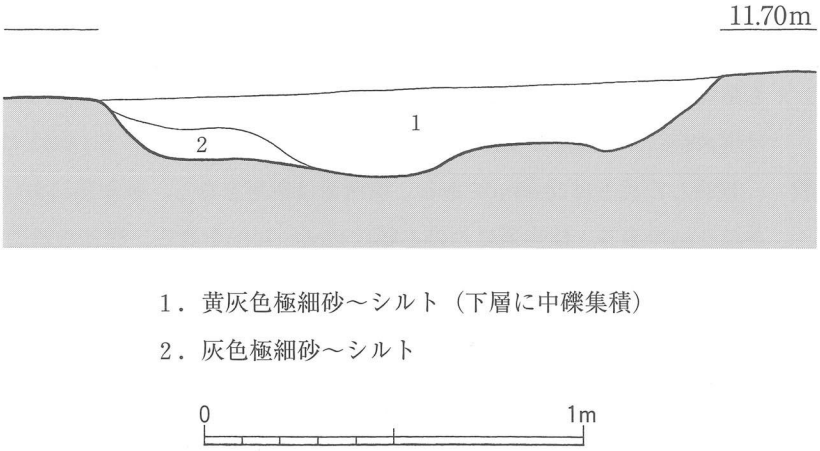
検出状況　Ｅ－３区北西隅で検出した（第143図）。北東－南西方向に直線的にのびる溝で、北東側は調査区外までのび、南西端は調査区内で収束している。他の遺構との切り合い関係は認められない。ＳＢ14の北東側に位置する。

形状・規模　検出した長さは4.36ｍである。横断面は皿形をなし、最深部における検出面からの深さは16㎝、検出面における幅は24㎝～43㎝を測る。底部のレベルは、ほぼ一定している。

埋没状況　埋土は、淡灰色シルト１層からなる。

出土遺物　全く出土していない。

時期　土器が出土していないため時期の特定は困難であるが、ＳＢ13・ＳＢ14と方向性が一致することから、中世Ｉ期（第17期）と考えられる。



1．黄灰色極細砂～シルト（下層に中礫集積）

2．灰色極細砂～シルト

第151図　ＳＤ55

ＳＤ５５（写真図版61）

検出状況　Ｅ－３区中央部で検出した（第143図）。北東－南西方向に直線的にのびる溝で、両端とも調査区外までのびている。ＳＫ56と切り合い関係にあり、ＳＫ56に切られている。ＳＤ56の西側にほぼ平行する。

形状・規模　検出した長さは19.78ｍである。横断面は逆台形をなし、最深部における検出面からの深さは23㎝である。検出面における幅は、1.50ｍ～2.78ｍを測る。底部の標高は、北東端で11.41ｍ、南西端で11.34ｍと、わずかに南西側へ傾斜している。

埋没状況　埋土は２層からなる（第151図）。層相から判断して、人為的に埋められたものと考えられる。

出土遺物　須恵器・土師器・備前焼・白磁・青磁が出土している（図版36）。

須恵器　椀・小皿・捏鉢・甕が出土している。

椀は、641～643の３個体を図化した。いずれも、底部は回転糸切りにより切り離されている。642と643の底部には平高台の痕跡が認められる。

小皿は、639と640の２個体を図化した。いずれも底部を回転糸切りにより切り離し、体部から口縁部が回転ナデ調整により仕上げられている。

捏鉢は644の１個体を図化した。内外面とも回転ナデ調整により仕上げられている。

甕に関しては、東播系の体部片が多く出土しているが、図化できなかった。

土師器　椀・小皿・甕・鍋が出土している。図化できたのは椀の１個体（638）のみで、底部は回転糸切りにより切り離され、体部は回転ナデ調整により仕上げられている。

小皿・甕・鍋は、体部の小片が出土している。

備前焼　擂鉢１個体（645）が出土している。わずかに残存する個体で、一部にハケ状の卸目が認められる。内外面とも回転ナデ調整により仕上げられている。

白　磁　Ⅳ類碗の口縁部片が出土している。

青　磁　碗の口縁部片が出土している。

時期　645の備前焼を除いては、ほぼ同様の年代観を示す土器と考えられ、12世紀前半（中世Ⅰ期：第17期）に位置付けられる。備前焼については、当溝上面で出土していることから、当溝が完全に埋没する時期を示すものと考えられる。

ＳＤ５６

検出状況　Ｅ－３区中央部で検出した（第143図）。北東－南西方向に直線的にのびる溝で、両端とも調査区外までのびている。他の遺構との切り合い関係は認められないが、南西端の一部は用水路により攪乱を受けている。ＳＤ55の東側に位置し、ＳＤ55とほぼ平行する。

形状・規模　検出した長さは18.68ｍである。横断面は皿形をなし、最深部における検出面からの深さは９㎝である。検出面における幅は42㎝～74㎝を測る。底部の標高は、北東端で11.56ｍ、南西端で11.46ｍと、わずかに南西側に傾斜している。

埋没状況　埋土は、灰色極細砂～シルト１層からなる。層相から判断して、人為的に埋められたものと考えられる。

出土遺物　須恵器と土師器が出土している。須恵器は椀の底部片と甕の体部片が、土師器は小皿の口縁部片が出土しているが、いずれも小片のため図化できなかった。

時期　出土土器から判断して、12世紀前半（中世Ｉ期：第17期）と考えられる。

ＳＤ５７

検出状況　Ｅ－４区西部で検出した（第143図）。東西方向に直線的にのびる溝で、両端とも調査内で収束している。他の遺構との切り合い関係は認められず、完存する。ＳＢ15の南側に位置し、ＳＢ15の棟軸方向とほぼ一致することから、ＳＢ15との関係が考えられる。

形状・規模　検出した長さは2.94ｍである。横断面は逆台形をなし、最深部における検出面からの深さは７㎝である。検出面における幅は38㎝～51㎝を測る。底部のレベルは、ほぼ一定している。

埋没状況　埋土は、灰色シルト混じり極細砂１層からなる。層相から判断して、人為的に埋められたものと考えられる。

出土遺物　土師器の小片が出土しているが、器種の特定も困難である。

時期　出土土器から時期の特定は困難である。先述したように、ＳＢ15との関係が考えられることから、ＳＢ15とほぼ同様の時期（中世Ｉ期：第17期）と考えたい。

3．第２面（写真図版62～70）

当面で検出した遺構（第152図）は、弥生時代・古墳時代・飛鳥時代～奈良時代の３時期からなる。

地区ごとの遺構分布と遺構の時期との関係は、以下のとおりである（第154図・第162図・第193図）。

Ｅ－１区　当地区においては、遺構・遺物は全く検出されていない（第152図）。

Ｅ－２区　弥生時代と古墳時代および飛鳥時代～奈良時代の遺構が検出されている。

弥生時代の遺構は、当地区東側に集中して検出されている（第154図）。

古墳時代の遺構としては、掘立柱建物跡・柱穴・溝状遺構が検出されている（第162図）。弥生時代の遺構同様、当地区の東側に集中する傾向が認められる。

Ｅ－３区　弥生時代と古墳時代の遺構が検出されている（第154図・第162図）。

弥生時代の遺構としては、溝状遺構と土坑が検出されている。

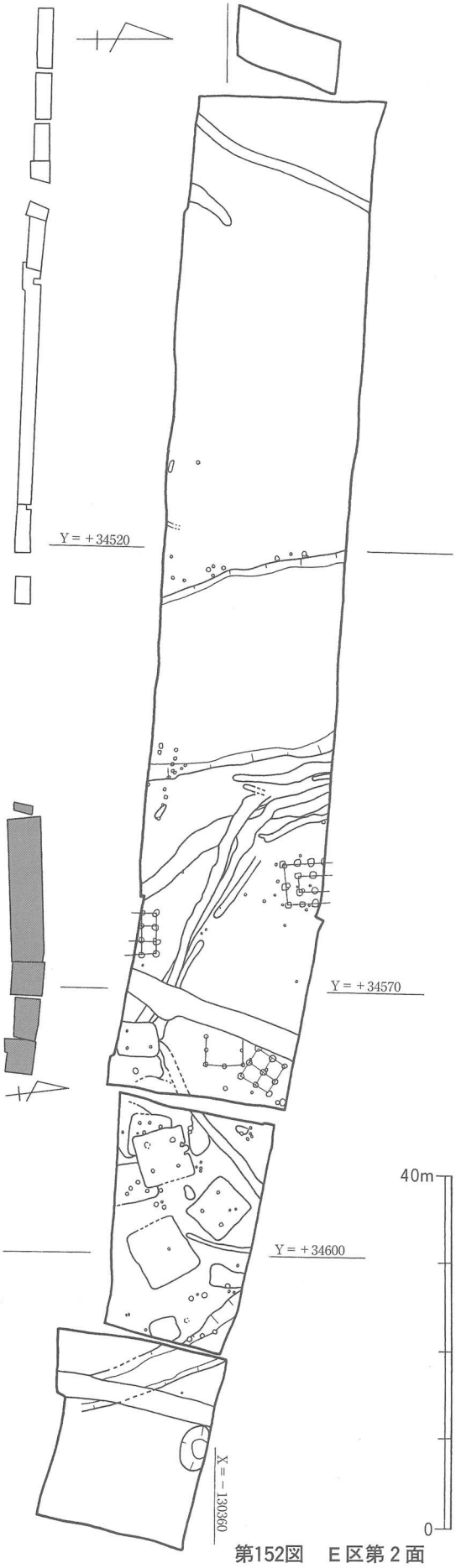
古墳時代の遺構としては、竪穴住居跡・掘立柱建物跡・柱穴・溝状遺構が検出されている。

Ｅ－４区　弥生時代と古墳時代の遺構が検出されている。

弥生時代の遺構としては、溝状遺構と土坑が検出されている（第154図）。土坑は当地区南西部に、溝状遺構は等地区北東部に偏在する傾向が認められる。

古墳時代の遺構としては、竪穴住居跡・柱穴・溝状遺構が検出されている。特に、竪穴住居が６棟、切り合い関係をもって検出されている（第162図）。

Ｅ－５区　弥生時代の溝状遺構と土坑が、古墳時代の溝状遺構が検出されている。



第152図　Ｅ区第２面

Ⅰ：弥生時代

検出した遺構は、土坑と溝に限られる。地区ごとの検出状況は、以下のとおりである。

Ｅ－１区　当地区においては、遺構・遺物は全く検出されていない。

Ｅ－２区　溝状遺構が４条検出されている（第155図）。最も西側で検出されたＳＤ58は、奈良時代に至って、漸く埋没する。

Ｅ－３区　柱穴と溝状遺構・土坑が検出されている（第155図）。

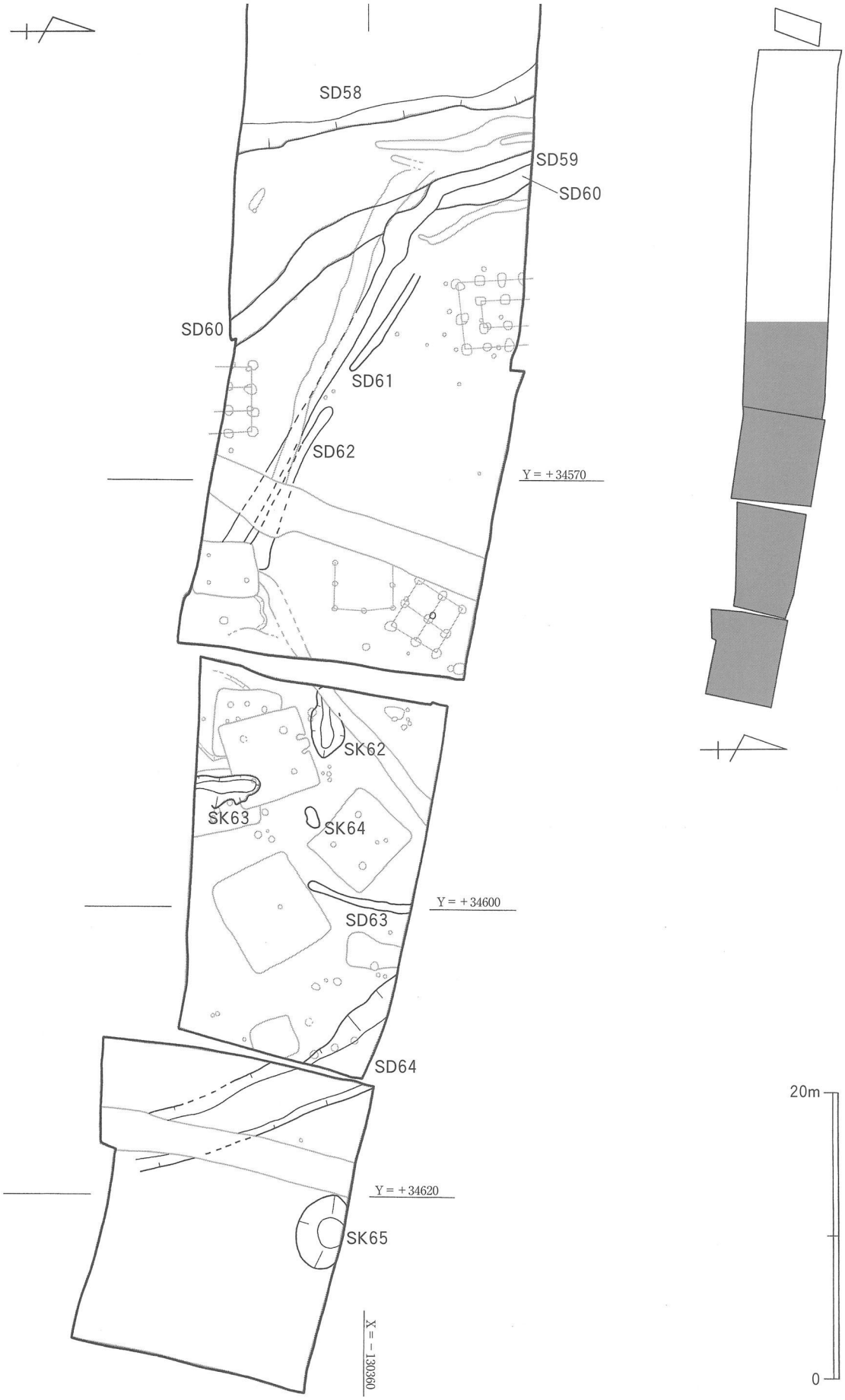
溝状遺構に関しては、Ｅ－２区から続くものである。土坑は、１基のみ検出されているが、古墳時代の遺構との切り合い関係および攪乱を受けていることから、明確な形では検出できなかった。柱穴についても、１穴のみ検出されている。

Ｅ－４区　溝状遺構と土坑が検出されている（第155図）。土坑の検出は、当地区の南西側に偏在する傾向が認められる。

Ｅ－５区　溝状遺構と土坑が検出されている（第155図）。溝状遺構（ＳＤ64）に関しては、Ｅ－4区から続くもので、次の古墳時代まで継続して機能していたようである。

第153図　ＳＤ64の掘削

第154図　Ｅ区第２面　弥生時代



第155図　E区第２面　弥生時代（東半部）

（１）土坑

ＳＫ６２

検出状況　Ｅ－４区西側で検出した（第155図）。古墳時代の溝ＳＤ67に切られ、一部を欠く。ＳＫ63の北西側に位置する。

形状・規模　平面形は不定形な楕円形を呈する。長軸方向で4.52ｍ残存し、その直交方向で2.28ｍを測る。横断面は逆台形を呈し、最深部における検出面からの深さは47㎝を測る。

埋没状況　埋土は、３層からなる（第156図）。

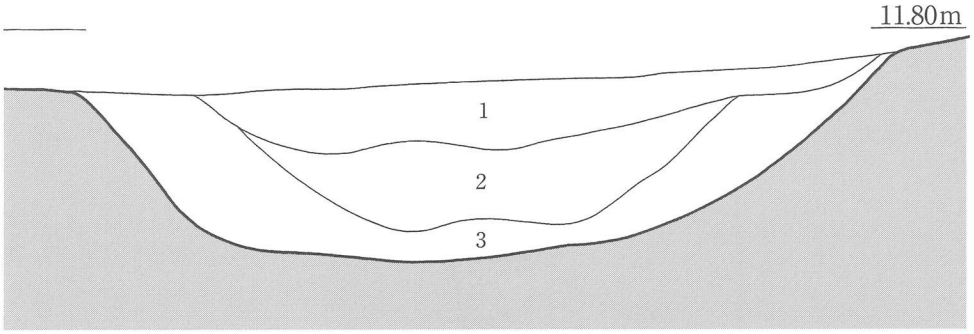
出土遺物　壷・甕・脚部が出土している（図版37）。

壷　広口壷の体部（652）と直口壷の口縁部（651）が出土している。651は、口縁部に３条の凹線が施され、内外面が横ナデ調整により仕上げられている。652は、外面に４段の刻み目文帯が施され、下２段には３個を単位とする円形浮文が刻み目の上に貼り付けられている。内面はハケ調整により仕上げられている。

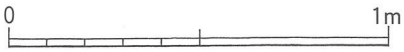
甕　底部片１点（653）が出土している。外面がヘラ磨き、内面が指オサエにより、仕上げられている。

脚部　654の１点が出土している。台付無頸壷あるいは台付鉢の可能性が考えられる。脚部外面はヘラ磨きにより仕上げられ、竹管文が２段にわたって施されている。内面は、粗いヘラナデ調整により仕上げられている。体部外面はヘラ磨き、内面はハケ調整により仕上げられ、脚部とは円盤充填法により接合されている。

時期　出土土器から判断して、弥生時代中期後半（第３期）と考えられる。



１．黒茶褐色細砂　２．濃茶褐色シルト質細砂　３．茶褐色シルト質極細砂



第156図　ＳＫ62

ＳＫ６３

検出状況　Ｅ－４区南部で検出された（第155図）。古墳時代の住居跡ＳＨ14の床面を検出した段階で確認された遺構で、ＳＨ14を切るＳＨ12に切られている。また、南側は調査区外まで拡がっている。このため、当遺構の全体像の把握は困難である。ＳＫ64の南側に位置する。

形状・規模　平面形は不定形な溝状を呈する。長軸方向で4.62ｍ残存し、その直交方向で1.10ｍを測る。横断面は皿形をなし、最深部における検出面からの深さは19㎝を測る。

埋没状況　埋土は、暗褐灰色シルト混じり極細砂１層からなる。層相から判断して、人為的に埋められたものと考えられる。

出土遺物　広口壷の底部片が１点出土しているが、小片のため図化できなかった。

時期　出土土器から判断して、弥生時代後期（第４期）と考えられる。

ＳＫ６４（写真図版71）

検出状況　Ｅ－４区ほぼ中央部で検出された（第155図）。ＳＫ63の北側に位置する。他の遺構との切り合い関係は認められず、完存する。

形状・規模　平面形は不定形な楕円形を呈する。長軸方向で1.52m、その直交方向で86cmを測る。横断面は皿形を呈し、最深部における検出面からの深さは12cmである。

埋没状況　埋土は、暗褐灰色シルト質細砂１層からなる。層相から判断して、人為的に埋められたものと考えられる。

出土遺物　広口壷の体部片と底部片が出土している。いずれも小片のため図化できなかった。

時期　出土土器から判断して、弥生時代後期（第４期）と考えられる。

ＳＫ６５（写真図版71）

検出状況　Ｅ－５区中央部北側で検出した（第155図）。ＳＤ64の東側に位置する。他の遺構との切り合い関係は認められないが、当遺構の一部は調査区外まで拡がっている。

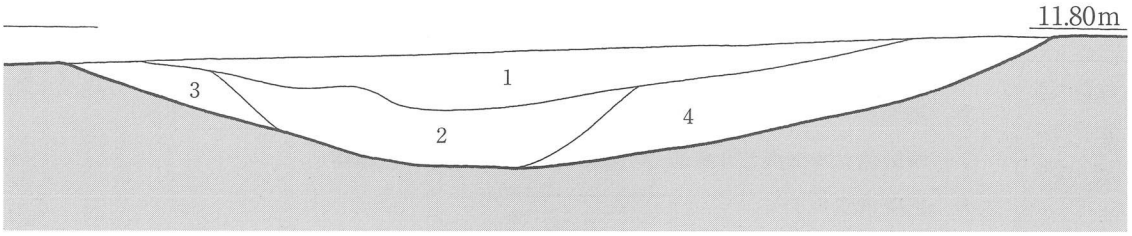
形状・規模　平面形は楕円形を呈するものと推定される。長軸方向で5.15mを測り、その直交方向で3.20m残存する。横断面は皿形をなし、最深部における検出面からの深さは46cmである。

埋没状況　埋土は、４層からなる（第157図）。層相から判断して、少なくとも上の２層に関しては、人為的に埋められたものと考えられる。

出土遺物　甕と高坏の脚部小片が出土している（図版37）。

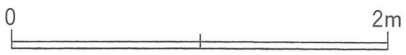
甕（655）は、いわゆる庄内型甕である。体部外面は細筋の平行叩きによる整形後、部分的に縦方向のハケ調整により、内面は縦（下→上）から右上がり方向のヘラ削りにより、仕上げられている。口縁部は横ナデ調整により仕上げられているが、端部のつまみあげは認められない。胎土は在地産である。

時期　出土土器から判断して庄内併行期（第５期）と考えられる。



1．白灰色シルト質極細砂混じり暗褐灰色シルト質極細砂　　2．灰色極細砂混じり淡褐灰色極細砂

3．白色シルト質極細砂混じり黒色シルト質極細砂（埋め土）　　4．灰色極細砂混じり淡褐灰色極細砂



第157図　ＳＫ65

（２）溝

ＳＤ５８（写真図版72）

検出状況　Ｅ－２区ほぼ中央部で検出された（第154図）。南北方向に直線的にのびる溝で、両端とも調査区外までのびている。他の遺構との切り合い関係は認められなかった。

形状・規模　検出した長さは20.00ｍである。横断面は逆台形をなし、最深部における検出面からの深さは1.30ｍを測る。検出面における幅は、20.92ｍ～22.00ｍを測る。底部の標高は、北端部で10.00ｍ、南端部で9.75ｍを測り、南側への傾斜が認められる。

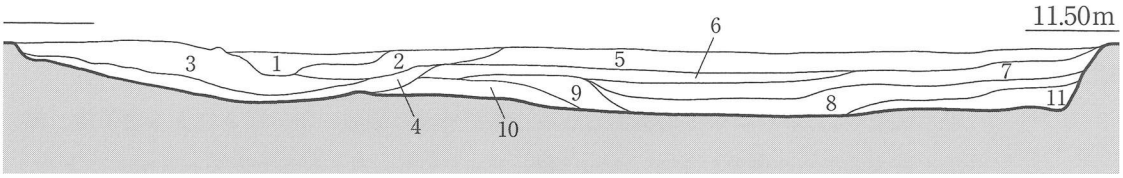
埋没状況　埋土は11層からなる（第158図）。土器の出土状況から判断して、当溝は弥生時代中期に５層～11層まで堆積後、６層下面のラインまで再掘削を受けている。その後、弥生時代後期に１層～４層が堆積している。その後、当溝上面に、古墳時代前期と奈良時代にわずかな堆積が認められる。奈良時代にはほぼ埋没している。これらの層からは、「洪水起源による堆積→その層上部の土壌化」のパターンが繰り返され、各洪水間に時期幅が認められる。

出土遺物　弥生時代中期・同後期・古墳時代前期・奈良時代・平安時代の５時期の土器（図版37～図版39）、および鉄釘が出土している。

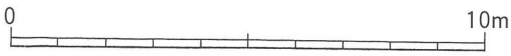
弥生時代中期　壷と甕が出土している。いずれも、最下層から出土している。

壷　656～661の６個体を図化した。

656は、直口壷の口縁部で、外面に断面三角形を呈する４条の突帯が貼り付けられている。また、口縁端部も外方へつまみ出すような横ナデ調整により、突帯状を呈している。４条の貼付け突帯とともに、頂部に刻み目が施されている。口縁部～体部内面はナデ調整、



1．黒褐色細砂混じりシルト（下層に砂礫層：土壌層）
2．淡黒褐色極細砂混じりシルト（若干土壌化）
3．暗黄褐色極細砂～中砂（洪水層）
4．暗灰色細砂混じりシルト
5．暗黄灰色シルト質細砂（洪水層）
6．黒褐色シルト混じり極細砂（土壌層）～暗灰褐色極細砂質シルト（洪水層）
7．暗灰色シルト混じり極細砂（弱い土壌層）～暗灰色細砂
8．黒灰色シルト
9．暗黄色極細砂～灰色シルト混じり細砂（若干土壌化）
10．暗灰色シルト質極細砂～淡黒灰色シルト質極細砂（土壌層）
11．淡灰色シルト混じり極細砂（洪水層）



第158図　ＳＤ58

体部外面はハケ調整により仕上げられている。

657は、広口壷の体部と考えられる。外面は、ハケ調整後下半部がヘラ磨きにより仕上げられ、中位には刻み目が施されている。内面は、底部が弱いヘラ削り、下半がナデ調整、上半がハケ調整とナデ調整により、仕上げられている。

658は、広口壷もしくは直口壷の体部と考えられる。外面上半には、上から、ヘラ先列点文・4条と6条からなる櫛描直線文各1単位・4条と6条からなる櫛描波状文各1単位・4条と6条からなる櫛描直線文各1単位・4条と6条からなる櫛描波状文各1単位・ヘラ先列点文・4条からなる櫛描直線文1単位・6条からなる櫛描直線文各2単位・ヘラ先列点文が施されている。外面下半はヘラ磨き、内面はハケ調整により仕上げられている。

659～661は底部片で、661を除いては、外面はヘラ磨きにより仕上げられている。内面は、659がハケ調整、660がヘラナデ調整、661が弱いヘラ削りにより、仕上げられている。甕の可能性も考えられる。

甕　662・667・669の3個体図化した。3個体とも同タイプの甕であるが、667の口縁端部には、つまみあげは認められない。669は、体部内外面をハケ調整後、内面下半が弱いヘラ削り、外面下半がヘラ磨きにより仕上げられている。662についても、669の体部下半と同様の調整により仕上げられている。

弥生時代後期　壷・甕・蓋・高坏の各器種が出土している。

壷　663～666・670～675の10個体を図化した。

663～666は底部を中心とした個体である。666を除いては、外面はヘラ磨き、内面は663がナデ調整、664と666がハケ調整により仕上げられている。666の外面の調整は、摩滅のため観察できない。

670は短頸壷で、体部内面はヘラナデ調整、口縁部内外面は横ナデ調整により仕上げられている。671は、口縁部端面に擬凹線が施され、口縁部内面はヘラ磨き、外面は横ナデ調整により仕上げられている。

672～674は長頸壷である。672は外面がハケ調整、内面が指オサエとナデ調整により仕上げられている。内面の調整は粗く、粘土紐痕が顕著に残る。673は、外面が指オサエとヘラナデ調整および部分的にハケ調整により仕上げられ、内面がハケ調整により仕上げられている。外面には、円形の刺突文が4箇所に施されている。674は、内外面ともナデ調整により仕上げられている。

675は短頸壷である。体部外面はハケ調整、内面は中位を横方向（右→左）のヘラ削り、上半をユビオサエとナデ調整により仕上げられている。口縁部は内外面とも横ナデ調整により仕上げられている。

甕　668・676～680の6個体を図化した。668を除いては、V様式系甕に分類されるものである。外面は叩き整形後部分的にハケ調整、内面はハケ調整もしくはナデ調整により仕上げられている。676の口縁端部は、横ナデ調整によりわずかにつまみあげられているが、胎土は在地産である。また、679の底部も叩き整形により仕上げられている。

668は、当該期においては異質な甕である。体部外面はハケ調整、内面はナデ調整、口縁部内面はハケ調整、外面はナデ調整により、仕上げられている。

蓋　681の１個体を図化した。口径32cmを測る大型の蓋で、外面は叩き整形後部分的にハケ調整、内面はナデ調整により、口縁部内外面は横ナデ調整により、仕上げられている。つまみには断面方形の突帯が貼り付けられ、指オサエとナデ調整により仕上げられている。

高坏　682～684の３個体図化した。682については、古墳時代前期の可能性も考えられるが、出土層位が異なることから、当該期の土器として報告する。体部外面はハケ調整、口縁部内外面は横ナデ調整により、仕上げられている。体部内面は摩滅が著しいため良好に観察できないが、ヘラ磨きの痕跡がわずかに観察できる。683は、682と同タイプの高坏の脚部と考えられる。

684については、器台の可能性も考えられる。外面はハケ調整後部分的にヘラ磨き、内面は上半がヘラ削り、下半がハケ調整により仕上げられている。径1.4cmの円形の透孔が穿たれており、当初は６箇所に穿たれていたものと推定される。

鉢　688の１個体が出土している。小型丸底鉢の祖形タイプと考えられる。体部外面は叩き整形後ナデ調整、内面はナデ調整、口縁部内外面はハケ調整後ナデ調整により、仕上げられている。

古墳時代前期　壷・小型丸底壷・底部が出土している。

壷　685と686の２個体を図化した。両者は、法量的には異なるが、同タイプの壷と考えられる。686は、体部内面がヘラ削り、外面がナデ調整、口縁部内外面が横ナデ調整により仕上げられている。

小型丸底壷　687の１個体が出土している。体部外面はナデ調整とヘラナデ調整、内面はヘラ削り、口縁部内外面は指オサエとナデ調整により仕上げられている。頸部外面には、ハケ調整がわずかに認められる。

底部　689の１個体である。甕の可能性が考えられる。外面はハケ調整、内面はヘラ削りにより仕上げられている。

奈良時代　上層から須恵器の杯Ｂが出土している。690の１個体である。底部から高台にかけて、火襷痕が認められる。

平安時代　最上層から須恵器が出土している。691の１個体である。椀の底部と考えられる。

鉄釘　Ｆ19の１点が埋土最上層から出土している（図版80・写真図版185）。3.8cm残存し、頭部は頭巻状に仕上げられている。断面は、５mm×４mmの方形を呈する。出土層位等から判断して、奈良時代の土器に伴うものと考えられる。

時期　出土土器から判断して、弥生時代中期には掘削され、奈良時代から平安時代にかけてほぼ完全に埋没・平坦化したものと考えられる。

ＳＤ５９（写真図版73）

検出状況　Ｅ－２区東半からＥ－３区にかけて検出した（第155図）。南北方向から西北西－東南東方向に緩やかに屈曲する溝で、北端は調査区外までのび、東南東端は古墳時代の住居跡ＳＨ11に切られている。他に、古墳時代の溝ＳＤ66に切られている。

形状・規模　検出した長さは23.69ｍである。横断面は緩やかなＵ字形をなし、最深部における検出面からの深さは21cmを測る。検出面における幅は、38cm～81cmを測る。底部のレベルはほ

ぼ一定している。

埋没状況　暗灰色砂質シルト１層からなる。層相から、人為的に埋められたものと考えられる。

出土遺物　壷・甕・高坏の各器種が出土している（図版39）。

壷　広口壷・長頸壷が出土している。広口壷は、生駒西麓産の西ノ辻I式の体部片が出土している。長頸壷は、692の１個体が出土している。頸部から体部にかけての個体で、体部内外面はナデ調整、頸部内外面は横ナデ調整により仕上げられている。

甕　Ｖ様式系の甕１個体（693）が出土している。内面は、ハケ調整とナデ調整により仕上げられている。

高坏　脚部１個体（694）が出土している。脚柱部外面はヘラ磨き、脚端部内外面は横ナデ調整により、仕上げられている。３箇所に円形の透孔が焼成前に穿たれている。

時期　出土土器から判断して、弥生時代後期（第４期）と考えられる。

ＳＤ６０（写真図版72）

検出状況　Ｅ－２区東半で検出した（第155図）。北西－東南方向にわずかに弧状を呈する溝で、両端とも調査区外までのびている。他に、弥生時代の溝ＳＤ59と古墳時代の溝ＳＤ66と切り合い関係にあり、ＳＤ59を切り、ＳＤ66に切られている。

形状・規模　検出した長さは27.80ｍである。横断面はやや深い皿形をなし、最深部における検出面からの深さは32㎝を測る。検出面における幅は、2.36ｍ～2.80ｍを測る。底部のレベルはほぼ一定している。

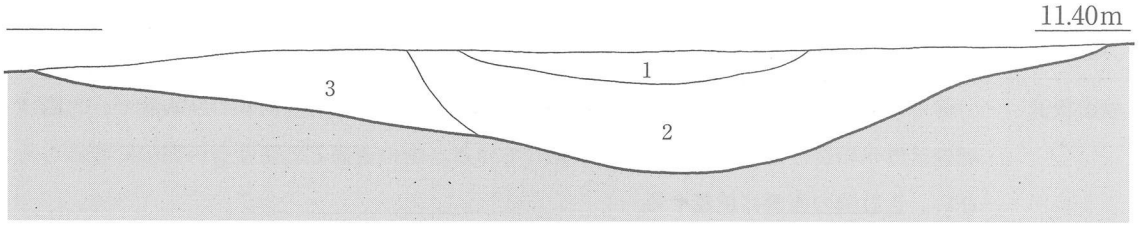
埋没状況　埋土は３層からなる（第159図）。層相から判断して、1層・２層に関しては、人為的に埋められたものと考えられる。

出土遺物　壷と甕が出土している（図版39）。

壷　複合口縁壷（695）１個体が出土している。口縁部と頸部の接合関係は認められないが、胎土・色調等の特徴から、同一個体と判断している。体部内外面はナデ調整、口縁部内外面は横ナデ調整により、仕上げられている。

甕　庄内式の甕１個体（696）が出土している。体部外面は細筋の叩き整形、内面はヘラ削り（右下→左上）、口縁部内外面は横ナデ調整により仕上げられている。胎土は、在地産の特徴を示す。

時期　出土土器から判断して庄内併行期（第５期）と考えられる。



１．暗灰色シルト混じり細砂　２．黒褐色極細砂混じりシルト　３．暗黄褐色極細砂混じりシルト

第159図　ＳＤ60

ＳＤ６１（写真図版73）

検出状況　Ｅ－２区東部からＥ－3区西部にかけて検出した（第155図）。北西－東南方向に直線的にのびる溝で、北西端は攪乱を受け、南東端は調査区内で収束している。ＳＤ59・ＳＤ66の北東側に位置し、両溝とほぼ平行している。他の遺構との切り合い関係は認められない。

形状・規模　検出した長さは7.96ｍである。横断面は浅いＵ字形をなし、最深部における検出面からの深さは16cmを測る。検出面における幅は40cm～69cmを測る。底部のレベルはほぼ一定している。

埋没状況　埋土は、暗褐色シルト混じり暗灰色砂質シルト１層からなる。層相から判断して、人為的に埋められたものと考えられる。

出土遺物　壷と甕が出土している（図版39）。

壷　697の1個体が出土している。内外面とも横ナデ調整により仕上げられている。

甕　698と699の底部片が出土している。698は、内外面ともハケ調整とナデ調整により仕上げられている。699の内面は、ナデ調整により仕上げられている。外面は摩滅のため観察できない。Ｖ様式系甕の底部と考えられる。

時期　出土土器から判断して、弥生時代後期（第４期）と考えられる。

ＳＤ６２

検出状況　Ｅ－３区で検出した（第155図）。西北西－東南東方向にほぼ直線的にのびる溝で、西北西端は調査区内で収束し、東南東端は古墳時代の住居跡ＳＨ11に切られている。また、途中、調査前まで機能していた水路により攪乱を受け、寸断されている。ＳＤ59に近接し、ほぼ平行している。

形状・規模　検出した長さは7.92ｍである。横断面はＵ字形をなし、最深部における検出面からの深さは26cmを測る。検出面における幅は35cm～1.38ｍを測る。底部の標高は、西北西端で11.32ｍ、東南東端で11.02ｍと、東南東側へ傾斜している。

埋没状況　埋土は、黄褐色シルト質極細砂をブロック状に含む暗灰褐色シルト質極細砂１層からなる。層相から判断して、人為的に埋められたものと考えられる。

出土遺物　高坏脚部が出土しているが、小片のため図化できなかった。３方に円形の透孔を有するもので、弥生時代後期の特徴を示している。

時期　出土土器から判断して弥生時代後期と考えられる。

ＳＤ６３（写真図版73）

検出状況　Ｅ－４区中央北側で検出した（第155図）。南北方向にほぼ直線的にのびる溝で、北端は調査区外へのび、南端は調査区内で収束している。他の遺構との切り合い関係は認められない。ＳＤ64の西側に位置する。

形状・規模　検出した長さは7.40ｍである。横断面はＵ字形をなし、最深部における検出面からの深さは16cmを測る。検出面における幅は30cm～64cmを測る。底部のレベルは一定している。

埋没状況　埋土は、淡褐灰色シルト混じり中砂１層からなる。層相から判断して、人為的に埋められたものと考えられる。